

神喰らう無色の反逆者

COLD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コードギアスR2の世界を経て再び眠りについた狂王様（ライ）が次に目覚めた世界は荒れ狂う神が支配する荒廃した世界。

この不条理な世界でライは力を手に入れ仲間と共に荒れ狂う神：アラガミに反逆する。

簡単に言えばコードギアスLOSTCOLORSの主人公ライ君をGODDEATERの世界で神機使い（ゴッドイーター）として活躍させよう小説です。

目次

Prologue

封印 | 1

荒ぶる神、抗う人間 | 4

無印編

救助 | 6

目覚めの刻 | 11

勧誘 | 15

同期とエイジス計画 | 19

訓練 | 23

実地演習 | 27

急上昇 | 31

配属 | 35

サクヤの忠告 | 38

禁忌種 | 41

新たな新型神機使い | 46

大きな溝 | 48

アリサの闇 | 52

大黒柱の喪失 | 55

主治医 | 59

神機使いの最期 | 62

感応現象 | 65

過去 | 69

暗殺の憶測 | 75

指南 | 79

克服	84
リーダー就任	90
拒絶と幻想	95
優秀	100
過去の記録	106
化け物達	112
白い少女	118
人に近い神	122
人物紹介	126
君の名は：	132
生きるということ	136
孤独の2人	140
お兄ちゃんの謎	144
特務	150
弔い合戦	154
極寒の女帝	157
禁忌の力	163
多重人格	169
魔法の言葉	173
包囲網	177
想定外	181
自分の命、仲間の命	186
裏人格	193
類似点	201
アーク計画	205

自信と慢心	303
リンドウ救出編	
エリナの覚悟	295
事後処理	291
幕切れ	287
総力戦	283
戦闘開始	279
犯人	273
注射痕	269
診療所	263
悪い噂	261
不穏と感謝	257
薬物の影	253
エリックの妹	249
幕間	
また明日	245
可能性	241
弱さと亜種	237
神喰らう反逆者	234
信念とエゴ	229
別れの歌	226
カルネアデスの板	220
決別	216
手紙と選択	213
カウントダウン	210

不死のアラガミ	306
アラガミ侵入	310
ライの危うさ	314
生存の可能性	318
黒い羽根	324
新人指導	327
アラガミ化の対処法	330
ハンニバルの進化	335
救出	339
贖罪	343
黒いハンニバル	347
覚悟	351
伝言	355
馳走	361
逃げるな	364
執着	369
共闘	372
約束	375
帰還と邂逅	380
手がかり	386
過去の帰還編	
規格外	392
負の遺産	396
新種	399
トウキョウ搜索	403



封印

とある遺跡の前に2人の男女。そしてその奥の祭壇の前に1人の男が横たわっていた。

「本当にいいのか。此奴はまだ生きている。それなのにこのまま眠らせるのか。」

「構わない。それに今の世界に此奴の居場所はない。もし生きていることが分かれば此奴は殺される。ならば眠らせておいた方がいい。」

遺跡の前に立つ黄緑の髪の少女の問いに黒髪の少年は応える。

「確かにな。だがそれなら潔く死なせるべきだと思うが。」

「それはできない。俺も彼奴らも此奴が死ぬことを望んでいない。お前もだろ?」

「まあな。だが此奴は必ず再び目覚めるぞ。封印とは時が経つにつれその効力が弱くなる。…数百年の時を越え、この時代に目覚めたように…」

「そうならないに越したことはないがその時が来たなら此奴はその時代の救世主になるだろう。形はどうあれ此奴は俺を…俺たちを救ってくれたのだから。」

そう言い黒髪の少年は横たわる銀髪の少年の頬を撫でる。その眼は優しいげだった。

「皮肉なものだ。此奴は自らの死を望んでいるというのに世界がそれを許さない。」

「世界が?」

「そうだ。世界に意思があるのならそれは生者の願いであり祈りに他ならない。例え9割の人間が此奴の死を望んでも残る1割の人間が此奴の生を望むのなら世界は此奴を死なせはしない。」

「此奴の生を望む私達からすればそれは祈りであり願いだが此奴からすればそれは質の悪い呪いでしかない。」

「そうだな。俺たちを生かすために自らの命を差し出した此奴を俺た

ちは延命させた。それがこの世界に害をもたらすこともわかっている。」

「それでも此奴が…此奴だけが死ぬことを許すことはできなかつた。誰にでも幸福を掴む権利はある。だから…此奴にも…”ライ”にも幸せになつてほしい。」

「傲慢だな。それは我儘だ。お前の此奴を生きながらえさせようとす
る奴等の我儘だ。此奴は…ライは自ら生き長らえることを望んでい
なかつたのだから。」

「わかっている。だがこれは俺たちからライへの願ギアスいだ。二度と会え
なくなつてもライには幸福になつてほしい。」

「それが傲慢なんだがな。だが私も同じだ。此奴は十分に苦しんだ。
苦しんだ分だけ此奴には幸せになる権利がある。」

「C. C. . . .」

次は黄緑の髪の少女が銀髪の少年の頬を撫でた。

「時間だ。ルルーシュ。始めよう。」

『ああ。』

黒髪の少年が返事を返した直後祭壇の下に描かれた”サークル”
が光り輝く。」

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが願う。祭壇に眠りし者の封印を。そ
して時が来た時の復活を。」

輝くサークル内で黒髪の少年は告げる。彼の瞳に”真紅の鳥の紋
様”を浮き彫りにさせて…

サークルからの光が収縮していき祭壇に眠る少年の胸に光の球体
となり入り込んだ。

「上出来だ。これでライは封印の眠りについた。あとは私が奴をCの
世界に連れて行けばライが眠りについた状況に戻る。だが良かった
のか?」

「何がだ?」

「お前が願ったギアスは恐らくライ本人の封印だけでなくライの記憶
まで封印したことになる。最悪、目覚めた時には記憶を失った状態か
もしれん。」

「構わない。俺たちがライと出会うことは二度とない。なら俺たちのことを忘れて目覚めた世界で新たな仲間を作り絆を育んでいってほしい。」

「それにこれは以前に俺たちがされたことだ。仕返しさせてもらっても文句は言えまい。」

「そうか。まあ此奴のことだ。どうにかして思い出すだろうよ。それに渡すべきものは既に渡してあるのだろうか？」

「まあな。役に立つかは分からんがきつとライの助けになる。」

「では行くとしよう。最後の別れは済んだな。」

「ああ。」

黄緑の髪の少女が祭壇の奥にある”扉”に触れる。

直後、扉に描かれた”鳥”の紋様のようなものが紅く輝きを放ち、大きな音を立てて開いた。

「じゃあ行ってくる。本当にそこで別れていいのか？」

「ああ。この先に行くと未練が生まれてしまう。」

「強情だな。」

黄緑の髪の少女は黒髪の少年にそう吐き捨て、銀髪の少年を抱きあげ扉の先へと進む。

「サヨナラ…ライ。」

その後ろ姿を黒髪の少年は涙を流しながら、小さな声で別れの言葉を口にした。

この日、

1人の咎人が封印の眠りについた。

封印とはいずれ解かれるもの。

封印が解かれ、咎人が目覚めた時、

彼の眼には何が映るだろう。

美しき天国の世界か…

荒廃した地獄の世界か…

その答えは…

咎人の封印が解かれた時にしか分からない。

荒ぶる神、抗う人間

西暦2050年。

突如地球上にあらゆる対象を『喰らい尽くす』細胞。通称『オラクル細胞』が世界中に蔓延した。

オラクル細胞は『考えて、喰らう』細胞であり、1つ1つの細胞毎に生命活動が完結しておりその点に関しては単細胞生物に近い。

オラクル細胞は地球上のありとあらゆる対象を『捕食』しながら急激な変化を遂げ、数万から数十万の細胞の集まりから多種多様の姿へと姿を変えた。

姿を変えたオラクル細胞地球上の支配者である人類をも捕食対象と見なし牙をを向く。

人類も所有する兵器で応戦するもオラクル細胞には一切のダメージを与える事できず抵抗虚しく喰らい尽くされる。

所有する兵器すらも通じない強大の力の前に、いつしか人類は極東地方に伝わる八百万の神々になぞらえて『アラガミ』と呼ぶようになった。

アラガミの出現により世界中の大部分の都市文明が短期間のうちに崩壊してしまった。

これにより居場所を失った人類のアラガミの影に怯える日々が始まった。

これは世界：地球の意思なのか。

新支配者（アラガミ）による旧支配者（人類）の淘汰。それがこの事象なのだろうか。

しかし旧支配者の人類もただ滅ぼされる運命を待つだけではない。人類の最大の武器である知力を生かし人類はアラガミに対抗し得る力を作り上げた。

研究が進むに連れてアラガミを倒すにはアラガミと同じオラクル細胞を宿した武器で戦うしかないことが分かった。

これにより人類はアラガミに対抗する為、オラクル細胞を人体に移植する実験を行なった。

その非人道的と思われる実験が繰り返し行われ、この実験でオラクル細胞に捕食され命を奪われた者もいた。

しかしその実験の末、アラガミに対抗する存在が生まれた。

彼等は神に挑み神を喰らう者『神機使い』又は『ゴッドイーター』と呼ばれ人類最後の守護者となった。

アラガミとゴッドイーター。

同じ細胞を持つ似て非なる存在同士の間が始まる。

次に地球上の覇権を握るのは：

新支配者（アラガミ）か：

それとも旧支配者（人類）が生み出した新人類（ゴッドイーター）か

：

そしてこの戦いの末に何が待っているのか？

それはまだ誰にも分からない。

：荒ぶる神により荒廃と化した世界。

聞く人によれば地獄と称するこの世界に：

人々の意思の下、長き封印の眠りについた一人の少年がその眠りから覚める。

この荒廃した世界で少年は何を得、何を失い、何を成すのだろうか。少年は未だ深い眠りの中。

しかし目覚めの刻は刻一刻と迫っていた。

無印編

救助

西暦2071年

荒廃した廃墟の街『贖罪の街』にて3人の男女が廃墟の岩壁の陰に身を潜めていた。

彼等の視線の先には小型の恐竜を彷彿させるアラガミ『オウガテイル』が集まって同族のオウガテイルを喰い荒らしていた。

「本命はまだ来てないから今のうちに役割を確認するぞ。俺が敵を引きつける。サクヤは俺の援護。ソーマは遊撃だ。まあいつも通りだな。」

チエンソーのような武器を携える男『雨宮リンドウ』が指示を出す。彼はフェンリル極東支部所属の神機使い即ちゴツドイーターで第1部隊のリーダーを務める。

「了解。後ろは任せて。」

リンドウの指示に返事を返すのは緑を基調とした少し露出の多い衣服を纏った女性『橘サクヤ』。彼女もフェンリル極東支部所属のゴツドイーターでその手には彼女と同じくらいの大きさの銃を持っている。

「ソーマ。お前は何か聞きたいことはあるか？」

リンドウが『ソーマ』と呼ぶフードを被った褐色肌の青年に聞く。

青年の名は『ソーマ・シックザール』言わずもがなフェンリル極東支部のゴツドイーターである。彼はリンドウのチエンソーよりも大きな包丁のような大剣を担いでいる。

「ねえよ。俺のすることはアラガミをぶっ殺す。それだけだ。」

「血気盛んなのはいいが無茶はするなよ。」

「分かっている。何度も同じことを言うな。」

「分かっているから何度も言うんだろ。っとおいでなすったか。」

再び廃墟の陰から覗き見る。そこにはオウガテイルの他に獅子を彷彿させるアラガミ『ヴァジュラ』がオウガテイルの群れを襲っている。

た。

「いいな。ヴァジュラの電撃には気をつけろ。そして死ぬな!!!」

リンドウの最後の言葉と同時に3人は廃墟の陰から姿を現す。

ゴツドイーターとアラガミの戦いの火蓋が切って落とされた。

数十分の死闘の末、今回の戦いはゴツドイーターの方に軍配が上
がった。

死闘を演じたアラガミ『ヴァジュラ』は動くことなく地に横たわる。
そのアラガミに対し、リンドウの持つチェンソーが”異形”の形と化
して先程のオウガテイルが同族のオウガテイルを喰い荒らしていた
ようにヴァジュラを喰い荒らす。

これがゴツドイーターがゴツドイーターたる所以である。

彼等ゴツドイーターが持つ武器は『神機』と呼ばれる物であり、そ
の正体は”人工的に造り出されたアラガミ”である。

ゴツドイーターには『偏食因子』と言うものが体内に投与されてお
り、神機はその偏食因子に適合したもののしか扱えない。

もし適合外の神機を手に入れば神機もアラガミ故アラガミを構成
する『オラクル細胞』によりみすみす捕食される。

しかし適合した神機でも定期的に偏食因子投与しなければその神
機の所有者でも捕食される。

「任務もこれで終わりね。」

「ああ、お疲れさん。サクヤ。アナグラに戻ったら配給ビールもらう
ぞ。」

「また？仕方ないわね。それにしても人手が欲しいわね。」

「そう言うなって。神機使いは適合試験に合格しなとなれない狭き

門だ。それになつたらなつたでアラガミとドンパチする日々だ。なりたい奴もいるかもしれないがならないに越したことはない職業だろ?」

「確かにそうだけど…ってソーマ?」

「どうかしたか? ソーマ。」

リンドウとサクヤの会話の途中、ソーマは辺りを見渡していた。

「どうしたの?」

「いや、何かに見られてる感じがしたんだが気のせいか。」

「大方遠くからアラガミが見てるんじゃないのか?」

「…かもな。」

リンドウの返答に賛同したソーマ。その時だった。

「っ…地震!!」

突如として辺り一帯が大きく揺れた。その影響で廃墟は崩れる。

「一応確認するが皆無事か?」

「ええ。無事よ。」

「見ての通りだ。」

「よし。しかし極東は地震が多い地域だがここ数年は地震が起きたことはないのにな。」

「そうね。つてあら?」

「どうしたサクヤ。」

「あそこだけ地面が陥没してるわ。」

サクヤが指差す先、

そこには確かに一ヶ所だけ大きな穴が空いていた。

「大昔の貝塚か? それにしては浅いな。」

「貝塚?」

「大昔のゴミ捨て場みたいなものよ。」

貝塚を知らないソーマにサクヤが説明しているとリンドウはその穴に飛び降りた。

「少し中の様子を見てくる。すぐ戻るからそこで待っててくれ。」

「分かったわ。」

サクヤの返事を聞いたリンドウは穴内部の奥へと足を進めた。

「地下坑道か？アラガミが出る前はここも都市として機能してたから地下に道があつても不思議じゃないが…」

地下通路を進むリンドウ。通路は明らかに人為的に手を加えられていた。

「大方、水道工事とかの名残か。」

ある程度探索を終えて、来た道に戻ろうとした時だった。

通路の奥からこちらに向かってくる足音のようなものが聞こえる。

「おーい!!!誰かいるのか？」

リンドウが声を掛けるも返事はない。しかし足音は徐々にこちらに近づいていた。

アラガミから逃れた避難民がここにもおかしくない。一応警戒の意味も込めて神機を構えるリンドウ。

そして程なくして足音の主が現れた。

まず目に入った。否、印象に残ったのはその髪だった。

綺麗な灰銀の髪。夜の月明かりに照らされればさぞ綺麗だろうとリンドウは思った。

次に印象に残ったのは眼。空を彷彿させるような透き通った蒼の瞳。しかしその瞳には焦点があつてなかった。

そしてその姿はソーマとは間逆の白い肌で歳もソーマと同年代くらい青年だった。

「おい。アンタ避難民か？この先にも避難民入るのか？」

神機を下ろしてそう問いかけるリンドウ。しかし青年は答えない。否、答えられなかった。」

何故なら、

突如として、青年は気を失ったのか、足から崩れ落ちるように倒れかかったからだ。

「お…おい!!」

慌てて青年を支えるリンドウ。一応心肺の確認をしたが正常だった。

「なんなんだ。いったい…」

気を失った青年を見るリンドウ。だが起きる気配はない。とにかく青年の身柄を保護したリンドウは来た道に戻る。

…リンドウはまだ知らない。

身柄を保護したこの青年が…

自身に大きな印象を与えることになることを…

目覚めの刻

フェンリル極東支部通称『アナグラ』

ゴッドイーターの本拠地にしてフェンリルの前線基地とも呼ばれるこの施設のとある一室に2人の男が対峙していた。

「君から呼び出しがあるとは珍しい。どうしたんだペイラー。」

「やあヨハン。どうしても君の耳に入れときたい話があつてね。」

ヨハンと呼ばれた金髪の中年くらいの男。彼の名はヨハネス・フオン・シツクザール。ここフェンリル極東支部の支部長を務める謂わば極東支部のトップであり、第1部隊所属のソーマ・シツクザールの実父でもある。

そのヨハネスからペイラーと呼ばれた灰がかつた髪色とどこかの民族衣裳のような衣服を纏った眼鏡を掛けた男。彼はペイラー・榊。アラガミ研究の第一人者にして神機の生みの親とも呼ばれている科学者である。2人の呼び方で分かるように旧知の仲でもある。

「リンドウ君が保護して連れて来た子を覚えてるか？」

「ああ。気を失って今も医務室で寝てる彼がどうかしたのか？」

ヨハネスが言った通りリンドウが保護した青年はアナグラ内にある医務室で今も眠っている。因みにリンドウが連れてきたのは3日前であり、3日前から一向に目を覚まさない。

「それがね。彼は人為的に身体を弄られた形跡が見られたんだ。それも1回だけじゃない。何度も筋肉や神経系といった箇所の破壊と再生を繰り返している。さらには脳まで至っている。恐らく気を失ったのもその脳の負担による影響だと思われる。」

「人体改造と言いたいのか？」

「おかしいとは思わないかい？アラガミが存在している今の世界でフェンリル以外で人体実験を行える組織があるとは思えない。」

「そうだな。他の支部が行なっているならばある程度納得できるがなら彼は何故極東に現れたとなる。」

「そのことだけ彼の血液を調べたらどうやら彼は東洋人と西洋人のハーフらしいよ。」

「ハーフか。まあそのことは彼が目覚めた時に彼自身の口から聞くでしょう。」

「そうだね。」

「一応本部や支部に彼について連絡をとってみよう。それで？それが私の耳に入れたときたかつたことかい？」

「ああゴメン。もう一つ彼についてわかったことがあるんだ。」

そう言うペイラーの掛けている眼鏡が一瞬光った。

「彼は君や私、いや、極東支部が欲していた”新型”神機使いの適合する可能性を持っている。」

???
side

暗い。

辺り一帯が夜よりも暗い闇のような黒に染まっている。

それに真つ暗故にどうにも身体が重い。まるで海の中に引きずり込まれているような感覚。

だけど何故だか居心地がいい。

怖いとか恐ろしいとかそんな感情が不思議と芽生えてこない。

ただただこの闇に呑まれるのもいいかもしれない。

そう思った時だった。

闇一色の視界にふといろんな色のついた丸いものが映し出される。紅か、蒼、黄、緑、白、紫、茶といったあらゆる色の球体が目の前に現れる。

でもその色の輝きも闇の黒を照らすにはもの足りず一つ、また一つとその闇に消えていく。

それが恐ろしく見えた。何か大事なものを失ったような気がして

…
そう思った途端、急に怖くなった。

嫌だ。怖い。助けて。置いていかないで…

声にならない叫びをあげ重い枷のついたような見えない手足をジタバタさせ暴れさせる。

そうもがいているうちにも色の球体は消えていく。

そしてようやく右手か左手か分からないが球体の方へと手を伸ばせた気がした。

残る球体は蒼。それを掴もうと必死に手を伸ばす。

だけど手は蒼の球体を捉えることはできなかった。

蒼の球体も闇の世界に溶けた瞬間、自分の中から”何か”が音もなく崩れた気がした。

その気がしたとき、不意に思った。

”懐かしいなあ”と…

目を開ける。すると鼻に入ってきたのは消毒液などのような刺激臭だった。

「……あつれ？」

ぼんやりする頭。脳が正常に機能するにはもうしばらく掛かりそうだ。

そして右手が何故か虚空に向けて伸ばしていた。まるで何かを掴もうとして結局掴めなかったような哀愁を漂わせた。

「良かった。目を覚まされたんですね。」

無理に身体を起こすと同時に白衣のようなものを着た女性が入ってきた。

「気分は悪くないですか？どこか変なところを感じるとかはありませんか？」

「あ…いや…」

「あ、すみません。私はここフェンリル極東支部の医療班に所属する
ものです。」

「フェン…リル？」

フェンリル…確か北欧神話に登場する神狼だっただろうか。

「あの…貴方のお名前を聞かせてもらっても？」

「名前…」

はて？ 僕の名前…

「あ…あの？」

「ああ、すまない。僕の名前は『ライ』だ。…多分。」

「え？ 多分？」

「そう呼ばれていた気がするんだ。だけどこれが本当の名前なのかは
分からないんだ。」

「それって…記憶喪失ということですか？」

「そうなる…のか…な？」

医療班の人が慌て始めてる中、僕は記憶喪失という言葉に何故か懐
かしさを感じていた。

そして無意識のうちに呟いていた。

「また…か。」

この呟きは誰の耳にも届くことなく虚空へと消えた。

そして今の僕の今の表情は呆れたような困ったような笑みを浮か
べていることを想像できた。

side out

勧誘

「あ、リンドウさん。お疲れ様です。」

「おう。お疲れ。」

アナグラのエントランスに任務を終えたリンドウが姿を現す。それに気づいたフェンリル極東支部でオペレーターを務める赤い髪を結んだ少女、竹田ヒバリが声を掛けた。

「サクヤ達はまだ戻って来てないのか？」

「はい。サクヤさんは防衛班の方々とコンゴウ討伐に出ていますね。ソーマさんも単独でオウガテイル討伐に出ています。」

「そうか。まあ大丈夫か。」

「あ、そういえば3日前にリンドウさんが保護した避難民の方がようやく目を覚ましたそうですよ。」

「そうか。それは良かった。」

「いやそれが…それでもないらしいです。」

「ん？その避難民に何か悪いことでもあったのか？」

自身が助けた避難民が目を覚ましたことに安堵の表情を浮かべるリンドウだが、ヒバリの歯切れの悪い言い方に疑問を覚える。

「それが…目を覚ましたのは良かったんですが記憶を失ったみたいで…」

「記憶喪失ということか。」

「はい。でも医療班の方によると名前以外思い出せないのに本人は焦る様子も不安になる様子ももないみたいです。良くいえば落ち着いて悪くいえば自分の記憶に興味がないみたいです…」

「検査とかはやったのか？」

「はい。その結果、東洋人と西洋人のハーフということがわかったみたいです。DNA鑑定も行なったのですがサンプルに該当するものがなかったとか。」

「となると、彼奴は外から来たことになるな。」

極東支部の近くには外部居住区というスラム街があり、そこにはフェンリルに所属する神機使いの血縁者が住んでいる。しかしいつ

オラクル細胞に適合する神機が見つかるか分からないため居住区に住む人々から血液や細胞といったサンプルを取っている。

「それで？そいつは今、どこにいる？」

「はい。彼は今支部長室にいます。」

「支部長室？なんでまた…」

「それがこれも検査でわかったことなのですが…」

「どうやら彼は新型神機の適合候補者みたいなんです。」

支部長室内ではライとヨハネスが対峙していた。

「率直に言おう。君の身体は人為的に手を加えられている。」

「……………」

「君が眠っている時に軽く検査をしてね。それでわかったことなんだ。しかもそれは脳まで至っている。恐らく君の記憶喪失の原因は度重なる人体実験による脳への過負荷もしくは防衛本能による欠落と私は考える。」

「はあ…」

「いきなりこんなこと言われて混乱するのも分かるが今は受け入れて欲しい。」

ライの反応の薄さに混乱してると思ったのかヨハネスは悟すようにそう言う。

「いえ、大丈夫です。混乱したわけではないですから。寧ろ納得というか得心を得たというか…」

「どういう意味かね？」

「人体改造については記憶を失っているだけで”知ってる”んです。脳の記憶が失われても身体の記憶が覚えているというか…」

自身でもうまく説明できないのか困惑しながら言葉を選ぶライ。対しヨハネスも考えるような仕草をする。

「なるほど。毎日何度も同じ動きをすれば自然と頭より身体が反応する。君はそう言いたいんだろう。」

「はあ…」

「とりあえず記憶喪失以外では君の身体に異常は見られなかった。そこでだが君はこれからどうする？」

「どうするとは…」

「実は先の検査で君に適合する偏食因子が見つかった。我々フェンリル極東支部は君をゴツドイーターとして迎え入れる準備はできている。まあ適合試験はまだ受けていないからゴツドイーターになれるとは確定してないがね。」

『……………』

遠回しの脅迫。ライはそう思った。

フェンリルやアラガミ、ゴツドイーターの説明は支部長室に入つての冒頭に説明を受けた。

アラガミという化け物と戦うには人をやめて化け物となる必要がある。

ゴツドイーターとはある意味では人の皮を被った人外とも言える。

しかしライには人を辞める…化け物を倒す為には化け物になることにさほど抵抗はなかった。

寧ろそれが当たり前で既に受け入れているような感覚もあった。

それはまるで自分が人の常識…”理”から外れた存在だと知っているかのごとく…

記憶が無くとも自身がどんな存在なのか、ライはそれを理解しているかの如く…

「分かりました。その試験を受けさせてもらいます。もともと保護されて貰えなければ今頃アラガミに食べられてたかもしれませんしね。その恩は返さないと。」

「ありがとう。まだはやいが君なら先に言っても大丈夫だろう。ようこそフェンリル極東支部へ。我々は君を歓迎しよう。」

「ごちらこそまだ早いですがよろしくお願いします。」
共に握手をするライとヨハネス。
しかしこの2人が…
世界の命運を賭けて…
戦うことになる。

同期とエイジス計画

適合試験の準備があるとかの諸事情によりライが試験を受けるのは翌日となった。

そしてその適合試験の当日。

ライは広い部屋の中にいた。

広い部屋のちようど真ん中には剣のようなものがあり、さらにその頭上には何やら焼印を入れるような機械があつた。

「これよりゴツドイーター適合試験を行う。準備ができたなら中心に向かうといい。」

放送ながらヨハネスの声が響く。部屋の奥にはガラス張りになっていてその奥にヨハネスの他に数人の人が見受けられた。

「……………ふう……………」

一呼吸置き、中心に足を運ぶライ。

そして安置されている剣…神機に手を伸ばした。

直後、

突如神機に手を伸ばした腕を固定され、上にあつた機械が腕に落ちてきた。

「っ……………!!!」

激痛が全身に走る。それだけじゃない。体内に入れられた偏食因子が暴れているのかライは声にならない程の叫びをあげる。

しかし痛みは徐々に薄れていき、上の機械が外れる頃には痛みは感じることはなかった。

ライの腕には赤い腕輪がついていた。これがゴツドイーターの証になり、二度と外れることもできない代物である。

「おめでとう。適合試験は成功だ。改めて歓迎しよう。君は極東支部初の”新型”神機使いとなった。」

ヨハネスの賛辞の声を聞きながらライは自身の手にある神機を持つ。これがライの神機であり、これから共に戦う相棒である。

「この後は榊博士の検査を受けるように。また気分が悪いなどの体調不良を感じるならすぐに伝えるように。」

ヨハネスからこのあとのことを聞きライは部屋を後にした。

試験を終えて、一度エントランスに戻ってきたライ。

そこには黄色の服を着た赤い髪のライより1つか2つ下くらいの少年がいた。

「あ、もしかしてアンタも新しいゴッドイーターの人？」

「あ、ああ。そうだよ。」

「うーん。見た感じ俺より年上っぽいけど数分の差で俺の方が先輩ということ。っても同期には変わらないけどな。」

「俺は『藤木コウタ』。アンタは？」

「皇（スメラギ）ライだ。」

記憶を失っているライの体は当然自身の苗字も忘れている。

しかし流石に苗字がないのは変なので昨日のうちに適当に決めたのだ。

「へえ。珍しい苗字だな。よろしくな。ライ。俺のこともコウタって呼んでくれ。」

「ああ。よろしくコウタ。」

共に自己紹介をして拳をぶつけ合う2人。その2人に近寄る女性が1人。

「藤木コウタと皇ライだな。私は『雨宮ツバキ』お前達が実践で使えるようにするまでの間、面倒を見る。いわば教官だ。私の言葉には全て、はいかいエスで答えろ。反論は許さないいな？」

「は…はい!!!」

ツバキの威厳に怖気付いたのか敬礼までして返事をするコウタ。それを見て苦笑いを浮かべながらもライも頷く。

「では榊博士のカウンセリングだが皇ライ。お前からだ。1200

(ヒトフタマルマル) までに榊博士の研究室に行くように。「了解です。」

「それまではアナグラないを回るといい。迷子になりたくなければな。」

言うだけ言ってツバキは去って行く。その後ろ姿を見送ると脱力したかのようにエントランスのソファアに座り込んだ。

「こえー。あんな威厳がある人初めてあったわ。」

「大丈夫か?」

「ああ。でもお前もスゲーな。あの教官で平静保ててさ。」

「そうか?」

「ああ。俺からは堂々としてるように見えたぜ。」

「それはツバキ教官も僕らの為を思って言ってることだからね。僕達がゴツドイーターとして長く活躍できる為には今のうちに厳しく鍛える必要があるんだよ。」

「ふーん。俺たちのために厳しくか?」

「さて、僕は時間にはまだ早いけど研究室に行くよ。」

「ああ。じゃあな。」

榊博士の研究室に入るとそこにはヨハネスとペイラーの2人がいた。

「約束の時間よりまだ早いね。感心感心。だけどすまない。まだ準備ができてないんだ。ヨハン。君の用事から済ませたらどうだい?」

「はあ…博士。公私の区別をつけてもらいたい。さて改めておめでとう。そしてようこそフェンリル極東支部へ。まあ昨日も言ったことだし割愛しよう。」

「これから君がゴッドイーターとして為すべきことを説明する。それは全て『エイジス計画』に起因する。」

「エイジス計画？」

「エイジス計画とは旧日本海近郊に建設中の人工島でね。そのエイジス島の外部装甲をアラガミ装甲壁とすることでアラガミの脅威から人類を護る計画だ。君達ゴッドイーターはアラガミと対峙そ捕食することでそのアラガミの素材を得ている。」

「要するにそのエイジスという人工島に人類を避難させてアラガミの脅威から逃れるということですか？」

「その通りだ。君は賢いね。」

ヨハネスの言いたいことを簡単に要約してみせたライにヨハネスはそう賞賛する。

「エイジス計画成功のために君の力を貸して欲しい。以上だ。」

「話は終わったかい？こっちも準備ができたよ。」

このあとペイラーによる検査でライは眠らされた。ライが目覚めるのは3時間後のことである。

訓練

ライside

少し先にアラガミが5体。全てオウガテイル。
まだ此方には気づかれていない様子はない。

この距離なら狙撃が有利。すぐに神機を銃形態に変更。

今回の銃は『ブラスト』。銃では1番の火力を誇る。燃費が悪いのが欠点だが：

それでも当たらなくとも衝撃で何体かは吹き飛ばせるはずだ。
できるだけ密集してるところに狙いを定め引き金を引く。

放たれる弾丸は勢いよくオウガテイルの群れに当たる。

弾き飛ばしたのは2体。残る3体は此方に気づき咆哮と共に迫ってきた。

1対3では分が悪い。だから『閃光弾』を投げる。

『スタングレネード』閃光でアラガミの目を眩まし、一時的に行動不能とする。

その隙に神機を銃形態から剣形態に変更しオウガテイルに迫る。

まだ動けないオウガテイルを一閃。

たった一振りで倒せるとは思っていない。だから2度3度と神機を振るう。

スタングレネードの効果が切れると同時に捕食形態へと神機を移行させ、オウガテイルを喰らいその食らったオウガテイルを起き上がった別のオウガテイルの方に投げ捨てる。

残り2体。

今のうちにこの2体を仕留める。

尻尾からの遠距離攻撃を交わし接近する。

別のオウガテイルが噛み付こうと突進してくるがそれも交わし無防備のところを一閃。

痛みにもがいているところをまた一閃。そして距離を取り銃形態に移行しブラスト弾を発射。

それが致命傷になり、一体撃破。

2体目はブラスト弾連射で撃破。
残り3体。

さて、どうするかね…

side out

「シミュレーション終了。」

訓練室内に教官であるツバキの声が響く。

「ふう…」

一つ溜め息を吐き、額の汗を拭うライ。

そう今のはシミュレーションであり、実戦ではなく訓練だった。

「やっぱり剣の方が使いやすいかもな…」

ライは自身の神機に目をやる。

神機には近接武器として長剣(ロングブレード)、遠距離武器として
ブラスト、防御壁としてタワーシールドが装備されている。

「防御力は高いけど、展開に少し時間がかかる。やはり多少防御を落
としてでもある程度展開の速いシールドにすべきか…バックラーは
回避メインだからここぞの時の防御は心許ないし…」

「ブラストも火力はあるけど確実性がな…それに精密射撃のできるス
ナイパーの方がしっくりきたし…」

今のシミュレーションで自身が感じた感覚を元に思案するライ。

実は訓練毎に神機の装備を替えてあらゆる型を試した上で自身の
メイン武器を探っているのだ。

今は長剣だが先日は短剣、先々は鎌といったあらゆる武器を試し
ている。

その全てでハイスコアを叩き出しているのだが本人はどうにも

しつくりこないらしい。

余談だがあらゆる武器を試してくれるので提出する報告書も多くなるのだが貴重な新型神機使いのレポートが多いのはフェンリルの技術者としても嬉しいらしくすぐに改善に取り掛かっているらしい。

「では次の訓練に入る。シミュレーション開始!!」

再びシミュレーションが始まる。思案を止め、シミュレーションに集中するライだった。

「修正が速いな。」

シミュレーションを見ながら感心するようにツバキは呟く。

先のシミュレーションで悪い点はほぼなかったがそのほぼが見事に修正されていた。

「身体を弄られているとは聞いてはいたがあれはまぎれもない奴自身の能力だろう。」

「どうだね? 彼は?」

「支部長。」

訓練室に入ってきたのはヨハネスだった。

「すごい一言に尽きますね。状況判断と行動予測は高い水準を誇ります。それに修正力の高さも評価できます。」

「そうか。さすが新型とも言うべきか。身体や脳を弄られているがその後遺症は?」

「ありませんね。ただ…」

「ただ?」

「ヤツ自身は気づいてないでしょうがアラガミを倒した後一瞬ですが悲しげと言うか、羨ましそうというか、儂げな表情をしていますね。」

「よく見ているね。」

「あの鉄仮面のような表情が変わるのですから気づきます。」

「そうかい。では君の所感からして彼は実戦に出せるかい？」

「……………」

黙りこくるツバキ。数秒の沈黙のあと、意を決したかのように答える。

「小型種なら恐らく単独で仕留められます。中型種もある程度実戦を積ませれば……」

「そうか。了解した。本当に君の弟君はいい拾い物をしてくれた。今後とも姉弟共にフェンリルの為に働いてくれ。」

「そう言い訓練室を出て行くヨハネス。」

「拾い物……か。」

捨てる神あるならば拾う神もある。

なんとなくだがツバキはその言葉を思い出した。

もしもヨハネスのいうようにリンドウに拾われたならライは一度捨てられたのかもしれない。

記憶喪失もライを棄てたものによる故意的なものならばツバキは捨てたものに怒りを覚える。

同時にツバキは心配になった。

自身のことすらも碌に覚えてないライがこの先壊れてしまうのではないかと……

そんな状態のライを本人が決めたとはいえ、ゴッドイーターとして戦わせるのは酷なのではないかと……

そんなツバキの心情とは裏腹に……

ライはまたハイスコアを叩き出す。

実地演習

「本日より実地演習を開始する。」

「はあ…実地演習ですか。」

訓練という名のシミュレーションに勤しむこと1週間。まだ実戦に出ていないライに教官を務めるツバキから実地演習の訓練の命を下された。

「そうだ。実地演習は実戦に出ているゴッドイーターに帯同して任務を遂行してもらおう。シミュレーションとは違い演習とはいえ実戦になるから心して掛かれ。」

「了解。」

「まあお前なら大丈夫だろうがな。今回、お前の実地演習に付き合うゴッドイーターは後にお前が配属される部隊の隊長だ。其奴の指示に従い、任務終えてまたここに帰ってくるまでが実地演習だ。気を抜くなよ?」

「はい。」

「そう硬くなるなよ。教官殿も余り新入りに緊張させないでくれませんか?」

「来たか。」

ツバキがライに激励の言葉をかけているとリンドウが頭を掻きながらやってきた。どうやらリンドウが同行するゴッドイーターらしい。

「そんなつもりはないがな。では両宮少尉。あとは任せるぞ。」

「了解です。」

リンドウの返事を聞き、ツバキはエレベーターの方へと向かう。

「さて、お前とは初めましてじゃないんだが一応自己紹介するか。俺は両宮リンドウ。ここフェンリル極東支部の1番隊隊長を務めている。階級は少尉だ。っても堅苦しいのは苦手だからあんま気にしないでくれ。」

「はあ…」

今まで出会ってきたのがツバキやヨハネスみたいな堅い性格だっ

たからか少しリンドウの性格にたじろくライ。慣れてないせいかな少し苦手意識が芽生えている。

『しかしまさかお前さんが新型使い手とはな。偶然とは恐ろしいものだな本当に。』

『どういう意味ですか?』

『やっぱ覚えてないか。まあ当然だな。実はお前さんを保護したのは俺だ。その保護した奴がまさか新型の適合者だったんだ。だから偶然とは怖いなあ。』

『そうだったんですか。ありがとうございます。』

『御礼はいらんから早く背中を預けられるようになってくれよな。じゃあ早速実地演習に行くか。つとその前に3つ言っとくことがある。心して聞け。』

『死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。隙があったらブチ殺せ。これじゃ4つだな。まあいいか。そんじゃ行くぞ。』

リンドウの先導の下、ライは実地演習の戦場へと向かった。

「ハハ…すげえなアイツ。」

実地演習の地『贖罪の街』でリンドウは驚嘆の声を上げた。

実地演習の任務は『オウガテイル』3体と『ザイコード』2体の討伐。小型種とはいえ集まれば面倒な相手であり初実戦の相手にしてみれば難しい任務だとリンドウは思っていた。

しかし蓋を開けてみればなんとやら…

ライはいとも簡単にオウガテイルとザイコードをとって見せた。

新型特有の近接遠隔変換を使いこなし、銃撃でザイコードを討伐。残るオウガテイルもリンドウの助けあり10分も掛からずに討伐を完遂させた。

「さすが新型といえはいいのかねえ。それでもお前さん腕がいいな。」
「どうも。」

討伐したアラガミのコアを神機で喰らいながらリンドウの賛辞の言葉に応えるライ。

「狙撃の腕も凄いな。スナイパーでオウガテイルの目玉をブチ抜いた時は驚いた。しかも相手の死角からの斬撃だろ？さらにはザイコードにはその鎌であの大きな目玉斬り裂いた時はアラガミに同情したくらいだ。」

そうライは相手の死角からの攻撃を重視していた。さらに相手の五感の1つである視覚を奪うという一見卑怯とも言えるが生き残るには的確な戦法だ。因みに今回のライの神機は鎌（ヴァリアントサイズ）とスナイパー、バツクラーである。

のちにあらわれる自称騎士道精神の塊は卑劣というかもしれないが…

「本当にすげえな。記憶を失う前はお前は何やってたんだろいな。」

「…知ってたんですか。」

「まあな。ある程度の神機使いの耳には入っているよ。」

『ま、この世界じゃ記憶を失うほどの恐怖を味わっても不思議じゃない。他の連中も気にしてないみたいだしお前だってそこまで気にしてる様子はないようだしな。』

「そうですね。そこまで気にしてません。」

「そうか。ならいいんだ。そんじや帰って飯にするか。」

リンドウがそう言ううちちょうどフェンリルのヘリが到着した。

『あ、帰ってきた。』

アナグラに戻り、神機の保管室に来るとそこには灰の髪で左頬に油

汚れが付いている少女の姿。

「リックカさん。」

「ようリックカ。出迎えか。」

「お疲れ様ですリンドウさん。」

ライとリンドウに労いの言葉をかける少女。彼女は『楠リックカ』。ここフェンリル極東支部で神機整備を行なうエンジニアである。フェンリルに所属する前からアナグラに入るため技術者歴は長い。

ライと面識があるのはシミュレーションの際、あらゆる神機の組み合わせを行なったライに興味を持ち、ちよくちよく訓練室に顔を出していた。そのことがありライとは話す真柄となった。

「神機はどんな感じだった？」

「特には何も。でも銃形態から鎌に変えるとき妙に変な音がしたかも。」

「

調整が甘かったかな？分かった。こっちで調整してみるね。」

「そう言うどリックカは去って行く。」

「リックカとはよく話すのか。」

「そうですね。新型神機の整備は初めてだからといろいろ聞かれる間柄です。」

「そうか。まああれだ。新型新型というがお前が全て背負う必要はない。旧型にも旧型の矜持があるからな。」

「わかりました。」

「そんじやとつと報告して飯を食うか。」

「そう言い、リンドウとライは神機保管室からエントランスへと向かった。」

急上昇

リンドウとの初の実地演習の翌日の実地演習の相手はサクヤと
だった。

そこでサクヤから遠距離神機使いとの作戦行動の仕方を学んだら
イ。

さらにその翌日はソーマと組んで任務に向かった。

その際、エリックという神機使いが目の前でアラガミに喰われる光
景を目にした。

ソーマと共にアラガミを倒したもののエリックは既に死に絶えて
居た。

「お前はここに何しにきた？」

エリックを失った直後、ソーマはライにそう問うがライは答えるこ
とができなかった。

否、敢えて答えなかったのかもしれない。

実地演習が始まってから周囲にはわからないだろうがライは妙に
高揚感を得ていた。

自分の生死を掛けた戦いに身を置きアラガミを実際に手に掛ける
ことでさらに高揚感を得る。

そんな自分に少なからず戸惑いを覚えたライ。

命を掛けることになんの躊躇いのない。むしろそれが当たり前で
自身が死ぬことにも関心がない。

リンドウに死ぬなど命じられたがライはきつと自分は仲間を助け
るなら自身の命を躊躇なく差し出すだろうと思った。

記憶が失っていようとそれが自身の本質と理解して入るかのよう
に…

「ヒバリさん。」

「あ、ライさん。また訓練ですか？」

「はい。お願いできますか？」

「そうですね。訓練室は空いてますので大丈夫ですよ。」

「ありがとうございます。」

ヒバリに御礼を言って訓練室に向かうライ。

「ヒバリちゃん。」

「あ、タツミさんお帰りなさい。ブレンダンさんもお疲れ様です。」

ライを見送るヒバリに声を掛ける男が2人。

赤い服を着た男はフェンリル極東支部第2部隊隊長を務める『大森タツミ』そして青い服を着た外国の男は『ブレンダン・バーゼル』といい彼もタツミと同じ第2部隊に所属している。

彼等の所属する第2部隊と第3部隊は通称『防衛班』と呼ばれ主に外部移住区のアラガミからの防衛任務を主としている。

「今のもつて例の新型だね。また訓練？」

「はい。ライさんは任務の後、さすがにすぐとはいきませんが訓練をしていますね。」

「関心するな。俺は実地演習の後は生きて帰ってこれたことに安心して部屋でぶっ倒れてたよ。」

「ああ。あそこまでストイックというか向上心があると新入りでも尊敬できるな。」

タツミもブレンダンもライには悪い評価はしていない。むしろ好印象を持っている。

その理由はリンドウとサクヤにある。

まだ人数が少ない新型神機使いということもあり、やはり気になるのかライの実地演習に同行した2人に興味本意でどうだったか聞きその評価が良かったのだ。

勿論他者の評価だから全てを信じたわけじゃないがリンドウもサクヤも極東支部1のゴッドイーターのため2人の評価は他のゴッドイーターにとっても信憑性があるのだ。

「……やっぱエリックのこと気に病んでるのかな。」

「そうだな。『死神』と同じでアイツもその場にいたみたいだからな。」
死神とはソーマの悪名である。

実はソーマと任務を同行したゴッドイーターで死んだのはエリックだけじゃない。

複数人から十数人もソーマとの同行任務で命を落としている。

そのことから極東支部のゴッドイーターの間でソーマを死神と呼び敬遠してるゴッドイーターも少なくない。

無論、タツミもブレندانも少なからず思っている。

「ヒバリちゃん。あの新型も死神の話を聞いてるんだろ？」

「はい。なんでもシユンさんに教えられて私にも聞きにきましたから。」

シユンとは極東支部の第3部隊に所属する『小川シユン』という名のゴッドイーターである。

神機はロングソードで剣の腕前はあるようだが基本的には奇襲がメインらしい。しかしミツシユン成功率は低いとか…

「あんまり喋るようには見えないけどヒバリちゃんとは話すんだ。」

『私はオペレーターですから任務（ミツシユン）の発注や報告の為の会話ですけどね。』

「それでアイツはなんか言ってた？」

「はい。表情が変わらないからどんな気持ちだったかはわかりませんが…」

” アラガミは怖くないのに死神は怖いんだな”

” 僕達もある意味では化け物なのに…”

「と言っていました。」

「……………」

「なるほどな。」

ヒバリから伝えられたライの伝言とも呼べる言葉。それはタツミもブレندانも納得できるものだった。

ゴッドイーターはアラガミと戦える存在だ。現に今までも人類の為に戦ってきた。

しかしその人類から見ればゴッドイーターはどう見えるだろう。アラガミと戦える力を持った人外、即ち、化け物。

ゴッドイーターだって腕輪が壊れたり適合する偏食因子の投与を怠ればアラガミ化が始まる。

きっとソーマの話聞いたライは実にくだらないと思っただろう。死神だろうがアラガミだろうが結局自分達も結局は人外（化け物）なのだから。

「そうだな。なにくだらなことを気にしてたんだ俺は……」

「ああ。それに仲間を悪く言うのは良くない。」

何か憑き物が取れたかのように反省するタツミとブレンダン。

そして2人は少しだけライを理解した。

「アイツ無表情だけど仲間思いのいい奴だな。」

「ああ。できれば一緒に任務に出てみたいものだ。」

「それいいな!!俺、リンドウさんに掛け合ってみるよ。」

本人不在なのに勝手に盛り上がる。2人。

ライは知らぬ間にまた自身の評価を上げた。

因みにその本人は…

「ヘックション!!!」

訓練室でくしゃみをしていた。

配属

『鎮魂の廃寺』にてコンゴウ討伐の任務についたライ。

今回の同行者はコウタでこの任務は実地演習の総仕上げの面もある。

任務達成後、ライとコウタは正式に部隊配属となり訓練兵の肩書きがなくなり、1人のゴツドイーターと認められるのである。

とはいえ極東支部ではヴァジュラを1人で倒せれば一人前と認められるそうだが…

『アラガミの結合崩壊を確認。もう少しです!!』

無線からオペレーターの声が響く。

「コウタ。 援護!!」

「了解!!」

ライの指示に應えるようにコウタの神機のアサルトがコンゴウに火を噴く。その隙にライが接近し肉薄になったコンゴウにブーストハンマーを振るう。

勢いよく振るわれたハンマーにより吹き飛ぶコンゴウ。さらに追撃でブラストで連射。

コンゴウも残る力で衝撃波を放つが放たれるまで時間が掛かるため、容易に回避される。

「これで!!」

神機を捕食形態としコンゴウを喰らうそしてそのまま近くの建物に叩きつける。

これが決定打となりコンゴウは倒れた。

かくしてライとコウタは実地演習最後の試験任務を達成した。

「よくやった。これでお前達の実地演習訓練を終了とする。並びに双

方共にフェンリル極東支部保守第1部隊配属を言い渡す。これからお前達は訓練兵ではなく、1人のゴツドイーターとなる。励めよ。」

ツバキに辞令を言い渡され最後に激励を受ける。

「報告は以上だ。」

そう言うのとツバキはエレベーターの方へと向かう。

「はあ…やつとゴツドイーターになれた…」

「おめでどう。」

「お前もおめでどう。同じ部隊だしこれからもよろしくな。」

そう言つて拳を突き出すコウタ。それに習いライも拳をぶつける。

「よう。」

「リンドウさん。」

拳をぶつけているとエレベーターからリンドウ、サクヤ、ソーマの第1部隊の面子が出てきた。

「ツバキ教官から聞いたわ。私たちの部隊に所属になったのね。」

「新型の方は使えそうだが、お前大丈夫か？」

「大丈夫だよ!!」

三者三様の歓迎の言葉を掛けられる。ソーマとコウタの仲は悪そうだが…

「ソーマ。折角仲間が増えたんだ。そう言うなよ。」

「すぐ死にそうな奴を仲間と思えと？」

「ソーマ!!ごめんなさい。」

サクヤがソーマの代わりに謝罪する。

チームとしては妙にバラバラに見えたライだった。

「まあうちはこのなところだ。面倒な奴もいるが仲良くやってくれ。」

場を纏める様に言うリンドウ。

「よろしくお願いします。」

ライもその後に一礼しながらそう言った。

「そうか。もう部隊配属となったか。」

「はい。これでエリックの穴は防げたと思います。」

支部長室でツバキから報告を受けるヨハネス。

「君から見て新型の彼はどう映る？」

「優秀ですよ。戦術理解も早く、状況判断も早い。さらに実戦での臨機応変の対応もできますし並みのアラガミなら討伐できると思います。」

「ほう。普段厳しい君がそこまで言うのは珍しい。」

「教官として見た結果です。ですがやはりどこか寂しげな印象を受けます。新型は奴一人ですから…」

「そのことだが本部からも新型の適合者探しを優先する様に指示がきている。その寂しさも新型が増えれば拭えるだろう。」

「そうか。もう実戦に入ったか。」

ツバキが退室したのを確認したヨハネスは一人呟く。

「彼が来たならもう”彼”は必要ないな。」

「私の周りを嗅ぐ”狗”には早々に消えてもらおう。」

そう呟くとヨハネスは”とある人物”に連絡を取る。

「私だ。こちらの準備は整った。そちらの調整はどうだ？」

「そうか。ならばこちらに赴いてもらおうか。もう一人の”新型”にね。」

そう言うヨハネスの眼光は怪しく光った。しかしそれを見たものは誰もいない。

サクヤの忠告

部隊配属となってもゴッドイーターのすることは変わらずアラガミとの命のやりとりの日々が続く。

すべてはエイジス計画の遂行。その為に…

『ミツシヨン終了。お疲れ様です。』

『愚か者の空母』そこで任務を達成したライに通信越しにヒバリから任務終了の種を伝えられる。

今回討伐したのは鮫の顔でその頭部には砲身のようなものがついたアラガミ『グボロ・グボロ』。

そのアラガミをライは単体で倒した。

今のライは時間が掛かるが中型種のアラガミ1体ならライ単体でも討伐できる実力を有していた。

『もう少し早めに片付けられた。スタングレネードが効いてる内に倒しきれなかったのは課題だな。』

今回の討伐で浮き出た自身の問題点を把握するライ。中型種と単体でやりあえれば十分な実力者ともいえるのだが当人は満足してないようだ。

『いろいろ試したけど一番使いやすいのはロングブレードだな。状況に応じてバスターブレードもありか。銃はスナイパーとブラストのアラガミに応じて使い分けだな。』

などと考えていると遠くからヘリの音が聞こえてきた。どうやら迎えがきたようだ。

「お疲れ様。」

「サクヤさん。お疲れ様です。」

アナグラに戻ってくるとサクヤに話しかけられた。

「頑張ってるみたいね。評判いいわよ。」

「そうなんですか?」

「ええ。さすが新型といえいいのかしら。でもあまり無理はしないでね。」

笑顔でライを褒めるサクヤ。だがその表情が少し暗くなる。

「ゴッドイーターは凄い人程早死にしていなくなるの。それは期待の裏返しなのだけど…その期待が時に枷になることもあるわ。」

「特に君は新型としていろんなところから期待されてるわ。だけどそれを貴方1人で背負うこともないわ。私達は仲間なのだから頼ってもいいのよ。」

『はあ…』

「だ・か・ら・あまり1人で無茶しないように!!ただでさえ問題児もいるし隊長は変に能天気だからこれ以上問題児が増えたら私でもフオローできないわよ。」

『は…はい…』

凄むサクヤに怯むライ。サクヤからすればライは自分と同じストップパー側においてほしいという切実な思いだろう。

「よろしい。でも正直貴方やコウタが配属になってくれて助かったわ。今までは遠距離神機使いは私だけだったから火力不足は否めなかったし援護も偏りがちだったから。」

「貴方達が入ってきたおかげで役割分担もできるから作戦の幅も増えるからいいこと尽くしね。」

「さて、疲れてるのに呼び止めてごめんなさいね。もし任務で人手が足りなかったらいつでも呼んでちょうだい。」

言うだけ言ってエレベーターの方に向かうサクヤを見送るライ。

「心配してくれたのかな?」

「そうだと思いますよ?」

サクヤの言動を思い出して不意に出た眩きが聞こえたのかヒバリが返答する。

「気をつけよう。」

サクヤの心配の返事なのか独り言の方なのかそれとも両方なのか
とりあえず気をつけようと決意したライだった。

禁忌種

『贖罪の街』

そこには第1部隊の面子が揃っていた。

「さて、今日も楽しいお仕事の間だ。まあ俺は参加しないけどな。」

「え？そうなの？」

「ああ。ちよつとデートがあつてな。まあ相手はヴァジュラだが油断しなければお前達だけでも倒せるだろ。」

コウタの問いにそう返すリンドウ。するとリンドウの持つ通信機器の音が鳴る。

「おつと早くこないとしよげて帰るらしいから行くな。全員生きて帰れよ。」

そう言い残しリンドウは去っていく。

「まったく…私達もブリーフィングを始めましょうか。」

リンドウの後ろ背中を見送りながら溜息を吐くサクヤ。そして気をとりなおしてブリーフィングを始めた。

「ソーマ!!そっちに行つたわ!!」

「分かつてる!!!」

サクヤの指示にソーマが答え、ヴァジュラに一閃加える。

「コウタ!!ソーマの離脱の援護!!」

「了解!!」

「ライは…つてもう動いてるわね…」

サクヤが司令塔として指示を出す中、ライだけは指示を出す前に動き出していた。

今回の作戦はサクヤがソーマ、コウタがライのサポートに入り、近

接での攻撃はソーマとライが受け持つというスタンダードな戦略をとっている。

特にライは新型神機の特性を生かし、サクヤとコウタが援護には入れない間はかわりにソーマの援護に入っている。

そして現在も、重い一撃を与えられるものの動作が遅いバスターブレードを扱うソーマのかわりにヴァジユラの後ろ脚にロングブレードを振るっていた。

『結合崩壊を確認しました!!もう少しです!!』

後ろ脚が結合崩壊を起こし、ヴァジユラの体勢が崩れる。

「体勢が崩れた!!今よ!!」

サクヤの指示が飛び、サクヤとコウタはヴァジユラの顔面に向かって連射。ライは後方から捕食。

そしてソーマが渾身の力を込めたバスターブレードをヴァジユラに振り下ろす。

それが致命傷になったのかヴァジユラは咆哮を上げ地に倒れる。そして動かなくなった。

『オラクル反応の消失を確認。ミッション終了です!!』

通信でヒバリの喜びの声を聞き、今回の任務も無事に終えた。

「いや〜電撃にはビビったけどなんとかあったな。」

「お前だけ当たりすぎだったけどな。」

帰りのヘリの中、自画自賛するコウタにツツコミを入れるソーマ。

そんな2人の会話を聞きつつライは外を見ていた。

「お疲れ様。」

「サクヤさん。」

そんな様子のライに話かけたのはサクヤだった。そしてライに飲み物を差し出す。

「ありがとうございます。」

「気にしないで。それにしても貴方には驚かされてばかりね。」

「そうですか？」

「ええ。私が指示を出す前に行動に移ってるのだもの。しかも私が出そうとした指示通りにね。」

「離脱のタイミングも援護にはいる瞬間も私の指示をあらかじめ分かっているようなタイミングだったから。さすが新型なのかしらね。」

「そうですね。新型だからこそ…できることが多いからこそ、臨機応変に対応できないといけませんから。」

サクヤからの賛辞の声にそう返すライ。

近接武器も遠距離武器も併せ持つ新型神機を扱うライは戦闘の中で選択肢が多い。

その選択肢（手札）から効率的且つ相手に有効打を与え、さらに味方へのフォローのできる一手を選ぶ。

その一手が自分や味方の生存率に直結する。

「今回の僕の役割はソーマの攻撃が当たりやすくする攪乱と援護。それがうまくいっただけですよ。」

「なるほど、防衛班の皆が賞賛するわけね。」

「タツミさん達がですか？」

「ええ、貴方がいる時といない時の任務達成時間がかなり違うって言うってたわ。それにカノンちゃんの誤射も貴方がいるとほとんどないそうよ。」

「だから度々呼ばれるのか…。」

最近のライは度々だが防衛班の任務に呼ばれることがある。

その時には何故か防衛班の『ブラスト』神機の使い手である『台場カノン』が絶対いるのだ。

「フフ、人気者ね。でも前も言ったけど余り無茶しちやダメよ？」

「はい…」

「おーお疲れ。」

アナグラに戻ってくるとそこには既にリンドウがいた。

「先に戻ってたのね。」

「まあな。そっちも命令通り誰も欠けることなく帰って来れたな。関心関心。」

「まあね。俺たちの華麗なるコンビネーションを見せてやりたかったよ。」

「お前は足引つ張ってただけだろうが。」

「まあまあ2人とも…」

調子にのるコウタにソーマがツツコむ。それをライが窘める。

「まあお前達だけでも任務がこなせるならデートの方の頻度あげてもいいかもな。」

「それより先に俺に女の子を紹介するのが先になんじやないんですか。」

「お前にはまだ手に余ると思うぞ?」

リンドウがそう返した時、アナグラ内に放送が流れた。

内容は第7部隊が大型アラガミ『ウロヴオロス』のコア剥離に成功したことだった。

「ウロヴオロス?強いのか?」

「それくらい自分で調べろ。」

「そうね。今の私達じゃ倒せないわね。」

「そんなに!!?」

「まあなんだ。生きてりやいづれ倒せるだろ。」

リンドウの軽い激励を受けた後、また一悶着あったがその日はその場で解散となった。

「デケエな!!!」

「禁忌種だからね。倒してきたアラガミと比べ物にならないほど強いだろうね。」

解散後、ライはコウタに誘われターミナルでウロヴオロスの情報を閲覧していた。

「外は硬そうだな。だけど足は剣でなんとか…」

情報を元に討伐のシミュレーションを始めるライ。

「お前いつもそんな風にシミュレーションしてるのか?」

「癖とかは一通りは頭に入れてるつもりだよ。せつかく攻略法があるんだ。活かさないかね。」

コウタの問いにそう返すライ。

敵を知ること自身ひいては仲間の生存率が上がる。当然、その攻略法が確実とは限らないがやはり敵を知ることが大事だろう。

「それにエイジス計画には他の禁忌種のコアもきつと必要になる。もつと強くないと。」

「そうだな。」

今の自分達では禁忌種には敵わない。サクヤが言うのだからそれは事実だろうとライもコウタも自覚している。

だがそのままでもいいはずなどないとも理解している。

リンドウが言っていた通り、いつか倒せるように腕を磨かなければならない。

そしてその“いつか”が1日でも早くくるよう静かにだが2人は決意した。

新たな新型神機使い

「お前達第1部隊の新たな仲間を紹介する。待望の新型神機使いだ。」
珍しく第1部隊全員が招集された。招集を掛けた張本人のツバキからその内容が伝えられる。

「はじめまして。『アリサ・イリニチーナ・アミエーラ』です。本日1200（ヒトフタマルマル）付でロシア支部から此方の支部に配属となりました。」

新たな仲間は白い肌と赤を基調とした帽子や衣服が印象的な少女だった。年齢はコウタと同年代くらいか。

「女の子ならいつでも大歓迎だよ!!」

「…よくそんな浮ついた考えでここまで生きてこられましたね。」

「え…?」

歓迎するコウタにアリサはまるで呆れるような軽蔑するような言葉を返す。

「彼女は実戦経験こそ少ないが演習では抜群の成績を残している。追いつけないように精進するように。」

「り…了解。」

アリサの言動は神機使いとしての誇り（プライド）を持っているからだろう。そしてその言動に裏打ちされた実力を持っていることも今、ツバキに実証された。

「アリサは今後、リンドウと行動をするように。」

「了解しました。」

「リンドウは資料等の引き継ぎがあるので私と来るように。他の者は持ち場に戻れ。」

ツバキの号令により解散となる。ツバキはリンドウを連れてエレベーターの方に向かい、残された者はアリサに自己紹介をする。

「皇ライだ。よろしく。」

「…貴方が極東支部初の新型神機使いですか。」

「まあそうなるね。それにしても僕を知っているような口ぶりだけだ。」

「此方の支部長から話を聞いていましたから。とても優秀な神機使いと聞いてます。」

「買い被りすぎだよ。」

「謙遜ですか？その必要はないと思いますが。」

「なにが言いたいんだい？」

なにやら不穏な空気が漂い始める。それに気づいてるのか気づかないふりをしているのかわからないがアリサは言葉を続ける。

「私達は新型神機に選ばれた存在です。旧式神機使いとは違って個人で状況を打破できる力を持ち合わせています。これから神機使いの主流は私達になります。今は私達2人ですがだからといって肩身を狭い思いをする必要はあるとは思えません。」

「別にそのつもりはないよ。それに新型や旧型関係なく神機使いは神機使いだ。だから新型だからといって旧型神機使いを悪く言うのは間違っている。」

「…ガツカリです。貴方も私と同じ考えの持ち主と思っていたのですが。」

「人の考えは個人それぞれだ。君の考えを僕は否定しないし僕の考えを君が理解する必要もない。」

「そうですね。なら私は私の思想、信念で貴方より優秀だということを実証します。まあ私より優秀な神機使いなんて存在しませんからね。」

そう言うとアリサはこれで話は終わりとばかりに去っていく。

「絶対的な自信…か。」

その後ろ姿を見つめながら静かな口調で呟くライ。

ライにはアリサのような自信は持っていない。

ないから情報を頭に叩き込みその情報を下に策を練り、時に臨機応変に対応に繋げる。

それを自信にするには考えた策で結果を残さなければならぬ。

故にライはアリサのような自信を持ってない。

だから羨ましいのだ。

自身に絶対的な自信を持てるアリサが…

大きな溝

アリサの加入はフェンリル極東支部に良くも悪くも影響を与えていた。

良い面での影響は新型の噂に違わぬ実力の神機使いが1人増えたことによる戦力補強。

現にアリサの実力は実戦経験が少ないにも関わらず演習と同等の戦果をあげている。

しかし光差す所には陰も差すというように悪い面もある。

それはアリサの単独行動が目に残ることだ。

例外もあるが基本的にアラガミ討伐は複数人の神機使いがチームを組んで行う。

しかしアリサは自分1人の力でアラガミを倒そうとする。

そもそもアラガミという強大な怪物に挑むには神機使いの連携は不可欠だ。

神機使い同士が連携・協力をしてお互いをフォローしながら討伐を行う。

それにより神機使いの死亡率を下げ、討伐成功率を格段に上げるのだ。

しかしアリサはその連携を知ってか知らずかは分からないがその連携の和を乱している。

今は何も問題は起きていないがアリサへの不信感とこの行動による最悪の事態を想定すれば不安が拭えないだろう。

「というわけなんだがなんとかならないかねえ？」

「いや…僕に継られても…」

アラガミ討伐任務を終えて帰還のへりを待っている中、ライは今回の任務の同行者であるタツミにアリサについて相談を受けていた。

「いやな。あの子の言う戦術理論というか考えは分からないわけじゃないんだよ。ただ、俺らいることだし協調性をな。」

「確かに1人で片をつけようとする節はありますね。」

実際、ライも第1部隊の面子での任務の際にアリサの独断行動を目にしていた。任務後、サクヤと口論もしている。

「ブレンダンやカノンはまだ協調性があるからいいけど、カレルやシユンは既にイライラしてるんだよ。ジーナはあまり気にした様子はないけど。」

「なんとというか危なっかしいんだよな。今はいいけど。いつか大きな失敗をしそうで。」

「そうですね、一応リンドウさんに伝えときます。」

アリサの面倒は基本的にリンドウが見ている。故にリンドウに伝えればアリサにも伝わるだろう。

「頼むよ。あの子もアンタみたいな戦い方をすればいいのにな。」

「戦い方は人それぞれですからね。」

新型旧型関係なく神機使いはいろいろな性格をしている。好戦的の性格もいれば本来戦いには向いてない性格の神機使いもいる。だからこそその性格に合った戦い方があるのだ。

「なんだと!!?もっかい言ってみろ!!」

アナグラに帰還したライとタツミがエレベーターでエントランスについたと同時期に語尾を荒げた声が響いた。

急いで現場に向かうとそこではシユンとアリサが口論をしていた。

「分からないなら何度でも言っておきます。もっと状況に応じてスタングレネードを使ってください。さっきの任務では3つも無駄に消費したじゃないですか。ただでさえ資源が枯渇してるのに貴方みたいに無駄遣いをすれば本当に必要な時に酷い目にあいますよ?」

「んだと!!!」

「シユン!!落ち着け。」

アリサに詰め寄るシユンをタツミが割って入りそれを止める。

「放せよ!!コイツには1度立場というものを…!!!」

「そこまでだ。」

一触即発の状況の中、場を鎮める声が響いた。

「リンドウさん。」

その声の主はリンドウだった。

「悪いな。シユン。俺の教育がなつてなかった。アリサにはあとでよく言い聞かせるから怒りをおさめてくれ。」

『……チツ!!』

渋々ながらも怒りをおさめるシユン。抑えていたタツミも安堵の溜息吐きながら抑えていた手を放す。

だが…

「事実を言われて激昂とか…ドン引きです。」

「んだとコラあ!!!」

アリサの余計な一言で再び怒りに火がついたシユン。

タツミも虚を突かれたのかシユンを止めることができず、シユンはそのままアリサに殴りかかる。

しかしそれは叶わなかった。

振り上げたシユンの腕を掴んだライによって。

「放せよ!!アイツは一発殴らなきゃならねえ!!!」

「シユン落ち着けて。」

すかさずタツミがシユンを落ち着かせようとする。

「フンッ。」

アリサはその光景を冷めた目でみると興味を失ったかのようにその場を去る。

「チツ…放せよ!!」

アリサがいなくなるとシユンは舌打をしてライの手を振りほどく。
「どうせお前も俺達旧型を見下してんだろ!!?あの女と同じようにな
!!」

「おい!!シユン!!」

「うるせえ!!!」

ライに噛み付くシユン。それを叱責するタツミだがシユンは捨て
台詞を吐いていなくなった。

「はあ…」

「悪いな。お前まで飛び火しちゃった。」

「いえ。気にしてませんよ。」

リンドウから謝罪を受けるライ。とはいえ新型のライには今のエ
ントランスは居心地が悪かった。

アリサとシユンの喧嘩を見てたのはなにもライやリンドウ、タツミ
だけじゃない。エントランスである以上、他の神機使いもいる。

故に…

その場で唯一の『新型』神機使いのライはリンドウとタツミを除く
周りの『旧型』神機使い達から不審の視線を送られていた。

新型と旧型。同じ神機使い（ゴッドイーター）であるのに大きな溝
ができた瞬間だった。

そしてその溝がさらに大きくなる大事件が近い未来起きること
なる。

アリサの闇

新型と旧型の確執から数日。

神機使いはいつもと変わらない日常を送っていた。

神機使いの仕事であるアラガミ討伐には連携が第一。

無闇に戦えば命を落とすことは神機使いは百も承知だ。

だからこそ多少のギクシヤクがあろうとも任務中には新型旧型関係なく協力し合っていた。

贖罪の街。

そこにはライとアリサがいた。

何故2人が此処にいるのか。それは当然、任務だからだ。

「ヴァジュラ相手なら私1人でも倒せるのに……」

愚痴るアリサにライは内心溜息する。

例の確執からライは基本的にアリサと共に任務に出ていた。

正確にはリンドウの指示でアリサと共に任務に出ていた。

確執のおかげでライも一部を除く旧型神機使いとの任務はいけなくなっており、単独でもいけるがそれはそれで陰口を叩かれる要因になり兼ねないと判断され、リンドウからアリサの相棒（お目付役）に抜擢されたのだ。

勿論基本的にはアリサはリンドウと行動するのだが、リンドウがない時やアリサが独自に任務に取り組む際にはライがリンドウの代わりに入る。

アリサも最初こそは抵抗したが一応上官の指示には従うので渋々ながらも任務に行く際にはライを誘う。

単純に言えばライはアリサの暴走を防ぐ枷であり、監視なのだ。

「おつと今日は新型2人とお仕事か。」

「リンドウさん。」

2人に遅れて姿を現したのはリンドウだった。今日はこの3人で
行う任務らしい。

「頼もしい新型2人とお仕事か。足引つ張らないよう気をつけるんで
よろしくな。」

「……旧型は旧型らしく任務を行ってればいいと思います。」

「はは。期待に添えるよう頑張るさ。」

相変わらず高飛車な発言をするアリサを流すリンドウ。

そう言いながらリンドウはアリサの肩に触れる。

その時だった。

「キヤア!!!」

リンドウに触れられた瞬間、アリサはまるで拒絶反応を起こしたか
のように後ろに距離を取る。

「おーおー。随分と嫌われたみたいだな。」

「あ…す…すいません。大丈夫です。」

リンドウの言葉に謝辞を示すアリサ。だが頭を押さえる辺り、大丈
夫には見えない。

「うーん。そうだな。よしアリサ。混乱したら空を見る。そして動物
に似た雲を探せ。落ち着くぞ。」

「それまで此処で待機。これは命令だ。それをしてから合流しろ。」

「な、なんで私がそんなこと…」

「いいから探せ。な?」

「よし。先行くぞ。」

これで話は終わりだとばかりにリンドウはライを連れて歩き出し
た。

「アリサのことなんだがどうやらいろいろとワケありみたいだな。」
ある程度歩いたあと、リンドウはライにアリサについて語り出した。

「このご時世だ。誰もが暗いものを持っているのは当たり前だ。お前もそうだしな。」

「え？」

「なに驚いた顔してんだ。記憶だよ。お前記憶喪失だろ？」

「あ、そうでしたね。」

「本気で忘れてたみたいだな。」

「まあ毎日生死の境の日常を過ごすならお前のように気にしないようにするのがいいのかもな。」

「どうでしょう。忘れることがいいことではないでしょうから。今はいいでしょうけどいづれは向き合わないといけない事案ですからね。そのまま忘れるのはただの逃げですよ。」

「今迄忘れてた奴のセリフじゃないな。」

「僕も言ってる気づきました。」

「まあ話をアリサに戻すが同じ新型のよしみだ。あの子の助けになっ
てやってくれ。」

「さて、その当人が合流する前にやれることをやっておきますね。」

「はい。」

結局今回の任務はアリサが合流するときにはほぼ勝敗を決していた。

アリサは不服そうではあったがリンドウに窘められ今回の任務は終了した。

大黒柱の喪失

「各自、周囲を警戒して。目的を達成したとはいえ他のアラガミが襲ってくるかもしれないわ。」

本日も神機使いの仕事であるアラガミとの戦いに勤しむライ達、第1部隊。今日はライ、サクヤ、ソーマ、コウタの全員第1部隊所属の面子でヴァジュラの討伐を行なった。場所は『贖罪の街』

サクヤの指示で周囲を警戒するライ達。だがアラガミの姿はなく、警戒を解く。

「どうやらないようね。ふう…みんなお疲れ様。」

「あー疲れた。」

「大丈夫か？」

座り込むコウタに手を差し伸べるライ。

「ありがとう。でもそれはお前が1番掛けられる言葉だと思うぞ。」

「そうか？」

「コウタの言うとおりよ。ヴァジュラの引き付け役にソーマの援護、さらに臨機応変に動き回っての攪乱。私達の中では1番体力を使っているわ。」

コウタの言葉にサクヤが同意する。

今回の任務でのライの役割はアラガミを引き付けての攪乱。

その隙にコウタとサクヤが狙撃で援護しソーマの一撃で倒す。

とはいえ第1世代の遠距離型神機はオラクルが切れると射撃ができない欠点があり、その間にはライが射撃の援護にまわる。

遠近切り替え可能の新型神機を扱うからこそその運用性を発揮するもその分使用者の負担が大きくなるのは自明だった。

「あまり無茶はダメよ。戦術的にはよくてもそれで貴方が危険に晒されるのは誰も望んでないわ。」

「なら、足手まといにならないように強くなるしかないだろ。」

心配するサクヤの言葉に黙っていたソーマが口を挟む。

「結局生き残るのは強い奴だ。ゴットイーターもアラガミもな。其奴に負担を掛けてると思うのならそれはお前らが弱いからだ。」

「俺は少なくともコイツをお前達よりも信用している。」

言うだけ言って歩き出すソーマ。

「珍しいわね。ソーマが誰かを褒めるなんて。」

ソーマの言い分を叱咤と知っているサクヤは意外そうに呟く。

「でも一言多くないですか？まるで俺たちを蔑ろにしてるようで腹たつ。」

「いつものことよ。でも壁を作っても作戦には従順だから。」

「なるほどツンデレか。」

「聞こえてるぞ。」

「なんやかんやで仲良いですねこの部隊。」

ライ達がそんな会話をしてる頃…

「アリサ。後方の警戒を頼む。」

「了解。」

リンドウとアリサの2人も贖罪の街に降り立っていた。

しかし今日のアリサは体調が悪いのか顔が青ざめていた。

「元気がないが大丈夫か？」

「いえ…大丈夫です。」

「そうか。ならいいんだが。」

不調に見えるが本人が大丈夫と言うならとリンドウは贖罪の街の廃墟群へと向かう。

……この選択が最悪だとは知らずに…

「え？」

「リンドウさん？どうしてここに？」

「お前ら」

廃教会近くで鉢合わせる第1部隊の面々。本来同地区に緊急を除いて神機使いのチームが複数来ることはない。

アラガミは広範囲に存在するため一箇所に1チーム以上の神機使いが存在しても効率が悪いからだ。

「どういうこと？なんで同じ地区に……」

「詮索は後にしよう。俺とアリサは中の搜索。お前達は外で見張りを頼む。」

サクヤの疑問を遮り、リンドウは指示を出す。

その指示通りライ、サクヤ、ソーマ、コウタは廃教会の出入り口を守るように見張りをし、リンドウとアリサは中へと入っていく。

それからすぐだった。

アリサの悲鳴と同時に……

瓦礫が崩れる音がしたのは……

同時刻……

とある男の口角が吊り上がった。それを見た者は誰もいない。

崩落の音が聞こえ、ライとサクヤが廃教会内に入ってくる。

そこには膝から崩れ落ちるアリサの姿があったがリンドウの姿はなかった。

「貴女!!何を……!!」

「パパ……ママ……違うの……私……」

サクヤの叱責が聞こえてないのか。焦点の合っていない視線でうわ言のような言葉を繰り返すアリサ。

同時にソーマとコウタもヴァジユラの変異種のアラガミに囲まれていた。

「サクヤ!!お前達はアリサを連れてアナグラに戻れ!!」

『サクヤ、お前がが指揮を取れ!!ソーマは退路を開け!!これは命令だ。』

「嫌よ!!私も残って戦うわ!!」

「ダメだ!!アリサを連れてアナグラに戻れ!!いいな?全員必ず生きて帰れ!!これは命令だ!!」

「サクヤさん!!このままじゃ共倒れだ!!行こう!!」

「嫌よ!!リンドウ…リンドウ!!」

いつもの冷静さを失ったサクヤの腕をコウタが無理矢理引っ張って連れて行く。

「アリサ。行くよ。」

「パパ…ママ…違うの…」

「…………ごめん。」

うわ言を言うアリサに手刀を喰らわせアリサの意識を刈り取るライ。そのままアリサを背負い逃走する。

その後、無事にアナグラのヘリに救助され事なきを得た第1部隊。

しかしアリサは医務室に収容され、サクヤは茫然自失と精神面の衝撃が大きかった。

しかし特効薬となるであろうリンドウはこの日アナグラに戻ることはなかった。それどころか腕輪の反応も消失した。

即ち、リンドウの行方不明。

それは極東支部随一の実力者であり極東支部の神機使いの精神的支柱を失ったことと同義だった。

そして…

この事件が後に大きな事件に繋がる布石となる。

主治医

リンドウの行方不明

それはフェンリル極東支部に所属する神機使い達に大きな衝撃を与えた。

リンドウを探しに行こうとする者も少なくなかった。

しかしそれをツバキは許さなかった。

ツバキの決定はフェンリル極東支部の決定と同義だ。

神機使いもフェンリルという組織に所属している以上、組織の決定には逆らえない。

無論、実の弟を探しに行きたいという思いに駆られているのは誰よりも姉であるツバキだろう。

リンドウが隊長を務めていた第1部隊も深刻な状態に陥っていた。

精神的支柱を失い、情緒不安定に陥ったサクヤ。

精神的ダメージで医務室に收容され戦線離脱となったアリサ。

ライ、コウタ、ソーマは幸い、サクヤやアリサほど大きなショックを受けることはなかったがそれでもリンドウの損失は大きな陰を残した。

結論から言えば第1部隊はバラバラな状態だった。

さらに、今回の件の元凶はアリサだ。

アリサの暴発により起きてしまったアクシデントと言える。

そしてこれによりクローズアップされるのは今迄のアリサの行動と言動。

新型としての矜持故に第1世代の神機使いを下に見る発言や独断行動。

先輩にあたる神機使いの注意も聞くそぶりもなく、むしろ反論するなど目に見えて問題行動が多かった。

故にこの事故は起こるべくして起きた事故とも言えるだろう。

そしてこの事件を巻き起こしたアリサをよく思わない輩が調子付くのも当然の理だった。

ライは今、医務室の扉の前に佇んでいた。

その表情は険しく、暗かった。

医務室内からは発狂したかのようなアリサの叫びとそれを落ち着かせようとしているツバキの声が聞こえる。

アリサの叫びはまるでトラウマを引き起こされたような幼子のようにも聞こえた。

その叫びを聞き、意を決したのかライは医務室に入ろうと足を動かす。

その時だった。

「ああ、君か。」

不意に呼び止める声を聞き、ライは声の主の方を見る。

そこには白衣を着た褐色肌の小太りの男がいた。

「今は会わない方がいい。薬が切れるといつもああなんだ。」

「貴方は…」

「そういえばこうして話すのはじめてだね。私はオオグルマダイゴ。」

アリサのメンタルケアを行なっている主治医だ。」

「僕を知っているような口ぶりですが…」

「君の適正試験のときに居合わせていてね。」

「そうですか。」

ライはオオグルマを警戒していた。

特にアリサの“主治医”と“メンタルケア”という単語に引っかかりを覚えたからだ。

「主治医というならアリサの過去に何があったかは貴方は知っているのですか？」

「知っている。だけど教えることはできない。アリサのプライバシーーに関わるからね。」

「そうですか。分かりました。貴方の言う通り今日はやめときます。」

「そうしてくれると助かる。でも落ち着いたらアリサと仲良くしてほしい。」

「はい。それでは僕はこれで。」

オオグルマに一礼し、その場を後にするライ。しかし、エレベーターの扉が閉まるまで警戒を解くことはなかった。

神機使いの最期

リンドウの行方不明から1週間。

「リンドウの搜索を終了して…どういうことですか!!？」

「…上層部の決定だ。雨宮リンドウ少尉は本日付でMIA（作戦行動中行方不明）認定された。そしてこれまでの功績を讃え、2階級特進となり大尉となった。」

第1部隊を招集したツバキからリンドウの処遇を伝えられた。

言い渡されたのはリンドウ搜索の打ち切り。遠回しに死亡認定とも言える。

「そんな…まだ腕輪も神機も見つかっていないのに…それにどこで襲われたのかもどのアラガミに襲ったのもわかっているのに…どうして…」

当然、第1部隊の誰もが納得してない。特にサクヤはツバキに掴みかからんばかりに問い詰める。

「さつきも言ったがこれは上層部の決定だ。逆らうことは赦されん。…連絡は以上だ。それでは解散。」

しかし、ツバキは上層部の決定を非常に通達することしかしななかつた。

「確かになんか不自然だね。」

「そうなのか？」

任務を達成しアナグラに戻ってきたライは整備室でリツカと話し込んでいた。

実はライが1番話す相手はこのリツカだったりする。話す内容は基本的には神機についてが主だが…

「うん。神機使いが行方不明になると見つかるまで探すことが多いんだ。まああくまでメインは神機の回収なんだけど。神機もそんなすぐに造られるものじゃないしき。だから何人もの神機使いが使いまわしてきた神機は神機使い（ゴットイーター）の歴史そのものと言っても過言じゃないんだ。」

「そうなのか？」

「ちなみにコウタ君が使っている神機は前の使い手はツバキさんって知ってた？」

「初耳だ。確かに腕輪を付けてたしかつては戦場に出てたとは思ってたけど。」

「規定年数を超えたのかはわからないけど上層部の指示で任を解かれてね。でも神機使いがいつまでもその神機を使い続けられるわけじゃないからね。いづれはゴットイーターを引退する時が君にも来ると思うよ。…その時まで生きてればだけど。」

「不安なのか？」

「…そうだね。今までも死んでいった仲が良い神機使いもいたから。そして今回はリンドウさん。次は君かと思うと…怖いよ。」

不安げに答えるリツカ。その姿にライが示したのは…

「神機の具合はどうかかな？」

「え？」

「だから神機。僕の神機はどこも悪くないかな？」

「あ…うん。どこも異常はないけど…」

「なら大丈夫だ。僕はそう簡単には死なない。君が整備した神機があるからね。」

「神機が正常に動けばあとは慢心さえしなければ神機使いはそうは死なないよ。戦術があるなら状況を打破する手があると同義だ。」

「あのさ…慰めてるの？」

遠回しに話すライに直球に聞くリツカ。

「いや、単に死なないというよりは根拠を説明した方が君も納得すると思うて…」

変だったか？と聞くライに対し、少しの間呆気にとられるリツカ。

そして…

「プツ…フツ…アハハハ!!」

「笑うところあったか?」

突然笑い出すリツカに困惑するライ。

「ううん。ごめん、ありがとう。」

「御礼を言われることをした覚えはないが…」

真顔でそう言うライにまたも笑うリツカにさらに困惑ライだった。

感応現象

リンドウ搜索が中止となっても神機使い（ゴットイーター）のやることは変わらない。

「敵アラガミのオラクル反応消失。ミッション終了です。」

インカム越しにヒバリの声を聞きながらライは本日の討伐を終えていた。

「お疲れ。」

「コウタもお疲れ。」

今回の任務の同行者だったコウタに労いの言葉をかける。ここ最近のコウタとのツーマンセルが多く2人の連携は日に日に良くなっていた。

「今日も危なげなく行けたな。」

「コウタが適切に援護してくれたおかげだよ。」

「そうかな？俺はお前が作り出した相手に隙を狙って撃ち込んでるだけだからな。あんまり自分では分かんねーや。」

「その隙を見逃さずに的確な射撃ができるのはコウタの実力さ。慢心は駄目だけど自信は持っていていいと思う。」

「へへ。ありがとな。お前にそう言われるとなんか嬉しいぜ。でもサクヤさんも大事をとって休暇を取ったみたいだし今の第1部隊はロボロだからさ。俺もお前のようにこの部隊を支えられるようにならないとって思ってた。」

コウタの言うようにサクヤは現在、休職状態にある。

リンドウ不在で1番影響を受けたサクヤの精神面を考慮してのとだとツバキから伝えられていた。

「支えてるってそんなつもりはないけどな。」

「じゃあサクヤさんとアリサが戻ってくる場所はどこだと思う？」

「できるならここに（第1部隊）に戻ってきてほしいけどサクヤさんはともかくアリサは…」

「アリサの様子は芳しくないのか？」

「わからない。医務室に行くのと寝てるからね。医療班の人の話だと目

を覚ますとヒステリックを起こして鎮静剤を打つてもあまり効果が
見られないらしい。腕とか見たけど傷だらけだったよ。」

任務を終えるとライはアリサの見舞いに行くのがここ最近の日課
となっていた。同じ新型のよしみとしてもあるようだが理由は他に
ある。

当然アリサが心配であるのはライも変わらないがライが一番気が
かりなのはアリサの「主治医」である。

オオグルマダイゴ

初対面以降も度々顔を合わせていたが表面上は親密に接するも警
戒だけは解かなかつた。

オオグルマを何故ここまで警戒するのはライ自身わからない。

だが、本能が直感がオオグルマを危険と認識していた。

ライはその警告に従ってオオグルマを警戒していた。

「とりあえずこの後も行ってみるつもりだコウタも時間があれば見舞
いに来なよ。」

「ああ、そうする。」

アナグラに戻ってきたライは任務完了の報告をすると早速医務室
へと向かった。

「やあ君か。いつも見舞いに来てくれてありがとう。」

「どうも。」

医務室に入るとそこにはベットに横たわり眠りにしているアリ
サと…

ライが警戒する存在…オオグルマの姿があった。

「アリサの様子は？」

「いつもと変わらないよ。起きたら自傷行為に走って、過去の記憶を

見てるのか悲鳴をあげる。今は寝てるけど強い鎮静剤を投与したからね。しばらくは目を覚まさない。」

「そうですか。」

あくまでアリサを心配するような言動でオオグルマと話すライ。

いくら警戒していようとあくまでフェンリル所属の医師としての腕はライも信用しているのか話はスムーズに進む。

「君にも迷惑をかけているみたいだね。」

「迷惑?」

「アリサのおかげで第1世代の神機使いと確執が生まれたと聞いている。お詫びはできないがアリサのかわりに謝罪するよ。すまなかった。」

「気にしないでください。」

頭垂れるオオグルマにそう返すライ。実際ライ自身はそこまで気にしてはいない。

単独での任務の方が報酬がいいという面もあるし1人だからこそ思考し続ける大切さを学んだためライが気に病むことはなかった。

「今、僕が気にかけているとしたらそれはアリサが再び立ち上げられるかですよ。」

そう言っただけ眠っているアリサの手を優しく包み込むように握る。

……その時だった……

「っ……………!!」

ライは自分の頭に電気が走った気がした。

同時に脳裏にとある「映像」がフラッシュバックした。

それはトランプのキングのような顔をした「アラガミ」

そして……

「え?」

今まで眠っていたアリサが目を覚ました。

「目を……覚ましただと?…し……失礼する!!」

アリサが目を覚ましたことに動揺を隠せない様子のオオグルマは何故か慌てて医務室から出て行った。

「今、私……貴方の……」

そう言い残しアリサは再度眠りについた。

「今のは……一体……」

事態を飲み込めないのはライも同じだった。

脳裏に映った映像。それがなんなのかわからない。

そして慌てて外に出たオオグルマ。

その姿にライは疑問を覚える。

「何故目を覚ましたことに動揺するんだ？」

その疑問に答える者はいなかった。

一方医務室の外では……

「はい。まさか目を覚ますとは……」

オオグルマが何者かに連絡していた。

「はい。恐らく、新型同士による『感応現象』が起きたのかと……」

「如何致しましょう。隔離した方が……」

「分かりました。今はこのままです……では、私はこれで……」

通話を終えたオオグルマ。

「……まさか机上の空論と思われていた感応現象が発動するとは……」

「なるほど……『あの方』も重宝するわけだ。しかし感応現象が立証さ

れた以上『計画』に狂いが生じかねない。」

「……やはりひき入れるしかない。あわよくばアリサ同様に私の忠実な

僕に……」

オオグルマのメガネが怪しく光る。

しかし彼は知らない。

自分が毒牙に掛けようとした存在が自身の想像の範疇を越えた存在だということを……

過去

不思議な体験をしたライは翌日もアリサの下を訪れた。

この日はオグルマの姿もなく、眠っているアリサとそれを見守るライの2人だけだった。

静寂が流れる。片方が眠っているのだから当然だが…

「昨日の感覚は一体…」

不意に自分の手を見るライ。

昨日、ライがアリサにしたことは手に触れた程度のことだった。

その瞬間、脳裏に映像がフラッシュバックし、その直後、眠っていたアリサが目を覚ました。

アリサが目を覚ましたことにまるで狼狽し慌てて医務室を出たオグルマの行動も気になっていたライは彼にそのことを問うと…

「目を覚ましたことを他の医務局員に連絡した。」

という返事が返ってきた。

また検査でもするのだろうか。その返事にそういう意味合いと捉え昨日のライは医務室を後にした。

「……………」

自身の手を見つめるライ。

しばらくして昨日のように自身の手を眠っているアリサの手を重ね合わせ、優しく、まるで壊れ物を扱うように…アリサの手を握った。

直後…

昨日経験した不思議な感覚がライの体に流れる。

しかし昨日見た映像よりも鮮明に…かつ、1つの動画のような映像が脳裏に流れた。

「もういいかい?」

「まあだよ。」

「もういいかい？」

「まあだよ。」

聴こえてきたのは男女の声と少女の声。

かくれんぼでもしているのか男の声と少女の声が反響する。

「もういいかい？」

「もういいよ。」

少女の隠れ処が決まり、かくれんぼがスタートする。

ライの視点は少女のものなのか少女の隠れ処であろうクローゼットから外の様子を伺っていた。

数分もしないうちにかくれんぼの鬼役である2人の大人の男女が姿を現した。

少女が隠れているクローゼットの前に2人が近づいた時だった。

「それは、突然、訪れた。」

聴こえたのは獣の咆哮。

直後、その獣が鬼役の大人に襲いかかった。

「パパ：ママ：やめて：食べないで：」

少女の涙ぐむ悲鳴の懇願はその獣：アラガミに聞き入られることはなく：少女の目の前で彼女の両親を食い殺した。

そして捕食が終わったのかそのアラガミが移動を始める。

一度、クローゼットの中を覗き見たが少女に気づくことなく、アラガミは離れていく。

そのアラガミの顔は「トランプのKのカードに描かれる王」の顔をしていた。

次の光景はゴットイーター適性試験だった。

「戦え!!打ち勝て!!!」

「そうすれば君は無力で何もできない少女から1人の戦士へと生まれ

変わる。君自身の野望を君自身で叶えられる!!」
放送から男の声が聞こえる。
まるで鼓舞するかのように強要するかのように…

再び視点は変わり少女は病院で入院していた。

「これが君たちの敵、アラガミだよ。」

「アラ…ガミ…」

近くに男の声が聞こえ、少女にアラガミについて教えていた。

「そうだよ。君のパパとママを殺したアラガミだよ。」

「パパ…ママ…」

男の声に続くようにまるでうわ言のように少女も呟く。

「でも君はもう戦える力を持っているだろう?」

「力…」

「そうだよ。君の強い強い力で君のパパとママを殺したアラガミを倒すんだ。なに簡単なことだよ。この“アラガミ”に向かって引き金を引くだけでいいんだ。このアラガミが君のパパとママを食べちゃったのだから。」

“このアラガミ”と言うことで少女に映像に映ったアラガミを少女に強く印象付ける。

しかしおかしなことに…

少女に印象付けたアラガミは“アラガミ”ではなかった。

何故か…

アラガミを映していたモニターに“あの男”が映し出した。

少女が自身の両親を殺した存在と刻み込んだのはあの王の顔のアラガミではなく…

“リンドウ”だった。

映像はここで途切れ、視界は医務室に戻る。

するとアリサが目を覚ました。

「今のは…」

「落ち着いて。大丈夫だから。」

アリサが混乱しないように優しく冷静に落ち着くよう言うライ。

少し話すとどうやらアリサの方にもあの映像の光景が流れ込んでいたらしい。

そこからアリサの独白が始まり、自己嫌悪になるアリサを抑え、ライはアリサの独白を聞いていた。

「私はこれからどうすれば……」

「今は先のことより自分の体調を良くすることを考えて。」

弱々しくそう言うアリサを優しく抱きしめるライ。その光景は兄甘える妹のような光景だった。

その後、アリサが再び眠るまで、ライはアリサの手を握っていた。

「……そう。アリサにそんなことが……」

「確証はありません。ですがアリサ本人の確認は取れましたからアリサの過去は事実でしょうね。」

医務室を後にしたライが向かった先は現在休養中のサクヤの下だった。

「いえ、信じるわ。私としても少し気になることがあったから。今の話を聞いて少し合点が言ったわ。」

「何か調べものをしてたようですが…」

「少しね。それにしても相手の気持ちの流れってくる…ね。新型特有の不思議な力なのかしら?」

「ただの遠近切り替え可能の神機使いじゃなかったんですね。」

「貴方もその程度の認識だったのね。とりあえずアリサは貴方に任せ
ていいかしら?アリサも貴方には心を開いてるみたいだし。」

「そのつもりです。一応リーダー命令でもありますから。」

「リーダーってリンドウの?それって押し付けられたんじゃない?」

「今となつてはそうなりますね。」

その後は談笑するライとサクヤ。

「ごめんなさい。君にはいろいろと負担をかけたわね。私ももう少ししたら復職するわ。」

「お願いしますね。」

サクヤと別れた後、エレベーターに乗ると中には先客がいた。

「やあ君か。」

「オオグルマ先生。」

エレベーター内にいたのはオオグルマだった。

「そうだ。君に渡したいものがある。」

そう言つて、オオグルマはライに1つの「注射器」を渡した。

「それは…」

「君の記憶を取り戻すことができるかもしれない薬物『リフレイン』というものだ。君が記憶を失っていることを聞いてね。アリサの
ことを見てくれている御礼ではないが私も君の役に立ちたくてね。薬物療法は身体に毒だがこれは中毒性は低い。試しに使ってみるといい。」

言うだけ言つてオオグルマはエレベーターから降りていった。取

り残されたらライは渡された注射器を見る。

「リフレイン」

聞き覚えのある薬物だった。同時にライの脳裏に『紅』が思い浮かんだ。

『紅』……………カレン……………」

紅が思い浮かんだ瞬間同時に『カレン』と言う単語が思い浮かんだライ。

しかし今のライにはその単語の意味もなんなのかも分からなかった。

暗殺の憶測

「もう少ししたら復帰できると思います。」

「そうか。」

「とはいえ、他の神機使いの方達が受け入れてくれるでしょうか？」

「どうだろう。」

アリサの見舞いに来たライ。アリサによるともうじき復帰できるそうだが、今までの自身の言動や行動、そしてリンドウ喪失の主犯としての責任。それがアリサを苦しめていた。

「貴方にもご迷惑を掛けたと思います。すみませんでした。」

「僕のごことは気にしなくていい。それに諦めたわけじゃないから。」

「え？」

「リンドウさんのこと。きっと誰も諦めてないと思う。」

アリサを慰めるために言ったわけじゃない。ライはリンドウが生きていると思っていた。

当然確固とした根拠はない。だがリンドウが閉じ込められたあの廃協会のステンドグラスは割れていた。神機を使えば脱出できたかもしれない。当然アラガミと一緒に閉じ込められたのだからそのアラガミと戦闘した後となるが。

「さて、そろそろ時間だ。」

「あの…また来てくれますか？」

任務の時間になったのかライが立ち上がる。そんなライにアリサは弱々しい声色で問う。

「うん。また来るよ。」

そう言って医務室を出るライ。

「また来てくれますか？…：か。」

何気にアリサから言われた言葉をライは呟く。

その時…

「また、会いに来てくださいね」

ふと脳裏にアリサとは違う声色の声が聴こえた。

そして自然に脳裏の声にライは答えていた。

「ああ、会いに行くよ。『ナナリー』」

そこでライは我にかえる。

「ナナリー？誰だ？」

首を傾げるライ。先日オオグルマから受け取ったリフレインを見て口にした。『カレン』そして今の『ナナリー』やはり今のライにはその単語が意味することは分からずにいた。

因みにライはリフレインを使わずに今は自身の部屋に置いている。ライ本人が自身の記憶に興味を示していないという理由もあるがリフレインを与えたのが要警戒の人物だということ、そしてそのリフレインを得たことで思い出した『カレン』という単語。その単語がリフレインに対し、強く拒絶してる感じがしたのでとりあえずその直感に従って使わずにいた。

「まあいいか。」

軽く頭を振って気を取直したかのようにエレベーターへと向かった。

「あら、戻ってきたわね。」

今日も無事に任務を終えて、アナグラに戻ってきたライ。

そこにサクヤが待ち構えた。

「少し話があるの。付き合ってくれる？」

「はい。」

恐らくアリサ関連だろうと思いき抵抗なくサクヤについて行く。

「アリサに話を聞いてみたわ。」

「…そうですね。」

「別に貴方から聞いた話を信用しなかったわけじゃないわ。でもやっぱり本人の口からあの時の真実を聞きたかったの？」

「いえ、それがいいでしょう。僕の言うことはあくまで僕の見識ですから。」

「ありがとう。それで分かったことなんだけど貴方はアリサの主治医を知っているかしら？」

「オオグルマ先生ですか？はい。何度か会ってるしつい最近も会いましたね。」

「その先生は今行方不明になってるみたいなの。ロシア支部に戻る際にアラガミに襲われたとか。」

「それはいつ頃ですか？少なくとも先日僕は会ってますよ。僕の記憶喪失に役立つ薬品も受け取りましたし。それに主治医は自分の担当の患者を置いて別の支部に行きますか？必要な物資がロシアにあるなら向こうから送ってもらった方がいいでしょうし。」

「そう言われればそうね。それは不可解ね。」

「いや…少し待ってください。」

そう言っただけでライは思考を深くする。そして自身のごく最近の記憶を追想して行く。

「アリサ…主治医…メンタルケア…過去……洗脳」

「え？」

「もしかしたらアリサは洗脳されてリンドウさんを暗殺する道具として使われたのかもしれませんが。」

「どういうこと？」

『アリサの過去を見た時にアリサにアラガミについて教える映像がありました。その映像の最後はアリサを殺したアラガミがリンドウさんにかわっていました。』

「そしてアリサの主治医として一緒に極東に来たのもメンタルケアと称した洗脳を繰り返し続けるため。姿を消したのはそれが難しくなったとか何か都合が悪いことが起きたか、…もしくは目的を達成したから逃げ出したかでしょう。あくまで憶測ですが。」

「そんな…そんなことが…」

「憔悴したアリサは洗脳するのにうってつけだったのかもしれないせん。両親を目の前で殺されたなら精神状態がおかしくなっても不思議。」

議じゃないですから。」

淡々と答えるライ。同時にライ自身自分の思考の速さと展開に驚いていた。

「……ない。」

部屋に戻ってきたライは部屋内に“あるもの”がなくなっていた。

「逃げる前に回収したか何者かに回収されたか……」

「どうでもいいか。『リフレイン』なんて……」

ライの部屋から無くなっていたもの……

それは薬物『リフレイン』だった。

しかしこの『リフレイン』が後々大きな事件を巻き起こす。

指南

「……本日付で原隊復帰となりました。……またこれからよろしくお願ひします。」

エントランスで談笑しているライとコウタ。そこに俯きながらもライ達には原隊復帰の報告に来たアリサの姿があった。

「実戦にはいつ復帰なの？」

「実戦はまだ……」

「そうか。まあ退院したばかりだから無理はしない方がいい。」

実戦に出れるか聞くコウタに出れないというアリサ。その返答に理解を示すライ。

しかしアリサの本心は早く実戦に出たいという思いだろう。

現にアリサを取り巻く現状は悲惨だ。

リンドウ損失の主犯。

短期間で使い物にならなくなった新型の片割れ。

新型とは名ばかりの役立たず。

現にアリサの原隊復帰を知ったゴットイーター達が隠すつもりはないのかライ達に聴こえる声量で陰口を叩いている。

その印象を植え付けたのはアリサ本人だ。

そしてその印象を払拭するのもアリサにしかできない。

「……貴方達も私を責めればいいじゃないですか。」

「俺たちは責めたりしないよ。な？」

「ああ。君を責めてリンドウさんが戻ってくるなら喜んで責める。」

「お……おい……」

「だけどそうじゃないだろ？終わったことを忘れるなどは言わない。だけど立ち止まってもいられない。なら進むしかない。」

「……………」

ライの厳しくも見える叱咤激励。

確かに死者や行方不明者を思うことは大事なことであり忘れてはならない思いだ。

しかしその思いに縛られて前に進むことを止めてはならない。

逃げてもいい。前に進むためには寄り道も必要だろう。

しかしどんな寄り道をしても必ず一度逃げ出した道（壁）をとらなければ前に進めない。

生きてる以上一歩ずつするしかないのだから。

すこし重苦しい空気が流れる。

『あ、あのさ!!あの時現れた新種のヴァジュラ。』

その空気に耐えられなくなったのか強引に話始めるコウタ。

「最近になって極東地域周辺に目撃情報が出たんだって。これは何かの兆候なのかな…なんて…」

新種のヴァジュラという単語にさらに暗くなるアリサに徐々に言葉が詰まるコウタ。

そして…

「悪い。あとは頼む。」

コウタはライに任せてその場を去った。

「はあ。」

「あ…あの!!」

そんなコウタに対し嘆息するライ。そんなライにアリサが声を掛ける。

「もう一度…私にもう一度戦い方を教えてくれませんか?」

「戦い方を?」

「はい。今までの私はただ両親の仇を取る為にゴットイーターとして努力してきました。でも今は違う。」

「私はこの手で私の大切な人を守るようになりたい!!」

「だから…私に戦い方を教えてください!!」

よろしくお願いします。と言って頭垂れるアリサ。

その様子に以前とかなり変わったなあと内心思いつつ、

「わかった。でも任務はまだ出れないから今日は訓練で。ツバキ教官に掛け合って僕が同行する時は君を任務に参加させるようにしてみよう。」

「は…はい。ありがとうございます!!」

ということコウタがアリサに戦闘の指南することになった。

「動きを止めるな。バックラーは回避メインの防具だから耐久力は低い。」

それからというもののライ主導の下、アリサの戦闘のリハビリが行われた。

ツバキに掛け合った説得もうまくいき、今現在はコンゴウ討伐に出ていた。

「大振りなんだから簡単に避けれるだろ。そして回避から間髪入れずに銃を撃ち込め!!」

「クツ…」

ライの指示が飛ぶがアリサの動きが固い。やはり実戦は速かったかと思いつつもコンゴウに斬りかかるライ。

実戦の前に訓練を繰り返し行い、動けると判断したからこそ今回の任務に同行させたライ。しかし違いを改めてアリサに感じさせることには収獲したと思っていた。

アリサにシミュレーションと実戦の違いを改めて感じさせるのが今回の任務の目的。そしてあわよくばアリサの手で本物のアラガミを倒すことで自信を持たせようとした。

「まあ目的は果たせたからいいか。」

呑気なことを考えていながらコンゴウの一撃を紙一重にかわすライ。今のアリサには到底不可能な動きをするライにアリサは自身とライの本当の実力差を思う知らされる。

かくして今回のコンゴウ討伐はライにより仕留められた。

「ライさんは怖くないのですか？」

「何が？」

アナグラに帰投中、不意にアリサに問われたライ。

「何がってアラガミですよ。かつての私も恐怖すら感じてなかったのに今回はアラガミを目にしたら足がすくんじやって…」

「まあアラガミにトラウマを植え付けられたようなものだからね。君は。」

「逆に聞くけど仮に君の両親を殺したアラガミを倒したら君は満足する？」

「え？」

質問の意図がわからないのかクビを傾げるアリサ。

「僕達がどんなにアラガミのコアを取り出してもアラガミを形成するオラクル細胞はその個体を捨てて一度分裂して集結してまた新たなアラガミが生まれる。」

「別に僕達が生きていることが無駄というつもりはない。エイジス計画に必要な素材が無限にあるのと同義だからね。」

「でもその再集結して生まれたアラガミがまたアリサの仇だったら？何度も何度も仇打ちの繰り返し。それはアリサにとって生きる希望？それとも終わりのない苦痛？」

「それは…」

「だから仇というのは持たない方がいい。っと話が逸れた。なんだっ たっけ？アラガミが怖いかったかな？」

「あ…はい。」

「そうだね。怖くはないかな？」

「どうしてですか？」

「わからない。戦っている時はそんなことを考える暇はないしね。」

「怖いと思う前にいかにアラガミを倒すかに頭を働かせているからそんな感情に浸る余裕がないのかもしれない。」

「そうですか。」

アリサがライに何故この問いをしたのか

それは見たからだ。

コンゴウを倒し、コアを回収する時に見せたライの顔を…
ほっとするわけでもなく、喜ぶ様子もない。

ただ無表情に

ただ悲しげに…

そしてつまらなそうその顔を…

克服

「うん。最初の頃より断然動けるようになってきたね。」

「はい。ライさんのおかげです。」

今回もライはアリサを連れて実戦任務に赴き、討伐対象のアラガミ『ボルグ・カムラン』の討伐を終えていた。

ボルグ・カムランは蠍のような形状と鬼のような盾を持つ大型のアラガミである。

「大型種相手にも動けるようになったのなら、もう大丈夫だと思うけど。まだ恐怖心はあるかな?」

「いえ、大丈夫だと思います。もちろん完全に払拭できたとは言いきれませんがアラガミを前にしても恐怖心に支配されるようなことはなくなっただと思います。」

「そうか。じゃあもう僕と一緒にじゃなくてもいいんだな。」

「はい。今までありがとうございました。まだ本格的な復帰はもう少しばらく先でしょうけど前のような状態にはきつとならないと自信を持って言えます。」

そう言うアリサには自信に満ち溢れていた。

元からアリサの戦闘能力及び状況判断能力は高い水準だった。今のアリサはその状態に戻ったと言えよう。

しかしあの頃のような天上天下唯我独尊のような雰囲気はなくその姿を見てライも安心していた。

しかし懸念材料もあつた。

それは…

ヴァジュラ種との戦闘を避けていたことだ。

今回はあくまでもアリサに実戦感覚を取り戻すのに重点を置いていてヴァジュラ種との戦闘はアリサのトラウマを刺激しかねないと判断したライは故意にヴァジュラ種との戦闘を避けていた。

アリサの両親を喰い殺したアラガミもヴァジュラ種でありリンドウを閉じ込めた時も対峙したアラガミもヴァジュラ種だ。

とりあえずヴァジュラ種以外のアラガミは対峙できることは証明

されたがヴァジュラ種のアラガミを倒したその時こそアリサは完全に復活できるだろう。

その時は意外にもすぐに訪れた。

「説明は以上だ。何か質問はあるか。」

アナグラのエントランスにてツバキから今回の討伐任務の説明を受けていた。ライ、コウタ、サクヤの3人。

さらにツバキの隣に復帰後はツバキの補佐をしているアリサがいた。

「はい。アリサも今回の任務に討伐任務に同行させてほしい…ですが」

手を挙げてそう進言したのはコウタだった。

「彼女、最近頑張っていると思うんだ。だからそろそろ本格的に復帰してほしい…なんて…」

相変わらず最後は弱々しくなるコウタ。その意見を聞いたツバキはライとサクヤに目を向ける。

「お前たちはどうだ？お前たちも同じ意見か。」

「はい。私も依存はありません。」

「同じです。」

しばし考えながら答えるサクヤ。それに乗っかるように答えるライ。

「お前は どうする？相手は『アレ』だが。」

「……………」

次は隣にいるアリサに任務参加を問うツバキ。アリサは俯き考えるが、意を決したのか顔を上げて答えた。

「行きます。行かせてください。」

「……………わかった。だが無理はするなよ。」

ツバキから任務同行の許可が下り、アリサの「ヴァジユラ」討伐任務の参加が決まった。

「それじゃあブリーフィングを始めるわね。」

ヘリで現場に移動中にブリーフィングを行う。

「そういえばこのメンツで任務に出るのもすごく久しぶりな気がする。」

場を和ませるようにコウタがそう言うのと全員がコウタの方を見る。

「そうね。私も長く休暇してたしアリサも入院中だったものね。……ごめんなさい。古参の私が頑張るべきだったのにあんなに取り乱しちゃって。」

「戻ってきたからそれでいいです。それよりブリーフィングを始めましょうか。」

場の雰囲気は暗くなりそうなのを阻止しブリーフィングを始めるよう促すライ。

「そうね。それじゃ改めてブリーフィングを始めましょう。今回も相手はいつもと変わらないヴァジユラだけど気をつけていきましょう。私とコウタは牽制や援護。ライは陽動兼接近戦を任せるわ。アリサは……」

「アリサは遊撃で。」

「え?」

そう言ったのはライだった。

「まだ本調子じゃないしアラガミを前にしてもある程度動けるようにはなったけど無理はしてほしくない。自分で判断して動けるなら攻撃に参加、無理そうなら生き残ることを1番に考えて行動してほしい。」

「あ、それって」

ライの言葉に反応したのはコウタだった。

ライが最後に言った言葉。

それはリンドウが何度も繰り返して言っていたことだった。

『死ぬな。死にそうになったら逃げろ。それで隠れろ。隙があったらブチ殺せ。』

「そうね。アリサ。ツバキ教官も言ってたけど無理はしないでね。」

「…はい。」

「そっちに行ったわ!!」

「クソツ!!あともうちよいなのにここで弾切れかよ!!」

贖罪の街で行われるヴァジュラ討伐。

ブリーフィング通りコウタとサクヤが援護や牽制にまわり、ライが近接戦を挑んでいるが決定打が足りない状況だった。

アリサはやはり他のアラガミと比べてヴァジュラを前にすると動きを鈍くなって迂闊に攻撃もできない状態だった。

「問題ない。」

しかしライはそんな状況からでも臆することなくヴァジュラの電撃を避けては神機の大剣を振り下ろす。

声にならない咆哮を上げ倒れかかるヴァジュラだがなんとか踏み止まり、周囲に電撃を撒き散らし、その場から逃げ出す。

「固まったら格好の的よ。散開して探しましょう。」

「了解。」

ライとサクヤは北側にまわりコウタは南側から搜索する。

「っ……」

アリサも重い足を動かしヴァジュラ搜索に向かう。

最初にヴァジュラを見つけたのはアリサだった。
自分が見つかからないよう廃墟の陰に隠れる。

「パパ…ママ…」

脳裏にヴァジュラ種に喰い殺された両親が浮かんだのか小さく呟くアリサ。

そして意を決して姿を現し銃形態の神機をヴァジュラに向ける。

あとは引き金を引くだけ……なのだが……

『ク……』

アリサはその引き金を引けず、膝から崩れ落ちる。

「アリサ?」

そんな姿のアリサを偶然見つけたライ。

ヴァジュラの存在に気づかないという失態を犯したライがアリサの方へと足を進める。

……そんなライにヴァジュラは飛びかかっていた。

「あ……」

このままではライが死んでしまう。

あの時の自身の父と母のように…

そう思ったした瞬間、アリサは叫びと共に神機の引き金を引いた。

「よけてええええええ!!」

神機から放たれた銃弾は飛びかかるヴァジュラの顔面に寸分違わずに直撃しそれが致命傷となり、そのまま地面に叩き落とされた。

ライも爆風で少し吹き飛ばされたが対したダメージはなかった。

爆発音が聞こえてすぐに現場に現れたサクヤとコウタ。

何があったのか悟ったサクヤは膝から崩れ落ち、手で顔を覆いながら泣いているアリサの前行き、しばらくの間アリサを抱きしめた。

「これで大丈夫…かな。」

その様子を見て、アリサの復活を確信したライは小さくそう呟く。

「しかし我ながら失態だな。」
ついでにヴァジュラに気づけなかった自信の失態も恥じていた。

リーダー就任

ヴァジュラ討伐の成功を機にトラウマから解放されたアリサのその後の活躍は目覚しかった。

以前の高圧的な態度は鳴りを潜め、また単独行動もしなくなった。その変わりように大きな溝があった旧式神機使い達にはしばらくの間、戸惑いを感じられたようだが今となってはその献身的な行動を評価されアリサを悪く言う者はごく一部となっていた。

：まあアリサ自身黒歴史として時折自己嫌悪に陥ることが多々あるが…

因みに裏でライやサクヤがいろいろ手を回していたのはアリサは知らない。

とある日、ライ達第1部隊全員がエントランスに集合していた。

「全員集合って珍しいけどなんかあったの？」

「知りませんよ。知ってても貴方には教えませんがね。」

「ひでえ。」

変わったとはいえコウタやシユンのような性格の者には相変わらず辛辣な言葉を吐くアリサ。

「サクヤさんも何か知りませんか？」

「いえ、私も何も聞いてないわ。」

「ライとソーマも聞いてないよな？」

「うん。」

「……………」

コウタの問いにライは同意し、ソーマは沈黙。2人も知らないようだ。

「全員揃っているな。」

そんな会話をしているとツバキがエレベーターから出てきた。

「お前たちを呼び出したのは上層部の決定を伝えるためだ。」

『上層部決定ですか?』

「そうだ。」

そう言い、ツバキはライの方を向く。

「皇ライ上等兵。貴官を本任務完了を機にフエンリル極東支部保守局第1部隊隊長に命じる。また同時に准尉に昇進を命じる。」

「……………」

「す…すげえ。」

しばらくの沈黙の後、最初に口を開いたのはコウタだった。」

「出世じゃん！大出世じゃん!!これってなんていうんだっけ？下克上!!?」

「……………それ、裏切りですよ。」

騒ぐコウタに冷ややかに突っ込むアリサ。そんなアリサにライはアリサが下克上という言葉知ってたことに関心していた。

「ともあれおめでとうございます。貴方になら安心して背中を預けられます。ね、サクヤさん。」

「……………」

「サクヤさん?」

「あ、いえ、なんでもないわ。そう、少し見ないうちにもう隊長か。おめでとう。」

「気がはやいぞ。そいつの隊長就任は今回の任務を終えてからだ。」

ツバキの一言でまた全員がツバキの方を見る。

「確かにリーダーともなれば相応の権限を与えられる。同時にそれ相応の重責を負うことにもなる。」

「神機使い(ゴットイーター)としての職分だけではない。部隊員全員を生きて帰すという重責がな。」

「死ぬな。必ず生きて帰れ。」

「とはいえそれを隊長(リーダー)1人で背負い続ける必要はない。その為の部隊員だ。自分を生かし、味方(仲間)を生かせ。そして誰も

欠けることなくここに帰ってくる。それができて初めてリーダーの職分が成せたことになる。」

「そいつなら1人でも背負い続けることができることだろう。それくらい潜在能力（ポテンシャル）を持っているとの判断されての任命だろうが1人ではいずれ潰れかねん。それ共に支えるのがお前たちだ。」

ツバキから激励とリーダーの務めを話される。

「さて、ボサツとしてないで任務に行くといい。」

『撃ち落とせ!!』

鉄塔の森にて浮遊する一見魔女のような姿のアラガミ『サリエル』の討伐に挑む。ライ、コウタ、アリサ、サクヤ達第1部隊。

サリエルのレーザーのような遠隔攻撃と自身を中心に一帯にオラクルの壁に苦戦するも宙に浮いている間は全員で射撃。地に倒れた時はライとアリサの新型2人の近接攻撃という作戦で初討伐ながらもサリエルを追い詰めていった。

そして時間が掛かりながらもサリエル討伐に成功。同時にライの第1部隊隊長就任が決まった。

「呼び出してすまない。こうして顔を合わすのは久しぶりかな?」
「そうですね。」

アナグラに戻り任務の報告をするとヨハネスに呼ばれたライ。

「まずは祝辞を述べさせてもらおう。リーダー就任おめでとう。」
「どうも。」

「さて、君を呼び出したのは他でもない。リーダーとしての権限の強化と義務について説明をしようと思つてね。」

「まずは権限の強化だが、君にはリーダー専用の個室が与えられる。前リーダーのリンドウ君が使っていた部屋を使うといい。」

「その際、ターミナルにアクセスして利用者権限の更新を行なつておくように。今まで閲覧できなかった情報が開示されているはずだ。」

「情報の開示、共有するということは我々フェンリルが君を認め、信用したという意味だ。……願わくば裏切らないことを願うよ。」

「……まるで、前に裏切られたような口ぶりですね。」
「……………」

少しばかり不穏な空気が流れる。

別段、ヨハネスとライは仲が良いわけではない。ただ、お互いに腹のなかが読めない、読みにくい相手との会話が何故か楽しいと感じていた。

だからこそなんとなく呟いた一言に反応したライにヨハネスはまるでカウンターをくらつた気分になつた。

「フツ…どうだと思つ?」

「さあ?どうでしょう?」

売り言葉に買い言葉。喧嘩ではないがこの言葉が相応しい。

『話を戻そう。次は義務についてだ。』

「君には通常任務とは別に前リーダーのリンドウ君が取り組んでいた『特務』を引き継いでもらう。特務については…」

そこで連絡が入つたのか耳を傾ける仕草をするヨハネス。

「話は次の機会にしよう。君も今日は疲れているだろうからね。」

「僕は別に構いませんが?」

「……そうだな。では特務の話ではなく少し謝罪をしようか。」

そう言うとヨハネスは引き出しから『注射器』と『鍵』と『メモリステイック』を取り出した。

「リフレイン」

「そうだ。君が今は行方不明になったオオグルマ博士から受け取つたリフレインを私が回収したんだ。」

「君が注射器を見てる姿を職員が見てたらしくてね。秘密裏にマスターキーを使って回収させてもらった。」

注射器はリフレインだった。そしてライの部屋から無くなった経緯を話すヨハネス。

「確かにリフレインを使えば君の記憶が戻るかもしれないがそれはひと時のものでそのひと時の為に再びリフレインを使う依存性が出る。現にアラガミが出る前からリフレインは禁止薬物だったそう。君の記憶を取り戻す可能性の1つを奪ったことに申し訳ないと思うが君という優秀な人材を失うわけにはいかなかった。」

『いえ、別に使うつもりはなかったんで気にする必要はないですよ。』

謝罪するヨハネスにそう返すライ。リフレインの話はこれで終わり。次は『鍵』と『メモリスティック』の方を見る。

「ありがとう。では次はこの鍵とメモリだが、これは君が保護された時に持っていたものだ。メモリ内のデータを見ようとしたがロックされていてね。解除にはパスワードが必要らしくてね。」

「それで諦めて僕に返すと。」

「そんなとこだ。あくまで君の持ち物だが君はある意味では得体の知れない記憶喪失者だ。そんな不審人物を抑えるつもりで返さなかったが今回のリーダー就任を機に君に返そう。」

「どうも。リフレインは？」

「こちらで処分しよう。」

「わかりました。では僕はこれで。」

「ああ。今後も君の活躍に期待する。」

「了解。」

そう言い支部長室を出るライ。

ライの元に戻ってきた鍵とメモリ。

この2つが役割を果たすのはまだ先のことである。

拒絶と幻想

ライのリーダー就任は他の神機使いからも祝福された。

リンドウの行方不明というアクシデントによる空席にライが座つたといえば聞こえは悪いだろうがそれでもライのリーダー就任に異を唱える者はいなかった。

但し、優秀な神機使いだからといってリーダーに向いているかといえはそうとは言い切れない。

特にライが率いる第1部隊は極東支部最強の部隊ともいえるし、それ故に一癖も二癖もある部隊員が所属している。

求められるのは統率力。きつとライはこれから四苦八苦することだろう。

「今さ、お前のリーダー就任のお祝いを考えてるんだ。楽しみにしとけよな。」

「いや、気にしなくていいんだけど。」

鎮魂の廃寺にて作戦開始時間を待つライとコウタ。今日の任務はこの2人と。

「……………」

「あ、ソーマ。今度コイツのリーダー就任のお祝いするんだけどさ。お前も参加しない?」

「断る。」

遅れてやってきたソーマにそう尋ねるコウタに対し、ピシヤリと言い返すソーマ。

今日はこの面子での任務なのだがこの通り既にギクシヤクしている。

「そう言わずにさ。俺たちは同じ部隊の仲間なんだぜ。」

「ハッ。仲間か。」

まるで馬鹿にするような嘲笑うかのように言うソーマにコウタの表情が曇る。

「おい！そんな言い方……」

「少し小突かれただけで死ぬような仲間なんて最初からいない方がマシだ。……お前のようにベラベラ口が回るような奴がすぐに死ぬんだよ。」

「な……なんだと……!!」

ソーマの挑発的な言葉に怒りを露わにするコウタだが当の本人は気にする様子もなくアラガミ討伐へと向かう。

「お前暗くてそんなことばっか言ってるから友達少ないんだよ!!」

「コウタ。そこまでだ。作戦開始時間を過ぎてる。」

コウタを落ち着かせるようにそう言うライ。しかし内心では問題山積みで前途多難だなと嘆息していた。

「コウタ!!ソーマの援護!!」

「ああ!!」

「いらねえ!!」

「おい!!ソーマ!!」

ヤクシヤに突っ込むソーマにライがコウタに援護を指示するもその援護を拒絶する。

「クソツ!!アイツ突っ込み過ぎ!!」

「いや、このまま一気に攻める。」

悪態をつくコウタにライはそう言い、スタングレネードを使う。

閃光により視界を奪ったことにより生じた隙をつき、ソーマがヤクシヤの砲塔を斬り落とす。

ヤクシヤの武器はブラストのような砲塔だけだ。それを失えば攻撃の術は失われる。

「手を緩めるな!!」

ライの指示のもと加減なしの攻撃を加え続け、程なくしてヤクシヤが地に倒れた。

「おい。ソーマ!!なんでリーダーの指示を無視した!!?」

倒した後、コウタがソーマに詰め寄る。どうやら独断行動を怒っているようだ。

「お前のせいでヤクシヤが三体も集まったんだぞ!!ヤクシヤが耳が痛いのは知らされてただろうが!!」

「……………」

しかし詰め寄るコウタに何も言い返すこともなくただ目を背け、その場から歩き出す。

「おい…!!」

「コウタ。落ち着いて。ソーマ。帰投時間には戻ってきてよ。」

コウタを落ち着かせながらソーマにそう言うライ。ソーマは返事を返すことなく歩き出した。

「姿を見せろ。いるのは分かっている。」

廃寺の再奥にある広い木造の寺院に1人。ソーマが誰もいないの

に声を掛けていた。

「っ…!!」

何かを感じたのか神機を後方へと振るう。

「ちよつ待つて待つて!!俺だよ俺!!」

「なんだお前か。」

背後にいたのはライとコウタだった。

拍子抜けしたかのように神機を下ろすソーマ。

「なんだはないだろ。帰投時間になつても戻つてこないから探しにきたというのに。」

「……余計なお世話だ。」

「お…お前な…!!」

「コウタ。とりあえず無事でよかった。さあアナグラに帰ろう。」

熱くなりつつあるコウタを制するライ。そしてソーマと一緒に戻るよういう。」

『……お前も俺みたいだな『化け物』に関わるな。……お前もあの時……エリックのように死にたくなければな。』

ソーマから拒絶のような忠告を受けるライ。しかしライはソーマの言う『化け物』と言う単語に引っかけかりを覚えた。

しかし問いただそうにも既にソーマは帰投場所へと向かっていた。「なんなんだよアイツ…腕が立つからといってお高くとまりやがつて……そんなに自分が『特別』なのかよ。」

コウタも悪態をつきながら、帰投場所へと向かう。ライも続こうとした。

その時だった。

「なんだ。」

歩き出そうとしたその時、ライの背後から淡く弱々しい光を感じ背後に振り向く。

……そこに『少女』がいた。

否、少女と喋っているのかそれが正しいのか、ただ少女の形をした『何か』がいた。

全身が白く、身体を布切れで覆いながら、おかつぱ頭の少女がライ

を見据えていた。

「君は…」

ライが問いかける前に「少女」はライに近づいてきた。

そして少女はライの胸の辺りに手を添えた。

その瞬間、ライの脳裏に少女のものなのか、「女性の声」が聞こえた。

「あなたは私と同じ空っぽの存在。だから貴方が相應しい。」

声が聞こえた直後、ライは胸の辺りが熱くなるのを感じた。

胸の中心の熱さが徐々に全身に周る。それでいて自身の中に「何か」が留まっているようなそんな感覚に陥っていた。

「あれ?」

気づくと少女の姿はなく、ライ一人佇んでいた。

「あの子は…一体…」

まるで夢でも見たたのか、散りゆく雪の中に輝く月光りという光景が幻想を見せたのか。

「おい。リーダー?」

「あ、ごめん。今行く!!」

遠くから聞こえた呼びび声に返事を返し、今度こそライは歩き出した。

……その後ろ姿を「白い影」が見ていたことに気づかず……

優秀

ライは久方ぶりに“夢”を見ていた。

ライが最後に夢を見たのはフェンリルに保護された時…

自分の中から“色のついた球”が黒（闇）に呑み込まれていく夢を見て以来の夢だった。

久々に見た夢は以前の夢とは対照的で “真っ白の世界” が広がっていた。

“やはり貴方は空虚（空っぽ） 貴方には何も無い”

不意に聞き覚えのある“女性”の声が聞こえた。

しかしライはその声の主を思い出せないでいた。

“楽しみ。『あの子』と貴方。共に空虚（空っぽ）の器が満たされた時、貴方達がどうなるのか。そして何が貴方を満たすのか。”

“あの子はあの子の“意思”で自身（器）を満たす。貴方は貴方の“意思”で貴方を満たす。

“貴方にはあらゆるもの”が混じっている。私もその中の1つとなって貴方の行く末を見守りましょう”

“貴方が満たされた時、貴方の中にあるこの広大な大地がどう“色付く”のでしょうか？”

女性の声はまるで楽しげでまるで詩を歌い上げるようにライの耳に響く。

そこでライが意識が浮上する感じがした。

「あ、起きました？」

目を覚ますとアリサの顔があった。

「アリサ？どうして僕の部屋に？」

「どうしてってリーダーの様子を見にきたんですよ。部隊内ブリーフィングの時間になってもリーダーが来なかったのです。」

アリサにそう言われライは設置している時計を見る。いつもの起床時間より1時間経っていた。

「ごめん。寝過ぎした。」

「風邪じゃないんですか？昨日リーダーが行った廃寺は雪が降るくらい寒いですし。」

「いや、体調は悪くない。少し夢心地が良かったからかな。」

でも見た夢はもう忘れてるんだけどね。と苦笑するライ。

それと同時にあることに気づく。

「あれ？」

「どうしました？」

「あ、いや……なんでもない。」

「やっぱり今日は休んだ方がいいんじゃないんですか？」

「いや、行くよ。悪いけどもう少しかかるって伝えてくれないか？」

「わかりました。」

アリサが部屋を出るのを確認するとライは何やら考え込んだ。

「……何かがあった筈なのに……思い出せない。」

「コウタとソーマとヤクシャを倒した。そのあとソーマを探しに行つた。ソーマと合流したままでは覚えてる。だけど帰投するまでに何かあったはずなのに……思い出せない。」

ライが気づいたのは一部記憶の損失。どうやらライは白い少女との記憶を失ったらしい。

「印象深いことだったから忘れることの方が難しいことのはずなのに……」

再び思考の海に呑み込まれそうになるライ。

「まあいいか。いづれ思い出すだろうし。」

軽く頭を振り、軽く深呼吸する。

「よし。」

頭が冴えてきたのを確認したのか立ち上がり、軽く腕を回し凝りをほぐすライ。そして今日も神機使いとしての1日をスタートさせた。

「これで!!!」

今回はライとアリサ、サクヤの3人でアラガミ討伐に出た。

3人の連携がうまく決まり、苦戦することもなくコンゴウとその墮天種を2体討伐に成功した。

「お疲れ様。」

「お疲れ様です。」

「アリサから調子が悪そうとは聞いてたけどたいしたことがなさそう
でよかったわ。」

へりが来るのを待っているとサクヤに話しかけられたライ。

「すみません。心配かけたみたいで。」

「気にしないで。リーダーになって貴方の周りの環境が変わったのも
分かってるわ。きつとその疲れが出たのよ。」

「それにリーダーになる前から貴方には負担をかけてたからね。こっ
ちこそごめんなさい。」

そう謝罪するサクヤ。確かにライがリーダーになる前からアリサ
のメンタルケアやりハビリ。サクヤが休んでいる間、第1部隊の屋台
骨を担っていた。

「気にしないでください。体調管理も神機使いの務めですから。」

「ところでなんでアリサを起こしによこしたんです?」

「最初はコウタに任せただけけどなんかバツが悪そうな顔してたか
ら。よくわからないけど責任感じてるみたいよ?」

「ああ…」

昨日のソーマとの件かと納得したライ。

「昨日はソーマとも一緒だったんでしょ?知ってると思うけどソーマ
は馴れ合いを嫌うから。」

「そうですね。確かにそんなところがありますけどそれには何か理由
がある気がするんです。」

「理由？」

「根拠はないんですけどね。」

そう言って笑うライ。だが距離を取るの何かしら理由がある。そのことについては確信していた。

それからライは神機使いとしての日々を過ごしていたある日、再び「あの者」に呼び出された。

「失礼します。」

「やあ、よく来てくれたね。」

ライが来たのは支部長室。ライを呼び出したのはヨハネスだった。君の活躍は聞いている。リーダーとして部隊をよく取りまとめているようだね。就任して間もないにも関わらず統率が取れるとは新型の面目躍如かそれとも君自身の能力なのかな。」

「お褒めに預かり感激です。……とでも言えばよろしいですか？」

「フフ…やはり君は面白い。それでいてとても優秀だ。……君みたいな存在がいればここまで人類が衰退しなかったのかもしれないな。」

「どういう意味ですか？」

「なに。私が生まれたのはアラガミが現れる前でね。まだ我々人類が世界の支配してた時代を知っているのさ。」

「当時の世界はとある」組織と憲章」の下に1つになっていた。小さな諍いはあれど戦争はなく平和とっていい世界だった。」

いきなり昔の世界の話が始めるヨハネス。記憶のないライにはそれが興味惹かれる話で少しづつのめり込んでいった。

「国家が組織に入るには条件があった」所属国家は武力を永久に放棄

する。すなわち軍事力の放棄だ。当然だ。武器を失えば戦争は起きない。起きても原始的な殴り合いくらいだろう。だがアラガミが出現した時にはそれが仇となった。」

アラガミには同じ細胞を持つ神機でしか攻撃は効かない。しかしいくら効かないとはいえ、銃ならある程度の牽制にはなる。しかしそれを放棄したということは……言うまでもない。

「当然組織にも頼るべき武装集団はあった。だがその集団はアラガミに負けた。負け続けた。そして壊滅した。」

「国家を担う官僚どもは我先にと逃げ出したようだ。まさに無能者達だったよ。もしその時に君のような有能で優秀な存在がいれば人類がここまで追い詰められるとはなかっただろうね。」

「私としても尊敬する『博士達』とここで（フェンリル）で研究したかった。もう死んでしまったがね。優秀な頭脳は人類の財産だ。失われるのは惜しい。」

「博士達？」

「長話してしまったね。本題に入ろう。エイジス計画だがもうすぐ実行されるところまできた。」

話はここで終わりとばかりに本題に入るヨハネス。少し不可解に思いながらもライも聞くことはしなかった。

「君のおかげだ。君が活躍してから実行予定が大幅に短縮できた。多大なる被害も出たがもう少しだ。……もう少しだけ君の力を貸して欲しい。」

そこでヨハネスのパソコンから音が鳴った。

「どうやら来客のようだ。君との話は楽しい。また機会があれば語り合おう。」

笑みを見せながらそう言うヨハネスにライはまたの機会にと答え、支部長室を後にした。

支部長室を出てエレベーターを待つライ。

ようやくきたエレベーターの中には「珍客」がいた。

「やあ。君か。」

「サカキ博士。どうも。」

エレベーターから出てきたのはサカキだった。基本的にサカキは自分の研究室から出てこないののでこうして顔を合わせることは珍しい。

「そういえばヨハンから聞いたけど、君、リーダーになったようだね。今頃になって申し訳ないけどおめでとう。」

「いえ、単に空いた空席に座っただけですので。まだまだ未熟ですよ。」

「謙遜しなくていいと思うよ。私から見ても君は「優秀」だからね。」

まるで含みのある言い方と感じ眉を顰めるライ。しかしサカキは気にする様子もなくライの隣を通り越していく。

ライもエレベーターに乗った時ふとサカキがライの方を向いた。

「そうだ。君は好奇心は旺盛な方かい？」

「え？」

しかしライが答える前にエレベーターの扉が閉まった。

「どう言う意味だ？ん？」

サカキの意味深な言葉に首を傾げるライ。何か含みのある言い方に思考の渦に吞まれかけたその時、ライの足下に何か落ちていた。

「これは「ディスク」？」

足下に落ちていたディスクを手に取り、サカキの物かと思案する。同時にサカキの問いも耳に反響する。

「君は好奇心は旺盛な方かい？」

「博士。どうやらそのようです。」

虚空に消える眩きを吐きながらライはディスクを手に分の部屋に向かった。

過去の記録

「やあヨハン。」

「来客とは君だったか。ペイラー。」

ライが支部長室を出てから入れ替わりに入ってきたサカキ。ヨハネスも旧友を迎え入れる。

「さつき新型の彼とすれ違ったけど、……彼も“そちら側”に引き入れようとしていたのかい？」

「何のことかな？それより君に頼んでいる“例の件”の報告が届いてないがそちらはどうなっている？」

「ああ、『特異点』のことかい。これといって成果はないね。」

「そうか。引き続きよろしく頼む。」

旧友のはずなのにお互い探りを入れるように話す2人。その関係はどうにも敵対者にも映る。

「君も君で探してるようだけどそちらこそ首尾はどうなんだい？」

「同じようなものさ。やはりソーマだけでは“ままならない”ようだ。」

「……だから彼を“手駒”として引き入れようとしたというわけかい？」

「言い方には気をつけてほしいな。『スターゲイザー』。君は今までどおり“観察”に徹していればいい。いままでもそしてこれから。」

明確な拒絶を見せるヨハネス。やはりこの2人には大きな隔たりがあるようだ。

「分かっているさ。私は観察者。この世界における森羅万象全てのものが私の観察対象だ。」

「故に興味深い“観察対象”を無碍に扱ってほしくないだけさ。」

「忠告感謝する。肝に銘じるとしよう。しかし差異はあれど君の思考は“アスプルンド博士”に似てきたな。」

「私は博士の論文や研究内容はすべて読みあさったからね。それは褒め言葉と受け取ろう。」

「それでは今後も『我々』のなす計画を観察者として見守ってくれたま

え。」

一時的に友人のような会話が入ったがそれはすぐに終わり、サカキは支部長室を後にする。

支部長室に出てサカキは小さく呟く。

「さて、君はどちらにつくのかな？ “新米リーダー” 君？」

ヨハネスとペイラーが話している頃…

彼等が共に味方につけたいと思っている “新米リーダー” はとうとうと……

「これでいい…んだよな？ 動画を観るとかしたことがなかったから分かりにくい。」

自身の部屋のターミナルの前に立ち、拾ったディスクの動画を観る準備をしていた。

「これで再生を押せば…」

多少の四苦八苦しながらも再生ボタンを押すライ。

同時に動画は再生された。

最初に映ったのはアラガミ…オウガテイルの解剖の実験映像だった。

しかしアラガミから黒煙のようなものが出てきて解剖していた科学者が苦しみだした。

そこで慌てふためく科学者が出てきて映像が止まる。実験が失敗したのは誰が見ても明白だった。

次に次に映った映像は支部長室で話あう3人の科学者だった。

1人はフェンリル極東支部支部長を務めるヨハネス・フォン・シツクザール。

1人はフェンリル極東支部でアラガミ技術開発統括責任者を務め

るペイラー・榊

そしてもう一人は黒髪で褐色肌の眼鏡を掛けた女性。

「やはり成体への偏食因子組み込みは難度が高いわね。」

「投与してもアポトーシスが誘導されにくいようだね。やはり胎児段階での投与がより確実じゃないかな。少なくともラットでは成功している。」

先の実験失敗で改善案を話あっているのだろうか。少なくともライにはその程度しか理解できなかった。

「…どちらにせよ。人間による臨床試験は必要だろう。」

「原理を分らないものを分らないまま、使うアプローチすべてを否定するつもりはないけどそれは時期尚早じゃないかな？」

「P-73 偏食因子の解明は始まったばかり。もっと研究してある程度謎を解いてからでも遅くはないと思うけど。」

「1日約10万人がアラガミに捕食されている状況だ。悠長なことを言ってられない。」

共に意見をぶつけ合うヨハネスとサカキ。頭を抱えるように考える女性。

「…もう少し早くP-73 偏食因子が発見されていれば『博士達』の意見も聞けたのかしら？」

「アイーシャ。今更『行方不明』になった博士達のことを言っても意味がないだろ。私もできることなら博士達の研究資料を得たいところだが研究施設も既にアラガミに破壊されている。恐らく何も残ってないだろう。」

「…そうね。ごめんなさい。」

ヨハネスからアイーシャと呼ばれた女性は一言謝り、覚悟を決めたように言う。

「ヨハネス。私の…私たちの子供に投与しましょう。」

「本気か？いくら発案者が君とはいえ、私たちの子供を…」

「誰かが渡らなければならぬ橋よ。それなら私たちが…」

『しかし…』

「合理的ではあるけど…賛同しかねるね。」

アイーシャの提案に難色を示すヨハネスとペイラー。当然だろう。やろうとしていることは何が起こるか誰にも分からない未知の実験なのだから。

「今後生まれてくる子ども達に滅びゆく世界を見せるつもりはないわ。」

「私は支持しよう。」

しばしの沈黙のあと、ヨハネスはアイーシャの提案を支持した。

「ヨハネス…」

『両親共に賛同か。…説得の余地はないようだね。』

そう言うのと立ち上がるサカキ。

『ならば私は降ろさせてもらおうよ。私と君たちでは方法論が違いすぎる。』

「サカキ…」

「私はどんな時でも『スターゲイザー』星の観察者なんだ。君たちの重大な選択に介入するつもりはないよ。」

「私は私なりのやり方で偏食因子の研究を続けていくよ。またどこかで交じり合うことがあるだろう。それじゃあ失礼。」

そこで映像が途切れる。しかしサカキとシツクザール夫妻が決別した瞬間だった。

また映像が映し出される。次に映ったのは病床にいるアイーシャだった。

『気分はどうだ?』

「うん。体調もいいし…早く産まれてきてね。」

そう言い自身の大きくなっただお腹を撫でるアイーシャ。この撮影はどうかやら出産前日に行われたらしい。

「サカキは?」

「安産の御守りが届いたが音信不通のままだ。」

「そう…やっぱり私たちが計画を強行したのを怒って…」

「今はそんなことを考えるな。身体に障る。」

『ええ。御守りは貴方が持つてて。』

『わかった。』

そこで映像が途切れる。

次に映ったのはヨハネスだった。

『久しぶりだね。ペイラー。』

『君も知っているとと思うが『マーナガラム計画』は完全に凍結された。』

『あの忌まわしい事故で生き残ったのは生まれながらに偏食因子を持った“ソーマ”と君の“作った”安産の御守りにより護られた私だけだ。』

「君の作った御守りの技術が今や人類を守るアラガミ装甲壁となるとは…科学者として私は君に敵わないと痛感したよ。」

「このメールを送ったのは他でもない。君の力を借りたいからだ。」

「私は近々フェンリル極東支部の支部長に任命される。君には極東支部のアラガミ技術開発統括の主任を任せたい。」

「勿論。報酬も用意する。君の研究の研究資金と神機使い、ゴットイーターの開発統括といったところだ。無論、他に要望があるならできる限り応えよう。」

「そういえば君に息子を紹介していなかった。近いうちにソーマを連れて君に会いに行こう。それじゃあまた。」

そこで映像が途切れる。そしてサカキからのメッセージらしきものが出た後再生が完全に終わったのか停止した。

「支部長とサカキ博士の確執、ソーマの『特別』の正体…か。」

映像を見終わったあと、ライは映像で得た情報を思い出していた。

「言うならソーマはゴットイーターの試作体（プロトタイプ）といったところだな。そして他とは違う能力を持っていると…」

オラクル細胞を投与したゴットイーターは高い身体能力を得る。しかしソーマはそれだけじゃなく範囲はどの程度かは不明だがアラガミを感知する能力を持っている。

実際エリックが食われる直前だが慌てて「エリック!! 上だ!!」と言ったのをライは覚えている。

「死神、化け物、ソーマの悪名はよく聞くけど蓋を開ければそんなことか。」

周囲からは死神と呼ばれ恐れられ、自身は化け物と呼ぶソーマ。しかしライはなぜか未熟者という言葉が思い浮かんだ。

能力を生かすきれないからこそ守れるものも守れない。それは能力者が未熟だからだ。

「悪名か…吸血鬼に虐殺皇女、悪逆皇帝、裏切りの騎士…狂王」

なんとなく悪名を思い浮かべたライ。そして最後に呟いた狂王という単語に何故か愛着が湧いた。

化け物達

「話とはなんだい？ペイラー。」

「単刀直入に聞こう。引き返すつもりはないのかい？」

支部長室にて対峙するヨハネスとサカキ。共に表情は険しく旧友として話をしにきたわけではなさそうだ。

「またその話か。前にも言ったが既に『計画』は動き出している。もうどうやっても止められない。止めるつもりもない。」

「そうかい。じゃあ君には朗報だ。」

「朗報？」

ヨハネスの『返答』を聞きサカキはしばし沈黙するとすぐにいつものテンションに戻る。

「これは民間のタレコミだけだね。旧イングランド領周辺に特殊なオラクル結合を持ったアラガミが現れたらしい。」

「特殊なオラクル結合…まさか『特異点』か!？」

「それはまだ分からないよ。新種のアラガミかもしれないしね。」

「私自身の手で調査に向かいたいところだけどあそこは本部直轄だからね。私でもなかなか手が出せなくてね。」

「わかった。しばらくヨーロッパに飛ばう。留守は任せるが大丈夫かい？」

「構わないよ。とは言っても私は私の研究を続けているだけなんだけどね。」

「それもそうだな。」

そう言うとお出張の準備を始めるのか支部長室を出て行くヨハネス。

「…そう。研究の障害となるものは1つでも少ない方がいい。さて、私の方も『お出迎え』の準備を始めないとね。」

誰もいない支部長室内で1人呟くサカキ。その時サカキの欠けている眼鏡が怪しく光った。

同時刻、鎮魂の廃寺では…

「クソっ…!!!」

「ワツ!!ビツクリさせないでくださいよ。」

「なんかうなされてたみたいだけど悪い夢でもみたか？」

「…まあな。」

「あれ？珍しく素直じゃん？これは明日は雨か？」

「うるさい。」

「うん。いつもどおりだ。任務に支障はないでしょ。」

アリサ、コウタ、ソーマの第1部隊の面子が揃っていた。

「まあソーマがいつもどおりなら安心ですけど…」

「……………」

アリサの視線の先にはもう1人。現第1部隊隊長のライが何やら考え込んでいる。

「リーダー。任務開始時間です。」

「ん。ああ、ごめん。行こうか。」

「大丈夫ですか？ずっと黙り込んで。話掛けてもうわの空でしたし。」

「いや、気にしないで。」

「まあこの面子なら1人くらい不調でも大丈夫でしょう。それじゃお先に。」

そう言うときコウタが1番に廃寺に待機場所から出て行く。

「そういうことなら…リーダーはあまり無理はしないでくださいね。」

ライに気遣いの言葉を掛けコウタの後を追うアリサ。

残るはソーマとライ。

「フンツ…」

ソーマも任務に向かおうとした。

その時だった。

「……………」

「っ…………!!」

ライが微かな声での眩きをソーマは聞き逃さなかった。

否、ライが「それ」を知っていることに驚きを隠せなかった。

『マーナガラム計画』

ライは確かにそう呟いた。

「おい!!」

特定のアラガミの討伐後、ソーマはライに詰め寄った。

「ちよつと!!どうしたんだよ!？」

慌ててソーマを止めるコウタ。だがソーマは止まらずそのままライの胸ぐらを掴む。

「ソーマ!!さっきの連携には何処にも不備はなかったはずですよ!!それよりリーダーを放してください!!」

「なんでお前が「それ」を知っている!?あの忌々しいソレを!!」

アリサも止めに入るがソーマは聞く耳を持たない。そんなソーマにライは1つ溜息すると。

「コウタとアリサは先に帰投ポイントに向かってくれ。それで僕とソーマは少し遅れることを伝えてくれ。これは命令だ。」

「っ…でも…」

「大丈夫ですか？」

「なに。少し話すだけだよ。」

「…わかりました。」

渋々ながら納得して先に帰投ポイントに向かうコウタとアリサ。

「さて、ここで話すのもなんだし雪が凌げる場所で話そうか。」

2人を見送りつつソーマにそう言うライ。ソーマも黙ってライの後を追う。

「さて、質問に答えよう。」

「その計画はどこで知った？」

『サカキ博士が落としたディスクから。』

「チツ：アイツか。」

「博士には全て見透されていたと思うよ。あの人の掌で踊らされたよ
うなものだし。」

最奥地である壊れ掛けの木造小屋で問答を行うライとソーマ。

「これで俺が化け物ということがわかっただろ？今後俺に一切関わる
な。」

「断る。…と言ったら？」

「死ぬぞ？俺は死神らしいからな。」

「死ぬのが怖くてゴットイーターが務まると思うか？」

「……………」

ライの返答にソーマは押し黙る。

確かにライの言うようにゴットイーターは常に生死の境で戦い続
ける職業だ。並：否、正常な精神じゃ務まらないだろう。

「マーナガラム計画の一環で君が生まれた。そのおかげで結果的に
ゴットイーターという存在が生まれた。それは誇るべきことじゃな
いか？」

「ハッ!!大怪我しても次の日には完治している。生まれながらにして
尋常じゃない身体能力を持つ奴が普通の人間と言えるか？」

「それをいうなら僕たちゴットイーターだって普通の人間じゃない。
一歩間違えればアラガミという化け物に成り下がるのだから。」

「何故遠ざけようとする？今の君の言い分は僕たちとなにも変わらな
い。共に化け物なのだから。」

ライは悟すようにそれでいて力強く反論する。

「それにそんな身体で生まれた：生まれさせた元凶が君の近くにいる

「ことはいいことだ。憎しみが生きる目的となるし希望にもなる。」
「なんだと?」

「ソーマ。君は実の親を憎んでるんだろう? ならなぜその元凶の言いなりになってる。母親への贖罪か? それとも復讐か?」

「っ……!!?」

ソーマは狼狽えた。ライの言う通りソーマは実父をヨハネス・フォン・シツクザールを憎んでいる。

「それに死神や化け物と呼ばれる君はあの時…エリックが襲われた時…何故叫んだ。普通の化け物ならそんなことはしない。」

「それに本当の外道というのは、散々身体を弄った拳句、記憶を消してアラガミが蔓延る世界に棄てて命まで奪おう」とするような奴のことを言うんだ。」

「…なに?」

「僕はね。どうやら身体中を散々弄り回されている。脳も例外なくね。そして飽きたのか僕は記憶を消され棄てられた。そしてリンドウさんによつて保護された。」

「っ…!!」

ライが記憶を失っていることはソーマも知っていた。だが人体改造については知らなかった。当然だ。ライの身体が弄られていることを知っているのはヨハネスとサカキ、ツバキだけだからだ。

「何故捨てられたのかは知らない。知りたくもない。どうでもいい。だが棄てた元凶が身近にいれば僕はここまで達観してないだろう。」

「ソーマ。君はなにがしたい? 憎むべき相手が身近にいる君はなにを成したいんだ?」

「そろそろ冷えてきた。先に戻るよ?」

「待て。お前を棄てた存在が身近にいたらお前はどうする。」

話は終わりと歩き始めるライにソーマは問いかける。

ライが達観してるのは棄てた存在を忘れてるから。憎しみを…怒りをぶつけたくともぶつける相手がわからないなら残るのは虚しさだけだ。

「そうだな。とりあえずすぐには殺さない。それくらいしか考えられ

ないな。まあ最終的には絶望に叩き落として無残な最期にさせるだろうけど。」

あっけらかんに答えるライ。だがソーマからは恐怖を感じるくらいの声色だった。

今度こそ歩き始めるライ。残されたソーマは一人立ち尽くす。

「俺は…」

自身の行動の矛盾に悩むソーマ。しかし答えはすぐには出てくることはなかった。

白い少女

「おい!!」

「ソーマか。私はこの通り、出張の準備をしているのだが?」

「そんなことはどうでもいい!! テメエに聞きたいことがある。」

アナグラに戻ったソーマは真つ先に向かったのは父、ヨハネスのもとだった。

「どうでもいいとは酷いな。だが一応息子のお前も無碍にはできんなにを聞きたいんだ?」

「テメエが、＼アイツ＼の身体を弄り記憶まで奪ったのか!? 息子だけじゃ飽き足らず関係ねえ人間も巻き込みやがったのか!」

「……………」

荷造りの手が止まるヨハネス。そしてここで初めてソーマの顔を見た。

「そうか。本人から聞いたか。」

「どうなんだ!」

「案ずるな。彼に関しては私は関与していない。ペイラーもね。彼が見つかった時は私もペイラーも驚いたものだ。フェンリル以外で人体改造を施せる輩がいたとはとね。」

「何故フェンリルが関与していないといえる?」

「当然だ。ゴットイーターのようにオラクル細胞の投与などはされずにあくまでも筋繊維の破壊と再生や脳を弄ることによる記憶領域の拡大がメインだった。どんなに改造を施してもアラガミに対抗できない人間を造ってもフェンリルには意味がない。まあそんな彼がゴットイーターとなって活躍しているがね。」

『しかしお前がそこまで怒りを見せるとは。彼に親密感でも感じたか?』

「違う!!」

ソーマは拒絶するように言うと言を返す。

『ソーマ。お前は、アラガミを滅ぼす為に産まれた存在だ。それを忘れるな。』

出て行くソーマの背中にまるで命令するかのように言うヨハネス。しかしソーマは無視して出て行った。

『ありがとう。君が拾ってくれたんだね?』

「ええ。緊急任務で入って返すのが遅くなりました。」

ソーマがヨハネスに会ってるその頃、ライはサカキに例のディスクを返しにきていた。

「いいよ。若かりし頃の黒歴史だからね。…確認だけど中身は観てないよね?」

「さて、どうでしょう?」

「そうくるか。じゃあきますはマーナガラム計画については知っているかい?」

「少しですが。」

『エレガントに欠ける計画だね。この計画で大切な友人を何人も失ってしまった。だがこの計画のおかげで今のゴットイーターが存在するから因果を感じるよ。』

「単刀直入に聞きますが僕に何をさせようと言うんで。ディスクも僕が拾うのも全て博士のシナリオ通りでしょ?」

「イヤーンンノコトカナ」

はぐらかすサカキに溜息するライ。

「とはいえ君に頼みたいことがあるのも事実だ。とあるアラガミの討伐なんだけど少し手を加えて君に受注されるようにしてある。」

『アラガミの討伐は構いませんがあまり周りの人を巻き込まないようお願いします。』

一応忠告するライだが心の内では無理だろうと確信していた。

その後もサカキの頼みでアラガミ討伐やら素材の回収を行う日々を過ごすライ。

そして今回の任務もサカキの手による任務が行われた。

「シユウ3体。討伐完了。」

「お疲れ。」

「お疲れ様です。」

「じゃあとつととコアを回収しましょうか。」

上からサクヤ、アリサ、コウタ。今回は第1部隊の面子で任務を行った。

「じゃありーダー。お願いします。」

「わかった。」

ライがシユウのコアを回収しようと神機を捕食形態にした時だった。

「ちよつと待った!!」

不意に聞こえた叫び。振り向くと…

「え!?!」

「サカキ博士?」

「ソーマもどうしてここに?」

振り向くとそこにはサカキとソーマの姿があった。

「ちよつとね。捕食は後でワケを話すから少し待ってほしい。」

サカキの指示で身を隠す第1部隊。

「そろそろ時間のはずだけど…あ、来た!!」

サカキがそう言う先にはシユウの死体の前に立つ“白い影”

その影がシユウに手を掛けると同時に第1部隊が白い影に向かう。

同時にライは自身の内側が“ざわつく”感覚に陥った。

神機を白い影に向ける。

その音を聞き白い影がライ達の方を振り向く。

白い影の正体は白い“少女”だった。

ボロボロの布切れを纏った少女。

背後にある夜の月のおかげが神秘的に見える。

「オナカスイタ」

「ヒイ!!」

少女は拙い人語で喋ると悲鳴をあげるコウタ。

『オナカスイタ…カ?』

そう言いつつライ達第1部隊とサカキを見渡す少女。

そしてライに目がいった時…

まるで見知った誰かにあったかのようにそして何故か目を輝かせ
て…

ライに抱きついた。

「オニイチャン!!」

……場を混乱させる言葉を残して…

人に近い神

白い少女を連れてアナグラに帰投したライ達第1部隊。

少女は他の人には見つからぬように注意しつつサカキの研究室に連れ込まれた。

そしてサカキからこの少女の正体を聞かされた。

「はあっ!!」

「え!?!ちよっ…!!…えええ!!?!」

「は…博士…今、なんと…?」

「何度でも言っただけよ。この子は『アラガミ』だよ。」

サカキから聞かされた少女の正体。

驚くべきことに人の形を模ったアラガミということだった。

「安心していいよ。この子は君たちを喰らったりはしない。」

「『偏食』ですか?」

落ち着かせるように言うサカキにライがその理由を答える。

「その通り。アラガミには偏食というモノが存在していて個体独自の偏食傾向がある。神機使いの君たちにとっては常識だね。」

「それにこの子の偏食はより高次の存在に向けられている。つまりアラガミからすれば人類は既に範疇にないんだ。」

そう言い悟すサカキだがどう言い繕うともアラガミには変わりない。故に警戒は解けない。

「アラガミは捕食を通してその姿、形状を変える。この子はいくつものある変化の可能性の中で我々『人類』に近い変化（進化）を遂げたといえる。」

「さつき軽く調べてみたんだけど頭部神経節に相当する箇所が人間の脳のような働きをしているようなんだ。学習能力も高いみたいだからもつと発達すると思うよ。」

「要するにこの子の構成する2割が人であると。」

「そうだね。比率は分からないけどそう言っても過言じゃないね。」

「リーダー?」

「この子は単純に言えば僕達ゴットイーターに近いんだ。僕達ゴット

イーターも偏食因子の投与を怠ればアラガミ化が進む。ゴットイーターの比率が8割人類、2割アラガミとしたら、この子はその逆といえる。」

「その通りだ。リーダー君。やっぱり君は賢いね。それにこの子を研究することで『アラガミ化』を阻止する方法を見つけられるかもしれない。」

「はい！先生!!」

「なんだね？コウタ君」

「話を聞いて分かったというかまあよくは分からなかったんだけど、コイツの『ゴハン』とか『イタダキマス』とかはなんなんすかね？」

「リーダーは『オニイチャン』と呼ばれていますし…」

「ゴハン!!」

「コイツが言うとしヤレにならないんですけど…」

「誰から学んだ…もしくは聞き耳を立てて勝手に覚えたとか？」

「それは追々分かることだと思うよ。」

遠回しに研究、調査が続けばと言うサカキ。

「とにかく、これからは博士がこの子の面倒をみるんですか？」

「そうだね。だけど君たちにも度々この子に会いに来てくれると助かる。あとこの子については私と君たち第1部隊だけの秘密にしてほしい。」

「ですがせめてツバキ教官と支部長に報告はしないと…」

「サクヤ君。君は天下に名だたるゴットイーターがアラガミ討伐の最前線たるアナグラにアラガミに連れ込んだと報告するつもりかい？」

確かに捕食される心配がないとはいえ、アナグラにアラガミを連れ込んだ時点でそれは大きな軍規違反とも呼べる。

「我々は既に共犯なんだ。そのことを忘れないでほしいね。」

「っ……………」

「さて、今後もこの子を気にかけてくれ。ソーマ。君も頼むよ。」

「ふざけるな!!」

「どんなに人間の真似をしようともソイツがバケモノには変わりない。」

そう言い残し、ソーマは出て行く。

ソーマの言う通り。白い少女は如何に人に近いアラガミだとしてもアラガミということには変わりない。

それは第1部隊全員が理解していることでこの先の不安を拭えない。

「よろしく。」

一人を除いて…だが…

「え!?リーダー!!?」

アリサが少女に手を伸ばすライに声を掛ける。

「やらかしてしまったことには仕方ない。なら最後まで面倒をみるしかない。」

「オニイチャン!!」

「うわっ!!!」

アリサ達にそう言うライに少女は勢いよく抱きつく。

同時にライは感応現象のような錯覚が起きた。

目の前には白い少女ではない少女。

顔は見えないが高貴なドレスを着ていることから少女だと分かった。

その少女がライの手を引っ張りながら言った。

「お兄様」

その言葉を耳にしたライは自身の心が何故か罪悪感に吞まれる感覚に陥った。

そして自身への怒りも芽生えた。

「何故生きている?」

「苦しめ」

「地獄に堕ちろ」

耳に入るのはライに向けられたであろう怨嗟の声。

その怨嗟の声を聞く度にライは自身が何かに蝕まれる感覚に陥つ

た。

「いい加減離れろって!!」

「ヤー」

「リーダー!!大丈夫ですか?」

意識が現実に戻ると白い少女を引き剥がすコウタと心配そうに自分の顔を覗き込むアリサの姿があつた。

「アリサ?顔近い。」

「あ…すみません。」

間近にあつたアリサの顔が離れて行く。一步間違えれば口付けできるところに近かつた。

「とりあえず今日はこれで解散しよう。また明日からも頼むよ。」

サカキの一声で解散となった。ライから離れるのを嫌ったアラガミの少女だったがライが優しく頭を撫でると笑顔になって見送ってくれた。

…少女の頭を撫でてるライを不満げにそれでいて羨ましそうな表情で見っていたアリサがいたらしいがコウタとサクヤは苦笑いを浮かべるだけだった。

第1部隊を見送ったサカキの研究室に残るのは部屋の主のサカキと少女だけ。

「さて、『人が神になるか』『神が人になるか』競争の始まりだ。」

不敵な笑みで呟くサカキ。その呟きは虚空に…

「ハジマリダー」

消えることはなかった。サカキは少し笑みを深め優しく少女のサカキ頭を撫でた。

人物紹介

皇ライ(18?)

2071年 フェンリル極東支部入隊

出生：不明

身長：175cm

神機 近接 長剣or大剣

遠距離 スナイパーorブラスト

防御 シールド

本作主人公にして極東支部初の新型神機使い。

記憶を失っており、気を失っている時にリンドウにより身柄を保護された。

薬物投与など人為的な人体改造を施されているが副作用や後遺症はない。

MIA(作戦行動中行方不明)認定されたりリンドウの後任として極東支部保守局第1部隊隊長に就任する。

基本的に表情は変わらず、冷静沈着で口数も多くはないが根暗というわけではなく、話しかければ答えるしコミュニケーションを取ろうと思えば取れる。

アラガミとの戦闘の際には常に状況を見て先を読み、味方が動きやすいように行動する。ツバキ曰く行動予測と状況判断能力は極東一。単独での戦闘能力も高く、大型種を単独で倒せるほど。

「起きたことは仕方ない」とあまり過去を振り返ることはせず、これからのことをどうするかを考える主義(振り返る過去画のないのも要因) 趣味は読書。たまにカレルやシユンと金を賭けたポーカーなどを行う。ついでに全勝。

物欲はなく部屋は殺風景。

喜怒哀楽といった感情は薄く、気分が高騰する瞬間はアラガミとの戦いで生死の瀬戸際にいる時で討伐した途端に生き残ったことへの安堵感と終わったことへの寂しさが入り混じった不思議な感情が芽生える。

短期間での隊長に抜擢されるなど上層部の期待と評価も高い。

雨宮リンドウ(26)

2061年フェンリル極東支部入隊

出生：10月12日

身長：182cm

神機：長剣

フェンリル極東支部第1部隊隊長。

リンドウとの任務に出た者のミッション生還率が90%以上であり、これにより新米神機使いは研修としてリンドウのいる第1部隊に配属されることが多い。

戦闘力も申し分なく、ウロヴオロスといった超大型アラガミを単独討伐するほどの実力者。

彼が出す命令は「生き残る」ことに直結しておりそれが第1部隊には浸透している。

だがミッション『蒼穹の月』にてMIA(作戦行動中行方不明)され、現在も行方不明となっている。

橘サクヤ(21)

2065年フェンリル極東支部入隊

出生：6月10日

身長：165cm

神機：スナイパー

第1部隊のサブリーダーを務める神機使い。

極東支部随一の銃の制動力を誇り、また判断力・統率力が高く評価され他の部隊長クラスのミッションをこなすこともある。

MIAしたリンドウの後任として彼女が第1部隊隊長に就任すると思われるがその際に精神の弱さを露呈してしまい隊長職をライに譲ることになった。

リンドウを失ったことにまだ心の整理がついてないがライが隊長になることに異存はなく、今まで通り支えている。

入隊当初は適合する神機はなく、2067年まではオペレーターを務めていたため、神機使いとしての経歴はまだ3年と日が浅い。

ソーマ・シツクザール（18）

2064年フェンリル極東支部入隊

出生：8月28日

身長：177cm

神機：大剣

極東支部支部長であるヨハネス・フォン・シツクザールの実子にして弱冠12歳で神機使いとなり今でも第一線で戦い続ける神童。

神機との適合率は他の神機使いと比べ群を抜いて高くアラガミの討伐実績も同年代と比べても群を抜いている。

高い戦闘能力を誇るが軍規違反や単独行動など目に余る行動が多く階級は高くない。

その正体は凍結された計画「マーナガラム計画」において偏食因子を細胞に埋め込んだ状態で誕生した「最もアラガミに近い人間」。

ソーマ自身を研究することによって神機の技術基盤が完成し、ゴツトイーターが組織された。

体内で偏食因子を生成できるため他の神機使いのように偏食因子の人工投与を必要としない。

藤木コウタ（15）

2071年フェンリル極東支部入隊

出生：6月20日

身長：163cm

神機：アサルト

極東支部第1部隊所属の神機使い。

ライと同時期に神機使いとなったが数分の差で先輩と言っている。ムードメーカーで明るい。

仲間を大切にすることを優しい少年。

外部移住区に母と妹がいる。

頭を使うことは苦手だが偵察任務などの実績は高い。

エイジスの完成による平和な世界を夢見て今も頑張っている。

アリサ・イリニチーナ・アミエーラ（15）

2070年 フェンリルロシア支部入隊

2071年 フェンリル極東支部転属

第1部隊所属

出生：3月25日

身長：160cm

神機 近接：長剣

遠距離：アサルト

防御：バツクラ

ヨハネスがロシア支部から招聘した新型神機使い。

実戦経験こそ少ないが訓練や演習では高成績を収めている。

極東支部に配属された直後は自分に自信があったのか旧式神機使いを馬鹿にするような高飛車な発言が目立った。それにより新型への不満分子が増えた。

しかし自身のせいでリンドウを失い、かつ精神的な未熟さを露呈ししばらく入院したことにより絶対的な自信失ってしまう。

しかしライの献身的なメンタルケアや指導によって原隊復帰してからは高飛車な発言は鳴りを潜めた。現在は失った信頼を取り戻そうと日々頑張っている。

無意識にライに依存している節があり、1日1回はライと会わないと落ち着かないらしく任務後などはライを探したりしている。一部の者はそんなアリサを微笑ましく見守っているとか。

コウタの性格と合わないのか多少キツめになる。

アリサの思いが通じる時は来るだろうか。

ヨハネス・フォン・シツクザール（45）

出生：7月29日

身長：189cm

フェンリル極東支部支部長でフェンリル創設メンバーの1人。

またアラガミ研究の第一人者でもあるがサカキをフェンリル極東支部のアラガミ技術開発の統括責任者に立ててからはアラガミ研究の第一線から身を引いている：が特殊なアラガミのコアを探すなど本当にアラガミ研究から身を引いたのかは定かではない。

ペイラー・榊（47）

出生：1月7日

身長：168cm

フェンリル極東支部アラガミ技術開発統括責任者でありアラガミ研究の第一人者。「偏食因子」を発見した最大の貢献者でもありヨハネスと同様フェンリル創設メンバーの一人。

現在はアラガミの広い生態系についての研究を進めていて、サカキの部屋だけ情報セキュリティが支部全体と分離されている。

雨宮ツバキ（29）

2059年フェンリル極東支部入隊

出生：8月18日

身長：167cm

かつては極東支部の実働部隊のリーダーを務めた神機使い（おそらくリンドウの前任）。遠距離型の神機使いとしては他の追隨を許さない討伐実績を残している。2069年に神機使いとしての任を解かれ、現在は第一く第三部隊の現場指揮及新米神機使いの教練担当を担っているがその厳しさから鬼教官と恐れられている。なお、階級は大尉。

因みに彼女が扱っていた神機は現在はコウタに受け継がれている。

楠 リツカ（18）

2069年フェンリル極東支部入隊

出生：7月22日

身長：150cm

黒松高等学校在学中からフェンリル極東支部の神機整備班に所属する整備士。

正式な配属は2年前だが支部には5年以上前から整備班のクルー

として活躍してるため顔馴染みが多い。
彼女の父親もフェンリルの技術者だったが既に他界していてその
父の技術は全てリツカは継承している。

君の名は…

アラガミの少女をアナグラに保護してからというもの大きな事件も起きることもなく、変わることもないゴットイーターとしての日常を過ごしていた。

もちろん、ゴットイーターの居城であり人類最後の拠り所であるアナグラにアラガミを連れ込んだこと事態は大問題であることには変わりないがそこはライ達第1部隊も細心の注意を払っているため、今も変わらない日常を過ごせている。

そんなある日、本当に些細な問題が発生した。

「名前…ですか？」

少し困った口調でアリサが聞く。

「ああ。いつまでも『この子』扱いじゃ可哀想だね。しかし私はそういうのは疎いというか苦手なんだ。だから君たちで素敵な名前を付けて欲しいのだが何かないかな？」

「ないかなー」

いつもの日常に起きた瑣末な問題。

それはアラガミの少女の名付け問題だった。

確かに名前があれば何かと便利だ。しかし保護してからというもの名前を付けず過ごしていたが過ごすに連れ名前の重要性に気づいてのことだった。

「名前ね。フツ…俺、ネーミングセンスには自信があるんだ。」

多少カツコつけながらそういうのはコウタ。

「ものすごく不安なんです…」

「うーん。そうだな。…よし！『ノラミ』でどうだ!？」

ジト目で言うアリサを無視し、少し考える仕草をすると堂々と決めた名前を発表するコウタ。

しかし反応は薄く、場に冷やかな空気が流れた。

「どん引きです…」

「なんだよ!?じゃあ次はアリサが決めてみろよ!!」

「な!?なんで私が!」

場に漂う空気を言葉にしたアリサにコウタが噛み付く。

「ははーん。自分のネーミングセンスがバレるのが嫌なんだろう?」

「ち…違いますよ!!そうですね。えーと…」

凶星を突かれ少し動揺するアリサ。しかしそんなアリサに救いの神が現れた。

「シオ!!」

「へ?」

「そ…そうです!!シオちゃんです!私も同じ名前を考えてたんですよー」

「嘘つけ!!つつてもシオよりは俺が決めたノラミの方がよくね?」

「シオ」

アリサに救いの手を差し伸べたのがまさかのアラガミの少女だった。

「それは貴女の名前?」

「そうだよー」

今まで黙ってたサクヤが優しく問いかけると自分をシオと呼んだアラガミの少女は肯定した。

「どうやらここにいる我々以外の者が既に名付け親になってみたいだね。」

「この面子以外って…」

現在この場びいるのはコウタ、サクヤ、アリサとサカキ、そしてアラガミの少女『シオ』。

ライはサカキの指示（パシリとも言ふ）によりシオの食料調達（アラガミ討伐）に出ている、ソーマはヨハネスの指示で単独任務に出ている。

「な…なあ?やっぱシオよりノラミじゃね?」

「ヤダ」

「なんでだよチクショー!!」

諦めきれないコウタが再度改名を要求したが一刀両断され悔し
がったがそれは無視された。

かくしてアラガミの少女に『シオ』と名付けられた。

「シオ?」

討伐任務を終えてアナグラに戻ってきたライに問い詰めるのはア
リサ。因みにソーマの方にはコウタが問い詰めている。

「シオってなに?」

「え?リーダーが名付け親じゃないんですか?」

「名付け親?」

話が噛み合っていないと思ったアリサはライにシオについて説明
する。するとライは納得したのか…

「あーそう言うことか。」

「どういうことですか?」

「実は…」

ライの話によると…

ライが会いにくたびに抱きついてくるアラガミの少女（シオ）

その時に仄かに海風の匂いがしたというライ。

同時にその場にいたソーマが一言。

『海の匂いは塩風じゃねーか?』

『多分その時に覚えたんだと思う。』

「ええと…それってつまり…」

「間接的に言えば僕とソーマが名付け親になるのかな?でも「シオ」と
決めたのはあの子自身だからシオという言葉をすぐく気に入ったん
だと思う。じゃないと名前にしないとと思うし。」

「…そうですか。」

ライから顛末を聞いたアリサは少し不満気だった。

しかしアリサはなんでこんな気持ちになったのか自分自身分からなかった。

まあ側から見れば丸分かりなのだが単純にシオに嫉妬したのだ。

いつもライに抱きつくというシオにアリサが羨望しただけである。

しかしそんな気持ちを抱いてると本人は気づかず、そしてそこまで慕われているとも男の方も気づいてない。

「まあとりあえずあの子はシオと呼べばいいんだね。…できればお兄ちゃんと呼ぶのをやめてほしいんだけどね。」

「いいじゃないですか。リーダーだって満更でもないでしょ?」

「…ノーコメントで。でも…」

困ったように笑いながらそう答えるライ。だが、ここから後の言葉には哀愁が漂っていた。

「守るべきモノを自分自身で壊してしまった『私』があんなに慕われるのは…嬉しい反面、罪悪感に苛まれるよ。」

生きるということ

「おっす」

「おっす」

「なんですか？その下品な言葉使い。シオちゃんにそんな言葉を教えないでください。」

シオが来てから数日が経ち、話し方は変わらないもののいろんな言葉覚えた。

「ええ。別にいいじゃんよー」

「じゃんよー」

「シオちゃん。そんな言葉覚えたらバカが移つちやうよ？」

「ひでえ…」

しかし、第1部隊の面子、特にアリサとコウタが言葉を教えているかどうかシオはコウタの言語教育の方が影響を受けているみたいだ。

「シオちゃん。こんにちは。」

「んーこんにちは。」

「うん。偉いね。」

そう言いながらシオの頭を撫でるアリサ。こうしてみると姉妹にも見える。

…方や人で方やアラガミではあるが

「まだそんなに日が経ってない割に随分といろんな言葉を覚えてきましたね。」

「そうだね。君たちがおかげだよ。それとシオ自身の学習意欲が高いのも要因だろうね。」

「知性を持ちながら喰うか喰われるかの世界を生きて来たんだ。だから飢えているんだろうね。コミュニケーションというものに。」

「知性を持ったアラガミ…か。」

サカキの話を聞き、ふと呟くライ。

本来、アラガミは捕食本能しか持たない生物である。

故にアラガミ同士が喰らいあうなど日常茶飯事だ。

その食い争う世界を知性を持って生き抜いてきたシオは無意識のうち、『生きる』ことに重点を置いて知性を働かせていたのではないか。

アラガミを駆逐するゴツトイーターの姿も目にはしているため、姿を見せなかった。見つければ殺されるから。

そう考えるとシオが今まで姿を見せなかったのも納得がいく。

「おにーちゃんどした?」

「…だからお兄ちゃんはやめてよ。」

「ヤダ。」

思考の海に入っているうちにいつの間にもやらシオがライを見上げていた。そんなシオにライは優しく撫でた。

「思うんですけど、なんでシオちゃんはリーダーのことをお兄ちゃんと呼ぶのでしょうか?」

「すげー今更だな。でも気になるよなあ。最初からリーダーには懐いてたし。」

「それは僕が1番聞きたいことだけど。博士はわかります?」

「それは私にもわからないな。…いつそのことリーダー君を細胞レベルまで解剖して調べるかい?」

『嫌です。』「やめてください。」

冗談とも言えぬサカキの提案にライとアリサが即否定する。

「そういうのは僕が死んだらにしてください。」

「死んだらいいのかい?」

「いや、ダメでしょ!」

「リーダーも冗談はほどほどにしてください。」

「冗談じゃないんだけどなあ。」

この後、アリサに連れられてライは説教を受けるのだが説教の効果があったのかは定かではない。

「…デートですか?」

「チツ…なんで俺が…」

さらに数日後、サカキの研究室にはライとソーマが部屋の主のサカキに呼び出されていた。

「デートというよりはシオの食料調達と受け取ってほしいかな。いやあ君たちが今まで狩ってきたアラガミのコアが遂に切れちゃってね。在庫もない以上、戦闘（外食）に出てもらった方が手っ取り早いと思っただのさ。」

「もちろん、彼女も戦うよ。因みにこういうのを面白半分で作ってみたんだ。」

そう言つてサカキがライ達に見せたものは…

「神機？」

「しかも新型と同じ可変式…面白半分でなんてもの作ってるんですか？」

「いやあなんか楽しくなっちゃって。まあシオに合わせてる彼女も十分戦力になると思うよ。君たち同様、弱肉強食の世界を生きてきた猛者だからね。」

「そうだ。リーダー君。先日受けた検査の結果が今日届くんだ。多分任務後には届いてると思うから任務後にまたここに顔を出すようにね。」

「わかりました。」

「そういえばアイツは？」

「ああ。シオは一足先にコウタ君に連れて行ってもらった。既に神機も渡してある。こっちは残りもので作ったんだよね。うん。資源の無駄はよくないね。」

「…技術の無駄遣いは？」

「それじゃ健闘を祈る。」

「はあ行くぞ。」

これ以上サカキに噛み付いても意味無しと判断したのかソーマは踵を返す。

「あ、ソーマ。」

「怒らせちゃったかな？」

「ま、大丈夫だろう。ソーマも君を認めてるようだし。」

「どうですかね？」

「早くしろリーダー。置いてくぞ。」

部屋に外からソーマが呼ぶ声が聞こえる。

「どうやらリーダーとしては認められているようだね。」

「嬉しいような寂しいような変な気分ですね。今までは名前で呼ばれていたのに今ではリーダーで通りますから。」

隊長となってからリーダーと呼ばれるようになったライ。分かりにくいですが少し寂しい思いをしたようだ。

孤独の2人

シオの夕食という名のアラガミ討伐は海の近くにある『愚者の空母』にて行われた。

ライ、コウタ、ソーマの第1部隊のメンバーにシオも加わった今回の討伐は特にシオの活躍が目立った。

神機紛いのものを手に持ち方を替えて時に斬撃、時に射撃と近距離と遠距離の戦い方にはライ達も目を見張った。

これもサカキが言っていた知性を持って喰うか喰われるかの世界を生き抜いてきたシオは誰に教わる事もなく自然に身についた技術なのかもしれない。

それに人に近い進化を遂げているといつても腐つてもアラガミであるための身体能力も高く、まるでロデオでもするかのようにオウガテイルの背中に飛び乗った時は流石にライ達は啞然となった。

ともあれ、シオの食料調達は達成された。

「いただきますーす」

空母に群れていたアラガミを一掃すると空腹になったのかシオはアラガミの亡骸を食べ始めた。

「思ったんだけどアラガミって美味しいのかな？」

「さあ？一緒に食べてみたら？」

「ヤダよ!!腹壊しそうだし」

コウタのふとした疑問にライはそう返す。

「でもゲテモノは美味と本に書いてあったけど…アラガミだったらクアドリガとボルグ・カムランは遠慮したいかな。ザイゴートも毒持つてそうだし、もし食べられるとしたらオウガテイルやシユウ、ヴァジユラ種なら食べてみたいかな。」

「……いや、冗談で言ったのになに真面目に答えてるんだよ。」

「最低限、火で炙って調味料で味付けすれば食べられそう。そういえ

ばトンボも食べられるとか聞いたことがあったような…」

「…お前結構すげーな…」

アラガミを食べることを真面目に考えるライに少し引くコウタ。
そんな2人を他所にシオがソーマに話しかける声が聞こえた。

「そーまも一緒に食べよ？」

『シオ。俺たち人間はアラガミは食べないんだよ。』

シオの誘いをソーマのかわりにコウタが答える。

「えーでもそーまのアラガミは食べたがってるよー？それにおにー
ちゃんも。」

「え？」

「バレたか。」

「いや、お前は確かに食べたがってたけど。」

「ふぎけるな!! テメエみたいな…バケモノと一緒にするんじやねえ
!!」

シオの発言がソーマの触れてはならない一線に触れたのか激昂す
るソーマ。

「お…おい…」

「…いいから、俺には関わるな。」

そう言い帰投ポイントに戻るのか踵を返すソーマ。

そんなソーマに対しシオは語りかける。

「シオ…ずっとひとりだったよ。」

『だれもいなかった。いつもひとりだった。さびしかった。』

「だから…んーと…だから…うれしかった。」

「そーまをみつけてうれしかった。おにーちゃんをみつけてうれし
かった。」

「だから…だから…んーと…えーと」

言葉足らずでも必死にソーマに何かを伝えようとするシオ。

しかしソーマはすべてを聞く前に歩き始めた。

「お…おい待てよソーマ!!」

コウタが呼び止めるもソーマは無視し歩を進める。

「どうしたんだよアイツ。」

「今はそつとしよう。」

ソーマの過去を知っているライはそう言う。

「お前、なんか知ってるの？」

「まあね。でもソーマの過去だから他人の僕が話していいのか。」

「聞かせてくれ。他人かもしれないけど、俺とソーマは同じ部隊の仲間だからな。」

「…わかった。」

そしてライは語り出す。ソーマの出自とマーナガルド計画を…

「そっか。よくわからないけど、要はアイツがゴットイーターと神機のオリジナルなんだな。」

「それで自分のせいでお母さんが死んだと思ってる。」

「おそらくね。でもソーマの存在がなければ人類はとつくに滅びてただろう。」

「そうだな。ったく。」

まるで悪態をつくかのようにコウタは既に見えないソーマの背中に向けて呟く。

『そんな重いもん一人で背負ってカツコつけてんじゃねーよ。』

当然この悪態はソーマに届くことはない。

アナグラに戻ってきたライは報告をコウタに任せ、シオを連れてサカキの研究室を訪れていた。

「盗まれた？」

「ああ、しかもバックアップも消されている。」

「でも、僕の『健康検査』の結果を盗んだとして意味なんてあるんですか？」

そこでサカキから聞かされたのは先日サカキ主導のものと健康検査受けたライの診断結果が何者かに盗まれたということだった。

この健康検査はシオがライを兄呼ばわりする理由はもしかしたらライの体内にあるんじゃないかと疑ったサカキがライに提案してライが承諾したことで行われた。

しかしサカキ主導だとなにされるかわからないともつぱらの噂で他の神機使いからは敬遠されている。

「新型のデータは今でも希少だからね。それに君はその中でも特殊といてもいい。それを盗まれたんだ。君の周りで不穏な動きがあるかもしれない。十分に気をつけてくれ。」

「わかりました。しかしこれで分からずじまいですね。」

「そうだね。もう一度行う事もできるけど、データを盗む輩がフェンリル内にいる以上、迂闊なことができない。やはりフェンリルの機材を使ったのが悪かったか。就任当初にヨハンにもつとわがまを言うべきだったよ。」

「博士のわがまを聞き続けると支部長の胃に穴が空きそうですね。」

なんとなくだがサカキのわがまを聞くヨハネスに同情するライだった。

お兄ちゃんの謎

シオとの外食という名目のアラガミ討伐はあの後も数度に渡り、行なわれた。

しかし、その討伐にはソーマが加わることはなかった。

最初の際にできたソーマとシオのわだかまり。あれ以来、ソーマの方がシオを避けている節があった。

最初こそシオの方も構ってもらおうしていたが会うたびに成長しているのか最近では雰囲気を感じて距離を置くようになった。

そうした小さなわだかまりがあるものの、いつもの殺伐とした平穏な日常を過ごしていた。

ある日のこと、サカキの部屋でいつものようにシオの面倒を見ていたライ、コウタ、アリサの3人。

特にこの3人がシオと積極的にコミュニケーションを取ろうとサカキの部屋に訪れる頻度が高い。ライに関してはサカキの依頼の報告を兼ねてという面もあるが。

ふとシオはアリサの目の前に立つ。

「どうしたの？シオちゃん？」

「……………」

「シオちゃん？」

黙って自身を見るシオに少し困惑するアリサ。

次の瞬間

「ヒャア!!」

「ムニムニ。」

いきなりのことだった。

じっとアリサを見ていたシオが突然アリサの胸を揉んだのだ。

いきなりことで驚きと多少の羞恥から悲鳴を上げるアリサ。しかしシオは気にすることなくアリサの胸を揉む。

「うーん。」

「な…なに!!?」

手を離し、なにやら考え込む仕草をするシオ。対しアリサは羞恥のあまり普段色白の顔を紅潮させていた。

「ん?どーした?シオ。」

次にシオが近づいたのはコウタ。アリサ同様、まるで観察するかのようにコウタを見ると次はバシバシとコウタの両腕を叩く。

「イテっイテッ」

「カチカチ。うーん。」

最後はサカキとなにやら雑談しているライに背後から抱きつくシオ。

いきなり背後からの衝撃に驚くライだが衝撃の正体がシオだと分かると思はらくされるがままになった。

「ムニムニ、カチカチ、おかしーなーおつかしーなー。」

「おかしいのはお前だよ。シオ。」

「どうやら個体差の違いに気づいたようだね。」

「個体差の違いですか?」

シオの一連の行動にそう評するサカキ。

「そう。人は同じ個体でも形状はまるで違う。男女で筋力の付き具合も違うしね。例を出すとアリサ君のような色白の人もいればソーマのような褐色肌の人もいる。そのことに気づいたことで今までは気にしなかったことが気になり始めたのだろう。」

「本当に人に近づいてるんですね。やはり環境でしょうか?」

「そうだね。だいたいぶ前の研究だけど異なる動物：例えば犬が豚を育てたらその豚は犬のような習性が身についたらしい。やはり育った環境がそうさせるのかもしれないね。」

「人の知性を持ったアラガミか。」

もし、今後も人の環境でシオの知性が成長したらシオは世界で唯一の“人のアラガミ”となるだろう。それが良いことなのかは定かでない。

ないが。

それから数日後、

「シオが逃げ出した？」

「はい。」

本日を終えて自身の部屋で休んでいたライ。そんな時に部屋に飛び込んできたのはアリサだった。

「それまたなんで？」

「それが…私とサクヤさんでシオちゃんに服を着せようとしたら嫌がって…」

「まあ人に近いとはいえアラガミだし。服は着ないよねえ。」

「そうですね。わかった。コウタやソーマは？」

「もう出てます。コウタとソーマは廃寺方面で、サクヤさんは地下街の方に。私たちは贖罪の街だそうです。」

「そっか。じゃあ行こうか。」

「すみません。連日迷惑かけて。」

「そう言い落ち込むアリサに帽子越しに撫でるライ。

「気にするな。これでもじっとしてると落ち着かない質だから。」

「そう言うライだが本音はまたアラガミと生死を賭けた世界に行けることに分かりにくい気分が高揚している。」

ライは結局のところ冷静沈着な戦闘狂なのだ。

場所は変わって廃寺。

その最奥地にソーマはいた。

「いるんだろ?」

「いないよー」

周囲には影すらない。しかしソーマの問いかけに答える声があった。

「遊びは終わりだ。帰るぞ。」

「チクチクやー」

「フツ：所詮はどこにでもいるアラガミと同じか。」

「シオ。ソーマといっしょか?」

「違う。」

「よつと。」

ソーマの雰囲気を感じてか姿を見せるシオ。

「帰るぞ。」

「ソーマ、おこつてないか?」

「あん?」

「シオ、ソーマ、おこらせた。だからソーマこなかった、シオ、さびしかった。」

シオは拙いなりに自分の気持ちを伝える。

「ああ、もう怒つてない。俺も悪かったな。」

「ソーマ、またあいにきてくれるか?」

「暇があればな。」

照れ隠しのつもりか軽く頭を掻きながらそう言うソーマ。

「落ち着いて考えてみると俺たちは遜色ないのかもしれないな。」

ソーマはずつと考えていた。

アラガミに近い自分と人に近いアラガミであるシオ。

そしてアラガミと渡り合える戦闘力と身体能力を持つゴツトイーターについて。

アラガミ化のリスクを抱えるゴツトイーターは偏食因子の過剰投与や腕輪が破損によりアラガミ化の危険性がある。

アラガミ化すればもう人に戻れないし人としての人格も失われる。残るのは捕食衝動の本能のみ。

「救われねえな。」

もしかしたら別の支部のゴットイーターがアラガミ化して他のゴットイーターに倒される。例えばリンドウが生きていたとしてアラガミ化してそうとは知らずに第1部隊に討伐されたら？

これほど悲しくて救われないことはないだろう。

「そうだ。お前、なんでリーダーを兄貴と呼ぶ？」

「あにき？」

「お前のにーちゃんのことだ。」

ライを兄と呼ぶことについてソーマは気になっていた。

そもそも初対面なのにシオはライに懐いていた。

それは前から知っていたかのように。

考えられるのはライの身体を改造した組織にシオも囚われていた。

そこでライとシオが心を通わせていたならば話の筋が通る。

だがライは記憶を失っている。

しかし、シオが覚えているならその組織が分かる可能性がある。

しかしシオはまったく別のことを答える。

「おにーちゃんは『中』にいる。」

「は？」

「おにーちゃん、いつも腹ペコ。まだ『前』にでれない。」

「おにーちゃんがまんぷくになったらきつとでてくる。シオ、ソーマ

におにーちゃんと会わせたい。」

「お前…なに言ってる…」

「あ!!コウタ!!」

遠くからコウタの声が聞こえたのか声の方へと向かうシオ。

しかしソーマは立ち尽くしたままだった。

「どういう意味だ？」

シオの言葉の解読ができない。

唯一わかったのは…

ライの中に『お兄ちゃん』がいること。

つまりシオの言うお兄ちゃんはライを指していないのだ。

恐らくシオがアラガミである以上、シオの言うお兄ちゃんもアラガミに違いない。

腹ペコの意味は不明だが、シオが言うには腹ペコが満たされたら前に：つまり表に出てくると言うことだろう。

もし、その『お兄ちゃん』が姿を見せた時、

ライはどうなるのだろうか？

そして『お兄ちゃん』はライの中で“何”を満たそうとしているのか。

ソーマの問いは謎が謎を呼ぶ結果となってしまった。

特務

後にシオの家出と呼ばれる脱走事件が解決したあと、とある人物にも大きな変化が見られた。

「最近、ソーマが気にかけてくるようになったのだが。」

「そうなんですか?」

「確かに。最近のソーマはリーダーとシオに優しくなった気がする。」

ゴットイーターの日課であるアラガミ討伐を終えて、帰投用のヘリを待っている中、ライは今回のパーティメンバーであるアリサとコウタに最近のソーマについて相談していた。

「嫌なんですか?」

「そうじゃないけど、いきなり態度が変わると性格柄裏がありそうで疑ぐり深くなる。」

「そうだよなー。特にあのソーマが優しくなると思うと何か起きそうで不気味だよなー」

「そうですか?」

「アリサ、例えば明日からコウタがすごく真面目になったらどう思う?」

「……気色悪いです。想像しただけで鳥肌が立ちました。」

「例えばの話なのになんかスゲー傷ついたんだけど。」

ライのたとえ話に即答するアリサ。鳥肌が立つほどに悪寒が走ったようだ。

「でもシオちゃんを見つけたのはソーマですからその時に何かあったんじゃないんですか?」

「それなら優しくなるのはシオだけだろ?」

「まあいいじゃん。ソーマが丸くなったならリーダーも統率しやすいじゃん。いいことだろ?」

「…まるでソーマだけが問題児のような言い方ですね。あなたも大概ですよ?」

「いやー入隊当初のアリサに比べたらマシだと思っぜ?」

「な!?!あの時のことを言うのはずるいです!!」

ライの話をそっちのけでアリサとコウタの言い争いはヒートアップする。そんな2人を見てライは…

「意外と相性は良さそうだな。君たちは。」

「それを聞いたアリサとコウタ（特にアリサ）は全力で否定した。」

「呼び出してすまない。」

アナグラに戻り、いつもどおりオペレーターであるヒバリに任務完了の報告をしたライだがその時に支部長室に来るようにと指示が降った。

いざ支部長室にいくとそこには任務に出る前までヨーロッパへ行っていた極東支部支部長であるヨハネスの姿があった。

「お帰りになられてたのですね。」

「ああ、先程帰ってきたばかりだね。」

そう言うヨハネスの横には鞆が置かれていた。

「ヨーロッパを周っている時も君の活躍は耳に入っていたよ。君と言う優秀で強力なゴットイーターが極東にいてくれて極東支部支部長として誇らしく思う。」

「さて、今回呼び出したのは以前、話せなかった『特務』の説明だ。エイズ計画も佳境を迎えた今、この特務が大事になってくる。」

「特務」

「特務は普通の任務とは違い、基本的には単独で遂行してもらう。さらに特務となった任務は最高クラスの機密情報として扱ってもらう。故にいくら同じ部隊所属の者にも話すのは禁止だ。」

「また、この特務は全て私直轄の案件だ。報告も全て私にするように。」

「さらにその特務で得た素材全ても私に提供するよう。そのかわり、それ相応の報酬を用意しよう。」

一通り特務について説明をするヨハネス。

「リンドウ君も相当の活躍をしてくれた。そんな彼を失ったのは残念だ。」

「それは以前リンドウさんがウロヴオロスのコア剥離に成功したことを言っているのですか？」

「その通り。特務の対象となる任務は所謂禁忌種や接触禁機種の討伐がメインだ。君は既にリンドウ君と同格かそれ以上のゴツトイーターであることを私が確信している。そして特務を言い渡すということは私から最大の信頼の証と受け取ってほしい。」

「話は以上だ。特務の発行はまた後日になるがエイジス計画を完全にするため、そして人類存亡のため力を貸して欲しい。」

「失礼します。」

支部長室を出るライ。特務の説明にあと、ヨーロッパでのお土産をもらって出てきた。

「遂にお前もこちらに来たか。」

外にはソーマが壁にもたれかかった姿でライを待っていた。

「ソーマ。」

「これだけ伝えとく。奴を信じるな。」

それだけ忠告するとソーマはエレベーターの方へと向かう。

取り残されたライは先程のヨハネスとの会話を思い出していた。

ライを期待し信頼する言葉。

ヨハネスの言葉は全て本心だろうとライは感じていた。

しかしライは高い洞察力を持っている。

ヨハネスの言葉にもう一つ感じていたものがある。

それは「空虚感」

これはヨハネスと話すたびに感じていたもので、ヨハネスの言葉に重みを感じなかった。

仮にヨハネスが嘘を言ったのならライは必ず看破していただろう。
しかしヨハネスの言葉は真実。だが言葉には重みがない。
故にライはヨハネスを信用も信頼もしきれないでいた。
言葉が空虚のヨハネス。記憶において空虚のライ。
ヨハネスの言葉の空虚に気づいたのはライ自身が空虚の存在だからかもしれない。

吊い合戦

ヨハネスから特務の話を受けてから単独任務が多くなったライ。その大半が墮天種や禁忌種指定されてるアラガミであり、特務の厳しさと難しさを実感したライだが同時に今まで受けた任務以上の高揚感を得ていた。

生死の境、一歩でも間違えれば大惨事となる状況を楽しんでいる。今までの討伐任務も高揚感を得ていたが最初の頃と現在のライの実力ではその高揚感にも差異が現れていた。

要は「馴れ」である。

現在のライ自身の実力と能力の高さ。そして繰り返される同型のアラガミとの戦闘。一度戦えば行動パターンを把握してしまいうライにとってはコンゴウやヴァジュラといったアラガミも言い過ぎかもしれないがオウガテイルと遜色ないに等しい。

しかしヨハネスの命じる特務はそんな生易しい任務じゃない。相手は禁忌種と名付けられるほどの強力で凶悪のアラガミ。そんなアラガミをライは一人で倒さなければならぬのだ。

当然強力なアラガミを単独討伐する以上、ライ自身の負担が大きくなる。

実際、初の特務からアナグラに戻ったライの姿はボロボロだった。だがその時のライの表情は充実感に満ち溢れていた。

まるで「空の器が満たされた」かのように：

そしてライは気づかない。

自身の中の「何か」が動き出したことに：

とある日のアナグラのエントランス。

そこに珍しく第1部隊全員の姿があった。

「全員揃っているな。」

当然、全員揃っている理由はツバキに呼び出されたからだ。

「今回お前たちを呼んだのは他でもない。今回討伐アラガミについてだ。」

「今回お前たちが討伐するアラガミから全リーダーである雨宮リンドウ大尉の腕輪らしき信号が確認された。」

「目下調査中だが恐らくは先の戦いの相手だろう。」

「苦しい戦闘になるだろうが現状戦力を鑑みて倒せない相手ではないと判断した。」

「間違っても仇などの雑念を混ぜるな。雑念が混じればそれだけ作戦効率が悪くなり、お前たちの死亡率が上がる。冷静で慎重に作戦を進めろ。いいな。」

「話は以上だ。健闘を祈る。」

報告は終わりとばかりにエレベーターの方へと去るツバキ。彼女自身本当は確かめに行きたいだろうとこの時ライは思った。

「リンドウ…これで…やっど…やっど…」

「サクヤさん…」

「皆思うところはあるだろうけど、ブリーフィングを始めようか。」

「やることは変わらないが相手は新種のヴァジュラだ。一度見たとはいえどんな能力が持っているかはわからない。よって僕とソーマが最初に接触して相手の出方と能力を見る。サクヤさん、アリサ、コウタは能力が判明次第戦闘に介入。OK?」

「了解だ。」

「索敵で先に私達が見つけた場合は?」

「できれば通信してほしい。すぐに向かう。戦うにして遠距離をメイ

ンに。特にサクヤさんとアリサ。教官が言っていたけど仇だからと突っ込まないように。基本戦術を忘れずに。」

ブリーフィングで各々の役割を決めるライ。他のメンバーも異論はないようだ。

「まあリンドウさんの仇だろうが僕たちのやることは変わらない。アラガミを倒して生きてここに戻ってくる。それだけだ。」

「リーダー……」

「……そうね。少し冷静さを欠いてたわ。」

『そんじやサクヤさん達も落ち着いたことだしリンドウさんの敵を俺たちできつさと倒してこようぜ。』

「まあこの面子なら大丈夫だろ。」

「……ソーマからそんな言葉が出るなんて熱でもあるんじゃない?」

「確かに。なんか起きそうだな。」

「……お前ら……!!」

アリサとコウタがソーマをからかうことでいつもの雰囲気に戻る。

「それじゃ行こうか。」

ある意味ではリンドウの弔い合戦とも呼べる今回の任務。

しかしこの任務はそれだけではなかった。

極寒の女帝

アナグラを出発してライ達第1部隊が降り立った場所は『鎮魂の廃寺』。

「やつぱここさみいな…俺寒いのが苦手なんだよ。暑いのも苦手だけど。」

「そんな薄着してたら当然ですよ。と言いたいところですが確かに今日は一段と寒いような。」

降り立って早々寒いと言い出すコウタとアリサ。

「私達ゴットイーターは偏食因子のおかげである程度の寒暖の耐性はあるけど確かにいつもより寒いね。雪が降るのはいつものことだけど。」

「当然だろ。アレを見たらな。」

サクヤもこの寒さに疑問を持ったようだがソーマは寒さの原因を見つけたようだ。

「ああ、確かにいつもより寒いわけだ。」

「何か見つけたんですか？」

そう問うアリサにライはとある方向に指差す。

そこには…

「そこに『凍りついたアラガミの彫像』があるだろ？その氷が寒さの元凶だ。」

ライの指差す先には凍りついたアラガミがいた。

「これ死んでる？」

「多分な。」

「やったのもアラガミだろうね。しかもそれなりの強敵。おそらく討伐対象だ。」

「氷を操るヴァジュラ…」

「接触前でよかった。いきなり鉢合わせしたら対応が遅れたらろうし。」

「火炎系の弾を仕込む必要があるわね。今のうちに…」

『…!!全員そこから離れる!!』

サクヤがそういうと同時にソーマが叫ぶ。その数秒後：
無数の氷柱が飛んできた。

「気づかれてたみたいね。」

サクヤは忌々しげに見上げる。

そこには木造の屋根にはリンドウが行方不明になった際、接敵したアラガミが第1部隊を睨みつけるように見下していた。

名を『プリティヴィー・マータ』氷を操るヴァジュラ種のアラガミである。

ヴァジュラと違い、一見人に近い顔をしているが姿はヴァジュラなので半人半獣の不気味な姿をしている。

「行くぞ!!」

「サクヤさん達は火炎系の弾丸で援護を!!僕とソーマで近接を担います!!アリサは遊撃!!」

「了解!!」

すぐに指示を出しマータに迫るライとソーマ。プリティヴィー・マータも一度咆哮してから屋根の上から飛び降りて迎え撃つ。

「所詮はヴァジュラ!!電気から氷に変わっただけの雑魚だろうが!!」

「ちよっ…!!ソーマ!!」

ライの制止を聞かず斬りかかるソーマ。

「まったく…援護する!!」

ソーマに呆れつつも神機を銃形態に変し援護に入るライ。

いつもどおりだと思っていたソーマだがやはり彼もリンドウの仇をとりたいのだろう。

プリティヴィー・マータに斬りかかるソーマに狙撃で援護に入るライ。

オラクルが切れればソーマが気を引いてるうちに捕食形態に移行し捕食することでオラクルを補充する。

そしてサクヤ達の火炎射撃の援護が入るとライ、アリサ、ソーマが近接を担いプリティヴィー・マータを追い詰める。

しかし相手は新種のアラガミ。普通のヴァジュラよりも耐久力が高くさらに動きも速い。

それ故に致命傷は避けていた。

追い詰めようとも最後の一撃には持ち込めない。それが戦闘を長引かせていた。

そしてこの長丁場がじわじわとライ達を苦しめて行く。

「このっ…!!」

「キヤッ!!ちよつと!!どこ狙ってるんですか!!」

戦闘が始まって数十分が経とうとしていた。

未だアラガミは健在。むしろ追い詰められつつあるのはライ達の方だった。

「クツ…!!震えで銃口が定まらない…」

サクヤが苦々しく呟く。

ライ達を襲っているのはアラガミではなく気温の方だった。

いくらゴツトイーターといえど人であることには変わりなく、暑い場所に長時間いれば脱水症状に陥るし寒いところにいれば霜焼けも凍傷もする。

そしてライ達はその極寒の中の戦闘を強いられ身体に異常をきたしつつあった。

「低体温による震えが止まらない。」

体を震わせながらそう呟くライ。しかしその眼光は死んでいなく、プリティヴィー・マータを睨む。

プリティヴィー・マータは氷を扱うためか寒さに耐久性があるのか状態に異常はない。今はライ達が完全に動けなくなるのを見計らっているのか距離を開けて様子を伺っている。

定石だろうがライ達が完全に動けなくなっからじわじわと罫り殺すつもりだろう。

「クソっ…舐めやがって…」

「ソーマ…」

ソーマが勢いよく斬りかかるが戦闘開始時のような速さははなく、
いとも簡単に避けられる。

「一撃で仕留める。何か」があれば…」

ライが不意に呟く。

体力の限界は近い。銃で仕留められる保証はなく、震えで銃口が定
まらない以上、オラクルの無駄遣いになりかねない。

そのときだった。

「力を貸してやろうただし少しばかり代償を払ってもらおう」

「っ…!？」

「リーダー？どうしました？」

不意に聞こえた謎の声、同時にライの心臓部辺りが大きく波打っ
た。

謎の声はアリサには聞こえてないのかライに問うがそれを無視し
て神機を強く握り第1部隊に指示を出す。

「アリサはソーマの援護!!コウタとサクヤさんはアラガミの動き出し
を狙って射撃!!をソーマはどうにか隙をつくれ!!」

指示を出すライは勢いよく駆け出す。その姿には低体温による
震えは見られず、本来のライの姿がそこにはあった。

ただ違うところが2つ

ライの瞳が普段の碧から金色に変わり、さらにその瞳には「紅い紋
様」のようなものが写し出されていた。

さらにライの勢いがまずに連れて神機の刀身が真紅に染まってい
くが

その変化には誰も気付かなかった。

そして眼前に迫ったプリティヴィー・マータに向かつて一閃する。
放たれた剣門はプリティヴィー・マータを捉え、なんと両断した。
かなり苦戦したがとてもあっけない幕切れだった。

…同時刻

サカキに研究室では…

「おー」

「ん？どうしたんだい？」

シオがいきなり声を上げた。

「ハカセ。おにーちゃんオキタ。」

「リーダーくんが目覚めたってことかい？何にかな？」

しかしシオはサカキの問いに答えずニコニコと笑うだけだった。

場所は戻って鎮魂の廃寺。

「うわぁ…完全に真つ二つだ…」

『もう!!リーダーもあんなことができたなら早いうちにやってくさ
いよ!!』

「ゴホツゴホツ…ごめん。」

戦いを終えて言いたい放題言われるライ。少しだけ顔が青ざめて
いるように見えるが誰も気づかない。

「…ねえな。」

「…そう。どうやら外れみたいね。」

アリサがライを咎める中、ソーマとサクヤはライが搔つ捌いたプリ
テイヴィ・マータからリンドウの腕輪と神機を探していたがどうやら
見つからないようだ。

「最近の調査隊の報告、誤報が多いですよ。」

「そう言わないのアリサ。とにかく任務は終えたからアナグラに戻り
ましょう。戻ったら皆暖をとるのよ。特に貴方、倒してから咳き込ん
でるけど大丈夫？」

「コホツ…大丈夫です。」

心配そうに問うサクヤに大丈夫と返すライ。しかしもとより白い

肌がさらに白くなっている。

その時、すぐ近くから咆哮が聞こえた。

「なに？」

「こつちからだな。」

「ゴホッ…行ってみよう。」

帰投ヘリが来るまで時間があるので咆哮が聞こえた場所へと向かう第1部隊。

咆哮が聞こえた場所に着くとそこには一体のアラガミ。

「あれも新種…」

その姿はライは前に一度見たことがあった。

そしてアリサの「仇敵」だった。

王の顔を持つヴァジュラ『ディアウス・ピター』

そのアラガミがまるで品定めするかのような目でライ達を見下ろしていた。

しかし襲って来る様子もなく、そのまま踵を返した。

「…先に進むにはアイツを倒さないといけないようね…待ってなさいよ…」

おそらくリンドウの腕輪と神機はピターの腹の中だろう。そして極東支部のゴットイーター達がリンドウの件に一区切りつけるにはピターを倒すしかない。

そしてアリサが真にトラウマを乗り越えるのもピターを倒すしかない。

因縁深いディアウス・ピターと第1部隊。次会うときは激戦は避けられないだろう。

「ゴホッ…帰投ヘリが来た。帰ろう。」

ヘリに乗り込む第1部隊。しかしライはかなり消耗していたのかヘリに乗った途端に安心したのと緊張の糸が切れたのかすぐに深い眠りについた。

禁忌の力

「呼び出してすまない。昨日は大変だったようだね。」

プリティヴィー・マータ戦の翌日、ライとアリサを除く第1部隊のメンバーはサカキの研究室に呼び出された。

「リーダー君はともかくアリサ君もいないけど、どうしたんだい？」

「それがいくら呼んでも部屋から出てこなくて…」

「そうか。まあいい。君たちを呼んだのは昨日のアラガミ討伐についてだ。君たちが討伐しているときにシオが不思議なことを言いだしてね。それにヒバリ君とリツカ君からおかしな報告が入っているんだ。」

「そういえばそのシオはどこに？」

「シオは今は就寝中だよ。昨日リーダー君が会いに来るのをずっと待ってただけだね。」

「話を進めるが昨日リーダー君におかしなところとかなかったかい？」

「おかしなところですか？」

「なんでそんなことを聞く？アイツに何か疑いでもかけられてるのか？」

サカキの問いにソーマがそう問い返す。確かにサカキの問い方はライを疑うような言動にも聞こえる。

「疑いね。君たちの返答によってはそうなるかもしれないね。」

「え!？」

「……どういうことですか？」

サカキの肯定ともとれる返答にコウタは驚きを隠せず、サクヤは静かに怒りを露わにしていた。

ソーマに至っては鋭い眼光でサカキを睨みつけている。

「待ちたまえ。私としてもまだ疑う以前の問題だ。ただ不可解な報告が上がっているのもまた事実。だから君たちを呼んだんだ。」

「…分かりました。昨日の彼の様子はいつもと変わりませんでした。ただ討伐終盤から…」

「うん。プリティヴィーマータを倒す時はいつもと違ったと思う。アラガミを一撃で真つ二つにするなんてスゲーと思っただけどリーダーがそんな芸当できたことに驚いたし。」

「……真つ二つだって?」

サカキが耳を疑うのも無理はない。

アラガミは複数のオラクル細胞が結合することで形成される。しかもオラクル結合はそう簡単には解けないし結合崩壊も何度も攻撃を与え続けてようやくできる。

それがたった一撃で強固のオラクル結合を突破するとはアラガミ討伐の常識ではありえない。

「ああ、リーダーが勢いよくアラガミに突っ込んだ時、奴の神機の刀身が赤く染まっていた。その神機を居合いだったか? そんな構えで一閃したらアラガミは見事に両断された。」

しかしサカキがそう考えつつもソーマがさらに詳細を伝えることで納得せざるを得ない。実際にそれは起きたことでもあるし自身の前に実際その瞬間を見た3人がいる。

「そうか。いやーすまない。まさか予想を遥かに超える返答で驚いたよ。」

「御託はいいからなんでリーダーのことを聞いた?」

「実はヒバリ君からの報告でアラガミを倒す寸前、君たちのすぐ近くに新たなアラガミの反応が出たと連絡が入ってね。同時にリーダー君の腕輪から偏食因子の大量投与も確認された。」

「最初こそ誤作動だろうと思ってたけど君たちの話を聞く限り、おそらくけどリーダー君は一時的にアラガミ化したと考えられる。」

「アラガミ化…」

「完全なるアラガミ化ではない。半アラガミ化といった方が正しいかもね。これがヒバリ君からの報告だ。次はリツカ君からの報告なんだけど、リーダー君の神機の近接パーツがかなり損傷していたらしい。多分、アラガミを両断するときには彼の神機もかなり無茶したということだろう。」

「そしてシオから『おにーちゃんオキタ』と言われてね。」

「へ？どういうこと？」

「おにーちゃんが起きた？」

「……………」

シオのナゾの言葉の羅列に首を傾げるサクヤとコウタ。だがソーマだけはお兄ちゃんがライを指してないことを知っていたため困惑も驚きもなかった。

「事情は分かった。聴きたいことはこれだけだ。ありがとう。」

「待ってください。リーダーが仮にアラガミ化したというのならなんでリーダーは人のままを維持してるんですか？」

「サクヤ君。これはあくまで推論だ。けどリーダー君はアラガミ化したことによる消耗で今も昏睡状態にあるのならある程度納得がいく。」

サカキが言う通り現在ライは医務室で眠り続けている。帰投へりに乗って眠りについてから一度も目を覚ませていない。念のため医療班がライの体調を調べたが低体温症以外は異常は見られなかった。「健康面は落ち着いてるからしばらくしたら目を覚ますと思うが君たちもリーダー君を気に掛けてくれ。」

「……………」

ゆつくりと瞼を開ける。視界はまだ焦点が定まらない。

嗅覚は正常に機能してるのか薬品の刺激臭がすることここで医務室であることがわかる。

それでも身体の怠さが取れないのか未だにライは起き上がることができずにいた。

10分かけ、ようやく身体を起こしたライ。だが視線は未だに虚空に向けられていた。

「あ……リーダー……」

「……アリサ？」

しばらくするとアリサが医務室に入ってきたその表情は何故か暗い。

「よかった。帰投ヘリから一度も起きなかったから心配してたんです。」

「ああ、ごめん。あの時は寒気とダルさと意識が朦朧としてたから帰投ヘリに乗ったら安心してね……」

「……大丈夫ですか？」

「少なくとも今のアリサよりは動けると思うよ？」

「……」

「とりあえず座りなよ。」

とりあえずアリサを椅子に座らせる。アリサが此処に来たのも恐らく自分に相談があるからだろう。

「あ……リーダー、前に私に復讐心に囚われるなど言ったこと覚えてますか？」

「似たようなことを言ったことがある気はする。」

「そうですね。私もそう思っていました。アラガミを何度倒しても結局は形を変えて復活する。終わりのない復讐に意味なんてないとリーダーに言われて気付きました。」

「でもあのヴァジュラが姿を見せた時、私の中からドス黒いものを感じたんです。両親の仇と遭遇して怒りと恐怖心を感じました。もし体力の消耗がなければきっと飛びかかっていたと思います。」

独白するアリサの話に耳を傾けるライ。いづれは対峙しなければならぬと思っていたアラガミと遂に対峙することになったアリサの心情は計り知れない。

「私がゴットイーターになったのは少なくとも両親に仇をとる為ではありません。でもいざ対峙して戦った時、私は正気でいられるか分からないんです。」

「その点は大丈夫だろう。いや、だと思っう。」
「え？」

「前のアリサは1人で全て片付けようとしてたけど今は周りとうまく連携を取ろうとしている。多分あのヴァジュラも皆で協力すれば倒せないことはないと思う。」

まあどんな能力も持っているかは知らないけどね。と付け足すライ。だがライには自信があるのかまったくネガティブな様子ではなかった。

「それに仮にアリサが暴走しても僕はバックアップに入るし、サクヤさんがきつと止めてくれる。コウタもそうだろうしソーマも悪態をつきながらも協力してくれる。」

「だから安心して暴走してくれとは言わないけど積極的に動いてくれて構わない。」

多少冗談にも聞こえる発言を交えながらアリサを慰めるライ。効果は観面のようにアリサから暗い表情が消えた。

「なんですかそれ。まるでいつも私が暴走してるように聞こえますが。」

「でもそうですね。私には頼れる仲間がいる。そのことを忘れてました。」

「でもそれはリーダーにも言えることです。あとソーマも。なんでも1人で決着をつけようとしなくてください。昨日のあの技はすごかったけど。」

「昨日の技？」

「え？覚えてないんですか？アラガミを両断したアレですよ？本当に凄かったのでできるなら教えてほしいくらいです。」

「そんなことしたかな？あの時のことはあまり覚えてないんだ。でも一時的だけど力が漲る感覚はあったけど。」

昨日の戦闘の終盤は覚えてないというライ。だがアラガミ討伐後には意識が朦朧としていたのなら無理もないのかもしれない。

「でもきつとその力は危険な力だと思う。アリサは覚えたいと言ったけど覚えられない方がいいよ。確証はないけどね。」

例の一撃を危険な力と分析するライ。一撃必殺の攻撃の代償としてライの体力の大半を失った。今回は体力で済んだが次回同じ力を使った場合次は何が代償となるのか。それをライは危険視していた。しかし既にライはその“禁忌”と呼べる力を有してしまった。きっとこの力がライを蝕むことは避けられぬ現実だろう。

多重人格

「君が此処に来るのもなんだか久しく感じるね。」

「そうですね。最近はいろいろありましたから、」

久しぶりにサカキの研究室に顔を出したライ。後ろには一緒に来たのかソーマの姿もあった。

「そうだね。最近はヨハンの手伝いもしてるようだしね。彼のことだ。なにやら無理難題を押し付けられているんじゃないかい?」

「支部長の命令で口外はできませんが個人的には楽しんでますよ。ところでシオの姿がありませんが。」

今回、サカキの研究室を訪れたライだが本来いるはずのシオの姿が見当たらなかった。

「シオはアリサ君とコウタ君と一緒にバイクングに出てもらってるよ。そろそろ戻ってくると思うけど最近は何も忙しくしてたしいろいろあったからシオも君に会えなくて寂しがってたよ。」

「それは悪いことをしましたね。……でも。」

「本当に僕に会いたがっているのかは分かりませんがね。」

「まるでシオが君を見てないような言い方だね。」

「なんとなくですけどね。」

そう言いながら弱弱しく笑うライ。

「ところで僕を呼んだのはなんの要件ですか?」

「なに、最近体調の変化とかなにか変わったところとかなかったかい?」

「体調は特に変わりませんが空腹感を感じるようにはなりましたかね? 仕事が増えたからエネルギー消費が激しくなったのかもしれないです。」

サカキの問いにそう答えるライ。ライの返答ではたいした変化はないように聞こえる。

「なるほど。君自身には変わりないようだね。でも君の神機はかなり損傷したと聞いたけど。」

「ああ、リツカから報告受けたんですね。なにやら僕もさつき彼女か

ら話を聞きましたけど近接パーツが焼けて罅割れしてたみたいです。リツカの見解では一定の放熱量をかなりオーバーして過負荷を与えた結果と言っていました。」

神機が壊れるような使い方はヤメテと口酸っぱく言われたと続けるライ。そんなライにサカキはさらに問いかける。

「君は神機が過負荷状態の時の自分の状態は覚えているかい？」

「覚えてないですね。そもそもどうやって倒したかも曖昧です。」

「そうか。本人が覚えてないんじゃない？」

「あの時はかなり消耗してましたからね。なんじやすみません。」

「いや、謝ることじゃない。あくまで私の興味本位で聞いただけだから。」

「おにーちゃん!!」

サカキとそんな会話をしているとライの背後に衝撃が走る。

「あれ、リーダーとソーマも来てたんだ。」

「まあな。」

「やあコウタ君。ありがとう。シオ。お腹一杯になったかい？」

「オナカイツパイマンゾクマンゾク。」

「少し見ないうちにまた言葉を覚えたようですね。満足って。」

抱きつくシオを受け止めながらそんなことを言うライ。

「シオ久しぶり。最近あまり来れなくてごめんね。」

「ヒサシブリ!!」

そう言いまたライに密着するよう抱きつくシオ。その状態でライの顔を見上げる。

「なんかこう見ると兄妹に見えるな。髪の色も似てるし。」

「そうか?」

何気にそんなことを言うコウタ。それに反応したのは珍しくソーマだった。

「あながち間違っていないと思うよ。シオは人に近いアラガミで君たちゴットイーターはアラガミに近い人間なのだから要は比率の問題だ。」

賛同するようにサカキがそう言うときシオが明るい表情に変わる。

恐らく褒められたと思っただろう。

「となると僕たちゴツトイーターとアラガミは親戚かなにかですか。」

「うわーそれって俺ら家族間で殺しあってるってことじゃねーか。」

「コウタが兄妹とか言うからだよ。」

「ミンナトモダチミンナキョウダイ!!」

「フツ：友達：兄弟：か。」

声大きくシオがそう言うとき場が少しばかり和んだがライは小さく
呟いた。

…その表情はまるで嘲笑するような見下すような表情だった。

「おい。」

「なんだい？」

「これから任務ということでサカキの研究室を出てきたライとソーマ。」

「シオが友達やら兄弟やら言ったあと、なんであんなこと呟いた。」

「呟いた？僕が？」

「しらばっくれんな。これでも耳もいいんだ。呟いただろうが。」

ソーマにはライの呟きが聞こえてたようにライを問い詰めるが何故かライの方は覚えてないような反応をする。

「…覚えてないのか？自分が言ったことだぞ？」

「すまない。覚えてない。」

「無意識に言ったのかもしれないけど。もしくは『もう1人』の僕が呟いたのか。」

「もう1人？だと？」

「博士には言わなかったけどプリティヴィーマータ戦ではなんか僕の

中から声が聞こえた気がするんだ。」

朦朧としてたのは本当だから確証はないけどねと続けるライ。

「もしくはアラガミかもしれない。偏食因子とはいえオラクル細胞には変わりないし言い換えれば体内にアラガミを飼ってるようなものだしね。」

「お前：自分のことだろうが。なんでそんな他人事のように言うんだよ。」

「それは単純に自分自身に興味ないからだよ。むしろ僕が僕自身を嫌っている。憎んでもいる。」

あつけらかんと答えるライ。その姿にソーマは少しばかり恐怖を感じた。

「そういえば前にソーマに聞かれたね。なにをしにここにきただったかな?」

「あの時は答えなかったけど。多分僕は僕を殺すためにゴツトイーターになったんだ。でもただアラガミに喰い殺されるなんて芸がない。僕は僕を徹底的に絶望させたいそして死にたい。」

「なんでお前がお前を憎む?」

「さあね。記憶がないから理由まではわからない。でも人体改造されるくらい軽い命だ。そこまでの価値は僕にはない。」

「ああ、言つとくけど他のメンバーには内緒で頼むよ。下手にバレたら僕の念願が叶わなくなりかねないから。」

そう言いソーマに釘をさすライ。その際に見せたライの表情は恐ろしいものだったと後にソーマは語る。

「しかしここまで話すと僕は多重人格者なのかもしれないね。」

また他人事のようにそんなことを言うライ。しかしそれは聞いたソーマからすれば納得出来るような答えだった。

魔法の言葉

「また雨宮大尉の腕輪の信号の反応が確認された。」

数日ぶりにツバキに呼び出された第1部隊。そしてツバキから告げられたのは以前のプリティヴィーマータ戦の時と同じ内容だった。「今回は本物だろう。場所も鎮魂の廃寺ではないから気温の影響は少ないだろう。」

「前にも言ったがあくまで討伐が優先だ。仇討ちやらなんやらは考えるな。」

「では武運を祈る。」

「…先にヘリに集まっています。少し寄るところがあるので。」

ツバキがいなくなり、ヘリに第1部隊全員で向かおうとした際、アリサがそう言う。

「…：わかった。出発には遅れないようにね。」

「はい。」

そう言うってアリサはエレベーターに乗り込む。それを見送る第1部隊、

「どうしたんだろ？アリサがやけに大人しかったけど。」

「そうね。少し表情が硬かったし肌も青白く見えたわ。」

「仕方ないですよ。今回の相手はアリサにとってはトラウマそのものですから。」

「なにか知ってるのね。」

「ええ。まあ。」

そう言うライの表情も暗い。

感応現象でアリサの過去とトラウマを知ったライだがそのアリサ

の過去やトラウマを他人であるライがサクヤ達に話してもいいのか悩んでいた。

前にサクヤにアリサの過去を話したのはアリサへの誤解を解くためだった。しかしだからといって他人の過去を勝手に話すべきではないともライは思っている。

「とにかく今回の相手は第1部隊としてもアリサとしても因縁の相手と言えます。これだけしか言えません。」

「そう。貴方がそう言うなら無闇に詮索はしないわ。」

「すみません。」

その頃、アリサはというと…

「ふう…」

自分の部屋で顔を洗っていた。

ツバキから例のアラガミが見つかったと聞き悪寒が走ったアリサ。いくら耐性がついたといえどもトラウマの元凶を前にして普段通りの動きができるか不安だった。

それで一度落ち着く為に自身の部屋に戻ってきたのだ。

「大丈夫。私なら勝てる。」

鏡越しの自分に暗示を掛けるアリサ。

その時、今は行方不明になった「主治医」から教わった「魔法の言葉」を思い出した。

主治医曰く言葉を発せば強い自分になれるというおまじないのよきな自己暗示。

その魔法の言葉をアリサは呟く。

「アジン・ドウヴァ・トゥリー」

魔法の言葉を繰り返して呟くアリサ。おまじないの影響が心なしか力が漲る感じがしていた。

「フフっありがとうございます。『オオグルマ先生』」
なんとなく呟いたお礼の言葉。

「よし!!」

両頬を叩き気合を入れるアリサ。

すると部屋のドアからノック音が聞こえた。

「はい。今行きます。」

第1部隊の誰かが迎えに来たのだろうとは急ぎ足でドアへと向かうアリサ。

できればリーダーがいいな。と内心想いつつも改めて部屋の散らかり具合を見るとリーダーには見せられないと翻意するアリサ。

だがその願いは聞き届けられたのか部屋の前にいたのはライ達第1部隊の誰でもなかった。

「あ…あなたは…」

「……………」

「あ…」

驚きの表情を浮かべるアリサだが外の人物が何か言うともまるで催眠状態にでもなったように目の光が消え、ただ立ち尽くすアリサ。

「……………」

そんな状態のアリサ以外の人物は語る。

「はい。わかりました。」

催眠状態のアリサは何か命令を受けたのかそれを受諾する。

「私は…リーダーを…」

命令が刷り込まれたのを確認したのか外にいた人物はその姿を消す。

「……………あれ?」

催眠状態が解けたのかアリサの目に光が灯る。

「私は一体?」

記憶の欠落を感じるアリサだが時計を確認するとヘリの出発時間

が迫っていることに気づいた。

「あ!!いけない!!」

急いで忘れ物がないか確認して部屋をでるアリサ。

その際にアリサは無意識に呟く。

「私は…アラガミ（リーダー）を…」

その声は恐ろしく冷淡で躊躇がなかった。

「殺します。」

包囲網

「いない…:ですね。」

「隠れる場所はたくさんあるからね。」

リンドウの腕輪の反応があった場所に辿り着いたライ達第1部隊。腕輪の反応があった場所は沢山の廃墟ビルが並び立つ人類にとってもアラガミにとっても身を隠しやすい場所だった。

さらにこの場所は広域のようで今はライとアリサの2人とソーマ、コウタ、サクヤの3人にチームに分かれて搜索を進めていた。

「こちら、ライ。そっちの様子はどうだい？」

手にもつ通信機で相手チームに連絡を取るライ。すると応答がすぐに返って来た。

「こちらサクヤ。今のところ変化なしね。オウガテイルやザイゴートといった小型アラガミはいるけど。そっちは？」

「同じですね。わかりました。何かあったらまた連絡します。」

「こつちも何かあったら連絡するわ。無茶しないでね。」

「サクヤさん達は何か収穫がありました？」

通信機を切るとアリサがそう聞いてくる。しかしライは首を横に振ることでアリサに伝える。

「そうですね。もしかして腕輪の反応が誤反応ということも…」

「あるかもね。」

「もしそうなら私偵察班にクレーム入れます!!あの人達のせいで振り回されるのはもう嫌ですから!」

「落ち着いて。気持ちは分かるけど偵察班だって万能じゃないんだから。」

「それに少しばかり不可解なことがあるしね。」

「不可解ですか？」

首を傾げるアリサに少し苦笑するライ。そして気づいた不可解なことを話す。

「アリサも気づいてると思うけどぼく達が此処に来てからまだ戦闘らしい戦闘はしてないよね?」

「あ、確かにそうですね。小型アラガミも確実に目があったのに襲ってこないしこちらから来ると牽制しながら後退していききました。」

「どうしてだと思おう?」

ライが言うように第1部隊がこの場所に来てから戦闘は行なっていないなかった。

「どうして…て言われても…でも不思議ですね。このエリアのアラガミ全員が同じ動きしてるのは。」

「確かに不思議だね。捕食本能しかもたないアラガミがそんな統率された動きをできるとは思えない。」

「あの…リーダーはもうわかってるんですよね? 勿体ぶらないでくださいよ。」

「ハア…アリサ。アドバイスだけど自分の頭で考えるということは大事なことだよ。どんな状況でもね。」

呆れ気味にそういうライはアリサが言うように答えには辿りついていた。

まあ答えよりは予想といったほうが今のところは正しいだろうが。

「絶対的な強者による統率だよ。言うならこのエリアの主。その主の指示で僕達に襲って来ないと言うのなら理にかなっている。」

そして…とライが言葉が続けようとした時、突然ライとアリサを包囲するように小型種と中型種のアラガミが現れた。

「このように襲ってきたということは主の許可が下りたってことさ。」

神機を強く握り共に背中合わせになるライとアリサ。小型と中型種のアラガミだけだがその数は多い。

「やれるかい?」

「私を誰だと思ってるんですか? 極東支部最強を誇る第1部隊のゴツトイーターですよ?…それに…」

そこで一度言葉を切り、信頼する声質でアリサは言った。

「リーダー（貴方）と一緒に負ける気がしません。」

アリサから絶大な信頼を受けるライ。

同時にライの耳にはアリサではない何者かの声が響いた。

「…貴方になら背中を預けられた…」

その声は女性の声でライはこの声に何故か懐かしさと虚しさを感じた。

同じ頃、サクヤ、コウタ、ソーマのチームも小型種と中型種のアラガミに囲まれていた。

「オウガテイルにコンゴウ…楽勝だな。」

「楽勝って単体ならともかくこの数は手を焼くだろ!!?」

「そうね。少し時間がかかるけど殲滅できるわね。」

「って!!?サクヤさんも乗り気!!?」

囲まれているのにも関わらず余裕のソーマとサクヤ。慌ててるのはコウタだけだ。

「おそらくアイツらも同じだろうな。」

「でしょうね。大丈夫かしら?」

「あのおサクヤさん?その大丈夫が心配してるようには聞こえないんですが?」

「心配してないもの。リーダーとアリサなら負けるはずないでしょ?この程度のアラガミにね。」

中型種クラスをこの程度と言わしめるほどの実力を持ち合わせたゴットリーダーが所属する第1部隊。極東支部では単独でヴァジュラを討伐したら一人前と認められるため中型種のアラガミをこの程度と呼べるのはあながち間違いではないのかもしれない。

「どちらにせよ助けに行くにしてこの状況を打破しないといけないでしょ。それにまだあのアラガミと接触してないわ。此処で撤退したらまた姿を眩ますかもしれないし近くにいます以上、逃すつもりはないわ。」

サクヤの決意に満ちた言葉。今回の任務は前リーダーであるリンドウの腕輪と神機の回収が最終目標である。

それが何を意味するのもサクヤ達は理解している。それでもこ

の任務を第1部隊の手で達成しなければならなかった。

「まあそういうことだ。」

「なににせよこのエリアに前リーダーの敵がいる。それを俺たちが撃つ。その前にこのアラガミ達を片付けてリーダー達と合流する必要がある。1つか2つ手間が増えただけだ。」

「そうね。それじゃ早速掃除を始めましょうか。」

どちらにせよこの包囲網を突破するのが現在の最優先事項。第1部隊全員の神機の握る手に力がこもる。

「それじゃあ…」

「神狩りを始めようか!!」

アリサ以外には聞こえないのにライがそう言うと同時に第1部隊全員が戦端を開いた。

想定外

何度屠つても次々と襲いかかってくるアラガミの群勢。現にアラガミの残骸が無数に転がっていた。

「数が多すぎる!!」

アリサも苛立ちが隠せないのか悪態をつく。

アラガミが襲ってきてから20分が経とうとしていた。

ライとアリサもまだ戦える体力はあるようだが確かに消耗していた。

2人に対しアラガミは今も10を超えている。いかにライとアリサが優秀なゴツトイーターであつても多勢に無勢にはかわりない。

しかしその多勢で押し寄せるアラガミに対し20分も保っているライとアリサ。

体力は削られているのは確かだがそれでも押し負けない2人も異常な存在ともいえる。

「これで30匹目かな?」

神機をコンゴウに振り下ろし絶命させるライ。まだ話せるくらいの体力は残っているようでまだまだ余裕があるようだ。

「あと10体!!」

「もうそれだけ?物足りないなあ。」

「物足りないって…やっぱリーダーはおかしいです!!」

「…酷いな。少し傷ついた。」

物足りないというライにアリサがそう突っ込むアリサ。

しかしながらライはヨハネスからの特務で禁忌種といった凶悪なアラガミと幾度となく戦っている。そのような危険なアラガミを何度も相手にしてれば今の状況に物足りなさを感じるのは無理はない。

寧ろこの事態に驚きを隠せないのは襲ってきたアラガミの方だろう。

たった2人に沢山の同胞を返り討ちにされた状況。捕食本能しか持たないアラガミだがその本能がライとアリサに対し恐怖を覚えていた。

「なにを逃げようとしてる？ここで逃げても変わらないだろ？僕達に狩られるか主に喰われるかの違いしかない。さあ選べ。どちらで死ぬ？」

また一体アラガミを屠り、アラガミに神機を刺すライ。そして上記の言葉を逃げ腰になつてるアラガミに言い放つ。

勿論アラガミがその言葉を理解してるかは謎だが。

「まあ逃がす気は毛頭ないけどね。」

そう呟き、逃げ腰になつてるアラガミの群れに飛び込むライ。そして簡単に残りのアラガミを駆逐していく。

襲撃から25分。アラガミによる包囲網は完全に破壊された。

「これで一息つけるね。大丈夫？アリ……………サ？」

包囲していたアラガミの殲滅を確認したライがそう言うが同時に背部からドスツと何かが刺しこむような抉りこむような感覚に陥った。

なんとか視線を下にすると見覚えのある「赤い帽子」。アリサがいつも被っている帽子だった。そしてライが自分を刺した相手がアリサだと自覚した瞬間だった。

「隙が…あつたら…ブチ殺せ…」

「なに…を…」

うわ言のように呟く声に返そうとするがそうすると体内から嘔吐感が込み上がり寸分もしないうちにライは口から血を吐き出した。

「……………え？」

そこで正気を取り戻したのかアリサは今の状況を認識する。

「……………え…な…なん…で…私…確かに……………アラガミを…」

自身が神機でアラガミではなくリーダーであるライを刺している状況に混乱するアリサ。

「り…リーダー？…い…イヤ…イヤアアアアアアアアアアアアア
!!!!?」

自身がやってしまった最悪な行動に悲鳴を上げるアリサ。

しかし最悪な事態は連鎖的に起きるもので今回も起きてしまった。

「ここで…本命…か…」

廃墟ビルが並び立つ道の奥から“王を彷彿させるような顔を持つ
ヴァジユラ”『ディアウス・ピター』がその姿を見せた。

まるでこの状況を見ていたかのような登場は明らかでピターの口
元は笑みを見せるようにつり上がっていた。

同じ頃、サクヤ達の方もアラガミ包囲網を脱しつつあった。

「なに？今の悲鳴？」

「リーダー達の方でなにかあったみたいね…」

アリサの悲鳴が聞こえライ達の方でなにかが起きたと判断するサ
クヤ。

「悪いけど、あとは任せるわ。向こうの様子も気になるし。」

「通信で確認できないのか？」

「通信は完全に切ってるみたい。」

通信機に応答もなくなるなんの音もしないことを確認し電源を切つて
いると判断したサクヤ。これでは誰かがライ達の方に向かって2人
の無事を確認するしかない。

「通信機はソーマに預けるわ。じゃあ頼んだわよ。」

そう言い戦線を離脱するサクヤ。しかし離脱を阻止しようとアラ
ガミが行く手を阻む。

「邪魔するな!!!」

だがそのアラガミをコウタが撃ち落とした。

「サクヤさん!!今だ!!」

「ありがとう」

コウタの援護もあり、サクヤは無事に戦線を離脱した。

なにが起きたのかアリサには分からなかった。

ライをおかしいと言った後のほんの数瞬。1分も満たない時間だけ意識が朦朧としていたアリサ。

その意識がハッキリした時にはライの身体を神機で貫いていた。

自分が何故、おそらく1番信頼しているゴットイーターであろうライを背後から刺したのか。

ただ朦朧する意識の中で脳裏に響いた“2つの声”があつたのはなんとなくだがアリサは覚えていた。

1つはまるでアリサ自身に言い聞かせるような口調で…

“リーダーは危険なアラガミだよ。だから誰よりも強いアリサが殺さないかね？”

そしてもうひとつは…

“隙があつたらブチ殺せ”

前リーダーのリンドウの口癖だった。

朦朧する意識でありながら身体は脳裏の声に従っていたのだ。

その結果…

「あ…あ…」

意識を取り戻したアリサは膝から崩れ落ち放心状態になっていた。

対してライは…

「……………の!!!」

止め処なく出る出血を気にする余裕もなく、衣服を紅く染めながらピターに1人立ち向かっていた。

しかし流血の影響か動きが遅く、攻撃がピターを捉えることはなかった。

ピターはというとそんなライをすぐに倒そうとはせず、攻撃も単調でまるで遊んでいるようだった。

おそらく遊びに飽きたら喰い殺すつもりだろう。

しかし突如として、辺り一帯が発光した。
ピターはしばらくの間、閃光により目をやられた。
閃光が消え、視界が戻る頃には…
ライとアリサの姿はなかった。

自分の命、仲間の命

「こちらサクヤ。ソーマ？聞こえる？」

ピターへの目眩しの隙に近くの廃ビル内に逃げ込んだサクヤ達。

閃光の正体はスタングレネードでそれを使ったのはサクヤだった。そしてその隙に重傷のライと放心状態のアリサを救出し、今に至る。

『こちらソーマ。リーダー達は無事か？』

「ええ。生きてはいるわ。重傷を負ってはいるけどね。」

そう説明するサクヤは視線を壁にもたれかかって気を失っているライに向ける。ここに来て止血をした後に糸が切れたように意識を失ったのだ。

「とにかく一度合流しましょう。悔しいけど撤退も考えないと。」

「了解だ。今何処にいる？」

「私が迎えに行くわ。とりあえず2チームに別れたところで合流しましょう。」

そう伝え通信を切るサクヤ。

「アリサ。」

「……………」

すぐにアリサを呼ぶが当の本人は未だ放心状態のままだった。

しかしライの側を離れようとせず、ライの右手を握り、うわ言のように謝罪の言葉を繰り返している。

「アリサ!!」

「…………サク…ヤ…さん。」

「私はソーマ達と合流するためにここを離れるわ。戻ってくるまでリーダーのことを任せるわね。」

サクヤがそう告げると今まで薄い反応だったアリサが大きく反応した。

「ま…待って…待ってください!!私じゃ…私じゃできません!!無力で愚かで…どうしようもない私には…私なんかじゃ何も守れません!!」

アリサの悲痛の叫び。

アリサは完全に折れていた。以前の自信喪失より遥かに深刻に。

アリサは過去のトラウマを乗り越えている。
ライやサクヤといった第1部隊が支えてくれたおかげでゴット
イーターとして再び活躍できるまでに立ち直った。

寧ろ以前よりも強く成長していたことだろう。

今回のピター戦はリンドウの件と自身のトラウマと完全に決着つ
けるはずだった。

不安や恐怖で弱気になってもライに吐露することで不安が薄れ、精
神的に余裕でいられた。

だがそれは今回、ライを神機で刺して重傷を負わせた瞬間に脆くも
崩れ落ちた。

アリサにとってライは尊敬する存在であり目指す目標であり自身
を導く道標でもあった。

その道標が突然音もなく崩れ去ったことでアリサは道に迷った幼
子となってしまった。

行き先も帰り道もわからない。幼子が不安に駆られるのは無理も
ない。

今のアリサはその幼子なのだ。

「いい加減にしなさい!!」

「っ……………!!!」

そんな幼子（アリサ）をサクヤは叱咤した。

アリサの涙を流しながら絶望した表情に驚きの表情が加わる。

「いい？アリサ。貴女とリーダーに何があったかは聞かない。なんで
リーダーがこんな重傷を負ったのかも貴女がなんでそうなったのか
もね。」

「でもこれだけは言わせて。『起きたことは仕方ないわ』もう変えら
れないことなんだから。」

「あ…」

——— 起きたことは仕方ない ———

ライの口癖のようなものでこの言葉を聞くだけで前向きに考えら
れるようになるライの『魔法の言葉』

「それにいつまで彼に甘えてるの？アリサ。貴女は強い。私たちが背

中を任せられるほどにね。」

「私が…強い…」

「それにこれは貴女が極東に来た時にリーダーが…ライが言っただことなんだけどね。」

“ 自分に自信を持っているアリサが羨ましく尊敬できる ”

「リーダーが…私…を…」

確かに極東に来た当初のアリサは自信に満ち溢れていた。その姿に当時のライは憧れを抱いていた。

ライとアリサはお互いに尊敬し目標にしていたのだ。

ライはアリサを、アリサはライを、共に目標にしてゴットイーターとして強く成長していきライは極東支部の多くの仲間から信頼される存在になった。

アリサも挫折はしたものの再び立ち上がり成長していき、信頼に応えられるゴットイーターとなった。

「貴女は強い。リーダーを守れるくらいに貴女は強い。そしてリーダーを守れるのは貴女しかないの。」

「私しか…」

「だから頼むわね。お願い。リーダーを守って。」

そう言っただけで優しく微笑むサクヤ。そして踵を返す。

「リーダーを任せられたわ!!」

そう言い残し、サクヤはアリサ達から離れていった。

「…あんな感じだったのね。」

ソーマ達との合流地点地点に向かうサクヤは取り乱したアリサをかつての自分と重ねていた。

あの時…リンドウと別れた時の自身の取り乱した姿と…

「本当に来た当初と変わったわね…かなり影響を受けたというか彼に変えられたというか。」

初対面時のアリサと今のアリサを比べると本当に別人なくらいに差がある。

それはやはりライの存在が大きいだろう。

同じ新型で感応現象という不思議な力で全てを知ってくれる理解者。

「そしてアリサはきつと…」

そこでサクヤは言葉を切る。

自覚しているかはわからないがアリサがライに好意を抱いているのは明らかだ。それは依存するくらいに大きなものだ。今回の件で証明された。

しかしそれは危険を孕んでいる。

もしライが死んだらアリサはどうなる。

きつとアリサは壊れるだろう。

心が壊れ、ゴットイーターとしても機能しなくなる。

それだけアリサにとってライは大きな存在だ。

サクヤにとってリンドウがそのような存在だったように…

サクヤが居なくなつて残されたアリサ。

サクヤの叱咤で先程よりは持ち直したようだが戦闘に耐えられる状態ではなかった。

「…リーダー」

縫るようにライの右手を両手で握るアリサだが気を失っているラ

イがそれに応えることはない。

「リーダーは凄いです。どんな状況でも落ち着いて対処しますし指示も的確でそして強い。私とは大違いです。」

「そんな貴方が私を目標にしてたなんて…信じられません。」

「どんなに語りかけてもライからの反応はない。」

「私は弱いです。貴方より遥かに。どうしたら貴方のように強くなれますか?」

「どうやったら貴方に追いつけますか?」

「どうしたら貴方の隣に立てますか?」

返答のないことは分かっているはずなのにアリサは問い続ける。

別にアリサは答えを欲しいとは思っていない。

ただ答えが返ってこなくとも自身が抱える疑問を口に出すことで心が軽くなる気がして吐露しているだけだ。

要は自己満足である。

意識を失っているライは当然聞こえてないし聞いてない。

しかしアリサの不安も話を聞いてきたのはライである。

だからアリサは話す。聞こえてないライに自分の思いを。

そんなことを続けていると不意に外が騒がしくなった。

『……………なに?』

身を隠す廃ビル近くからアラガミの咆哮が聞こえた。

アリサは恐る恐る窓に近づき外に目を目を向ける。

そこには当然だがアラガミがいた。

ヴァジュラとディアウス・ピターが喰らい争っていた。

だが一方的にヴァジュラは敗れ、コアをピターに食われた。

そしてピターは顔を上げた際、アリサと目が合う。

途端にピターの口元がっり上がる。

“そこにいたか”

と言っているかのように…

「あ…あ…」

トラウマの元凶と目が合い恐怖に駆られるアリサ。

少しもしないうちにピターが此処に来るだろう。

今すぐ逃げたい衝動に駆られるアリサだが…

その時…ライが目に入った。

「リーダー…」

今アリサが逃げ出せば、アリサは助かるだろう。

だが、ライは死ぬ。絶対に。

戦っても勝てる保証はない。

自分の命の為に、仲間の命を犠牲にするか。

仲間の命を守る為に、命賭けの戦いを挑むか。

究極の選択。

アリサが選んだのは…

アリサはライから離れ、1人ピターに挑んでいた。

アリサは仲間の命を守る為に命賭けの戦いをすることを選んだアリサ。

今はライのいる場所からピターを引き離すため、牽制をしつつ、距離を空けて逃げていた。

ピターはヴァジュラ同様電撃を使うよう度々電撃を飛ばすがそれを回避つつやはり一定の距離を開けて戦うアリサ。

また、アリサが逃げる方にはサクヤ達が合流地点がある。

アリサは1人で戦う気はない。

とにかくライからピターを引き離し、サクヤ達と合流してから迎え撃つのがアリサの作戦だった。

当然ライは今も気を失っている。その状態で1人にするのは危険だが…

アリサはライを信じることにした。

きつとリーダーなら大丈夫。…と信じて1人にした。

それにピターはアリサのトラウマそのもの。

この行動はそのトラウマに立ち向かうのと同義であった。

当然怖いだろう。

だがアリサはライを失うのがトラウマよりも恐ろしいのだ。

裏人格

落ちる。

堕ちる

陥ちる

おちる

オチル

光も届かない暗闇。

ライは存在していた。

否、存在とは語弊だろう。

漆黒の空間で光がない以上、ライは五体が満足に存在してるのかも認識できないのだから。

ただそこには在る。それだけはなんとなく認識していた。

しかし空間（世界）でライは身体を動かすことも出来ず、現在、どんな状態なのかも分からない。

平衡感覚が失われてるため意識的には下降（沈下）しているが実際は上昇（浮上）しているのかもしれない。

もしくは右へ左へと移動してるかもしれない。そんな暗闇にライは囚われている。

身体を動かすことができない以上身を任せるしかないライは抵抗することなくその暗闇の奥底に呑み込まれていく。

暗闇は夜の役割を担うようにライの意識を闇に？み込もうとする。意識の方も抗う術を持たず刻々と削られていく。

薄れゆく意識の中…

不意に背中であろう辺りに暗闇から息吹のようなものを感じた。息吹を感じるということはそこに何かがある。

しかし暗闇に削り取られたライの意識はそれに気づく前に完全に消え去った。

身を任せるしかなくなったライはそのまま闇へと引き摺られる。

そして…

ライは為す術もなく、闇に「喰われた」

「ん？」

同時刻、廃ビルでライは意識を取り戻す。

「ふむ。ああ、そうだそうだ。〃宿主〃は仲間に刺されたんだった。」
「おかげさまで〃俺〃が表に出て来れたわけだがいずれ〃奪う〃にしても宿主には生きてもわねーと困る。」

なにやらブツブツというライ。しかしいつものライとはまるで違う。

「さてと、とりあえず宿主の仲間は救わんとね。試してみるか。」

そう呟くと精神統一するように瞑想するライ。そして…

「南方か。」

そう呟き移動を開始するライ。…しかし

「おっと…」

いきなりオウガテイルと出くわした。すぐに戦闘態勢に入るオウガテイルに対し、

「ちようどいい。試したいことがあったんだ。」

不敵な笑みを浮かべるライは神機で自身の右手を傷つける。

鋭利なもので傷をつければ血が流れる。ライの右手も当然のように血が流れ出る。

「血は情報の宝庫。故に俺は情報を蓄え進化する。」

訳のわからないことを呟くライだが紅く染まる右手には変化が生じる。

血は硬質化し、結晶となった。また結晶はライの右手に装着するよううに右腕に覆い最終的には巨大な『鉤爪』となった。

「ふむ。宿主の『記憶』を元に創り出した『輻射波動』なるものだが記

憶よりも不恰好だな。まあ偏食因子（オラクル細胞）の混じった血で形成したものだし神機として成り立つ：はず。」

まあ試せばいいか。と眩き、目前のオウガテイルに目を向ける。「ちよつと実験に付き合ってくれ。」

ライがいた廃ビルの廊下。

その壁や床には血とアラガミであろう肉片が飛び散っていた。

その凄惨な光景はまるで“中から爆発”しなければ証明できない光景だった。

時は少し遡り：

「っ……」

アリサはピターに追い詰められていた。

ライのいる場所からいち早く離れるため、一目散に走り回ったアリサ。

しかしピターもこの追いかけてっことを楽しんでいるのかアリサとの距離を一定に保って“狩り”を続けていた。

狩りで獲物を仕留めるには獲物を疲弊させるのは定石である。さらに恐怖を煽ることで正常な判断を奪う。

アリサにとってピターは天敵。

「……パパ……ママ……」

故にアリサは恐怖に吞まれようとしていた。

獲物を追いつめるアラガミと追い詰められたゴットイーター。皮肉にも神を狩る者が神に狩られるという皮肉にも真逆の形となった。

一歩、また一歩と歩を進めるピター。

その一歩の度に恐怖型増大し動けなくなるアリサ。

「パパ…ママ…リーダー…」

この時アリサは後悔した。

もう少しうまく立ち回れなかったのかを。

サクヤ達と合流なんて浅はかな考えだったんじゃないかと。

だが、もう後の祭りだ。

起きたことは仕方ない。

そう思うと神機を持つ手に力が入るアリサ。

今アリサが考えてるのはこの状況の打破。

生き残るために頭をフル回転させるその時だった。

ピターが突然咆哮をあげる。

同時に少し態勢が崩れた。

「え？」

いきなりのことで唾然とするアリサ。そんなアリサに声をかける声。

「なにボサってしてやがる。早くこっち来い。」

「ソーマ!!」

アリサに声を掛けたのはソーマだった。さらにその後ろにはサクヤとコウタの姿もある。

アリサがサクヤ達との合流に成功した春季だった。

合流を果たしたことでゴットイーター達の反抗が始まった。

単体攻撃力の高いソーマを筆頭に司令塔のサクヤ。遊撃のアリサと支援のコウタ。彼らのコンビネーションはピターを追い詰めてい

く。
此処にライが入ればさらに総合力が上がるが彼等は極東最強の第1部隊。1人欠けようと他とは比べようもない連携攻撃を駆使できる。

「もう少しよ!!手を抜かないで!!」

サクヤの檄が飛ぶ。この敵はリンドウの仇だ。前に進む為にも絶対に倒さねばならないアラガミだ。

しかしピターも黙ってやられるアラガミじゃない。他のヴァジュラよりも強力な電撃とトリッキーな動きで翻弄するなどで致命傷は避けていた。

「しぶとい!!」

「この!!」

アリサがピターの顔面を切り伏せる。

これがピターの怒りを買った。

「っ…なんだ!?!」

いち早くピターの変化に気づいたソーマは他のメンバーに距離を空けるよう指示を出す。同時にピターにも変化が起きた。

背中にある翼のような羽は破れ、赤く鋭利な刃物と化した。

「なにあれ?」

「くんぐん!!」

コウタの問いがソーマにより掻き消され、同時にピターは先の状態よりも速く、迫ってきた。

「っ…速い!!?!」

あまりの速さにサクヤは牽制出来ず勢いそのままに翼刃をソーマに振るう。

「クっ…!!!」

なんとか受け止めるソーマだが勢い殺せず少し態勢を崩す。

同時に、ピターは足元に赤雷を発生させ全体攻撃。

これによりソーマは後方へと弾き飛ばす。

「この!!!」

アリサも斬りかかるがそれを下がることで避けるピター。

仕返しに再び翼刃を振るうピター。しかしアリサも距離をとって下がるがピターは赤雷の球を放つ。

その赤雷をやむなくバックラーで防ぐアリサだが防御に不安がバックラーでは防ぎきれずアリサは吹き飛ばされる。

「アリサ!!」

「サクヤさん!!」

サクヤが叫ぶがピターがサクヤに向けて赤雷をはなつ。コウタが叫ぶも間に合わず…

「キヤアアアアアア!!」

「サクヤさん!!この!!」

コウタが銃でピターにダメージを与えるがコウタもサクヤ同様の手口で倒される。

「サクヤさん…コウタ…」

「クソツタレが…!!」

アリサとソーマは赤雷の影響か、体が痺れて動けない。

一方的な展開を覆すディアウス・ピター。

これがこのアラガミの全力。

今までは遊びくらいだったのだ。

そして全力のピターはアリサへと足を進める。

「あ…あ…」

再び訪れた危機的状況。

そして再び恐怖に吞まれそうになるアリサ。

その時…

「止まれ。」

不意に聞こえた声。

その声は第1部隊誰もが聞き覚えがある声だった。

ピターもその声に従っているのか立ち止まっている。

アリサは恐る恐る振り返る。

そこには「彼」がいた。

「り…リーダー…」

「よく保った。あとは任せろ。」

アリサにそう声を掛けるのは彼等の“リーダー”だった。

「弱いもの虐めは楽しいか？」

ピターに近づきながらピターに問う。

当然答えが返ってこない。相手はアラガミだから当然だが。

しかしライが近づくと、ピターが後退する。

まるで蛇に睨まれた蛙の如くピターはライに恐れをなしていた。

「俺は好きだぞ？徹底的に潰すのみな。」

一歩また一歩。ライが近づく。その度に一歩また一歩と後退するピター。

「これはアドバイスだ。撃つていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだ。」

そう言うのと神機を振り上げるライ。

「自分より弱いやつをいたぶったんだ。お前もされる覚悟もあるよな？小山の大将さん？」

話し続けるライ。対してピターは恐怖の限界に達したのか赤雷を放ち、直後に翼刃を振るう。

『その程度か。つまらん。』

しかしその頃にはいつのまにかピターの背中に乗っていた。「これで終わりだ。」

そう呟き、神機の刀身を首の付け根を狙い振るう。

たった一振り。

それでピターの首は跳ね飛んだ。

音も立てずに崩れるピターの胴体。

その胴体に再び神機を刺しこむライ。

直後、ピターの胴体は中から膨張し、数秒もしないうちに…

爆発した。

爆発により血飛沫と肉片が飛来する。

その中に、

“腕輪”と赤い“神機”もあつた。
かくしてピター討伐は終わりを迎えた。

類似点

「リーダー…」

「よかった。目を覚ましたのね。」

アリサとサクヤが安堵の表情を見せる。アリサに関しては泣き顔にも見えるが。

2人が目を向ける先には銀髪の青年。たった1人でピターを倒したことには驚きだが前回のプリティヴィ・マータ戦でも真つ二つという離れ業をしたりといろいろと規格外の我等がリーダーなのでどんな理由でも納得できる。

「やれやれ。」

そんな視線を浴びせられてるとはつゆ知らず、ライは肩をすくめていた。

「呆気ない。仮にもヴァジュラの『帝王』というのに。まあ逃亡ではなく悪あがきを選んだのは評価すべきか。相手が悪すぎたがな。」

「リーダー!!」

1人ブツブツと呟くライを呼ぶ声が。

振り向くとアリサ、コウタ、サクヤがライに駆け寄って来ていた。

だが…

「待て!!」

「え? ソーマ?」

それをソーマが神機で遮るようにしながら駆け寄った3人を制す。

「ソーマ? 何を」

「テメエ…何者だ。」

サクヤの問いに答えることはせずソーマはライを睨みつけ問う。

「何者とは失礼だな。味方の顔を忘れたか?」

「いや忘れてねえよ。だがテメエは違う。それははつきりと分かる。」

「そもそもアイツはペラペラ口が回る奴じゃねえ。ましてや脇腹が血塗れの状態で普通に動き回れるのはありえない。」

確かにライの脇腹は止血はされているものの無理が祟ったのか紅く染まっていた。

「それはほら火事場の馬鹿力というか…」

「言い訳がましい!! テメエが本当に俺たちのリーダーならそんな言い訳はしない。」

「……………」

論破されるライ。だがその表情はつきり焦っているどころか楽しんでいるような笑みを見せていた。

普段から喜怒哀楽の変化が乏しいライからすればありえない反応だった。

「っ…!! まさかお前…」

「残念。」

ソーマが何かに気づいたのか何か問おうとするとそれをライが遮った。

「時間切れだ。」

「何を…」

ライは困った笑みを浮かべながらそう言うどまるで糸が切れた人形のように倒れかかった。

「おい!!」

「リーダー!!」

崩れるように倒れかかるライをソーマが抱き止める。

アリサ達もライに駆け寄るが…

「気を失ってるだけだ。」

「そう…」

「ソーマ。あのリーダーについて何か知ってるのか?」

「サカキのオツサンのところで話す。今はアナグラに戻るぞ。」

「ふむ。なかなか興味深い話だね。」

アナグラに帰投しライを医療班に預けるとサカキの研究室を訪れる第1部隊。

ちなみにシオは自分の部屋で眠っているためこの場に入っていない。

「まさかリーダーの中にシオのお兄さんがいるなんて…」

「君たちゴットイーターは偏食因子が投与された存在だから内にアラガミがいるのはなんら不思議なことではないよ。ただシオが兄と呼ぶアラガミがリーダー君の内にいると言うのがなんとも興味深い。」

「博士。偏食因子のアラガミが意思を持つというのはあり得るんですか?」

「そうだね。ないとは言えないというのが現状だ。現にリーダー君という例が出たからね。」

「でもリーダー君は潜在的感応能力が高い。もしかしたらその感応能力が彼の中のオラクル細胞になんらかの変化を生じさせたとすればあり得ない話でもないのかもしれないね。」

コウタの問いにサカキ博士はそう答える。あくまでも見識でしかないが。

「だけどある意味では新種のアラガミとも言えるかもしれない。『浸蝕』型のアラガミというね。」

「リーダーはこの先大丈夫なのでしょう?」

「今のところは『お兄さん』も協力的だから大丈夫だろう。多分彼としてもリーダー君を失うのは避けたいことだろうからね。」

「とりあえずリーダー君にはこのことを伏せとこう。彼のことだから気づいてるかもしれないが。」

「君たちは今迄と変わらないように接してくれ。それが彼に為になる。」

第1部隊を見送った後、サカキは1人考え込んでいた。

「シオが『特異点』であるのは紛れもない事実だ。故にヨハンより先に保護した。」

「だがシオの兄というのも『特異点』なのか？シオとは別にリーダー君の中で『終末捕食』の起動後の『生命の再分配』の情報を集めている？」

「だからリーダー君には死なれては困る…自身が特異点と完成する為に…」

『もしくは大替品。特異点が何かの拍子に消滅した際と同じ能力を持った類似品…いや、『類似点』とも呼ぶべきか…』

「ともあれ類似点の方は大丈夫だろう。いや…前に彼の健康結果を盗んだ輩がいた。その輩がこのことを知っていたとしたら…」

1人考察を述べるサカキ。

「まあ今は類似点よりは特異点だ。完成してない類似点を『彼等』が欲するのは時期尚早だろう。」

そう結論づけるサカキ。そして…

「2つの特異点…か。世界は『彼等』に味方するのか…はたまた単なる偶然か。」

アーク計画

フエンリル極東支部医務室

そこでライは目を覚ました。

『……』

まだぼんやりとしているのか身体を動かさない。

「なんか数日に1回ペースでここで寝てる気がするな……」

ようやく意識がハッキリとして頭が回り始めたのか、そう呟く。

「さてと……」

ベットから起き上がり降りるライだが足に力が入らないのかうまく立ち上がることができずそこでへたり込む。

「あれ？」

何度立ち上がろうとするも足が震えうまく立てない。まるで生まれたての子鹿のようだ。

何度挑戦してもうまく立ち上がれないライ。仕方ないので足の力が戻るまで床にへたり込んだままにいることにした。

「リーダー？起きてますか？」

そうしていると遮られたカーテン外からアリサの声が。

開けますよ。と一言断りを入れるとカーテンが開く。

当然開けた本人はアリサで彼女の目先には床にへたり込むライの姿。

「リーダー!!？」

「えつと……おはようアリサ。」

「あ、おはようございます。……じゃなくて!!」

「なんでベットから下りてるんですか!!？」

ライの状態に驚いたアリサだが当人であるライは的を外れに挨拶をする。あまりに普段すぎたのでアリサも普通に返事を返してしまっただ。

「いやね。なんか足に力が入らなくてね。」

「当然ですよ。丸一日身動きすることなく眠ってたんですから。」

「でもよかったです。見たところ“リーダー”みたいで。」

心配と安堵を入り交えながらそう言うアリサ。

「とにかく今日までは医務室で大人しくしててください。脇腹の怪我がまだ治ってないですし。」

『脇腹？』

アリサに言われ脇腹に手を当てるライ。確かに包帯が巻かれている感触があった。

「全然気づかなかった。」

「気づかなかったってかなりの大怪我ですよ!?!…私のせいだけど。」

「?まあ痛みがないならいいしたことないだろ。」

「ダメです。肩を貸しますから今日は医務室にいてください。医療班とサクヤさん達には私が伝えますから。」

「……………」

「納得してませんね。ちゃんと医療班から太鼓判をもらわないと任務に出れませんよ?…というか私が許しません。」

「……………わかった。」

「わかってくれたらいいです。」

結局アリサの肩を借りて再びベットに横になったライ。横になったらまた眠気が出てきたのかそのまま眠りについた。

「本当によかった。」

眠りにつくライの顔を見ながらアリサは優しく微笑んだ。

「オニイチャン!!」

「おっと。」

翌日、医療班から太鼓判をもらって退院したライはサカキの研究室を訪れていた。

そして入室早々シオに抱きつかれて少しよろめくライ。しかしシオは気にすることなくライの胸に耳を当てるように抱きついている。「やあ元気そうで何よりだよ。なんか刺されたとは聞いてたけどたい

したことではなさそうだね。」

「どうでしょうね。痛みがないから大丈夫なのか感覚がなくなっているだけなのか。」

2人の様子を見ていたサカキがそう言うがライは肩を竦めながらそう言う。

「痛覚が鈍っているということかい？」

「そこまではわかりません。医療班に採血されたのですが痛みは感じなかったのです。」

「ふむ。」

なにやら考えこむサカキ。ライはそんなサカキを気にすることなく、未だ抱きつくシオに目を向ける。

シオは相変わらずライの胸に耳を当てまるで鼓動の音を聞いているように見える。

だがそんなシオを見るライの口角が歪んだ。

「美味ソウダナ…」

「……!!」

ライが小さく呟くとシオは突然まるで弾かれるようにライから離れた。

「ん?どうしたんだい?」

「イマ…オカンガハシツタ。」

物思いに耽っていたサカキがシオに問いかけるとそう返すシオ。

「悪寒?」

「シオ?」

少しばかりライを警戒するシオ。アナグラに来るまで1人で生きてきた彼女の危機管理能力は侮れない。

「ちよつといいかしら?」

サカキの研究室を出てエントランスに向かっていたライだがちよ
うどライを探していたのかサクヤと出くわした。

そしてそのままサクヤの部屋に連れてこられたライだがサクヤの
部屋には先客がいた。

「あ、リーダー。」

「アリサ？君もサクヤさんに？」

「いえ、私は…」

「アリサは少し私の調べ物に協力してもらったの。」

「そういえば何か調べてましたね。もしかしてリンドウさんの？」

「よくわかったわね。まあとにかくこれを見て。」

そう言うとサクヤはターミナルを開いた。

「これはレポートですか？その他にもいろんなファイルがあるよう
ですが。」

「ええ。どうやらリンドウは誰かの密命でエイジスについて調べて
たようなの。その際に『アーク計画』というのを知ったみたい。」

「アーク計画？エイジス計画ではなく？」

レポートを読み進めていくとこのレポートには『アーク計画』と

『エイジス島潜入』について書かれていた。

「アーク計画…方舟の計画か。」

「次にリストファイル。このリストが何を意味するかはわからないけ
ど私たちも入ってるわ。それとエンジニアや医師にその親族など。」

「それはアーク計画の協力者もしくはアーク計画に必要な人材。それ
かブラックリストといったところでしょうか？」

「そうね。断言はできないけど。」

「そうですね。でも断言するにはエイジス島潜入しかないでしょう。
でもこれだけは言えます。」

「エイジス計画はアーク計画の隠れ蓑に使われている。」

そもそもエイジス計画は存在しないと決まるとは決まらずにライ。こ
れもエイジス島に潜入しなければわからないからだ。

「さて、これからどうするか？それは2人で決めてください。」

「リーダー？」

「あいにく僕は上層部……特に支部長に気に入られている。迂闊には動けない。」

「そうね。貴方はアナグラに残るべきよ。ただ貴方にもリンドウが何をしようとしていたのか知ってほしかったからここに呼んだの。」

「そうですか。じゃあ行くなら僕はこれしか言えないですね。」

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そして必ず生きて帰ってこい。」

リーダーらしくそう命じるライ。だが自身の“終わり”を望んでいる本人が“生”の言葉を使つて激励することがあまりに滑稽に思えたライであつた。

カウントダウン

「シオが逃げ出した？」

「…はい。」

アリサからシオ逃亡を聞いたライ。

「またか。」

「またです。」

「何か変わったこととかあった？」

「えっと…確かエイジス島を見てて行かなきゃって言ったような…」

「行かなきゃ…ねえ。」

それはおそらくエイジス島にある「何か」がシオを呼んだと推測できる。

「サカキ博士はなんか言ってた？」

「特には何も。でも早いうちに保護したいとは思ってます。」

「そっか。わかった。僕もこれから任務だから適当に探してみる。」

「お願いします。」

「ここでいなくなったのか…」

任務であるハガンコンゴウの討伐を達成し、ヘリの迎えが来るまでの間、場所がシオがいなくなったとされる愚か者の空母だったため何か痕跡がないか探すライ。

しかしアリサの話では海に飛び込んだとのことなので痕跡らしいものは見つからない。

「考えられるのはエイジス島…か。」

そう呟きライは建設途中の人工島に見る。

人類最後の理想郷と呼ばれ極東支部のゴットイーターが理想郷の完成を夢見てひたすら戦いの日々を過ごして来たエイジス計画。

しかし先日知った謎のアーク計画。前リーダーのリンドウがエイジス島に潜入しようとしていた事実を考えるとエイジス島は本当に人類の理想郷なのか疑わしい。

「……妹」は完成しつつあるのかもな。」

「やあ。こうして話すのも久しぶりな気もするね。」

任務を終えると支部長室に呼ばれたライ。支部長室にはそ部屋の主であるヨハネスがいた。

「相変わらず君の活躍は耳にしているよ。前リーダーのリンドウ君の仇も取れたこともね。」

「さて、本題に入ろう。先日、エイジス島近郊で特殊なオラクル反応を感知した。君には最重要特務としてこのアラガミを討伐及び無傷でのコア抽出を頼みたい。」

「しかし相手は得体のしれないアラガミ。新種の可能性もある。故にソーマと協力することに当たるように。」

「了解です。」

「期待しているよ。このアラガミのコアを手に入れば、エイジス計画は盤石となる。しかし手に入らなければ我々は苦渋の決断を迫られるだろう。」

「苦渋の決断?」

「ああ。私としてもこの決断は避けたい。どうか頼む。」

ヨハネスの言う苦渋の決断に首を傾げるライ。そして特務なオラクル反応とはシオで間違いないと悟った。

ライを見送ったヨハネスは何者かに連絡をとっていた。

「私だ。状況はどうだ。」

「そうか。お前はエイジス近郊を探れ。その他の場所はこちらで対処する。」

『特異点』の反応がエイジス近郊に見つかって日は浅い。まだ潜伏している可能性があるからな。」

「どうやらエイジス島で働いている者と連絡をとっているようだ。」

「わかつている。だが、不完全品。よりは完成品の方が計画が達成される可能性が高い。…それに、彼を失うことは未来の損失だ。」

「いいか。結果的にお前のおかげで彼は覚醒したかもしれないが金輪際彼に手を出すな。破ればお前の身の保障を白紙にさせてもらう。」

「私も数刻の内にそちらに向かう。食の管理もあるからな。」

「そう伝え、通信を切るヨハネス。」

「遂に…遂に…ここまで来た。」

「アイーシャ。ようやく我々の計画…いや、悲願がなされつつあるよ。」

「ここで特異点を逃すわけにはいかない。彼の為にも…」

「彼は私の意志を継ぐ。後継者に成りうる存在だ。必ず救ってみせる。」

誰も聞くものがない独白。その声は誰にも告げられることもなく消えていった。

シオの脱走、アーク計画、特異点、ヨハネスの言う後継者。

この単語が未だ何を意味するかはまだわからないがこれらが1つの線で結ばれた時、1つの答えがもたらされる。

微かにだが確実にカウンtdownは始まっている。

手紙と選択

「サクヤさん…」

自身の部屋に戻ると扉の前に1枚の手紙。宛先は自身で手紙を書いたのはサクヤだった。

「別にこんなことしなくてもいいのに…」

ライ自身規律に厳しいわけではないので自由行動には寛容である。実際ライ自身特務であるとはいえ単独任務を受けることが多い。よってライ自身強く言えないというのもあるのだが…

「律儀だな。」

なんとなくそう呟きながら手紙を広げる。

内容はリンドウの意思を継いでエイジス島に潜入してアーク計画の真相を調べること。

単独行動の謝罪などだった。

「とりあえずアーク計画に関しては報告待ちだな。」

そもそもライはヨハネスに目を掛けられている。それは言い換えれば監視とも言える。

それがライの行動を制限させている。故に表立っての行動は難しい。

「さて、このことは『彼女』は知っているのだろうか？」

「やっぱり!!1人で行くなんて!!」

「まあ、よくも悪くも命令違反だからね。巻き込まない為の配慮だろう。」

「それでも!!それでも…」

やはりアリスにも一言もなしにエイジス島潜入に向かったらしい。

「…すみませんリーダー。私…」

「止めないよ。多分今なら追いつけるんじゃない?」

「…すみません。行ってきました。」
「行ってらっしゃい。」

「ここにはいないようだ。」
「そうだね。」

翌日、支部長の指示通りライはソーマと共に特殊なコアを持つアラガミの搜索をしていた。

「どこにいるんだろうね。」

「さあな。」

「シオも探さないといけないのにね。」

「…いつまで茶番をするつもりだ。気づいてるんだろ？」

「……………」

「お前は賢い奴だ。あの野郎が血眼になって探しているのがシオだということ。」

「……………だったら？」

「悪いが俺はアイツにシオを渡すつもりはない。」

「じゃあサカキ博士に？」

「アイツもクソ親父と同じだ。もしシオに危害を加えようものなら俺はアイツを奴らの手から逃す。」

そうはつきりと宣言するソーマ。しかし特務には従順に従うのはあまりに皮肉だ。

「お前はどうか？」

「僕？」

「お前はシオをどうするつもりだ？命令通り親父にシオを差し出すか？」

ソーマの問いに考え始めるライ。だが…

「流石に『妹』を犠牲にするつもりはないな。」

「……………!!リーダーじゃねえな。」

「あれ？すぐに気づかれるとは。ああそういえばアンタアラガミを探知できるんだったか。」

「リーダーをどうした？」

「思考の海に流されてるよ。あれは長考コースだな。その隙について表に出てきた。」

あつげらかんに答えるシオの「兄」。

「しかしアンタが妹をそんなに大切に思ってくれているとは。兄冥利に尽きるといえればいいのかね？」

「そんなんじやねえよ。」

「本当に？まあどうでもいいけど。」

「でもアンタはどちらを選ぶ？」

「は？」

突然の選択問題。そして兄の口角が釣り上がる。そして自身を指差しながら言った。

「妹か 宿主か どちらかを犠牲にしないといけない場合アンタはどちらの命を助け捨てる？」

「言つとくけど近い未来の選択だから。」

「なんだと？」

「おっと。それじゃまたな。」

「あ…おい。」

「ん？あ、ごめん。答えが出てない。」

いつのまにか兄からライに変わった。

「いや、いい。」

「どうした？」

「なんでもねえよ。ここにはシオがいない。次行くぞ。」
話を強引に切り、ヘリの下へ向かうソーマ。

不思議に思いつつそのソーマの後を追うライだった。

決別

「まったく!!どこにいるんだ!!」

苛立ちをぶつけるようにソーマは悪態をつく。

シオが姿を眩まして数日、未だシオを見つけられないでいた。

「落ち着け。苛立ってたらなにも見つけられないぞ。」

「チツ…!!」

ライがどうにか論すがソーマは舌打ちをしてさらに奥地に歩き出す。

なぜソーマが苛立っているのかはライにはわからない。だが焦っているように写っていた。

「やっぱり可能性があるのは…」

ライはこれまでソーマとともに愚か者の空母や贖罪の街、煉獄の地下街や鎮魂の廃寺などまわってシオを探したが見つからなかった。

現状ライとソーマが探索できる箇所は全てまわった。残っている箇所はただ1つ。

「エイジス…か」

しかしエイジス島への潜入は厳禁となっている。故にライ達が潜入することはできない。

「仮にシオがエイジスにいるなら運が良ければサクヤさん達と会えるはず…」

サクヤ達がエイジス潜入を目指してからも数日たつ。時間的にはそろそろ報告がある頃合いだろう。

「歯がゆいな…」

現状ライにはどうすることもできない。周りは動いているのに。

それがなぜか不愉快にライは感じた。

同じ頃、サクヤは暗闇の中を歩いていた。

「ここが…エイジス？」

この数日の間、エイジス潜入の計画を練り、リンドウの『置き土産』を使ってどうにかエイジスの内部に潜入できたサクヤ。

だが潜入してみるとあたりは真っ暗でとても人類がこの『箱庭』の中で生きていけるようには思えなかった。

その時、突然照明が点いた。いきなりの光源の発生により咄嗟に目を覆うサクヤ。

同時に男の声が響く。

「まさか君が潜入するとは、リンドウくんはここに潜入する算段も立てていたようだな。」

「支部長!!」

ようやく光になれたのか声の方に目を向けるサクヤ。

そこにはサクヤを見下ろすように佇むヨハネスの姿があった。

「ここまで用意周到だったとはやはり彼も優秀な人種だったのだろう。屠ることになって実に残念だ。」

「やはり貴方が関与してたのね!!」

「まだ特異点が検知されていなかったからね。その状況下でアーク計画が公にされるわけにはいかなかった。故に実に残念だが消させてもらった。」

「そんな理由でよくもリンドウを…!!」

「案ずるな。君も今から彼の下へ召してあげよう。『彼等』には不慮の事故と伝えておくから安心してくれ。」

そう言いヨハネスは合図を送るように手を動かす。

…しかしなにも起きない。

「なに？」

「警護システムなら全て破壊しました。」

サクヤの背後から少女の声。

「アリサ!？」

「勝手に置いていって勝手に死なれたら困ります!!」

振り向けばそこにアリサの姿。

「ふむ。これは驚いた。君も潜入してたとは。」

「よし、ならば君達で『殺し合い』を演じてもらおう。」

たいした驚いた様子もなく淡々とそういうヨハネス。すると一つ人影が姿を現す。

「え？」

「久しぶりだねアリサ。あの時目を覚まさなければこんなことにならなかったのに本当に悪い娘だ。」

「オオグルマ…先生…」

人影の正体はオオグルマだった。行方不明のとなっていたはずのオオグルマがここにいるのはアリサも驚きを隠せない。

「アリサ。君は誰よりも強い。だからそこにいる『アラガミ』を倒そうね。」

「なに。私も協力してあげるよ。」

「なにを言って…」

「アジン」

アリサの言葉を遮るオオグルマ。同時にアリサの身体が硬直する。

「ドウヴァ」

次の言葉でアラガミ（サクヤ）に神機を向ける。

オオグルマは口角を吊り上げ最後の単語を紡ぐ。

「トウリー!!」

アリサはサクヤに神機の引き金を引いた。

放たれた“回復弾”はサクヤを癒す。

「なに!!?」

「残念だけどアリサの洗脳は解けているわ。」

「そういうことです。先生。」

アリサはそう言うときサクヤの隣に立つ。

「オオグルマ先生。貴方には感謝しています。ですが私は私の意思で強くなります。これからサクヤさんやリーダー達と共に…」

「今までありがとうございました。さようなら。」

「まつ…待てアリサ!!こっちに戻ってこい!!」

慌てるオオグルマの声はアリサに届かず、スタングレネードを使ってアリサとサクヤは離脱した。

「面倒をかけてくれる。」

誰も居なくなつたエイジスでヨハネスは悪態をつく。

「そんな…アリサ…」

「案ずるな。計画が遂行されればまた共に歩めよう。」

慰めるようにそう言うヨハネスだがオオグルマの耳には届いてない。

「アイツ…アイツのせいだ…」

「アイツさえいなければ…アイツ…アイツ…」

沸々と怒り…否、憎悪の炎を燃やすオオグルマ。

「殺す…殺してやる…」

一方的な感情で復讐者となつたオオグルマ。

彼を止められるのはもう誰も居ない。

カルネアデスの板

「これがアーク計画の全容よ。」

ターミナル越しに映るサクヤとアリサからエイジス潜入で得た情報を聞くライ。

ターミナルはライの部屋のものでその部屋内にはコウタとソーマの2人もいた。

「チツ…あの野郎が考えそうなことだな。」

「そんな…エイジス計画は元から存在しなかったなんて…」

異なる反応を見せるコウタとソーマ。

「なるほどあのリストはその箱舟に選ばれた人の一覧だったんですね。」

「ええ。本来なら私達も貴方達も助かる側の人間だったってことね。でもおそろくですけど私とアリサはリストから外されたと思うけど。」

「そうでしょうね。それで2人はこれからはどうするつもりです？」

「私達はもう一度エイジスに潜入できないか経路を探すつもりです。」
「ええ。全容を知った以上、このままなにもしないわけにはいかないわ。貴方達は貴方達で決断しなさい。これは誰かに決めてもらうのではなく自分で決めるべき選択だろうから。」

アーク計画の遂行と阻止。この二択の結末は大きく異なる。

故に簡単に決めてはならない。無論長考する時間もあまりないのかも知れないが。

「俺はお前らと違って生まれながらにしてのアラガミだ。そんな俺が新たな世界で生きていけると思うか？」

「…それでも貴方のお父様は箱舟の一員に貴方を組み込んだわ。」

アーク計画というより父親に反抗しているソーマは既に否定派に回っている。しかしヨハネスはアーク計画のリストにソーマの名を入れたのは父の思いなのかそれとも…

「とにかく貴方達がどんな選択をしても私達は恨んだりしないわ。」

「もしも私達の邪魔をしに来たらその時は全力で相手をしますけどね。」

「アリサ!!」

「じゃあその時はこちらも遠慮なく相手してあげるよ。」

「じよ…冗談ですよ。さすがにリーダーを敵にまわすのは怖いですし…」

ライの布告に狼狽するアリサ。確かに特殊な力を秘めたライを敵にまわすのは末恐ろしいだろうが。

「多分通信はもうできないと思うわ。それじゃあね。」

通信が切れる。同時にソーマはライの部屋を出て行く。

「ソーマ。」

「俺はあの野郎が造った箱舟に乗るつもりはない。」

ライが呼び止めるもソーマはそう一言言い出て行った。

残されたのはライとコウタだけ。

「俺は…」

暫しの沈黙のあと、コウタは口を開く。

「俺は…アーク計画にのるよ。」

「コウタ。」

「俺ってバカだからさ。難しいことはよくわからないけどアーク計画が正しい計画じゃないことは分かっているつもりだよ。」

「でもこの計画に乗れば俺の母ちゃんと妹が助かるんだろ?」

「俺がゴットライターになったのも母ちゃんと妹が安心して暮らせる場所を作りたいからだだったからでさ。だからエイジス計画の話聞いた時はどんなことも頑張ろうと思ったんだ。」

「そのエイジス計画が最初からなかったのはショックだけどアーク計画に乗ればアラガミもいなくなるし母ちゃんと妹も安心して暮らせる世界になるんだろ?」

「だったら…俺…アーク計画に乗るよ。」

コウタは自分が言うほど頭が悪くはない。

自分の力量と他人の力量を把握できると言うことは自分の出来ることとできないことを正確に判別できると言うことでもある。

少しばかり自分の力量を過小評価しているところがあるが…

「そうか。」

「…止めないのかよ？」

「君が決めたことに僕が口出しする義理はないよ。それがコウタの道と言うのならその道を行く進むといい。」

コウタも部屋を出て行き一人になったライ。

ライ自身はまだ答えを見出してはいなかった。

アーク計画：アラガミが食い合うことで最後に到達するとされるアラガミ『ノウア』が特異点を得た時に起こる『終末捕食』により地球上の全てを無（リセット）しその後特異点の情報を元に生命の再分配が成される。

その際一定数の人類を宇宙へ逃がし終末捕食による生命の再分配が終了した時に地球に帰還させるという壮大な計画。

終末捕食が起きれば当然人類もアラガミも例外なく無に戻るだろう。それは多大な犠牲ともいえる。

しかし宇宙に逃げた人類はアラガミもいない理想郷を手に入る可能性がある。

多大な犠牲を払って少人数の人を救うのは善か悪か…

しばらく部屋にいたライだがとある人物に呼ばれた。

その人物が指定したのは「支部長室」。

「失礼します。」

「やあ待っていたよ。」

支部長室に入るとこの部屋の「主」がいた。

「足を運んでもらってすまない。」

「気にしないでください。任務も終えて暇を持て余していましたので。」

「…なにか考え事かな？いつもより表情が険しく見えるが。」

「そんなところですか。それで僕を呼び出した案件は？」

「なに君にアーク計画に“協力”してほしいと頼むつもりだったか？この事情は既に聞いてるのだろう？」

「ええ。アーク計画の全容も発動の際の多大な犠牲もなにもかも聞いています。」

「そうか。なら話は早い。君にアーク計画に協力してほしい。既に箱舟には君の席は用意されている。」

「エイジス計画には限界がある。だがアーク計画にはその問題は無い。どちらが最適かは明白だと思うが？」

「そうですね。貴方の言う通りエイジス計画には未来は“ない”。それには賛同します。」

アラガミは日に日にその種を増やしている。それは新たな偏食因子が生まれているともいえる。

仮にエイジスが完成してもいずれ新種のアラガミによって“壁”を破られる。それは完成して10年後か100年後かはたまた1週間後か。

「やはり君も気づいていたか。ならばアーク計画も…」

「しかしアーク計画も問題は山積みですよ。正確には終末捕食後ですが。」

「仮に多大な犠牲を払ってリセットした地球には生き残った人類が生活できるでしょうか？酸素や水がなければ人類は生きていけない。さらに生まれ変わった大地に食物は育つのか。」

新たに生まれた世界での問題を上げていくライ。それを聞くヨハネスは口角を釣り上げる。

「やはり君は賢い。その先のことを見据えているとはね。」

「だがそれは人類が“神”から授かった叡智がある。その叡智を結集すればきつと君の言った問題を解決できると信じている。アラガミを倒すためにゴットイーターを生み出したようにね。」

「だがそれには多くの叡智：知恵が必要だ。君はその知恵を持っている優秀な存在だ。だからこそ君は私と共に新世界に向かうべきだ。」
「十分身勝手な言い分ですね。選ばれし人類とは言いかえれば貴方にとつて、都合がいい。もしくは操るための「人質」のように聞こえますが。」

「そうかもしれないな。だが君のその客観的にかつ俯瞰して物事をみる君の思考力。それは失ってはいけないものだ。」

ライは別にアーク計画を否定しているわけではない。ただ単に俯瞰して物事を見てそれで気づいたことを口に出している。

「この壁画を見てごらん。」

ヨハネスはそう言い飾っている壁画を指差す。

絵は嵐のような大洪水に一枚の板が描かれていた。

「これは『カルネアデスの板』と言うものでね。ギリシヤの哲学者であるカルネアデスがある問いを生んだ。」

「この板に捕まれるのは1人だけ、だがその板を見つけたのは2人。2人が掴まれば板は沈没してしまう。」

「簡単に言えば自分の命のために他人を蹴落とすのは悪か？君はどう思う？」

問われ暫し考えるライ。

「逆なのかもしれません」

「なに？」

「要はどちらが助かるかと考えるのではなくどちらが「苦しむ」かです。すね。」

「死ぬために短い苦しみを味わうか、生きるために長い苦しみを味わうか。」

「ほう。」

一見的外れに見えるライの返しにヨハネスは理にかなっているとも思えた。

死んでしまえば明日はないが短い苦しみですむが生きればこれからも苦しむことが訪れる。

助かる側のことしか考えていなかったヨハネスにとってライの返

答は目から鱗ものだった。

「失礼します。」

支部長室を出るライ。アーク計画の参加は保留とした。

「死んで楽になるか、生きて苦しみ続けるか…」

カルネアデスの板について思想した時、ライの脳裏にある『光景』が映った。

一見焼け野原のように見え、その地に横たわった人の山。

そして自身の手にも『血に染まった少女』がいた。

「っ……!!」

気づくといつもの廊下に戻っていた。

「今のは…一体…」

脳裏の光景がなんなのか今のライには分からない。だがライの手には『誰か』を抱えた感触が確かにあった。

今のライは知らない。

かつての自分がカルネアデスの板に掴まったことを…

別れの歌

アーク計画は数日もしないうちにアナグラ全体に公にされた。

エイジス計画を隠れ蓑として水面下で行われていたアーク計画。

特にエイジス計画のために日々アラガミと戦い続けたゴツトイーター達は複雑な思いだっただろう。

だがアーク計画については賛否両論があるようでゴツトイーター達にも賛成派と反対派に分かれている。

だが賛否があれどゴツトイーターのやることは変わらない。

今日も今日とて彼等はアラガミ討伐に出る。

そのゴツトイーターであるライとソーマも変わらずアラガミの討伐にシオの捜索に出ていた。

「アーク計画が公になった以上、シオは見つからない方がいい気がしてきた。」

「それでも時間の先延ばしにしなければならない。」

愚か者の空母で話しあうライとソーマ。

「サカキ博士はアーク計画には否定的だったけど…」

「アイツもクソ親父もかわらねえよ。どちらもシオを使って何かしようとしているのはわかっているからな。」

そう言いライの前を歩くソーマ。

そんなソーマを見つめるライの耳に微かな声が聞こえた。

耳を澄ますライ。

「これは…歌?」

耳を澄ますとその声が歌っているように聞こえたライ。

だがその歌声を遮るようにアラガミの咆哮が聞こえた。

「煩いな…」

微かに聞こえるメロディーを遮られ、苛立ちを覚えるライ。

「失せろ。」

神機を構え、咆哮したアラガミに挑む。しかしライの姿には恐怖心といった負の感情はなかった。

「いた。」

アラガミ討伐を終え、歌声の出所に向かうライとソーマ。

そこにエイジス島を見ながら鼻歌を歌う白い少女。

「シオ。」

「ライ!!ソーマ!!」

「あれ?お兄ちゃんじゃないんだ。」

「家出も飽きただろ?帰るぞ。」

「ワカツタ!!ア、ソーマ聞いていいか?」

『なんだ?』

「ソーマのからおそわった歌。歌うと悲しくてなる。なんでだ?」

「その歌は別れの歌だからな。」

「別れの歌?」

「シオ、サヨナラの歌ということだよ。」

「サヨナラ?なんかやだな。」

「そうだね。でも約束すればいいんだよ。」

「ヤクソク?」

「今日はお別れしてもまた明日会いに来るって約束すればいいんだよ。」

そう言うライはシオに手を伸ばす。その時だった。

「う…」

「シオ!？」

突如として身体が光り出し苦しみますシオ。

そして突如としてその場に倒れた。

「シオ!!」

「大丈夫。気を失ってるだけだ。」

「っ!!とにかくシオをアナグラに戻るぞ!!」

とりあえずシオの無事を確認したライとソーマはアナグラに帰還した。

翌日…

ライは自身の部屋で過ごしていると一瞬だが暗闇になった。

明かりがつくと次は通信が入る。

「どうした。ソーマ。」

「リーダー!!お前今どこにいる!？」

「自分の部屋だけど…」

「なら至急合流してくれ!!シオが親父に連れ去られた!!」

信念とエゴ

ソーマから連絡を受けたライは至急ソーマとサカキと合流した。
「まさかここまで強引な手を使って来るとはね。」

「クソっ…!!」

「ソーマ。落ち着いて。シオが支部長にバレるのはある意味では時間の問題だったろうし…」

いくらサカキの研究室がアナグラでも独立していても場所は敵の居城内にある。見つかるのも時間の問題だっただろう。

「しかしアナグラ全体を混乱に陥れてまで強引な手段でシオを連れ去るとは…さすがに私の想像を超えてきたよ。」

サカキの言う通り、アナグラ内はアラガミの侵入を告げる放送が流れている。

「とにかくシオを取り戻すぞ!!」

「うん。エイジスにいるだろうからエイジスの侵入経路を探そう。」

「すまないが頼んだよ。」

同時刻

アリサとサクヤはアナグラ周辺に戻って来ていた。

「何か騒がしいですね。」

「そうね。それになんだか人も少ないようにみえるわ。おかげでここまで誰にも見つかることなく戻ってこられたけど。」

「エイジスの潜入はできませんでしたからね。」

ライ達に通信した後もエイジスへの再潜入を試みたサクヤ達だが侵入経路を見つけないことができなかった。そして一度アナグラに戻ってきたのだ。

「きつとアナグラ内にエイジスに通じる道があるはずよ。」

「そうですね。」

これは運命か。

この事態に第1部隊が集まりつつあるのは。しかも目的に差異があれどライとソーマ、アリサとサクヤが共通の目的（エイジス潜入）に行き着くとは。

「ダメだ。みつからねえ。」

「支部長室から繋がっていると思っただけで隈なく探したけどこちらも収穫はなかった。」

一方でライとソーマは別れてエイジス潜入の糸口を探っていたがこちらも収穫はなかった。

「クソっ!!このままじゃシオが…!!」

「シオがどうかしたの?」

ソーマが悪態をつくとそれに反応する声が。

「アリサ、サクヤさん。」

「何があったの?警報がなっているしかなり騒然としてるけど。」

「シオが支部長に連れていかれたんです。どうやらシオがアーク計画に必要なだったみたいで。」

「え?それって…」

「そういうことだ。」

ソーマの一言でアリサ達は理解した。

アーク計画の準備が整ったということ。

「…多分あの通路ならエイジスに侵入できると思う。」

「コウタ。」

そういうのはアーク計画の全容を聞いてからしばらく休暇をとっていたコウタだった。

「貴方…アーク計画に賛同したんじゃない?」

「……………」

「ううん。戻ってきてくれてありがとう。」

「時間が惜しい。案内してくれ。」

「うん。こっちだよ!」

ライに促されコウタがエイジスへの潜入経路に案内するくらい。

ともかく第1部隊が久方ぶりに集結した。

「ロックがかかっている。前は入れたのに。」

「コウタ。貴方なんでここがエイジスに繋がってるってわかったんです?」

「前にサカキ博士の授業でエイジスについて聞いた時にエイジス内の移住区がどんなのか気になってき。その道を探していた時に見つけたんだ。」

「貴方：授業中ずっと寝てませんでしたか?」

「アリサ。今はそれどころじゃないでしょ。」

「コウタ。ロックは解除できそう?」

「無理だよ。そもそもこういうのはリーダーの方が得意そうだろう?」

コウタに連れてこられた場所に来たのはいいもののロックがかかっているようだ。

「いつそ飛び込むか?」

「下手すれば死ぬわよ。」

「なんだお前たち。まだ残っていたのか。」

「ツバキ教官。」

立ち往生になっていた第1部隊にツバキが声を掛ける。

「今まで姿が見えませんでした。」

「少し本部にな。それでさっき戻ってきたのだが離れているうちに自体がかなり動いたようだな。」

「そのロックは私なら解除できる。だがいいのか?」

そう言うツバキはまるで試すように問う。

「アーク計画は別段悪い計画ではない。多大な犠牲を払うことにはなるがそれでも救われる命はある。終末捕食によってアラガミが絶滅できる可能性もあるしな。」

「だがお前たちがアーク計画を阻止すればそれがどういうことかはわかるな。」

「試すように問うツバキ。」

アーク計画によって千の人類は救える。千の人類が新たな新天地で生きることができる。

だが万の人類はアラガミとともに死滅する。

しかし全ての人類を救うことはできない。神の所業でなければ

アーク計画にしても用意した宇宙船に乗り込めるのは千人が限界だったからに過ぎない。または宇宙船の燃料に限界があるからだ。

「別に難しいことではないですよ。」

「リーダー?」

「ほう。」

ツバキの問いに答えたのはライだった。

「支部長はアーク計画が正しいから行動したに過ぎません。僕たちは僕たちが正しいと思うことに行動する。それだけのことです。たとえそれがエゴだとしても。」

「だがアーク計画を阻止すれば…」

「行動に責任が伴うのは当然ですよ。」

「リーダー…」

「そうね。」

「そうか。」

難なく答えるライにツバキは笑みを見せる。

「行ってこい。お前たちの信じる信念を貫いてこい。たとえばそれがエゴだとしても貫き通せばそれも立派な信念だ。」

「はい!!」

ツバキの激励を受けロックを解除されたエレベーターに乗り込む
第1部隊。

正義と悪は信念の違いとも言える。

自身の信念が正しいと思う限りそれは正義だろう。

対して相容れない信念も前にすればそれは悪だ。

正義と悪は表裏一体。そして人類は相対する信念を受け入れられる程利口ではなく完成された存在ではない。

しかしライとヨハネスは例外だろう。

アーク計画の問題点を突きつけたライはアーク計画を全て否定したわけではない。それでも阻止することで動いた。

対するヨハネスはそれでもアーク計画を強行した。

似た者同士で似て非なる2人。

この2人の信念（意地）の張り合いが始まる。

神喰らう反逆者

ツバキの導きもあり遂にエイジスに潜入した第1部隊。

「ここが…エイジス…」

「ようこそ。この世の終わりと始まりを告げる聖域へ。」

第1部隊の誰かの呟きを掻き消すようにまるでライ達第1部隊を迎い入れる声が響く。

声の先にはまるで逆さまに祈りを捧げる女性の巨像とその隣に金髪の男が第1部隊を見下ろすように高みにいた。

「支部長!!」

「ほう。君たちも合流してたとは。コウタ君はアーク計画に賛同した筈だが？」

「っ……」

「コウタは自分の意思でこちらにいます。彼の導きがなければ僕たちはここに辿り着けなかった。」

そう答えるのはアリサでもサクヤでもコウタでもなくライだった。

「残念だよ。君なら私の思想を理解してくれると思ったのだがね。」

「僕はアーク計画を否定はしてないですよ。ただ単に時期尚早なのじゃないかと伝えた筈ですが？」

「そんなことはどうでもいい。シオを解放しろ!!」

今まで黙っていたソーマが突然叫ぶ。

そのシオはまるで磔にされてるように虚像に張り付いた状態で気を失っていた。

「ソーマ。どうやらこのアラガミとかなり親密になっていたようだな。だがそれは愚かだぞ息子よ。」

「黙れ!!俺はお前を一度として父親と思ったことはない!!」

ソーマとヨハネスの親子とも言えない会話。

この光景にライは何故か『既視感』を覚えた。

「だがいいだろう。特異点が手に入った以上、外側（抜け殻）など必要ない。」

そう言うとシオは宙から落ちる。

ソーマが走ってキャッチしようとするが一步及ばずシオは頭から地面に叩きつけられた。

「さて、いつまで隠れているつもりだ。ペイラー!!」

ソーマに興味を失ったのかヨハネスは突如としてそう叫ぶ。

「ここにいるよヨハン。」

同時に第1部隊の後ろから男の声。

そこにはサカキの姿があった。

「ペイラー。今回は私の…いや私“達”の勝ちだ。」

「ああ。そのようだ。」

「博士。どう言うことですか!?!」

「すまない。私は君たちを利用してしまった。」

そこでサカキは語りた出す。

サカキは特異点(シオ)を人に近づけて終末捕食を寸前で食い止めようとしていた。

シオに善悪の判別を覚えさせ終末捕食の発動の瞬間を遅延させようとしたといえれば正しいか。

そのため第1部隊とシオと交流させてきたのだ。

しかし人類は不完全な存在で愚かな生き物でもある。その発動の遅延もいずれ破られていたことだろう。

「ペイラー。君は昔から理想主義者だった。君の思想は問題の先送りにはかならない。」

「エイジス計画だってそうだ。いずれアラガミによりエイジスは壊される。それはいつかわからないが終わりのカウントダウンは存在する。」

「だがアーク計画は違う!!多くの人類は終末捕食で死に瀕するだろうが救われた1000の人類はアラガミの恐怖にいると怯えることなく、新世界で新たな文明を築き再び世界の君主としてたつだろう!!」

まるで謳いあげるように演説するようにアーク計画の正当性を語るヨハネス。

「君は悲観主義者だよ。しかし終末捕食は理論に過ぎない。その理論も間違っているかもしれない。君はマーナガラム計画の時と同様、訳

のわからないものをわからないまま発動しようとしている。」

「それでも少数の人類は救われる。」

「……もう無駄のようだね。」

そう呟くとサカキは踵を返す。

「人が神になるか、神が人になるか、興味深い問いだったけど今回は負けを認めるよ。」

「あとは君たちに託すでしょう。人類最後の守護者、神を喰らう者達よ。」

「君たちにもアーク計画発動を阻止させるわけにはいかない。邪魔をするなら容赦無く駆除する。この『アルダノーヴァ』で!!」

突然現れたアラガミに乗り込んだヨハネス。

「これはノヴァの成長の副産物で生まれた存在だがノヴァの偏食因子も取り入れたアラガミだ。」

「ちようどいい。」

長々と話すヨハネスを遮るように呟くライ。

「支部長。貴方がアラガミに乗り込んでくれて感謝する。」

「なに？」

「アラガミなら手加減することなく倒せる。僕たちはゴットイーター、神に仇なす反逆者だ。…故に。」

神機を構え不敵に笑みを見せライは言い放った。

「僕たちは貴方（神）に抗い続ける。」

弱さと亜種

「サクヤさんとコウタ、ソーマはデカブツを!!アリスは僕と女型をやるよ!!」

即座に指示を出しアルダノーヴァに挑むライ達第1部隊。

ライの指示を聞きサクヤとコウタは各自射線を確認するため移動し、ライとソーマは各標的に走る。

アリスはライ達の援護できる距離を保ちながら意識は女型に向ける。

「指示が早い。しかも的確。だがマニュアル通りだな。」

「戦ったこともねえくせに知ったような口をほざくんじゃねえ!!」

アルダノーヴァが発せられるヨハネスの声。しかしソーマはそう叫びながら神機を振りおろす。

「無駄だ。」

だが振り下ろされた神機の刀身は手ごたえを感じることなくアルダノーヴァから弾かれた。

「なに!？」

「言ったはずだ。アルダノーヴァはノヴァの成育の副産物でできたアラガミ。故に最もノヴァに近いアラガミである。」

「それって…」

ノヴァはあらゆるアラガミの偏食因子の集合体。アラガミ装甲壁もノヴァと似た原理であらゆるアラガミの偏食因子を混ぜてアラガミに捕食意欲を無くさせて身を守るもの。

要するにアルダノーヴァは強固の防御力を要している。

「君たちの攻撃は通じない。よって私が負けることはない。」

「決めつけはよくないですよ。」

堂々と自身の勝利を確信するヨハネスにライはそう言う。

現に女型の方は切り傷があちこちに見られる。

「ダメージが少ないなら攻撃の手数を増やせばいいだけだ。」

「なるほど。しかし攻撃を連続するなら相応のスタミナを消費する。遠距離神機も弾切れを起こせばその間戦力が下がるか?」

「試してみますか？」

「……いいだろう。君は優秀だがいささか生意気のような。私が君の性根を正そう。」

「それはこちらのセリフだ。」

いくら高い防御力を持っていても攻撃が通じていないわけではない。要は多少の時間はかかるが倒せない敵ではないとも言える。

とはいえ消耗が激しいのは第1部隊の方だろう。

戦いは続き、第1部隊に疲労の色が濃くなる。

アルダノーヴァのオラクルによる遠距離攻撃を避けるため走り回り、また体当たりを避けるために走り回り、巨神の叩きつけるような攻撃に衝撃から免れるために走り回る。

とわいえヨハネスの駆るアルダノーヴァも無傷とはいかず激しく損傷していた。

アルダノーヴァの弱点は大振りで攻撃をしてると背後が無防備になること。

そこを突かれた時に銃弾、時に捕食で少ないダメージと言えど蓄積すれば大きなダメージに繋がる。

「流星は極東支部最強。まさかここまで食い下がるとは。」

「だが君たちでは私には勝てん。」

「勝手なことを抜かすんじゃないやねえ!!」

「ソーマ!!」

挑発にも聞こえる言葉にソーマは反発し再度攻め込む。

しかし、アクシデントが起こった。

「クツ…」

「ソーマ!?!」

「スタミナ切れか。息子よ。お前は直情的過ぎる。それに反応も遅い。だから大事な時に愚かなミスをする。……エリックが喰われた

時みたいにな。」

足下から崩れるように膝をつくソーマにそう言いすてるヨハネス。

「黙れ!!」

「虚勢をはるな。それに事実だ。お前は自身の能力を生かせず何人ものゴツトイーターがアラガミにやられたと思っっている?」

「っ……」

ソーマが死神という悪名を得た所以。それはソーマと組んだゴツトイーターが次々とアラガミに殺されたのが所以であり一部の者はリンドウも死神の被害者とみるものも少なくない。

「お前が自身の能力を活かせたら多くのゴツトイーターが死ぬことはなかった。」

「黙りやがれ!!」

激昂したソーマは飛び上がり神機を振り下ろす。

だが女型がソーマに立ち塞がる。

「っ……!!」

何故かソーマはそこで怯み、結局そのまま地に着地した。

「その躊躇だ。それがお前の弱さだ。その弱さが多くのゴツトイーターを死に追いやった。」

「なにがお前を躊躇させるのか。やはりこのアラガミか?」

「大切なものを失えば人は変わる。私もそうだった。」

「ならば私がその弱さを断とう。」

そう言い横たわるシオに拳を振り下ろすアルダノーヴァ。

「シオ!!」

ソーマが叫ぶも拳は止まらず、シオに振り下ろされた。

……筈だった。

振り下ろした先にはシオの姿はなかった。

「……なんだと?」

「これ以上、〃妹〃を虐めるのはやめてもらおうか?」

不意にアルダノーヴァの背後から声がかかる。

そこにはシオを抱えたライの姿。

「さつきから聞いてたらくだらないことほごきやがって。」

シオを安全なところに下ろしてアルダノーヴァを睨みつけるライ。
その眼は金色に染まっていた。

「なるほど。報告にあったリーダー君の中に巣食う特異点の亜種か。」

「時間がないようだしさっさと終わらせる。」

「自意識過剰だな。」

「お前には言われたくない。」

売り言葉に買い言葉のように神機を構えるライ。

そして尋常じゃない速さでアルダノーヴァに斬りかかった。

可能性

「やっぱ硬いな。」

「グツ…」

アルダノーヴァに乗るヨハネスから苦悶の声が上がる。

シオの兄を名乗るアラガミに乗っ取られたライの猛攻は着実に、そして確実にアルダノーヴァを追い詰めていた。

ゴットイーターとはいえ尋常じゃない瞬発力を発揮するライに翻弄されさらにアラガミの力が加わったのか振り下ろされる神機の一撃が強力になっているのが要因だろうか。

「クツ…だがその動きは彼の肉体に大きく負担をかけているの筈だ。」
「だろうね。多分しばらくは筋肉痛に悩まされるんじゃないか？宿主がだけど。」

「まあ今更だろ。宿主様はとつくの昔に『壊れ狂って』いるし。」
「なんだと？」

「それより体力は戻っただろ？いい加減戦線復帰してよ。宿主様の仲間達。」

ヨハネスの問いに答えることなくライはソーマ達に問いかける。
「言われなくとも…」

ソーマの返事に呼応するようにアリサ達も各々の神機を構える。
「戦意は上々。これなら大丈夫か。」

歪むような笑みを見せるライ。本来のライが見せることがない表情がこの場にいる者たちに今のライが別人だということを思い知らせる。

「さて、時間もないことだし、手っ取り早く済まそうか。…今ならまだ間に合うし。」

「愚かな。何度も言うがこのアルダノーヴァには君たちでは倒せない。終末捕食もじきに起きる。戦う前からすでに積んでいるのだよ。」

「そうだな。確かに積んでるかもしれない。」

「だがそれは誰が決めた？」

「…なんだと？」

「可能性は確かに低いかもしれない。無駄な努力かもしれない。」

「だが意味がないとは限らない。」

「人は…人類は可能性を求め続ける生き物だ。アンタもその可能性を信じた結果ゴットイーターを生み出した。」

「まあ愛する妻を失った挙句こんなバケモノに変えてしまったんだけどね。」

「っ…貴様!!」

まるで挑発するようにそして嘲笑うように話すライに頭に血がのぼるヨハネス。

「よそ見してるんじゃないわよ!!」

「グッ…」

突然の銃撃がアルダノーヴァを襲う。

ライが挑発している隙にサクヤとコウタがアルダノーヴァの背後に移動していたのだ。

「小癪な…!!」

すかさず女型がサクヤ達の方に向かうがそれをアリサが立ちはだかる。

「ク…洗脳人形風情が!!」

「確かに私は貴方やオオグルマ先生の操り人形でした。いろんなことを刷り込まれて勘違いした誰よりも弱い子供でした。」

「でも私は変わった。アナグラの人たち。第1部隊の人達と出会えて私は本当の意味でゴットイーターになりました。」

「ゴットイーターは人類最後の守護者。ならば多くの人類を滅ぼすアーク計画を認めるわけにはいきません。だからアーク計画を認めるわけにはいかないんです!」

「俺も一度はアーク計画を認めただけど、今ならこの計画がおかしいのがわかるよ。」

アリサの発言に続くように次はコウタが口を開く。

「俺はバカだし弱いから人類が安心して暮らせる世界もいづれ誰かが作ってくれると思ってた。俺の家族が安心して暮らせる世界が作ら

れるなら俺はどんなことでも手伝おうと思った。」

「でも違った。母さんと妹が教えてくれたんだ。母さん達が願ったのは家族で普通の日常を過ごすことだったんだ。確かにアラガミのいない世界もほしいけど母さん達はそれ以上に家族として普通の日常を過ごしたかったんだって。」

「愚かな。その日常も必ず終わりがくる。この終わった世界では未来も希望もないのだ!!」

アリサとコウタの本心を聞いてもヨハネスはそれを否定する。

「それが貴方の限界ですよ。」

そういうのはライだった。しかし声色はいつもの落ち着いたもの。どうやらいつものライに戻ったようだ。

「人類は未来を求める生き物だ。今日が駄目でも明日、明日よりも明日、その先の未来にはたくさん可能性がある。」

「貴方はその可能性を否定し、逃げ出そうとしている。貴方はこの世界の存続を諦めた。だけど貴方が諦めただけで他の人達は諦めてない。」

「ならばこの世界にも多くの可能性を持っている。それを否定することとは貴方にもできないはずだ。」

「なにを言おうとアーク計画は始動し終末捕食は発動する。もうなにをしようがもうこの世界はおしまいだ。」

「なら僕は…僕たちはその終わりに反逆する。言ったはずだ。我々はゴットイーター。神に抗う反逆者だ!!」

人類史において神は崇拜する存在。その崇高な存在に仇なすことは反逆に他ならない。

「話にならない。君は利口だと思ったがここまで愚かだったとはな。いだろう一思いに終わらせてやろう。この私の手で!!」

女型を呼び戻し、二体でライに迫るアルダノーヴァ。だがライは恐れない。

「終わらせるのはこちらだ。バケモノ。」

一瞬、辺り一帯が閃光に包まれた。

「なっ!!?スタングレネードだど!?!」

閃光の正体はスタングレネード。アラガミの動きを一時的に封じるアイテムだ。

そしてその一瞬は極東最強のゴットイーターたちには十分だった。

「アリサ!!」

「はい!!」

サクヤとコウタが弾幕を張りアリサはアルダノーヴァの真下から撃ちまくる。

「この程度の攻撃が効くわけが…!!」

「いいや。終わりだ。」

ライの言葉の後、女型の断末魔の叫びが響いた。

閃光が晴れる。女型は肩から斬り裂かれていた。

「アイーシャ!!」

「余所見してんじやねえよ」

ヨハネスの乗る男神の目の前にはソーマが大剣を振り上げていた。

「終わりだ。クソ親父!!」

力強く勢いよく振り下ろされた大剣の一撃はアルダノーヴァの強固の防御を突破し、その肉を切り裂いた。

また明日

崩れ落ちるように地に伏すアルダノーヴァ。

「バカな…この私が…このような愚か者共に…」

「フツフフ…だがアーク計画は…終末捕食は止まらない。貴様等には負けたがこの勝負は私の勝ちだ。」

息も絶え絶えながら勝利を確信するヨハネス。

それと同時にエイジスが大きく揺れた。

「地震?！」

「いや…これは…」

「終末捕食が始まるのか…」

終末捕食は世界規模の浄化システムのようなもの。それならばこの揺れも終末捕食と関連あるものと言えるだろう。

「まだよ!!まだ何かできることがあるはずよ…」

「いや、この私も断言しよう。無理です。終末捕食はもう止めることはできない。」

サクヤの言葉を両断したのは戦いの中身を潜めていたサカキだった。

「その通り…もう不可能だ。唯一君たちにできるのは…残った宇宙船で宇宙に行くことだろう。…今ならまだ間に合う。」

「支部長。貴方は矛盾している。」

「…なに?！」

「貴方は僕達を敵とみなしながら何故か僕達を生かそうとする。元々方舟の船員に選ばれていたとはいえ、貴方と計画に反抗したにも関わらずに。」

「それに特に僕には執着してるようにもみえた。いくら極東初の新型ゴットイーターといってもアナグラ外から来た得体の知れない人間に博識な貴方が執着するのは何か理由があるのでは?！」

「いずれにせよ貴方は助からない。それなら死ぬ前に答えてくれませんか?！」

「フツ…単純なことだ。君が優秀だったからさ。」

「だが君は他の優秀な者達と比較しても群を抜いて優秀な存在だった。私とペイラーにはまだ及ばないもののその若さなら必ず私達を超える。」

「そして終末捕食の先に広がる新世界には君のような若い世代が必要だ。生き残った人類を率いる先導者として。」

「…なるほど、勝手に後継者認定してたのか。」

何故かヨハネスから高評価されていた理由を知り、嘆息するライ。

「随分と買いかぶられていたみたいですね。そんな大層な人間じゃないですよ。」

「ちんたら話してる前にこの揺れをどうにかすることに頭を使いやがれ!!」

「あ、ごめん。忘れてた。」

ソーマの指摘にそう返すライ。

現在進行形で激しくなる終末捕食の揺れ。できることは既にないとサカキが断言した。

唯一の方法はヨハネスの言う通り方舟に搭乗し脱出するくらいだろうか。

全員が諦めの境地に達したその時、

ふとノヴァに点っていた金色の斑点がエメラルドのような色に変わった。

揺れは収まり、同時に「聞こえるはずのない声」が聞こえた。

「ありがとう、みんなありがとう」

「シオ?」

「まさかノヴァと一体化しても人としての意識が残っているなんて…」

コウタとサカキが別々に驚きの声をあげる。

「シオにまかせて、シオならみんなをたすけられるから。」

「おそらにある、しろいのがなんかおもちのようでおいしそうだからそっちにいったらみんなたすけられるよね」

シオの言葉通り徐々にだがノヴァは上昇している。

「まさかノヴァごと自身を月に持っていくつもりか？」

「そんなのダメだ!!」

「シオちゃんやめて!!」

サカキがシオがやるうとしてしている人類救済策を導きだす。それを
知りコウタとアリサは悲痛の叫びを上げる。

だがノヴァ（シオ）が月に行けば終末捕食は地球上ではなく月で行
われ、結果的に地球は救われる。

ただし、シオという少女（アラガミ）を犠牲にして。

本来、人類にとってアラガミは怨敵であり、天敵だ。

普通の人類やゴットイーターならシオがしようとしていることを
止めることはしない。

だが第1部隊はシオというアラガミと深く心を通わせてしまった。

それは友愛や家族愛のようなものかもしれない。

「でも…やらなきゃ。」

「ク…」

「シオちゃん。」

万策は尽きた。人類がどうにかできる事態ではない。

「もうじかんがない。そのまえにおねがいがある。」

「そこのおわかれしたがないあたしを…」

「……たべて」

「ソーマ。おいしくなかったらごめんね。」

シオからの最後となるお願い。

それはノヴァが月に旅立つトリガーを引くこと。

その役割をシオが託したのは…

「チツ…勝手なこと決めやがって…」

ソーマだった。

最も人に近いアラガミと最もアラガミに近い人間。

似て非なる存在のこの2人。

故に他の物とは別の絆で繋がった2人とも言える。

「できるから。」

「あ？」

「できないなら…僕がやる。」

そういうのはライだった。

「これでもリーダーだ。ソーマができないなら部隊長として僕がシオを処理する。」

「それにシオ。前に教えただろ？」

「お別れが寂しいなら約束しようかね。だから約束だ。また『明日』必ず明日（未来）に会いに行く。どんなに時間がかかっても必ず明日君に会いに行く。皆と一緒に絶対にだ。」

「…うん。まってる。ずっと、いつまでもあつちで待ってるね。」

ライがシオと約束を交わしたあと、ソーマはシオを捕食した。

トリガーは引かれ、ノヴァはエイジスを壊し天へと向かっていく。天にある白く輝く餅へと向かって。

同時に地上には白いオラクル細胞が降り注ぐ。それはまるで雪を彷彿させた。

ライは掌にその雪が落ちる。同時に『声』が聞こえた。

『おにいちやんをよろしくね』

それはシオの声だった。そしてライが首を傾げるメッセージだった。

ともあれ地上の滅亡は免れアーク計画は阻止された。

アラガミの少女が月に飛び立ったことで…

しかし地上は今までと何も変わらない。

人類がアラガミに怯える日々が続く。

ゴットイーターがアラガミと生死を賭けた戦いに身を投じる日々が続く。

果たしてこの結末は本当に正しかったのか。

それはこの結末を決定づけたこの場にいる者達が証明していかなければならない。正しかったと証明しなければならぬ。

ある意味では愚かな道を選んでしまったのかも知れない。

だが過去は変えられない。今を生きる以上明日（未来）に向かって進むしかないのだから…

幕間

エリツクの妹

ヨハネスによるアーク計画は失敗に終わった。

人工ノヴァとシオという特異点を用い終末捕食を起こし、宇宙に逃れた千人の人類を残してアラガミと取り残された人類を生贄として新たな地球（大地）を手に入れる壮大な計画。

しかしこの計画には多くそして大きな穴があった。

助かるのは千人。その千人はヨハネスの独断で決められた。

そのほとんどが上流階級の間人か、ヨハネスにとって都合の良い人間だった。

しかしこの計画は失敗した。

フェンリル極東支部第1部隊と：

彼等と交流して人に近しく成長（進化）した特異点のアラガミの手によって：

人らしく成長した特異点は自らの意思で世界（地球）から新天地（月）へと旅たった。

これにより地球で行われる筈だった終末捕食は月で行われその結果月は緑に包まれた。

これがアーク計画失敗の顛末である。

しかしアーク計画の傷跡はあまりにも大きすぎた。

助かる筈だった人々の落胆、失望。

犠牲になりかけた人々の怒り、不条理。

そして極東支部への不信感。

あらゆるものが絡まりなんともいえないやるせなさが人々には残った。

「お疲れさん。」

「タツミさん。お疲れ様です。」

アーク計画失敗は現状維持の意味も表しており、極東支部所属のゴットイーターは今までと変わらぬアラガミと生死を賭けた戦いに身を投じていた。

「最近は多数のアラガミが極東支部の近くにアラガミが多発してるよ
うですが。」

「まあな。だけどオウガテイルが増えただけで危険ではなかったよ。
かわりにカレルとシュンがやる気を失くしてそっちの方が大変だっ
たよ。」

「こつちも同じようなものです。数が増えたけど精々小型種か中型
種。まるで質を数で誤魔化してるみたいですよ。」

「確かにな。数は増えたけど苦戦はしない。単純に俺らが場数を踏ん
できたからだろうけど。」

「極東支部ゴットイーターはヴァジュラを単独で倒したら一人前です
からね。」

ちようど討伐任務を終えたライは神機保管庫で偶然会ったタツミ
と共にエントランスに向かっていた。

「そーいや戻る途中コウタを見かけたけどまた仲裁か？」

「……ええ。戻る時にヒバリさんから連絡があつて。」

アーク計画失敗による波紋は当然の帰結だが助かる筈だった人と
犠牲になりかけた人の衝突。

外部居住区出身のコウタが顔役として仲裁に入っているが当然根
は深い。

「やらかしたことは仕方ないですが今更ながら後悔するのは身勝手で
すよね。」

「いや、確かに身勝手かもしれないけどアンタたちは真正面に受け止
めてるだろ？ちゃんと責任取ろうとしてるのは皆分かってるさ。」

既にアーク計画を阻止したのは第1部隊と知られている。故に第
1部隊には良くも悪くも視線に晒されている。

一応サカキやツバキが弁護してくれてはいるがやはり善悪入り交じった感情を向けられてるのは仕方のないことではある。

「ねえ。今日もおにいちゃんからのお手紙は届いてないの？」

「は…はい。届いてないですねえ。」

エントランスに着くと上記のような会話が耳に入る。

「よう。ヒバリちゃん。」

「あ…タツミさんにライさん。お帰りなさい。」

受付にはヒバリと高貴そうな身だしなみの幼い少女がいた。

「はい。報告書。」

「はい。お預かりしますね。」

「ごつちもお願ひしますね。」

「はい。報酬はターミナルに入れときますね。」

「ねえ!!」

報告をしているときさつきからいた裕福そうな少女が割って入ってきた。

「どうしたの？」

「私のおにいちゃん知らない？」

「おにいちゃん？」

ライが少女に目線を合わせて問いかけるとそう返してきた。

ライはタツミとヒバリの方を見るが2人ともバツが悪そうな顔をしながら目を合わせなかった。

「名前は？」

「エリック。とても強くて華麗で頼りになる自慢のおにいちゃんなの。」

「エリック…」

エリック。その名をライは知っている。

まだ新兵の時、一度だけ共に任務に出た。

…これが彼の最期の任務だったが。

どうやらこの少女はエリックの妹らしい。

「ねえ。エリック知らない？最近会えてないしお手紙書いても返してくれないの。」

純粹に聞いてくる少女。彼女は兄が生きてると信じている。

「そっか。君のお兄さんはきつとゴットイーターとして今も大活躍してるよ。今は偉い人から特別任務を言い渡されたみたいでね。極東支部を出ているんだ。」

「本当？」

「うん。腕が立つゴットイーターにしか頼めないからね。きつとお手紙の返事が書けないほどに忙しいんだよ。」

「それとも君はその強いお兄さんを疑うのかな？」

「そんなことないもん!!」

「じゃあ君は帰ってくるお兄さんを笑顔で出迎えないとね。」

「わかった!!ありがとう。」

ライに御礼を言うと少女は去っていく。

ライは嘘をついた。

彼女は二度とエリックには会えない。既に死んでいるのだから当たり前前だ。

「いいのか？あんなことを言つて。」

「仕方ないですよ。仮に死んだと伝えてもあの子は信じない。いや、理解できないでしょう。」

「それなら残酷かもしれないけど希望を与えとくべきです。」

「それに僕の名前は『嘘つき』ですからね。」

そう言い哀しげに笑うライにタツミとヒバリは何も言い返せなかった。

薬物の影

「すまないね。任務後だというのに。」

「いえ。」

ライは支部長を訪れていた。そこには当然だが部屋の主がいた。しかし真の支部長であるヨハネス・フォン・シックザールは既に亡くなっている。故に極東支部の支部長は現在空席である。

だがさすがに長がいない状況が続くのは問題ということで上層部は代理を立てることにした。

それで選ばれたのは…

「うーん。はやく後任決めて隠居したいのだがね。」

「アーク計画を阻止した責任とつてもう少し我慢してくださいよ。サカキ博士。」

支部長代理に選ばれたのはサカキだった。

サカキはアーク計画の全容を話した後責任をとってフェンリルでの役職をすべて辞職し隠居しようとしたがそれをツバキに諭され支部長代理に任命されたのだ。

「大半の責任はこちらが請け負いますから。それでどんな用件ですか？」

「うん。実はエイジスに回していたリソースは外部居住区に回せるようになってね。ある程度生活改善されそうなんだ。」

「でも半壊したとはいえエイジスという巨大な建造物をほったらかしにしとくのはもったいないと思つてエイジスを使つてなんらかの作業をしようと思つてるんだ。」

「その話を前にソーマにしたら彼が自ら参加したいと申し出てくれたのだが一応リーダーの君に許可をもらおうと思つてね。」

「ソーマがやりたいなら止めるつもりはありません。構いませんよ。」

「そうか。ありがとう。彼にも伝えとくよ。」

「話は以上だ。戻っていいよ。」

「それでは失礼します。」

軽く礼すると出口へと向かうライ。

すると同時に出入り口の扉が開いた。

「なんだ。お前か。」

「ツバキ教官。」

「やあツバキ君。」

新たに支部長室に入ってきたのはツバキだった。

「支部長代理。例の件について少し…」

「…ああ。」

「それじゃ失礼しますね。」

改めて一言かけてライは支部長室を出た。

「やはり外部居住区に出回ってるようです。」

「そうか。やっぱり出回ってるのか。」

「はい。これが証拠です。」

そう言うとツバキが机に置いたのは「空の注射器」。

「生活が改善されたとはいえまさか薬物に手を出すとは…」

「人々が酒や薬に逃げるのは例外なく絶望したときと決まっている。

あのヨハンも妻を失ったときの悲しみにより酒と睡眠薬で自殺しようとしたくらいだ。」

「…アーク計画の失敗により起きたということですか。」

「憶測だがね。症状はどんなものだい？」

「医療班によれば幻覚を見るような感じですね。薬が効いてるうち
は過去の幻覚を見るのか頬が緩んだように笑っているそうです。
ですが薬が切れると薬を求めて暴れるとか。」

「なるほど。十中八九「リフレイン」と見ていいようだね。依存度が
高いからアラガミが現れる前から禁止薬物指定されているものだ。」

「リフレインですか。それを使えば奴は『思い出す』ことができるのですか？」

サカキの解答にふとツバキはそう呟いた。

その問いにサカキのメガネが怪しく光る。

2人が思い浮かべたのはつい先程までここにいた銀髪の青年。

青年はフェンリルに保護された時から記憶を失っていた。

本人は関心がないようだが周囲の者は記憶を取り戻してほしいと思っているだろう。

特にツバキはがリンドウを失ってしまった時からその気持ちが強くなった。

リンドウが死んだ時周りには見せなかったがサクヤ以上に悲しみに暮れた。

だが立ち直る時に気づいたのだ。

自分はリンドウを覚えているからいつでも悲しみにもくられられるし思い出すことができる。

だが記憶を失っている彼はそれができない。

親兄弟や友達の顔

もしかしたらいたかもしれない恋人の顔も

彼は覚えていない。いや、思い出せない。

今まで自分を作り上げたものがすべてなくなったのが今の彼だ。

フェンリルで新しい関係を作ってはいるものそれでも記憶は取り戻すべきとツバキは考えていた。

現にフェンリル本部に向かったツバキはライについて聞いてまわったが成果は出なかった。

故に可能性があるならその可能性に賭けたいと思うのがツバキの心情だった。

「……確かに。彼の記憶を取り戻せる可能性はある。だけど推奨はしないよ。」

「……そうですか。」

サカキは冷たく言い放った。リスクが高すぎると。

「とにかく出所を探ります。被害を抑える為にも。」

「うん。頼むよ。」

そう言うのとツバキは支部長室を出て行った。

「我ながら何を言ったんだか…」

エレベーターの中で自虐するようにツバキは呟く。
だが彼女の右手は強く握りしめられていた。

不穏と感謝

「コウタ。どうかしたの？今日は動きが悪かったけど？」

「あ…えつと…ごめん。」

今回のミッションをライとコウタとサクヤの3人で終わらせた。だがいつもよりコウタの動きが悪かったことにサクヤが注意する。

「最近は外部居住区の諍いを仲裁してるけどそっちでなにかあった？」

「うーん。あつたというか…なんとというか…」

「歯切れが悪いけど言いにくいこと？」

「いや、俺もまだよくわかってないというか…」

なにかあつたのは確かのようなのだがまだ事態を把握しきれてないよ
うだ。

「でもなんとなくだけど外部居住区の人達が減ってるような気がするんだ。つても気のせいかもしれないけど。」

「減ってる？それって人がいなくなってるってこと？」

「それはないかと。居住区の外は神機使いじゃないと生きていけません。」

「だよなあ。それが分かっているから実際にいなくなっているとは考えられないんだよ。」

「となると居住区内に溜まり場ができたとか？」

エイジスにまわっていたリソースは外部居住区に大半使われている。そのリソースで新たな遊び場みたいな場所ができていても不思議ではない。

「いや、母さんに聞いたけどそんなのは知らないってさ。でもなんか医者の方が少し前に来て小さな診療所を開いてるとは聞いたな。」

「医者？」

「うん。小さな怪我や病気では無償で診てくれるおおらかで優しい人だっけさ。まあ母さんも実際に会ったことないから噂でしか知らないらしいけど。」

「それは居住区の人たちにしたら嬉しいことじゃない。」

「うん。もしかしたら皆その先生のところに集まっているのかもしれないし。やっぱ俺の考えすぎかも。」

「……医者……か。」

コウタの言う医者。その存在に確証はないがライには心当たりがあった。

オオグルマダイゴ

アリサのメンタルケアを務めていた医師でありロシア支部に戻る際にアラガミに襲われ行方不明になったとされた。

しかしそれは虚偽で実際はエイジスに身を潜めていた。これはアリサとサクヤがエイジスに潜入した時に発覚した。

つまりオオグルマはヨハネスとともにアーク計画の黒幕だったのだ。

だがヨハネスは死に、アーク計画は失敗したがオオグルマは行方不明になったまま。

アーク計画に関与していたとされる者たちはフェンリルの公安に位置する組織が今でも探しているらしい。

「考えすぎか……」

軽く頭を振り、1つ溜息をつく。小型や中型とはいえアラガミの数が増えた現状に少し疲れが出たのだろう。

アナグラに戻ったら少し休もうと決めるライだった。

アナグラに戻るといつも通りにエントランスにいるヒバリに報告する。これで任務完了となり晴れて自由の身となったので自身の部屋で一眠りしようと思っていたライだったが……

「あの……おつかれのところ申し訳ありませんがライさんと面会したいという方が……」

「はあ……」

そう問屋は降りることなくエントランスの休憩所に座り面会相手を待つこと10分。

「すまない。どうやら待たせてしまったようだね。」

そう言いながらライの前に現れたのは高価そうなスーツを着た老紳士だった。

「えつと…」

「何度か見かけたことはあるがこうして話すの始めてだね。」

「取り敢えず自己紹介をしよう。君にわかりやすく説明するなら私は『エリック』の父だ。」

「そうですか。それでエリック『先輩』のお父さんが僕になにを？」

エリックの父という老紳士にそう返すライ。

今更責められてもなにも変わらないがその責めを受ける覚悟がライはあった。

「なに。今更君を責めようとは考えてないよ。エリックの友人だったというソーマ君もね。」

「なによりエリックがそれを望まない。自分の意思でゴットイーターになったアイツも命を失うことへの覚悟ができていたはずだからね。」

「……恐縮です。」

ライはそう答えることしかできなかった。

あの日、自身はまだ新兵だったとはいえエリックを助けることはできたのはライとソーマだけだった。たとえ重傷でも生きていれば…と。

「エリックの死は最初は私もショックだった。受け入れるのも辛かったよ。だがゴットイーターの職務も理解してるつもりだ。だからゴットイーターの君たちを恨むことは出来ない。」

「だがあの娘はまだエリックの死を受け入れてないようだね。無理もないまだ幼いからね。」

「あの娘？」

「エリックの妹という少女が数日前に君に話しかけてきただろ？」

「ああ。あの子ですか。」

「名前はエリナという。あの子はエリックが大好きでね。いつでも口に出すのはエリックの話だ。」

「それを知っているゴットイーターの皆は今のエリナに真実を告げることができないのか口を紡いでいるんだ。」

「確かに。バツの悪そう顔をしてましたね。」

「そんな中君は嘘とはいえエリナと向き合って話してくれた。エリックと会えなくなっただけから元気がなかったエリナが君と話してから元気を取り戻した。」

「それにエリナは病弱でね。元気がない時はそれも相まって心配だったんだ。」

「だから君には感謝している。同時に親として恥じる思いだ。」

「単に嘘をついただけですけどね。」

確かにライはエリナという少女に嘘をついたに過ぎない。結局少女が真実を知る時間を引き延ばしたに過ぎない。要は時間稼ぎだ。

「それでもだ。私が仮にエリックが生きていると言ってもエリナは信じていない。エリックと同じゴットイーターである君が言えば信憑性があるから信じたんだと思う。」

「いつか真実を伝えることがあるだろう。その役目は父親として責任を持って務めさせてもらう。君には絶対に迷惑をかけないと約束しよう。」

「はあ…」

「では、私は行くとしよう。話せてよかった。」

そう言つてソファから立ち上がる老紳士。そのまま会釈してエレベーターへと歩いて行つた。

「嘘ついて感謝されるとは…結局最後は傷つくだけなのに…」

老紳士がエレベーターに乗つたのを確認したライは呆れた表情でそう呟いた。

悪い噂

「状態はどうだ？」

「……レベル3といったところでしょうか。ですが依存性はかなりのものかと……」

「そうか……」

ベットに横たわる男を見ながらツバキは医療班の人間と話し込んでいた。

「公安が現場に潜入した時にはまだ打つ前だったんだがな。我々の想定以上に根が深いな。」

「ですが禁止薬物である“リフレイン”を大量に所持できるものではないでしょうか？」

「このような世界だ。完成されたリフレインは数少ないだろう。恐らくリフレインの構成物質を調べて自らの手で製造したものだろう。」

「そんなことができませんかね？」

「できるから今こんな状態になっている。」

「ともかくこの男が目覚めて落ち着いていたら呼んでくれ尋問を行う。」

「了解。」

医務室を出るツバキ。相手には見せないがその表情に疲労の色が色濃く出ていた。

「リフレインの件。恐らく医療関係者と見るべきだろうな。……それに。」

公安からの報告書には居住区の住人の“声”もあつた。正確に言えば噂であるが……

「アーク計画を阻止したのは第1部隊という噂が“悪い”方向に広がっている……か。」

しかし第1部隊全員が悪く言われているのではないらしい。

「第1部隊隊長が特に悪く言われてるな。まあ隊長格が責任を負うのは正しいことだが……」

事実であるがゆえに否定はできない。だが彼等は結論しか知らず

そこに至った過程は知る由もない。ゆえに噂に躍らされる。

仕方ない。だが不本意に彼等が傷つくのは許せない。

「悪いことが起きなければいいが……」

仮にも自分の教え子で弟のリンドウの部下だった者が理不尽に傷つけられるのは気に入らない。

その頃ライは支部長室にいた。

「厄介なことが起きているようだね。」

「……みたいですネ。」

ツバキの不安は的中していた。

ここ最近、外部居住区の住人がライの噂を信じて極東支部に凸して来ている。

「今は抑えられてるが長続きはしないだろうね。突破されるのも時間の問題だと考えた方がいい。」

「どうしますか？ 僕が出てもいいですが？」

「それはやめといた方がいい。君が出たらさらに暴徒が増えかねない。」

「やっぱりそうなりますか。」

「うん。確実に。人の愚かな部分がすべて君一身に集まっている以上その君が出れば暴動が起きる。」

サカキははつきりと断言した。そして遠回しにこう言っている。

「君もただではすまない」……と

「とにかく君が表に出ることはない。こちらでなんとかする。君はこれまで通りにゴットイーターの職分を果たしてくれ。」

「……………了解です。」

……………ライはそう答えるしかできなかった。

診療所

ライに関する噂は日に日に広がり、それと同時に悪化していった。内容としては裏で暴力沙汰を起こしたり金品を無理矢理奪ったり、嫌がる女性に性的行為を強要したりと悪質になっていった。

もちろん、サカキやツバキにより噂は虚偽と伝えられてはいるが信用してくれているのは多くはない。

だがゴツトイーター達は誰一人として噂を信じる者がいない。

あくまで噂を信じるのはライを知らない者でありライがどういう人間か知っている者達からすればアホらしく思っている。

「なんですか。皆リーダーを悪く言ってます!!」

「アリサ。落ち着きなさい。」

アリサとサクヤはエントランスで話し込んでいた。

内容は2人が所属する部隊の隊長の悪い噂。

始めて聞いた時は2人は驚いたものだが所詮は噂だし数日で消えると思っていたが予想に反して悪化していった。

「サカキ博士やツバキさんが否定してくれてはいるけどやはり噂の出口を見つけないと噂は止まらないわよ。」

「でも…なんでリーダーだけ…」

アーク計画を阻止したのは第1部隊全員。だが噂の的にされてるのは隊長であるライのみ。

「怨みを持たれてるからでしょ。」

「あ…リーダー…」

アリサの疑問に答えたのは噂の中心の存在だった。

任務を終えたようでも後ろにはコウタとソーマもいる。

「内容はどうあれアーク計画は一部の人が助かるものだった。その一

部から怨みを持たれても仕方ない。」

「でもそれなら私たちだって同罪ですし…」

「それがどうやら俺たちは無理矢理リーダーに付き合わされたことになってるみたいでさ。」

アリサの疑問に答えたのはコウタだった。

コウタは外部居住区出身のため、居住区の住民からいろんな情報が得ることが出来る。

「本当に酷い状態だよ。俺なんか腕や足に傷や痣があつたらリーダーに殴られたのか蹴られたのかつてよつてたかつてさ。アラガミに吹っ飛ばされた傷と言つても信じてくれないし。」

「アリサ達は僕が性的暴行した際に撮った写真で脅されたという噂がたつてゐるらしい。」

「ソーマは暴力で服従らしいけどソーマには勝てる気しないんだけどね。」

「所詮は噂だろ。」

「ほんと酷いことになってるわね。いい加減に出どころを突き止めないと大変なことになるわ。」

「とはいえ根も葉もない噂ですから。それに…」

「今はともかく、昔はどうかだったかはわかりませんから。」

そういうライは自虐的な笑みを浮かべていた。その笑みの意味はサクヤとソーマしかわからなかった。コウタとアリサは意味が分からず首を傾げるだけだった。

「き……君!!」

そんな会話をしていると慌てた声が聞こえた。振り向くと…

「エリナ…エリナを知らないか？」

「貴方はエリナちゃんのお父さん。」

振り向くとそこには以前話した老紳士がいた。今までの優雅さはなくかなり焦っていた。

「リーダーのお知り合いですか？」

「うん。サクヤさん達は知ってると思います。エリックのお父さんで

す。」

「あ…エリックの…」

「……………」

「それでエリナちゃんがどうしたんですか？」

「エリナが外部居住区から帰ってこないんだ。」

「帰ってこない？迷子ですか？」

「ああ。確かに素人じゃ迷子になるかも。意外と居住区って広いし。」

「それは心配ですね。」

「コウタがそう言うのとアリサが心配そうに呟いた。

「それでエリナちゃんは何で居住区に？」

「居住区に良い腕の医者が来たらしくて一度診てもらおうしたらエリ

ナが1人で行くと言いついて。」

「それで1人で行かせたと。」

「すまない。エリナは言い出すと聞かなくてね…」

頭垂れる老紳士。その姿に何気なく苦笑したライ。

「わかりました。雨が降りそうだったし急がないと。」

「そういうことなら俺も手伝うよ。居住区なら庭みたいなものだし。」

「私も手伝います。」

「私も協力するわ。」

「極悪人と一緒に人探しするんですか？」

協力を申し出るアリサとサクヤにそう問うライ。

「所詮噂でしょ？実際そんな事実じゃないのだから別に一緒に行動し

ても問題ないわよ。」

「というよりリーダーは任務以外だと訓練してるかサカキ博士に呼ば

れてなにかやってることは極東支部内じゃ有名ですから。噂の暴力

とかしてる暇はないですよ。」

「いや、それだとサカキ博士を殴ることはできるよね？」

「アレは殴ってもいいだろ。というか急ぐんだろ。」

そう言うのはずっと黙ってたソーマ。確かにソーマなら躊躇なく

サカキを殴りそうだ。

外部居住区に着く頃には小雨が降り出していた。

「降り出してきたわね。本降りになる前に早く見つけないと。」

「そのエリナちゃんってどんな格好してるんですか？」

「高価そうな服を着てるから多分すぐ気付くと思う。あとは白い帽子を被ってる。」

エリナの容姿を簡潔に説明するとアリサ、ソーマ、サクヤの3人は探しに向かった。

「コウタ。例の医者診療所の場所を教えてくださいませんか？」

「わかった。でも迷うだろうから俺も一緒に行くよ。」

ライはコウタと一緒に診療所に向かった。

「母さんから聞いたところはこのあたりなんだけど…」

連れて来られた場所は居住区の中心部から離れた場所。家はあるが空き家だった。

「小さいときここで友達や妹とかくれんぼとかしたんだ。あんどきとあまり変わってないなあ。」

「そうなんだ。…ちよつと羨ましいな。」

何気なく呟いたライ。だがコウタの耳には届かなかった。

「とにかく診療所を探そう。」

「うん。早く見つけなくちゃいけないからね。」

雨足が強くなるのを感じながら一軒一軒確認しながら走り始めた。

「ここだ。」

「え？」

一軒の家の前で立ち止まるライ。どうやらここが診療所らしい。

「人の気配もするし弱いけど薬品臭もする。」

「確かに少し刺激臭がするような…」

「失礼します。」

扉を開ける。

そこには気配を感じた通り人がいた。

だが今でも人と呼んでいいのか分からないが…

「うわ…」

コウタは目の前に光景に吐き気を覚えた。

そこには多くの「廃人」が呻いていた。

目は焦点が合っていない。幻覚を見てるのか下品な笑みを浮かべている。

「…なんだよ。これ。」

「…多分薬物だ。腕に注射痕がある。」

廃人の1人の腕を掴み、そう判断するライ。同時に落ちていた注射器を見つけた。

打ち終わったあとなのか中身が空っぽにみえるが数滴ほど残っていた。

「コウタは極東支部に連絡を入れてくれ。流石にこの場は見過ぎすのはよくない。」

「わかった。リーダーは…」

「もう少し調べてみる。エリナちゃんを見つけないといけないし。」

「とはいえこれを見るからにここの医者はろくでもない人だということだけは分かる。」

吐き捨てるように言ったライの目は氷のような冷たい目になって

いた。だがそのような目をしていることにライは気づかなかった。

注射痕

コウタを見送ったあと、改めて屋内を搜索を始めたライ。

とはいえ、極東支部の搜索隊が来るまで物に触れるのは良くないと思ったのか目視で目に視える範囲で搜索しかできないが。

程なくしてツバキと搜索隊を連れたコウタと合流したライはその場をツバキ達に任せてエリナの搜索を再開した。

「ツバキ教官とサカキ博士はなんかこのことを知っていたようだった。」

「そうなんだ。それならあっちの方は任せていいんだね。」

事態を把握しているのなら説明する必要がないと判断して診療所を出てきたライ。

「とにかくツバキ教官には後で話を聞こう。今はエリナちゃんを探そう。」

「うん。俺は右の方を探すから。」

「わかった。合流場所は診療所にしよう。見つかったら通信機で連絡を。」

「了解!!」

コウタと別行動を取り単独行動を取るライ。

もとより診療所まで案内してもらったら別行動を取るつもりだった。

兎にも角にも雨足が強くなってきたため早くエリナを探し出そうと走る速度を上げる。

「いた。」

しばらく探しまわっていると公園のような広い場所に出た。

公園とはいっても遊具というものはなく、端にベンチがあるだけ。

そのベンチに座る小さな少女。

トレードマークの帽子は膝に置き、顔は下を向いて表情は見えない。

「探したよ。」

少女の前に立つとライは告げた。

少女は声に反応したのか下を向いていた顔を上げる。
だが少女の上げた顔を見たライは表情こそ出さなかったが絶句した。

少女の目に光はなく焦点も合わず虚空を見ていた。

その目はいさつき見た「薬物中毒者」と同じだった。

「……………が……………の」

「え？」

か細い声で少女エリナが呟いたことに気づいたライ。耳を澄ますとエリナは再度呟いた。

「あなたが…お兄ちゃんを…」

「……………殺したの？」

「……………」

言葉が出なかった。ライ自身聞かれるとは思っていなかったのか不意をつかれた。

だが答える必要はなくなった。

エリナがいきなり倒れこんだために

慌てて支えるライは倒れたエリナの額に手を置いた。

「熱い。熱か。」

ライはすぐにエリナを抱き上げ通信機でエリナを保護したことを第1部隊のメンバーに伝え急いでアナグラへと戻った。

アナグラに戻るとすぐにエリナは医務室へと運ばれた。

ライも一度自分の部屋で着替えた後医務室に訪れた。

そこにはエリナの父親である老紳士がいた。

「君か。」

「エリナちゃんの容体はどうですか？」

「熱が出ただけだよ。君のおかげだ。君が見つけてくれたから熱で済

んだ。感謝するよ。」

「どういたしまして。」

そんな会話をしている医務室から医療班の職員とツバキが出てきた。どうやらエリナの処置が終わったようだ。

老紳士は職員と共に医務室に入っていた。

残されたのはライとツバキの2人。

「戻っていたんですか。」

「ああ。お前はどうかやらあの子を探してようだが。」

「はい。少し面識があつて。」

「そうか。」

そこまで話すとしばし沈黙が流れる。

「彼女の容体はどうですか？」

「安心しろ。安定している。雨に濡れて風邪でも引いたのだろう。」

「そうですか。よかったです。」

そこでまた沈黙。だが意を決したのかライはツバキに問う。

「あの…変なことを聞きますがいいですか？」

「……なんだ。」

「彼女の腕に『注射痕』はありませんでしたか？」

「……」

沈黙するツバキ。だが一度嘆息すると答えた。

「あつた。」

「……そうですか。」

「他に聞きたいことは？もうお前もこの件の関係者とした。なんでも答えるぞ。」

「じゃあ1つだけ。」

「そう言いライはツバキに問う。」

「あの診療所にいた薬物中毒者ですが全員『リフレイン』を打たれますか？」

「……」

再び沈黙するツバキ。だがその内心は驚いていた。

まさか中毒者を見ただけで薬物を当てられるとは思ひもしなかつ

たのだ。

「……やっぱりですか。」

「何故分かった。」

「……何故でしょうね。」

「だけど……知ってるんです。覚えてないけどリフレインを服用して廃人になった人を知っている。涙を流した人を僕は知っている。」

「だから僕は僕が分からない。本当に僕は何者なのでしょうね?」

自虐的に言うライ。その表情にあったのは「無」だった。

「失礼します。」

「……どこに行く。」

エレベーターに向かうライにツバキはそう言う。いつもなら呼び止めたりしない。

だがツバキはライを呼び止めた。

何故呼び止めたのはツバキ自身分からない。

だが今のライを見て呼び止めなければならないと直感で思ったのだ。

……呼び止めなければ彼は知らないうちに消えてしまおうと感じたからだ。

「……少し所用を思い出しましたので。」

「……そうか。」

「では、失礼します。」

今度こそライはエレベーターの中へと消えて行く。

その後ろ姿をツバキは呼び止めなかった。

犯人

神機片手にライが向かった場所は例の診療所だった。室内には先程と違い殺風景だった。

「人がいるとこないじゃよこんなに違うんだな。」

そう呟くと屋内を進むライ。

「先生。いらっしやいませんか？」

ライがここに来たのはまだこの主人である医者に会っていなかったからだ。

往診に出ているにしてもじきに戻ってくると思っていたが未だに戻ってくる様子もなく人っ子一人この地域にはいない。

「別の場所を住居にしているのか、それとも……」

呟きながら何気なく床に目を向けると一ヶ所だけ床板が割れていた。

「無人の家は傷みややすいからあってもおかしくないけど……」

何気なく気になったので割れた床板を持ち上げる。

床下には地下へと続く階段があった。

「……ありきたりだな。」

苦笑いを浮かべながら外した床板を適当な場所に置き、姿を現した地下階段へと足を踏み入れた。

階段を降りきるとそこは一本の通路となっていた。

ライはそのまま進む。

「地下通路か。アナグラもエイジスと繋がっていたからなんとなく彼奴だけじゃないとは思っていたけど……」

ライはヨハネスを慎重な男と思っていた。

最後のシオの確保は強引だったが年数単位で時間をかけてノヴァを育んできた。またアーク計画が公にならないように情報を極秘機密にするなど慎重に事を動かしていた。

リンドウのデータとサクヤとアリサのエイジス潜入という強行策がなければアーク計画のことを知ることはできなかったに違いない。そんな慎重な男がアナグラ以外にエイジスに繋がる通路を秘密裏に作っていてもおかしくはない。

地下通路を進むと灯りの点いた一室に辿り着いた。

息を潜めて慎重に近づくとライ。

そして物影に隠れながら部屋を覗き込む。

目で確認する前に鼻で感じたのは消毒液のような薬品臭だった。

どうやらこの部屋で診療所で使う薬品を調合しているようだ。

改めて室内を覗きこむ。

そこには1つのシルエットがあった。

小太り体型に頭に帽子を被っているようなシルエット。

そのシルエットの正体にライは心当たりがあった。

「誰だ!!」

ライの気配に気づいたのかシルエットが叫ぶ。

男の声だった。そしてライも聞いたことのある声でもあった。

ライは静かに姿を現す。

「お前は…!!」

「……やっぱり貴方でしたか。」

シルエットに向けて話しかけるライ。

「記録ではロシア支部に向かう途中、アラガミに襲われて行方不明になったと聞いていましたが流石にアリサという貴方にとって、患者

“を見捨てるのは些か不審に思っていました。”

「案の定、アリサ達がエイジス潜入の際、貴方の生存を確認できましたが。」

「アーク計画失敗後、また行方不明になっていましたが居住区で医者をしてたんですね。」

そしてシルエットに鋭い眼光で睨み言い放った。

「オオグルマダイゴ先生。」

シルエットの正体はオオグルマだった。

「こうして顔を合わせるのは久しく感じますね。」

「まさか外部居住区で医者をしていたとは思いませんでしたよ。」

「な…何故お前が…!!?」

淡々と話すライと狼狽するオオグルマ。

「ここにいるのですか？診療所内を調べたら偶然地下階段を見つけまして降りてみたらここに辿り着いたんです。」

「それでここは薬の調合室といったところでしょうか？ここで居住区から来る患者の薬でも作っているといったところかな。」

「フツ…半分正解とっておこう。」

「半分?」

怪訝そうな表情に変わるライ。それを見てオオグルマは笑みを浮かべる。

「私はここで研究をしている。診療所はこの場所への御礼として診ているにすぎん。」

「まあ私の作った薬の“実験体”になってもらっているのだがね。」

「実験だと?」

「そうだ。実験だ。私が調合した薬が私の予想通りの効能を発揮するか実験だよ。」

「…その薬が“リフレイン”ですか。」

「リフレインに模したものだよ。前支部長が君から回収したものをさらに私が回収したりリフレインを使って私なりに調合した薬物。その実験体にね。」

「何故…そんなことを?」

「何故？分からないのか？」

そこでオオグルマの形相が変わる。

「お前がアーク計画を『潰した』からだよ!!」

「アーク計画は多大な犠牲を払うが確実に救われる計画だった。この絶望しかない世界から脱出できる唯一で壮大な計画だった!!」

「だがお前が全て覆しすべてを潰した!!そしてアリサも私から離れていった…」

「アリサ？」

ライの疑問に答えることなくオオグルマの独白が続く。

「私の新薬の被験者は本来アーク計画で助かる筈だった人々だ。アーク計画の希望に縋りお前のせいで絶望に堕ちた被害者達だ!!」

「だから私はリフレインの新薬を作り、夢のひとときだけは幸福にいられるようにしたのさ!!」

「なるほど。」

「僕に関する悪い噂も貴方が流したんですか？」

「噂は勝手に増大して広まったにすぎない。私は『アーク計画失敗には第1部隊が関わっているらしい』としか話してないからね。」

「そうですか。」

間接的とはいえ薬物中毒者の原因はライにあると罵るオオグルマ。

だがライはショックを受けた様子もなければ傷ついた様子もない。

「そうですか。貴方が言いたいことは分かりました。」

「貴方の言う通りなら僕は憎まれる存在なのでしょう。」

「それで？僕にどうしろと？」

「廃人になった人達に土下座して謝ればいいんですか？賠償金を払えばいいんですか？」

「そんな『無意味』をしろというならやりますよ。それで相手が納得するなら地に頭をつけますよ。」

「……無意味だと!!」

「無意味だろ。終わったこと、過ぎたことに縋って今を生きようとしてない。それが薬物中毒者だ。」

「そんな無駄に寿命を使うなら堂々と復讐しにこい。」

過去に起きたことは変えられない。如何なる生物や「神」でも。時は平等に流れ、一度たりとも戻ることは叶わない。

故に過去を変えらるという愚を犯すことは何人たりとも許されない。

「恨め!!憎め!!怒りをぶつけにこい!!無駄な墮落より有意義に命を使えるぞ!!」

「噂で元凶も分かっているんだ。いつでも殺しにすればいい!!僕が：「私」がすべて受けてやる!!」

普段無表情で滅多に話さないライが今は狂氣的な笑みを浮かべ高らかに話す姿はある意味では政治家の演説にもみえた。

だが言っていることがあまりに苛烈過ぎてオオグルマの背筋が凍りつく。

「貴様の下賤な戯言も聞き飽きた。貴様を拘束し公安に突き出す。大人しくしてもらおうか。」

「拘束するだど：!?!私は医療に従事してたに過ぎん!!」

「だが貴様はアーク計画の関係者だ。公安がアーク計画の関係者を捜査してるのは知っているのは知っている筈だ。」

「クツ…」

神機を構え、一步一步オオグルマに近づくライ。近付くたび後退するオオグルマ。

「待て!!私を捕らえたら薬物中毒者はどうなる!?!」

「知らん。しばらくはフェンリルの更生施設にでも入るんじゃないか?」

「薄情者め!!」

「ヤク漬けにした奴に言われたくない。」

オオグルマがどんなに罵倒しようともライは気にする様子もなく返す。そして歩も止まらない。

「ならばせめてお前を道連れだ!!」

追い詰められたオオグルマはポケットから「注射器」を取り出す。

「これには「ノヴァ」の偏食因子が入っている。」

「ノヴァ?」

「前支部長がいないうちにこつそりと回収したものでね。私はこれの

研究をしている。」

『だから?』

「フツ…どうせ助からない命だ。ならばこの命をノヴァにくれてやる!!!」

そう叫ぶとオオグルマは自身の腕にノヴァの偏食因子の入った注射器を射し込んだ。

「は……ハハ……これで……すべてがお終いだ!!!!」

……これがオオグルマの“人として”の最期の言葉となった。

戦闘開始

「う……ぐ……グアアアアアアアアアア!!!」

偏食因子による拒絶反応によるものかオオグルマは蹴き苦しむ。

血管は浮き上がり、脂汗も止まらない。眼球も徐々に紅く染まってい
いく。

「変貌する前に終わらせる。」

アラガミと化する前に神機でトドメを刺そうと動き出すライ。

ノヴァの偏食因子を取り込んだ以上、仮にアラガミ化すれば苦戦は必須。だが変貌前ならまだ“人として”処理できると考えたライは神機を捕食形態にしてオオグルマを喰らわせる。

勢いよく飛んでいく神機の顎。

しかしオオグルマを喰らう寸前、一步先にオオグルマは膨張し、その身体を人から異形のアラガミに形を変えた。

見た目はヨハネスが乗ったアルダノーヴァの男型に似ていたが女型の存在はない。しかし大きさはアルダノーヴァよりも大きい。

当然だが狭い部屋に膨張する巨体は入れない。そこが地下ならば自然と上が盛り返される。

「アナグラに地震が起きてそうだな。」

そんな呑気なことを言っているライだが少しばかり焦っていた。このままここに残れば生き埋めになりかねない。

そう判断したライは急ぎ地上へと離脱した。

その頃アナグラはライの予想通り、大きな揺れが起きていた。

極東地域は地震が多いことで有名な地のため、地震はアラガミが蔓延っていた現在も時折起きていた。

故に極東支部に長く在籍している者や極東出身の者にとってはいずれば起きるものとして達観している。

「な…なんですか今の揺れ…!!」

「そっか。アリサは初めての経験よね？地震。」

「じ…地震？」

サクヤの部屋で談笑していたサクヤとアリサだったがいきなりの地震でアリサはサクヤにしがみついていた。

「この地域ではたまにあるのよ。アラガミとは別の自然現象だから慣れるしかないわ。」

「でも震源地が近かったのかしら。すごく揺れたわね。」

「うう…地震怖い…」

アリサがロシア支部から極東支部に編入してまだ数ヶ月程度。初めての地震は刺激が強かったようだ。

だが突如としてアナグラに緊急放送が流れた。

『外部居住区にアナグラ出現!!外部居住区に新型アラガミ出現!!』

「居住区にアラガミ!!」

「急ぎましよう!!」

地震の怯えはどこへやらアリサは一足先に入入り口にいた。

しかし、緊急放送はまだ終わってなかった。

『なお、新型アラガミは極東支部第1部隊隊長と交戦中!!ゴットイーターは至急援軍に向かえ!!』

途中からツバキの放送にかわり、指示が出された。

「え？」

「リーダーが？」

何故ライが既に戦闘を行なっていることに驚くアリサとサクヤ。しかし立ち止まっている時間はない。ライの強さを理解しているとはいえ、相手は得体の知れない新型。最悪の場合「前リーダー」のようなことが起きるかもしれない。

「行きましよう!!」

「は…!!」

アリサとサクヤは勢いよく、飛び出していった。

「集落から離れてるのは不幸中の幸いだな。」

目の前に降り下ろされる巨腕の一振りをかわしすかさずブラスト弾を放つライ。

しかししたいしたダメージは与えられてないようで次は目の当たりからレーザーを放ってくる。

「サリエル種のレーザーか。まあ一直線なのが有り難い。」

サリエルのレーザーは曲がったりするが目前のアラガミの放つレーザーはサリエルのレーザーより火力はあるが一直線にしか放てない。それが分かっただけで攻撃による威力の衝撃があれどダメージには至らない。

「そして近づきすぎると……」

接近し胴体に斬りこもうとするライ。だが目前になってシールドを展開する。

展開が終わると同時にアラガミは放電した。

「ヴァジュラとハガンコンゴウの放電。まるで近づくなと言いたげだな。」

不適な笑みを浮かべるライ。別に余裕があるわけではないが自分の想像通りにことが動いていることに自然に笑みが零れたのだ。

オオグルマは優秀な医師だろうが戦う存在ではない。

戦えない人間を前線に出したところで平常心では戦えるはずがない。

故にオオグルマだったアラガミはがむしゃらに暴れているに過ぎないようにライには見えた。

「いくらノヴァの劣化品とはいえ乗り手が素人なら宝の持ち腐れだ。」

……前支部長のアルダノーヴァ戦の時も思ったけど……」

とはいえ相手は腐ってもノヴァ。ダメージは与えられてはいるとはいえあらゆるアラガミの偏食因子を得ているためか異なるアラガミの攻撃を次々としてくる。

「リーダー!!」

「これは…!?!」

「どうなっついていやがる!!?!」

「あ、アリサ達も来たんだ。」

次の一手を考えていると後方からアリサ、サクヤ、ソーマの3人が合流した。

「あれって前支部長が乗ってたアラガミよね?」

「ええ。ノヴァの偏食因子を取り込んだオオグルマダイゴの成れの果てです。」

「あれが…オオグルマ先生…?」

「おい!!なんでソイツがノヴァの偏食因子を持つてたんだ!?!」

「前支部長に隠れて秘密裏に撮取したようだ。だけど機動力はないがいろんなアラガミの攻撃をしてくるから気をつけろ。」

3人の問いに淡々と答えるライ。しかしその表情は険しい。

「とにかくアレを倒すことに専念しましょう。コウタも防衛班と一緒に居住区民をアナグラに避難させたら防衛班の皆と一緒に合流するそうよ。」

「とにかく早く倒しましょう。今ならまだオオグルマ先生も救えるはずです。」

「……救えたらいいけどね。」

アリサにとつてオオグルマは操られていたとはいえ辛いときも一緒にいてくれた信頼してた医師だ。故に助けたいと思うのは自然だろう。

だがライはその願いは恐らく叶わないと思っている。

とにかくオオグルマだったアラガミを倒すのは必須条件。オオグルマを救えるかはその後だろう。

総力戦

振り下ろされる拳を交わす。

その際にライとソーマが腕をつたって斬りかかる。

サクヤとアリサは地上からライとソーマを射撃で援護する。

地味だが最善の連携で巨体のアラガミに挑む第1部隊。

「放電くるぞ!!」

「飛べ!!」

腕に電気が走ったのを察知したソーマが叫ぶ。ライも放電の瞬間に指示を出す。

そして放電が止むと腕に着地し、顔面に向かって走り出す。

ゴットイーター故の身体能力で空中に数十秒いることができるからこのライの指示。

とはいえ既にこの策は10回以上繰り返している。

どんなに放電を避け、ダメージを与えても結局振り落とされる。

そしてまた1からやり直し。確実にダメージは与えてはいる。

だが倒せるまではいかない。

巨大過ぎる故にダメージが通りにくい。弱点を責めれば多少は違うだろうが肝心の弱点箇所を見つけられてない。

「クッソ!!」

「クッ…」

「またも振り落とされるライとソーマ。以前としてアラガミは健在。

「埒があかねえな。」

「状況からして対したダメージは受けてない。どうするか。」

「大丈夫!？」

アリサ達と合流して策を練る。しかし再び拳が振り落とされるがそれを避けるが衝撃が4人を襲う。

「クッ…ホント埒が明かないわね。」

「幸い足場が埋もれて動けないからこれ以上の被害が広がることはないのですが…」

「少なくとも今のような攻撃は数が増えても瑣末なダメージしか与え

られない。大きな一撃が必要だ。」

「……………」

各々が状況の危機を把握しているが有効な決定打は見つからない。

「……………少し試したいことがある。時間を稼げるか？」

「え？」

「何かあるの？」

「やってみる価値はあるかと。うまくいく保障はありませんが。」

「分かったわ。」

「もう一度俺が斬り込む。お前らは援護だ。」

「いえ、私も行きます。」

ソーマとアリサが勢いよく駆ける。サクヤも援護射撃を仕掛ける。

それを見てライも神機を強く握る。同時に「あのとき」の感覚を思い出す。

極寒の廃寺でプリティヴィ・マータを倒した時の一撃の感覚。

ライ自身はあの後倒れて記憶は曖昧だが血が騒ぐような胸の中心から熱が広がっていくような感覚はなんとなくだが脳裏の片隅に残っていた。

それを呼び起こす。

「……………」

熱を感じる。あの時よりも遥かに熱い熱が身体中に広がっていく。

「…………グッ…………」

同時に全身に走る激痛。だが意識が途絶えれば意味がない。

自然と走り出す足。

神機の刀身は禍々しく黒く染まっている。

「……………!!!」

激痛による声にならない絶叫を上げながらも足は止まらない。

漆黒に染まった神機はアラガミの腕に振り下ろされる。

その一撃を見たソーマは目を見開いた。

「アイツ…まさか!!」

ライが振り下ろした一撃はアラガミの腕を斬り落とした。

だが以前とは違い斬り落とされた腕は「焼き燃えた」

黒炎の太刀の追撃は続く。

次は胴体を焼き斬ろうと太刀を振り抜く。

だが胴体は大きく斬り落とすまでには至らない。

「……………!!!」

激痛をたえ声にならない絶叫を耐えるライ。だが片膝をついてしばらくは動けそうにない。

「リーダー!!」

「大丈夫!!」

アリサとサクヤがライの救援にくる。ソーマも躊躇したが合流する。

「大丈夫。少し身体が痛んだだけだから…」

「痛んだってその手……」

サクヤに言われ自身の手を見るライ。

「すごい火傷だね。痛みが引かないわけだ。」

「そんな呑気に言わないでください!!自分のことですよ!!」

「とにかくリーダーは休んで。戦うにしても遠方からの攻撃のみ。」

「……でもそれだと…」

「おーい!!」

不意に遠くからコウタの声が聞こえ声の方を向く。

声の先にはコウタを筆頭にタツミやブレンダンといった防衛班の姿があった。

「デカイな。しかも新種。……稼げそうだ。」

「おい!!カレル!!コイツは俺の獲物だ!!」

アラガミを前にアサルトライフルの神機使いであるカレルと長刀

の神機使いであるシユンがいみ合う。とはいえ正確にはシユンが絡んでカレルがあしらつてただけなのだが。

「フフ…やりがいがあるわね。」

「あんなに大きかったら誤射も少なくすみそうです!!」

スナイパーライフルの神機使いであるジーナとブラスト使いのカノンもアラガミに銃口を向ける。既に臨戦態勢に入っているようだ。

「あんた達は少し休め。アイツは俺たちに任せればいいからさ。」

「ああ、4人でこのデカブツをよく抑えてくれた。あとは防衛班に任せしてくれ。」

タツミとブレンダンがライ達に近づいてそう告げる。

「奴は近づきすぎると放電してくる。あとレーザーも撃ってくるから気をつけて。」

「おう!!防衛班の力をみせてやる!!」

「アンタも手がボロボロじゃないか。無理はするなよ。」

ライに一言言ってから戦線に加わるタツミとブレンダン。

ここにアナグラの主要戦力が揃った。文字通り総力戦が始まる。

幕切れ

「レーザーくるぞ!!」

「シユン!!前に出過ぎだ!!放電に巻き込まれるぞ!!」

「どわあ!!カノン!!アブねーだろが!!!」

「私の射線にいるのが悪いんだよ!!!」

「……………新鮮だな。」

「え?」

少し離れた場所でアリサに火傷した手に包帯を巻いてもらいながらライは呟いた。

「アラガミ討伐であんなに言葉が飛ぶことはないからさ。僕は事前に指示を出したらあとは各自臨機応変に攻めさせてるだろ?」

「そういえばそうですね。」

「防衛班の皆も臨機応変に動いてはいるけど各々我が強い。」

「だけどそれが良い傾向に進んでる。並みの部隊なら連携が乱れるだろうに。」

「それでも統制がとれているのは口では悪く言ってるけど各々信頼してるんだろう。ああいうまとめ方もあるんだな。」

防衛班の統制と連携を見てライは関心した声をあげる。

「そうですね?私はあるな連携は嫌です。」

「そう言うけど最初の頃はアリサも連携無視してたけどね。」

「それは言わないでくださいよ!!」

「まあ人それぞれの纏め方があるってことか。隊長歴もタツミさんの方が断然長いことだし。」

引き出しが多いのだろうと呟くと立ち上がる。

「包帯のおかげで痛みは和らいだ。これなら戦える。」

「無理しないでください。あと「アレ」はもう使わないでください
ね。」

包帯を巻かれた両手を軽く握るライ。痺れる痛みが走るが神機が握れないほどではないことを確認する。

「それじゃ討伐に復帰しよう。」

討伐するアラガミを睨み、勢いよく駆けるライ。その後ろ姿に頼もしくも少し不安を憶えるアリサが続いた。

「クソ!!しぶてえな!!!」

「落ち着けよシユン。攻撃は確実に通っているんだ。」

「そうだぞシユン。あのアラガミは確実に弱っている。もう一息だろう。」

目の前にアラガミに悪態をつくシユンに落ち着くよう言うタツミとブレンダン。

2人の言う通り目前のアラガミは第1部隊が戦っていたときより弱っている。というか「萎んだ」。

「萎んだ分、攻撃が効きやすくなった感じね。」

「確かにな。一種の結合崩壊といったところか。」

「じゃあこのままいけば倒せるってこと?」

防衛班と共に討伐を行っていたサクヤ達も目前のアラガミが萎んでいることに気づく。特にサクヤとソーマは元の大きさを知っているため明らかに小さくなっていることに気づく。

「とにかくこのまま攻めていけば倒せるわ。気を抜かずにいきましょう。」

「了解。それじゃ陽動は僕やタツミさんといった剣の神機使いがサクヤさんやコウタといった遠距離神機使いは援護を頼みます。トドメはソーマとブレンダンさんの大剣使いということで。そのあとは臨機応変にいこう。そういうことなんでタツミさんに連絡頼みますね。」

サクヤの言葉に返事を返したのは戦列に復帰したライだった。

「リーダー!!?」

「そうは言うけど…大丈夫なの?」

「神機を握ればどうにでもなりますから。」

サクヤの心配の声に淡々と返すライ。だが包帯に巻かれたライの手の痛々しさをみると説得力はない。

「言いたいことはわかるけど追い詰めている以上早く仕留めるには戦力が1人でも多い方がいい。」

「それにこれは僕が引き起こしたことだし責任もあるからここは引けない。」

言いたいことをすべて言ったのかライはアラガミに向かって駆けだす。

「おい!! ったく!!」

「あ!! ソーマ!!」

「あ、待っててくださいよ!!」

ライを追いかけるソーマ。それに続くアリサ。ライが考えた作戦はあっさり崩れた。

「ああ!! もう!!!」

自分が立てた作戦を自分で壊す我等の隊長に頭を抱えたサクヤ。

だが微かに口元は笑みを浮かべていた。

「まったくもう。私たちも援護するわよ。」

「了解です!!」

呆れながらもしつかりアラガミに突っ込んでいった我等の隊長とその仲間達を援護するサクヤとコウタ。

誰かの為に自分ができてることをやる。これが第1部隊の連携の根底だろう。

だからサクヤとコウタは遠距離神機で攻撃をする。

接近して直接アラガミと戦う仲間を生かすために。

戦線にライとアリサも加わり、着実に目前のアラガミは弱ってい

く。

「もう少しだ!!」

タツミの激励が響く。その言葉通り目前のアラガミはさらに縮んだ。

最初こそは超大型アラガミに匹敵するほどの大きさだったが今は中型種より少し大きい程度までに萎んだ。

また萎むにつれてレーザーも放電も弱くなった。それがゴットイーター達に相手が弱っていると認識させている。

「……すぐ今更なんだけどアラガミって小さくなるの?」

ふと疑問を呈したライの一言。その言葉に活気づいていたゴットイーターは静まりかえる。

アラガミ毎に形状が違うのはコンゴウ種やシユウ種といったアラガミの種類も豊富だから理解できる。

だが元の大きさから徐々に小さくなるアラガミは今までに発見されていいない。

不信感を覚えるライ。だがそれでも攻撃の手は緩めない。しかし浮かんだ不信感は現実となる。

アラガミの全身が徐々に赤く染まっていく。同時にアラガミの周囲も「熱く」なっていた。

空から降り注ぐ雨も小雨ながらも熱量により、水蒸気が立ち込める。

「うわッ何も見えねえ!!」

誰かの言葉の通り水蒸気でゴットイーター達の視界は蒸気により奪われた。

その一瞬だった。

「え?」

ほんの一瞬、一瞬だけ光った瞬間…その直後…
ゴットイーター達はとてつもない爆風に襲われた。

事後処理

爆風に巻き込まれ吹き飛ばされたゴツトイーター達。

また爆風により家屋も吹き飛ばされ、爆風に巻き込まれた一帯は瓦礫と化していた。

「っ……」

全身を叩きつけられた痛みを堪え、立ち上がるライ。

周りもライ同様に立ち上がる。

「チツ…自爆かよ。」

近くにいたソーマが悪態をつく。

「みんな、無事？」

「どうにか。」

「こつちもどうにか無事です。」

「防衛班の方もかすり傷程度で済んだみたいだよ。」

各々の無事を確認する。とりあえず全員無事のようにだ。

「それにしてもまさか自爆するなんて…」

「クアドリガのミサイルを体内で爆発させたという感じですかね。」

「いや…リーダー、何冷静に分析してるの？」

サクヤの問いに冷静に答えるライに対しコウタは真つ当な突っ込みを入れる。

「それはともかく結構吹き飛ばされたみたいだ。」

「でも人口密集地区には被害が出なかったのは不幸中の幸いですね。」

「とりあえずあのアラガミのところに戻ろう。…：…やらないといけな
いこともあるし。」

ライがそう言う全員でアラガミの下に向かった。

元の場所に辿りつくとその一帯は壊滅と言っていい状態だった。

先の爆風で建物は瓦礫へと変貌し放熱によって一部の廃墟は焼け焦げていた。

そしてこの惨状を引き起こした元凶は……

「……当然の結果か。」

ライ達の前には黒く焼け焦げた焼死体が1つ。

その焼死体の胸の辺りにはアラガミのコアが嵌め込まれている。

「そんな…オオグルマ先生……」

「アリサ……」

かつての恩人の成れの果てにショックを受けるアリサ。

アーク計画に利用するためだったとはいえ心が壊れたアリサとずっと一緒にいてくれた親代わりと言ってもいい存在だったオオグルマ。アーク計画を巡って袂を分かったとはいえ生きる気力を与えてくれた「主治医」への感謝の気持ちは変わらない。

だがアラガミに「墜ちた」以上、彼等ゴットイーターがこの焼死体を「弔う」方法はただ一つ。

「リーダー……何を……」

オオグルマ☒だった「焼死体に近づくライ。

そして焼死体の前に立つと神機を捕食形態に変える。

「決まってるだろ。」

呆然としてるアリサの問いに答えたはソーマだった。

「アラガミを倒したらコアの回収するのが俺たちの仕事だ。」

「そんな…オオグルマ先生はアラガミじゃ……」

「アラガミじゃなくてもアレはもう「手遅れ」だ。」

後ろの会話を聞きながら捕食形態の神機を焼死体に向ける。

「……………ヤール……」

「……………」

焼死体から掠れる声が聞こえた。掠れて聞こえにくいが意思の籠った声か。

「コロ……シ……テヤ……ル……ノロ……ツテヤ……ル……」

耳を澄まして聴くとその声を捉えることができた。

「……なんだ。まだ元気じゃないか。」

その身が黒く焼き焦げた上にアラガミ化による激痛に苛まれてもなお折れない闘争心に関心するライ。

だがそれだけだ。オオグルマは助からない。

彼には即死か長い激痛の末の死の選択肢しか残されてない。

「……今、楽にしてやる。」

「まつ……!!待って!!リーダー!!やめてください!!!」

アリサの悲痛な叫びが聞こえるがライは止まらない。

捕食形態の神機は容赦なく慈悲もなく焼死体に喰らいつく。

「やめてええええええええええ!!!」

アリサの悲痛の叫びが木霊する中……

ライの神機はオオグルマを「喰いつくした」。

「事の顛末は以上です。」

「……そうか。」

アナグラに戻ったライは支部長室に赴きサカキとツバキに事の顛末を説明した。

「お前にしては軽率な行動をとったな。」

「……返す言葉ありません。」

「だろうな。確かに公安はアーク計画の関係者の1人としてオオグルマダイゴの搜索も行なっていた。」

「奴はアーク計画の中心人物の1人だ。必ず捕らえなければならなかった。」

「……すみません。」

「まあまあツバキ君。君も彼を止めなかった非もあるのだから穏便に。」

叱責を続けるツバキに諭すような口振りで窘めるサカキ。

「ですが……!!」

「アーク計画に直接ではないが私も関与していた。ツバキ君の言い分なら私も拘束されなくてはならないが思うがね？」

「それにツバキ君も彼が考えなしに事を起こすとは思ってないだろうか？」

「確かに…そうですが…」

「…苛ついていたんでしょう。」

サカキに畳み掛けられるツバキに助け舟を出すように呟いたライ。

「苛つく？君がかい？」

「ええ。我ながら何故かは答えられません。」

「だけどリフレインのことは知っている。効能もどのような副作用があるかも。…そして最後にどうなるかも。」

淡々と語るライ。だが次第に言葉に怒気が含まれる。

「リフレインに怒っているのかオオグルマに怒っているのか、はたまたリフレインに逃げた人たちに怒っているのか。僕には分かりません。」

「だけどどんな手を使ってでもこれ以上被害を大きくしてはいけなと思うていたのは確かです。」

「…その結果がオオグルマダイゴのアラガミ化と居住区域の損害か。」

「…処罰は受けます。」

「うん。後日、処罰は後日発表する。戻っていいよ。」

「どう言い繕ってもライの行動は組織としては処罰されるものであるものにはかわりない。」

「とはいえライのこれまでの功績を考えればそこまで重い処罰は下されない…はずだ…多分。」

エリナの覚悟

「……その手。痛々しいね。」

「痺れるような痛みがするくらいだけどね。」

支部長室を出たライはその足で神機保管庫に向かった。

そこでリツカと話し込んでいた。

「すまない。神機にかなり負担かけた。」

「本当だよ、簡単に調べただけだけど君の神機があちこちおかしくなってるよ。」

「特に近接パーツのところはなんとか溶けてると言えればいいのかな。あれはもう使えない。」

「壊れたわけではないんだろ?」

「そうだけど……まあ他の皆の神機もそうなんだけどかなり疲弊してる。最近のアラガミが多数出現してるから仕方ないんだけどね。」

「直るのか?」

「幸い近接パーツのところ以外は使えるからそこだけ直せばすぐに使えるよ。」

「そうか。頼む。」

とりあえずライの神機は壊れたわけではなく修理も可能のようだ。

「でもそれなりのものは貰おうかな?」

「なんだ?」

「君が貰った任務の報酬数個程と修理費用を貰うよ。」

「それくらいなら構わないが。そんなのでいいのか?」

「君、前支部長から難しい任務を与えられてたんだよね。なら珍しい素材を持ってるかもしれないからね。」

「それくらいなら構わない。早速送金するか?」

「うん。そこにターミナルがあるから。」

ターミナルを使いリツカが欲しがった素材と費用を払ったのだが。

「え!?君、こんなに貯めてたの!?!」

「もうすぐ8桁になるな。まあ使うのはパーツの改造くらいだからな。」

「これって全部任務で稼いだの？」

「いや、これのうち100万近くはカレルさんとシユンと賭博して勝ちとった。」

「賭博って意外なことしてるんだね…」

「なんか喧嘩売るように言われたから。」

「君って結構負けず嫌いなんだね。」

神機保管庫を後にしたライは自らの手の治療をしてもらうため、医務室を訪れていた。

「酷い怪我ですよ!!何故すぐに来なかったんですか!!」

「たいした痛みはなかったので…」

医療班のスタッフに患部を診せると上記の通り責められるライ。だがライが考える以上に両手の火傷は酷いものだった。

だが当人としては神機を握ればそれでいいという考えなので包帯を替えてもらえればそれでいいと思っていた。

実際そう言うスタッフは呆れたように溜息を吐いて包帯を替えてくれた。

しかしあまり無理はしないようにと釘を刺されたが。

「やあ。」

「……貴方は。」

診察を終えて医務室を出ようとする、背後から話しかけられる。振り向くとエリナの父親である老紳士がいた。

「大変だったようだね。」

「いえ、僕が焦ってことを起こしたのでこんなことになったんです。」

自業自得ですよ。」

包帯を巻かれた両手を見ながら心配そうに言う老紳士にライはそう返す。

「実はエリナが目を覚まして君に会いたいと言っているのだが。」

「大丈夫ですか？腕に注射痕があったはずですが…」

「ああ。調べてもらったが薬物の反応は出なかった。おそらく採血の痕らしい。」

「そうですか。よかった。」

胸を撫で下ろすようにライはそう言う。

「それで会っていつでももらえないか？」

「……わかりました。」

老紳士により個室に通されたライはベットに座るエリナと対面していた。

個室を与えられたのは老紳士はフェンリル傘下にある企業の社長でありエリナが社長令嬢だからだそうだ。要は特権階級だからである。

「エリナ。彼を連れてきたぞ。」

「熱が下がったみたいだね。よかった。」

声をかけるが当のエリナは顔を下に向けたままだ。

そして彼女の膝には彼女のトレードマークとも言える白の帽子を強く握っていた。

「無事でよかった。安心したよ。」

「でも身体が弱いものだからあまり無理したらダメだよ。」

「……………」

ライが優しく語りかけるがエリナは反応せず俯いたまま。

会いたい、話がしたいと言って呼んだのに呼んだ張本人がだんまり

なのは些か行儀が悪い

「エリナ…」

「教えてほしいことがあるの。」

しばらくだんまりしているエリナに老紳士が何か言おうとしたがそれと同時にようやくエリナが口を開いた。

「なんだい？」

「……………」

そこでまただんまり。だがライは怒ることもなく静かに問いを待つ。

「…ねえ。」

か細い声でエリナはライに質問する。

「貴方がお兄ちゃんを…」

「……………殺したの？」

「……………」

エリナの問いは彼女を保護した時に聞かれたものと同じだった。熱にうなされていたため覚えてないと思っていたがまさか覚えていたことに驚きと記憶力の良さにライは関心した。

「エリナ……………誰がそんなことを…」

「パパは黙ってて。ねえ貴方がお兄ちゃんを殺したの!？」

「……………」

エリナの問いの前に次はライの方がだんまりとなった。何度も何度も問いかけるのにライは一切口を開かない。

「なんで…答えないの？」

「……………本当なの」

「先生が言ってたの……………本当なの？」

「貴方が本当に…」

「お兄ちゃんを殺したの？」

「……………」

だんまりと黙り込むライ。どんなに問いかけても答えないその姿はエリナからはライが自分の兄を殺したと認めてるようにつつた。「なんで……………どうして…」

「……信じてたのに……」

「貴方のこと……信じてたのに……」

「……嘘つき。」

「……」

罵倒の言葉を受けてもライは一切反論を口にしない。

他所からすればエリックの死は仕方ないと捉えられている。

だが、エリナにとっては今のライは大好きな兄を殺した嘘つきにみえていることだろう。

「エリナ。いい加減にしないで。」

「……パパは悔しくないの!?!お兄ちゃんを殺されたのにこの人が悪いのに……パパは悔しくないの!?!」

罵倒を止めようと老紳士が口を開く頭に血が上っているエリナに一蹴されてしまう。

そして……

「返して……返してよ!!私のお兄ちゃんを返してよ!!!」

「なんで……お兄ちゃんが……貴方が死んじゃえばよかったのに……!!!」

エリナの感情的で且つ本心の言葉が言い放たれる。

「……そうか。」

エリナの本心の叫びを聞き、ようやくライは閉ざした口を開いた。

「……ゴメンね。嘘をついちゃって……」

「……ゴメンね。お兄さんを助けられなくて……」

「……ゴメンね。生きてて。」

「言い訳はしない。君の言う通り僕は君のお兄さんを殺した。殺してしまった。」

静かな口調で語りかけるように言うライ。語るのはすべての非を認める言葉の羅列だった。

「許してほしいとは言わない。恨んでくれて構わない。殺しにきても構わない。だけど君のお父さんを悲しませないでくれ。」

これが最後の言葉なのかそれを言うところライは踵を返し部屋を出て行った。

数日後。

ライは外部居住区での瓦礫撤去労働に勤しんでいた。

これがオオグルマの件の懲罰ということで外部居住区の住人と協力して外部居住区の復興に関わっていた。

主に瓦礫の撤去や修繕に必要な材料の費用の出資など重労働や資金等で活躍している。

あと、この懲罰はライに関する悪い噂の払拭も狙っていたようでこちらはうまくいき噂は所詮噂ということとで露散していった。

「リーダー！そっちにまだ材木のあまりある？」
「あるよ。」

ちなみにこの復興作業はコウタも率先して参加している。家族が住んでいるというのもあるだろうが。

それにこのコウタの存在も噂の払拭に一役買っていた。

「サンキュー。それにしても少し前まで瓦礫があちこち転がってたし半壊した家が多かったけど今はもう元どおりになりそうだ。」

「居住区の人達が手伝ってくれたからだよ。とはいえ、全壊した家屋も多いから少し寂しくなった地域もあるけどね。」

「そうなんだけど幸い人が住んでる場所じゃなかったから皆そこまで気にしてないよ。ただ病院がなくなったのがなく」

「診察は真面目にしてたらしいからね。」

オオグルマはリフレインを製造したのも彼からすれば患者のためだった。結局彼は腐っても医者だったということだろう。

「…病院か。」

「あ、病院も建てる資金も出してほしいとかは言っていないからな!!リーダーが結構お金出してるの皆ありがたく思ってるし。」

「そうか。でも病院はないと困るよね。今のうちにフェンリルに頼つてのは住民も肩身がせまいだろうし。」

「でも病院って儲かりそうだな。」

「リーダー？」

「なんでもない。」

こう答えたライだが後日金儲けのためにゴットイーターになったカレルに病院の件を話した。

数年後、カレルは同志を集い病院を建てるがそれは先の話。

それからゴットイーターの仕事をしつつ居住区の復興に勤しむライ。

復興の手伝いとコウタの紹介もあって居住区の人々とも仲良くなったり、子供たちからも慕われるようになった。

そして無事に怪我人も出ることなく復興を遂げた。

それで今は復興祝いと称した宴会が開かれていた。

ライは宴会に参加する気はなかったが居住区民に捕まって渋々なら参加していた。

今は宴会会場から少し離れた場所で騒いでるコウタや居住区の人達を見ていた。

あとコウタが呼び出したのかアナグラの人達も宴会に参加している。

「……ねえ。」

ふとライに話しかける少女の声が隣から聞こえた。ライは視線を合わせることなく言葉を返す。

「元気になったんだ。よかった。」

「……ごめんなさい。」

「君が謝ることはないよ。君のお兄さんを救えなかった。それは事実だから。」

少女：エリナの謝罪に対しライはそう答える。

「違うの。貴方に死んじやえつて言っちゃつてごめんなさい。」

「気にしないで、いつかは死ぬかもしれない職業に就いてる以上死とはいつもとなり合わせだからね。」

「そう…なんだ…」

そう言うのと俯くエリナ。だが意を決して顔をあげると言った。

「私ね。ゴットイーターになりたいの。お兄ちゃんみたいなカツコよくて華麗なゴットイーターに。」

「……正気かい？」

ここで初めてライは隣のエリナの顔を見た。

「うん。危険なのはパパから聞いたから分かってるしアラガミが怖い存在なのは知ってるつもり。」

「でも他にも私と同じような思いをしてる人がいるなら少しでも減らしたい。そしてお兄ちゃんの意志を継ぐんだ!!」

覚悟を決めた眼でライを見据えて言うエリナ。その眼を見たライは…優しく微笑んだ。

「頑張つて。君が決めたことなら僕は応援するよ。」

「本当?じゃあ時間がある時でいいからゴットイーターになるために必要なことを教えてほしいの。」

「いいよ。僕が教えられることは教えるよ。」

「約束だからね!」

数年後、エリナはゴットイーターとして活躍するのだが、ライの教育が活きたのかは定かではない。

リンドウ救出編 自信と慢心

アーク計画失敗の報は欧州にあるフェンリル本部にも伝えられている。

極東支部から提出された報告書を本部の上層部が読みフェンリルの公式見解として発表するためである。

またリンドウに指示を出してエイジス島を探らせていたのは実は本部の人間だったりする。

とにかく本部の公式見解の発表を以てアーク計画の事後処理はすべて終わりとなる。

その公式見解によると：

アラガミの襲撃により人工島エイジスは半壊。

極東支部支部長だったヨハネス・フォン・シックザールはエイジスの崩落に巻き込まれ死亡。

極東支部長の後任が決まるまで極東支部で技術部長を務めるペイラー・榊が代理として就任する。

その他諸々あったが公式見解は発表され、アーク計画にまつわる事は完全に終止符を打った。

……だが彼等は知らない。

公式見解に触れられず、人知れず闇に葬られた者を……

このときはまだ誰も知らなかった。

「お疲れ様です。皆さん。」

「へりは？」

「10分後に到着する予定です。」

「了解。」

通信機越しにヒバリと話をしているライ。今回はソーマ、コウタ、アリサという第1部隊の面々とヴァジユラ2頭の討伐に出ていた。

「歯ごたえがねえな。」

「うん。なんか物足りない。」

「何言ってるんですか。」

ライが連絡をとっている傍らでコウタ達がそのような会話がされていた。

「私達は生きるか死ぬかの戦いの場にいるんですよ。それがもの足りないというのは慢心しすぎじゃないですか?」

「そうは言うけどさ。アリサだって余裕あったらろ?ヴァジユラの相手なんて最初の頃は酷かったのに。」

「それは…そうですね。」

「自信を持つのはいいことだよ。だからって慢心するのは良くないけどね。」

「リーダー、ヘリは?」

「そろそろ来るって。戻ったら少し休憩してからまた任務につこう。ソーマ達のいうとおり歯ごたえがなかったし。」

「リーダーも何言ってるんですか!?!」

アーク計画の阻止の際に戦ったアルダノーヴァ、オオグルマが化けたアラガミとの戦いの経験は確実にライ達の力となっていた。もともと極東支部第1部隊は極東最強の部隊と言われている以上、強くないといけないのだが。

「あーあ。最近似たのばっかだからテンションが上がらねー、いつそ新種とか出ないかなー」

「何を言ってるんだか…」

コウタの言葉に呆れるアリサ。そんな2人を見ながら苦笑するライ。だが、ふと自分の神機を見ると少し険しい表情になる。

「神機がどうかしたのか?」

「ソーマ。ちよつとね。盾の展開に違和感を覚えてね。そっちの神機

には変化はない?」

「まあな。白くなつた以外は対して変わんねーよ。」

ソーマの神機はエイジスでシオの抜け殻を捕食するとその色を純白に塗り替えた。しかしそれ以外に変化はなさそうだ。

そうこうしてうちに、迎えのヘリがやってきた。

こうしてライ達は彼らの拠点であるアナグラに戻っていった。

「新型…ですか?」

「ああ。情報は皆無だが現れたのは事実らしい。第1部隊は3時間後にヘリ発着所に集合、新型の討伐及びコアの回収を命じる。情報が無い以上、対策が取れん。用心するように。」

「了解!!」

アナグラに戻つて来ると至急ツバキに呼び出された第1部隊。

呼び出した理由は新型のアラガミのコア回収と討伐の指令だった。

「よっしゃ!!新型だ!!」

「喜ぶところじゃないですよ。情報がない以上、対策が取れませんし」

喜ぶコウタに叱責するアリサ。なんやかんやで仲の良い2人である。

「まあそれは情報部に任せよう。僕たちが出発する頃にはなにかしら情報が与えられるだろうし。」

アリサを宥めながらそう言うライ。ライ自身コウタ程ではないが自身の強さに過信していた。その新型と対等に渡り合える自信も少なからずあった。

また久々の新型アラガミだ。どんな相手かはわからないが骨のある相手だったらと願っていた。

不死のアラガミ

「いた!!」

「あれが新種…」

「トカゲ?…いや、龍?」

「火を噴くのか。遠距離攻撃もあるようだからお前ら気をつけろ!!」

ヘリで新型アラガミを確認したライ、アリサ、コウタ、ソーマの4人。

「火を噴くらしいから氷属性が弱点かもしれない。情報が少ない新型だから気を引き締めていこう。」

「了解!!」

最低限の指示を出すとライ達はヘリを飛び降りた。

新型アラガミとの戦闘は一筋縄ではいかない。

情報がない故に弱点もわからない、対処法も探り探りで突き止めていけないといけないため長期戦になりやすい。

「デカイ割りに身軽だな…」

「それに見た目の割に動きも速いですね。こんなアラガミ始めてです。」

「だが火を噴く時は動きが止まる。隙がないわけじゃない。」

ライ達第1部隊もアラガミを分析しながら戦っているためか討伐に多少の時間がかかっている。

「だが苦戦するほどでもない。情報もある程度揃った。…倒すぞ。」

「了解!!」

「倒すぞ」ライのその一言で彼らの動きが変わる。情報を得る戦い方から敵を倒す戦い方にシフトチェンジしたともいえる。

身体能力の高い新種を追い詰めていく第1部隊の面々。

だがそれが悪かったのだろうか。

「な…なんだ!!」

「炎の…羽根?」

追い詰めたのが原因か、突如として背から炎の翼らしきものが生えたと同時に凶暴性が増した新種のアラガミ。

「…なんだ?」

「宙に浮いて丸まってる?」

凶暴性が増したと思ったら次はまるで体育座りするように丸まる新型。

だが炎を中心に集約しているあたり、大技を放つ気配。

「全員…回避…いや…防御!!!」

ライは最初こそ全員に回避指示を出そうとした。だが同時に放たれた火炎の竜巻により装甲による防御を指示した。

「グ……」

「うわああああああ!!!」

「キヤアアアアアアア!!!」

「クソツタレが…」

数十秒から1分はあっただろうかと思われるほどの熱波の暴力。その威力は凄まじく、装甲で防御しても数メートルは吹き飛ばされた。

「なんですか!?!今のは!?!」

「力を圧縮して一気に放出…これが奴の最大の攻撃という奴か。」

「とりあえずあれが来る時は追撃せずに防御すること。全範囲攻撃のようだから回避は無理そうだ。」

仕切り直すように再度神機を構える。新種も片手に炎の槍を持って今か今かとライ達を見据えていた。

結果としてライ達と新型アラガミの戦いの軍配はライ達ぬ上がった。

「……レアモノだな。」

「うーん。ちよつとてごぼつたけどそこまで苦戦しなかつたな」

ソーマの神機で新種アラガミのコアを回収する傍らでコウタは神機で新種アラガミを突いていた。

「さつさと帰りますよ。」

「同感だ。」

アリサの言葉にソーマも同意して歩き出す。コウタが少し騒いでいたが2人は気にも止めず、そんなコウタに苦笑しながらライも続こうとしたが…

「つたく…」

「コウタ!!後ろ!!」

悪態をついたアリサが後ろみた瞬間、叫んだ。

「へ?う…うわあああああ!!」

「なんだと!!」

アリサの叫びにライもソーマもコウタも後ろを向いた。そこには…

……倒してコアを回収したはずの新種アラガミがまるで何事もなかったように動いていた。

「コウタ!!」

アラガミの間近にいる尻餅をついたコウタとアラガミの間に割つて入り装甲を展開するライ。

だがアラガミが勢いよくその腕を振り抜く。

振り抜いた腕と神機の装甲がぶつかる。

同時にこの瞬間、ライの神機が限界を迎えた。

もともとリツカから損傷が激しいと言われてたが度重なる出撃で整備を蔑ろにしたツケがここできたのだ。

装甲が碎ける音が響く。同時にライも勢いに吹き飛ばされた。

「リーダー!!」

アリサの声が聞こえたが吹き飛ばされた時に頭を強打したのかライは意識を失った。

この後、どうにか新型アラガミをやり過ごし第1部隊は撤退した。

アラガミ侵入

「よかった。目を覚ましたんですね。」

目を覚ましたライ。臍気ながらアリサが心配そうな表情をしているのが見えた。

「ここは…」

「アナグラの医務室です。アラガミに吹き飛ばされたことは覚えてますか?」

「ああ。」

「そのときに頭を強く打ったみたいで軽い脳震盪を起こしたみたいですよ。」

「そうか…」

「まだ無理しちゃダメですよ!!」

そう言って起き上がるライを支えるアリサ。彼女にお礼を言うと周りを見渡すと寝てるコウタとソーマがいることに気づいた。

「起きたか。」

「ごめん。心配掛けた。」

「部下を守るのはいいが…前のリーダーのようなことは勘弁してくれよ?」

一言忠告するとソーマは出て行った。

「本当無事でよかったです。」

「ごめん。」

「ッいえ、元はコレが悪いですから。」

そう言ってアリサは隣で寝こけているコウタを叩く。

「イテツ!! ああリーダー起きたんだ。」

「ゴメンな。俺が油断してたからこんなことになっちゃって。神機も壊れちゃったし。」

「ああ、そうなんですよ。今リツカさん達が直してるんですけど時間がかかるそうです。これを機に他の神機使いの神機のメンテナンスもするって言ってましたから。」

「ツバキさんも溜まつてる有休使ってゆっくり休めって言ってたよ。」

ツバキさんが言ってたけどリーダーが1番出撃してたそうだから。」
「うん。そうさせてもらおうよ。」

そう言うと同時に放送が流れた。

内容は例の新種アラガミ『ハンニバル』の対策を考えるため神機使いは集合しろとのことだった。

「僕も行った方がいいかな。」

「ダメですよ！脳震盪起こしたんですから。」

「そうだよ。ハンニバルの対策はこっちに任せて休んでて。あ、必要なものがあつたら教えてくれたら持つてくるから。」

「…わかった。」

「じゃ、またね。」

「あとでまた来ますからくれぐれも無茶なことしないでくださいね。」
「わかってるよ。」

2人が医務室を出るのを確認するとライは再び横たわった。

「……情けない。」

その言葉は吐き捨て、再び眼を瞑った。

神機が直るまで休むことになったライ。脳震盪を起こしたものの、後遺症は残らず身体も異常は見当たらず無事に退院していた。

とはいえ、1日の大半は任務に出てるため、時間があり過ぎて暇を持って余していた。

「本当につまらない奴だな…」

エントランスにある椅子に座り自嘲気味に笑うライ。

「記憶が戻れば少しはマシになるかな…」

本人も忘れかけていたがライは記憶喪失であり、小さい頃の記憶もアラグラに保護される以前の記憶もない。

今まではアラガミ討伐やアーク計画の事後処理などで自身の記憶

のことを後回しにしていたが今は神機が壊れたため時間ができたため何か手がかりを思い出そうとしていたが何も出てこない。

緊急放送がそんな時だった。

「緊急連絡!! 小型アラガミがアラガミ装甲壁を突破し居住区内に侵入しました!! 繰り返し!! アラガミが侵入しました!!」

「っ……!!」

職業病からか、アラガミという単語を聞いた時にはライの身体は立ち上がって走り出していた。

「なんで来たの? 君の神機はまだ直ってないよ。」

ライが神機保管庫に向かうとそこには神機のロック作業をしてるリツカがいた。

「私も神機のロックが終わったらシエルターに向かうから君も早く行って。」

突き放すリツカの言葉、ライ自身それはわかっていた。だがそれでもライがここに来たのは…

ライが「ゴットイーター」だからだ。

そしてライは1つの紅い「神機」に目を向けた。

「……ゴメン。」

最近、謝ってばかりだなと内心苦笑を浮かべながら謝罪を言葉にするライ。そしてその紅い神機の下へ駆ける。

「え!? ダメ!! それは「リンドウ」さんの神機!!」

「わかってる。」

リツカの叫びに一言答え、ライはリンドウの神機を掴んだ。

「っ……!!!」

ライの身体に拒絶反応の激痛が走る。

ゴットイーターの神機はゴットイーターに投与された偏食因子と同じもので作られている。

だがゴットイーターは自身に投与された偏食因子と適合した神機しか使うことが出来ず、仮に違うものを使うと拒絶反応により神機に捕食される可能性がある。

「早く離して!! 適合外の神機を掴むと拒絶反応で君を捕食しちゃう!!」

リツカの悲痛の叫びを聞いてもライはリンドウの神機を離さない。

同時にこの神機保管庫の壁を破り、侵入した小型アラガミ『ヴァジュラテイル』が侵入してきた。その衝撃でリツカは吹き飛ばされ気を失う。

「リツカ!!」

リツカを呼ぶも返事はない。だがどうにかリンドウの神機を持ち上げることはできたライ。

しかしライの言うことは聞かずむしろライを振り回すリンドウの神機。

それでも無理矢理制御してヴァジュラテイルに一撃浴びせ、リツカとの距離を開かせる。

しかし神機による拒絶反応と捕食による侵食により膝をつき声にならない悲痛の叫びをあげるライ。

ヴァジュラテイルも無防備のライに攻撃しようとしたその時…

ライの横を1つの閃光が横切り、ヴァジュラテイルにダメージを当たった。

「大丈夫ですか!?!」

背後から声を掛けられる。振り向くとそこには黒髪で金色の目の少年が神機を構えていた。

「援護します。トドメを!!」

少年の言葉に頷きライは少年のレーザーでヴァジュラテイルが怯んだ隙を狙い、一閃。

その一撃が致命傷となりヴァジュラテイルは倒れた分解された。

同時にライも限界を迎えたのか、そのまま倒れ気を失った。

ライの危うさ

アラガミ侵入の事件が起きてから数時間。

アナグラ襲撃の報を受けたゴットイーター達は続々とアナグラに戻ってきた。

「皆さん。お疲れ様です。」

「そんなことより大丈夫だったの？アラガミに襲撃を受けたと聞いたけど。」

「見たところ対した被害は出てないようだけど。」

討伐に出ていた第1部隊も報告を兼ねてヒバリに問う。

「はい。幸い、神機保管庫で倒されましたので、人的被害はリツカさんが頭をぶつけたくらいです。」

「誰が倒したんだ？その時には神機使いはいなかったはずだ。」

「それは…」

ソーマの問いにヒバリは口を噤む。その姿にアリサ、コウタ、サクヤも首を傾げる。

「実は倒したのはライさんなのですが…」

「え!?リーダーが!？」

「どうやって…リーダーの神機はまだ…」

「それが現場にいたリツカさんによるとリンドウさんの神機を使ったそうです。」

ヒバリの予想外の返答に驚愕する第1部隊。

「今は医務室で寝てるようですが、検査によると少量ですがリンドウさんの偏食因子がライさんに取り込まれたそうです。」

「あのバカ…」

「でも…俺が同じ状況になったら同じことをしたと思う。」

「コウタ…」

「だってここは俺たちの家なんだぜ？帰るべき場所を守れるなら俺は今回のリーダーと同じ行動をとるよ。例え危険なことでもやらなければ守れないなら俺はやる。」

とはいえ今回のライの行動は結果的にはよかったとはいえ褒めら

れる行動ではない。

「コウタの気持ちはわかりますけど私は怒ります。」

「…アリサ。」

「リーダーはアナグラの中で一番働いています。神機の消耗に気づいていても討伐に出るほどです。」

「私たちと一緒にでもリーダーが一番危険な役割を担っています。新型神機の使い手ですからやれることが多いのは私も新型ですのでわかります。」

「だからでしょうか。リーダーは生き急いでいるように見えて心配してしまふんです。」

『今回の件だつて一歩間違っていたらリーダーは死んでいたかもしれない。そんな危険を犯したリーダーを同じチームである私達が叱るべきです。』

「…でも私もリーダーやコウタと同じ行動をしたいと思います。」

最後に目を泳がせてそう呟くアリサ。第1部隊の彼らはライがなぜそうしたのかわかつているのだろうか。

なにせ、彼らライと同じ…

「神を喰らう者」なのだから…

同時刻

医務室でライは目を覚ました。

「あ…起きました?」

「起きた!?!良かった〜」

耳から援護してくれた少年の声とリツカの声が聞こえた。

「ここは医務室か…」

そう言いながら身体を起こすライ。

すると少し涙ぐんだリツカがライに抱きついた。

「本当に良かった…」

「ごめん。心配かけた。」

「本当だよーもう二度と他人の神機を使わないで…」

「適合してない神機を使うと拒絶反応で捕食されちゃう。そうなったらもう助からない。だから絶対に他人の神機は使わないで。」

「……わかった。」

リツカの懇願にライは頷いた。

ライ自身も拒絶反応による激痛はもう受けたくないと思っている。

「約束だよ?」

「ああ。」

「よし、じゃあ私は君が起きたことを伝えてくるね。」

そう言うのとリツカは医務室を出て行った。

「リツカさん。良い人ですよ。神機のことをよく理解している。」

「そうだな。えつと…」

「そういえば自己紹介がまだでした。本日付で極東支部所属となりました。黒髪の少年はレンという名前のような。」

黒髪の少年はレンという名前のような。

「配属は医療班ですが一応新型神機のゴットイーターです。専門はアラガミ化の抑制の研究をしています。」

「アラガミ化の抑制…」

「はい。でも研究はしてませんが成果はまだまだなんですけどね。」

「そうなのか。あ、僕は…」

「皇ライさんですよ。この極東支部で最強と謳われる第1部隊の隊長を務める極東初新型神機使い。」

「……かなり過大評価してるね。僕はそんな凄い人間じゃないよ。」

「強ち間違っではないと思いますよ。神機使いとしてまだ1年も経ってないのに極東の皆に認められるのですから。」

スピード出世で隊長職についたライだがそのことに文句をいう者はいなかった。そういう意味ではライは極東支部の人間に認められていると言えよう。

「あ、すみません。話し込んでやって。」

「いや、こちらこそすまない。あの時の援護は助かった。ありがとう。」

う。」

「どういたしまして。」

ライの感謝の御礼にそう返して笑うレン。

「また横になってください。まだ疲れがとれてないみたいです。」

「いや、もう大丈夫。」

そう言つて立ち上がったライだがすぐにふらついてレンに支えられた。

結局もう一眠りして医務室を出たがサカキやツバキを筆頭にいろんな人から説教を受けるライの姿が見受けられたとか。

生存の可能性

アナグラの襲撃から数日。

「君の神機、直ったよ。」

「そうか。ありがとう。」

リツカに呼び出されたライは自身の神機が直ったことを告げられた。

「これでまた戦える。ありがとう。」

「うん。頑張ったよ。徹夜もしたし。」

「大丈夫か?」

「少し無理しすぎたからこれから休むつもり。君があんな無茶しなかつたらゆつくり直そうと思っただけだね。」

「ゴメン。」

「いいよ。謝らなくて。でも約束は守ってね。」

「わかった。というよりも僕もあの痛みは勘弁だから二度としないと思う。」

「……なんで絶対にやらないと言い切れないの? 君らしいけど。」

ライ自身はもうやらないと思っただけでもまた同じ状況に陥ったら

「ゴットイーター」として神機を振るうことを厭わないだろう。

……その神機が他人の物だとしても。

「はあ…ゴットイーターに『侵食』されてるね。」

「否定できない。」

「極東支部に新たに新人を迎い入れることになった。待望の新型神機使いだ。」

ツバキに呼び出されたライ。目の前にはツバキと金髪の少女と黒髪の少年がいた。

「本日付で極東支部第二部隊配属となりましたアネット・ケーニツヒです。よろしくおねがいます。」

「同じく第三部隊配属となりましたフェデリコ・カルーゾです。」

「極東支部第一部隊隊長、皇ライです。こちらこそよろしく。」

「存じております!!極東支部初の新型神機使用で、凄く強いゴットイーターなんですよね?」

目を輝かせながらそう言うのはアネットだった。

「ちよつと待ってくれ。なんでそこまで過大評価してるの?」

「ヨハネス前支部長から話を聞いたんです。貴方が凄いゴットイーターだって。」

そう答えるのはフェデリコだった。

「私も本部に行ったがお前の噂が流れてたぞ。前支部長が散々吹聴したらしいぞ。まああなたが間違っではないいな。」

「ともあれ新型の戦術はお前やアリサの方が詳しいだろう。時間があるときでいいから2人に教えてやれ。」

そう答えるのはツバキだった。そしてライを有名にしたのはヨハネスのようだ。

「わかりました。教えられることは教えますよ。」

「よろしく願います」

元気よくそう言う2人にツバキは次の指示を出す。だがそこでライは気づいた。

2人より先に来たとはいえ同じ「新人」のはずのレンがないことに。

新人と顔合わせをした後、ライはその場にいなかったレンを探した。

「あ、お疲れ様です。」

「ここにいたのか。」

レンは神機保管庫にいた。そして彼の前にあるのは、
“リンドウ”
の神機だった。

「新人の紹介に君がいなかったから探したよ。」

「あ、今日だったんですね。すみません。すっかり忘れてました。」

「医療班所属とはいえ新型神機使いなんだから顔合わせはしといた方がいいよ。」

「……そうですね。気をつけます。」

「小言はここまでにしてよろこそ極東支部へ。」

そう言つて飲み物をレンに差し出すライ。

「ありがとうございます。あ、これ『初恋ジュース』ですね。」

初恋ジュースとはサカキが構想した甘いような酸っぱいような苦いようなわけのわからない味のする清涼飲料水だ。飲んだ者は何とも言えない味に地に突つ伏したとか。因みにソーマはすでに被害者である。

「美味しいですね!!」

「声高にそう言えるのは君だけだろうね。」

「それでリンドウさんの神機の前で何をしていたんだ？」

「いえ、特には何も。リンドウさんとは前にお世話になったことがあります。少しの間ですが一緒に戦ったことがあるんです。」

「久しぶりに会えると思つたのですが行方不明になつていたとは……」

「リンドウさんも酷いですね。皆を置いてどこか行っちゃうなんて……」

「皆心配してるのに……」

「そう言うけど笑つてるぞ。」

「え？」

心配するような怒つてるような呆れるような声を上げるレンに対しライは真実を伝える。

レンは言葉ではリンドウを責めてはいるがその表情は呆れるように笑っていた。

「リンドウさんの性格を理解してるから笑ってるんだろ？」

「それにリンドウさんらしいだろ。フラフラしてるのは。」

「……そうですね。」

苦笑しながらそう答えるレン。そして再びリンドウの神機を見上げる。

ふとレンの腕が動いた。

手はリンドウの神機に向かっている。

「……レン!!」

ライはその伸びた手を掴んだ。

……その瞬間、*「感応現象」*が発生した。

その記憶は何故か*「リンドウ」*が出てきた。

あの日、リンドウと第1部隊が隔離したあの時…

プリティヴィ・マータを倒して一服していたがその後アリサの両親の仇であるディアウス・ピターが割れたステンドグラスの窓から侵入。第2ラウンドの開始。

その際に腕輪が壊れ神機を食われた。

絶体絶命の状況。だがそこに*「救世主」*が現れる。

*「特異点」*という救世主が…

救世主によりディアウス・ピターは撤退。リンドウは気を失った。映像はかわり次に映ったのは雪と木造の廃屋だった。

その一室でリンドウは救世主に看病されていた。

目を覚ますリンドウに驚いた救世主は離れたがリンドウは救世主に*「言葉」*を教えた。

“ お腹空いた ” と言う言葉を…
同時に再びリンドウは気を失った。

「どうしました？」

レンの声が聞こえた。どうやら現実に戻ったらしい。

「ゴメン。なんでもない。」

「用事を思い出した。行くね。」

「はい。お気をつけて。」

レンに一言言うとライは一目散に走り出した。

「…あれが感応現象か…凄いな。」

ライの足音が聞こえなくなるとレンは静かに呟く。

そして初恋ジュースを飲み干しました呟いた。

“ 人間の舌は肥えてるな ” …と…

神機保管庫を出たライは支部長室にきた。

「サカキ博士。至急話したいことが…」

「君か。いいよ入ってきて。」

サカキから許可を得て支部長室に入るライ。支部長室にはサカキの他にツバキもいた。

「君が慌てているのは珍しいね。どうしたんだい？」

「えつと…」

「私がいたら話しづらいことか？なら席を外すが？」

「いえ、大丈夫です。」

部屋を出ようとするツバキを抑え、ライは2人に報告した。

「リンドウさんが生きている可能性があります。」

黒い羽根

「…なるほど。新型特有の感応現象が起きたようだね。それでリンドウ君が生きていると。」

「昏睡状態だったアリサを呼び起こした新型特有の不思議な力だったか…俄かに信じがたいが。」

「ともあれ誰にも話さず最初に我々に話したのは良い判断だ。…：期待して裏切られる絶望をまた味わうのは酷だからな。」

ライからリンドウ生存の可能性の経緯を聞いたサカキとツバキはそう評した。

「うん。確証が取れるまでこの件は誰にも話さないように。いいね。」
「そうですね。あくまで僕が感応現象で見たのは過去ですから。」

「その通り。腕輪が壊れてかなりの日数が経っている。それはアラガミ化が進んでいるのも同義だろう。」

「ツバキ君。念のため、調査隊に廃寺方面の調査の指示を出してほしい。何かリンドウ君に繋がるものが残っているかもしれない。」

「わかりました。」

ツバキは返事を返すと踵を返した。

その際にライの肩に手を置き一言呟いた。

「ありがとう」と…

「さて、ツバキ君がいなくなったことだしもう少し詳しく教えてくれるのかな?」

「ええ。『あの子』にオナカ…スイタを教えたのはリンドウさんのようです。」

「…なるほど。確かにツバキ君がいる前では話しにくい内容だね。」
ライはサカキにもう一度感応現象で見た内容を話した。

今度は包み隠さず全てを…

「シオがそんなことを…実に興味深いな。」

「だけど特異点の力でもアラガミ化を完全停止させることは不可能だろう。だけどアラガミ化の進行をまだ遅らせているならば…希望は

ある。」

「君にもリンドウ君の『痕跡』を探してほしい。なんでもいい。リンドウ君に連なるものを持ってきてほしいんだ。」

「わかりました。」

「そつち行つたよ!!」

「アリサ!! ソーマの援護に入つて!!」

「コウタは牽制!!」

ライの指示がとぶ。そして指示どおりに動くアリサ、ソーマ、コウタの面々。

討伐対象はコンゴウの墮天種2体とオウガテイル1体。ライの復帰戦にしては比較的簡単なミッションだ。

「これで!!」

「終わりだ!!」

ライとソーマが同時に別々のコンゴウに一撃を与える。それが致命傷になり、コンゴウはその活動を停止した。

「あー、やっぱりリーダーの指示があると動きやすいわ。」

「久しぶりの実戦でしたけど大丈夫でしたか?」

「大丈夫だよ。リツカの整備がよかったのか前より扱いやすい。」

アリサの心配にそう返すライ。ちなみにソーマはコアを回収している。

「あまり無茶しないでくださいね。言っても無駄だと思いますが。」

「そういえばさ。新しく新人入ってきたよね。」

「アネットとフェデリコに会ったんだ。」

「うん。なんだか後輩ができたつてのは変な感じだよな。」

「極東支部だと僕とコウタが1番下だったからね。」

ライとコウタがゴットイーターになって以降新人は入ってこなかった。故に2人にとっては始めての後輩となる。

「アリサはロシア支部でゴットイーターになったのは昨年なんだっけ？」

「ええ。そうですけど。私にとっても始めての後輩ですよ。」

「僕とアリサと同じ新型だから時折一緒に組むことがあるだろうね。」

「そうなんですか？ちゃんと教えられるかな…」

心配そうにそう言うアリサ。以前の高飛車のアリサならともかく今のアリサなら心配ないと思うが…

「そろそろ迎えが来たぞ。」

「今行く。」

「リーダー、行きましょう。」

ソーマの言葉に返事を返し歩を進めるライ達。

その際、ライは足下に黒い何かを見つけた。

「羽根？」

手に取ると、それは黒い羽根だった。

「鴉…いや…」

ここは鎮魂の廃寺。雪で一面真っ白だ。そこに黒い羽根があれば目立つだろう。

「……」応回収しとくか。」

何故かその黒い羽根が気になったライはその羽根を回収した。

新人指導

「アネット。突っ込み過ぎ。それだとアラガミの攻撃を防げないし遠距離攻撃に巻き込まれるよ。」

「す…すいません!!」

「フェデリコは敵を前にオドオドし過ぎ。怖いのはわかるけどその恐怖心を乗り越えないとこの先やっていけないよ。」

「は…はい…」

「じゃあ次のシミュレーション行くよ。」

「お願いします!!」

現在、ライは新型の新人2人の指導を行っていた。

アネットもフェデリコも既に部隊配属となっているがまだ実戦には数えるくらいしか出ていない。故に戦闘技術が未熟である。

さらに新型神機の扱いにも慣れてないためライの指導のもと訓練室で戦闘訓練のシミュレーションを行っていた。

「さて、一通りシミュレーションしてもらったけどアネットは防御の意識が足りないな。その分攻撃特化してるといえば聞こえはいいけど今のままだとカウンターをくらう可能性が高い。あともっと遠距離武装を使おうか。」

「……はい。」

「フェデリコは恐怖心からか及び腰だった。まだ神機使いになってまもないから仕方ないと思うけどそれを乗り越えないとね。」

「……はい。」

「あとは2人共神機変形に手間取ってるね。そこは馴れだから仕方ない。」

「新型神機は出来ることが多いから戦況を見る目も養っていた方がいい。」

「戦況ですか?」

「そう。遠距離神機は弾切れを起こすと自己修復が終わるまで攻撃できないからね。だけど新型は遠近両方に対応できるようになっているからできることが多い。」

「部隊で自分の役割を見極める目は大事。できることが多いならなおさらね。」

「言葉で言っても分からないから次回は実戦で実際に見せるよ。それまでにある程度実戦馴れしてくれ。」

「はい!!」

シミュレーションを終えてアネットとフェデリコに総評するライ。とはいえライも新型神機を手にして1年も経ってない。極東支部初の新型神機使いでかなりの場数を踏んではいるが経験値は極東支部内では低い方だろう。

「君が持ち帰った黒い羽根だけど僅かながらにリンドウ君の『痕跡』が見られた。」

「そうですか。」

アネットとフェデリコの指導を終えると次はサカキからの呼び出しがあった。

「でも確証はまだ持てない。だから…」

「黒い羽根を見つけたら回収してほしいと。」

「ああ。その通りだ。」

「わかりました。」

「ところで君の方には何か変調はないのかい?」

「と言いますと?」

「君の体内には少量ながらもリンドウ君の神機のオラクル細胞が入っているからね。本来なら拒絶反応が起きてもおかしくない。」

「僕本来のオラクル細胞に捕食されたとか?」

「おそらくそうなんだろうね。まあ見たところ大丈夫そうだが何か変調があったらすぐに教えてくれ。」

「了解です。」

「またサカキのオツさんにきき使われているのか？」

「そんなところ。ちよつとほしい素材の回収を頼まれてね。」

「それなら私も手伝いますよ？」

「それは助かる。黒い羽根なんだけど。落ちてたら拾っておいて。」

「黒い羽根ですか？」

「あのオツさん…また変なものを…」

エントランスに戻つてくると任務終わりなのかソーマとアリサと出くわしたライ。

リンドウ生存の可能性はまだ伏せられているため彼等にもまだ話してはいない。

「でも羽根なんて何に使うんです？」

「さてね。また初恋ジュースみたいなものを作るんじゃない？」

「お前…仲良いならもつとマシなもの作らせろよ。」

アラガミ化の対処法

リンドウの手がかりとなる黒い羽根の回収はアリサ達の協力もあり滞りなく進んだ。

羽根も感応現象で見た鎮魂の廃寺方面だけではなく他の場所でも発見された。これによりライとサカキは一つの予想を立てる。

「リンドウはどこかを目指している」という予想を。

少なくとも黒い羽根が極東地域の広範囲で発見されたということはリンドウは移動していることは確かだろう。

そして本日、

極東支部のゴットイーター達全員が招集された。

「揃ったな。」

遅れてツバキがエントランスに入ってくる。そして皆に告げた。

「本日、1200（ヒトフタマルマル）より雨宮リンドウ大尉の搜索再開する。」

リンドウの搜索再開の報は当然ながらこの場にいる神機使いに衝撃を与えた。

驚かなかったのは知っていたライと難しい顔で考え込んでいるレンあたりだろうか。

「以上の観点及びDNAパターン鑑定の照合結果から対象を雨宮リンドウ大尉と断定した。よって先も言ったとおり本日1200より搜索を再開する。」

「だが腕輪の制御を失って久しいためアラガミ化等の影響が懸念される。接触は注意するように。」

「……いい歳した迷子の愚弟だが…皆、よろしく頼む。」

リンドウ生存の報は周りに活気を与えた。

特にこの報に喜びを隠せないのは第1部隊だろう。

あの日、暗躍があつたとはいえリンドウ1人置いて逃げ出した負い目は全員持っていた第1部隊。故に自分達で見つけたい思いは他よりも強い。

「リンドウが…生きてる…!」

「……サクヤさん!!」

特にこの報せに歓喜を隠せないのはサクヤとアリサの2人だ。

サクヤにとってリンドウは大切な存在であり、アリサにとっては操られていたとはいえリンドウを失ったのは自身の責任という負い目を強く持っている。

「フン、さっさと見つけて連れ戻すぞ。」

「ああ!!早く探しに行こうぜリーダー!!」

当然、ソーマもコウタもリンドウを探すのに異論はない。

だが…

「あ、第1部隊はこれまでの通常任務と遊撃的な広域調査を行なつてください。」

「え?!なんで?」

今にでも飛び出しそうな勢いのコウタを止めたのはヒバリだった。

「極東支部主力である第1部隊は強力なアラガミへの対応としてなるべくアナグラから離れないでほしいというツバキさんから指示です。搜索は第2第3部隊で行います。」

「そんな…!!」

「これは仕方がない。」

「ハンニバルの出現やアナグラの襲撃があつたから最低でも何人かのゴットイーターはアナグラにいるべきだと考えたらしい。」

「リーダー…」

「……サカキのオツさんからの指示か?」

「まあね。」

コウタの反論を止めたのは彼等のリーダーであるライだった。

ライはこの件の発表の前に支部長室でサカキにそう言われていた。

「まあリンドウさんの方はこっちに任せてくれ。リンドウさんのこと

だしすぐ見つかるだろうしき。」

「…タツミさん。」

「見つけたらすぐに連絡しますから。ね？ジーナさん。」

「そうね。リンドウさんに会いたいののは貴方達だけじゃないということよ。」

「新人も増えたことだし人手もどうにかなるだろう。」

第2第3部隊の隊員達がそれぞれ意欲を見せる。

彼等もリンドウに会いたい気持ちは同じなのだ。

「あ、先輩。神機の遠近切り替えの離脱タイミングやいろいろ教えてください!!」

「あ、私も!!私にも教えてください!!」

「わかったわかった。じゃあこれから一緒に討伐任務を受けようか。」

「はい!!」

とにかくリンドウの生存は公となった。これで多少は肩の荷が下りたことにライは少し安堵した。

アネットとフェデリコを連れてボルグ・カムランとクアトリガの討伐を終えたライ。

任務を終えて少し休んでいるとレンと会った。

「お疲れ様です。ここにいたんですね。」

「ついさつき戻ってきたんだ。君はこれから出撃?」

「いえ、実は貴方に伝えたいことがありますよ:」

「……わかった。場所を変えよう。」

少し歯切れの悪い言い方をするレンに気づいたライはそう言い立ち上がり、レンを連れてエレベーターに向かった。

医務室前の休憩所に着いたライとレン。

「それで話したいことはなんだい？」

「……正直、貴方に話すべきか悩みました。でも貴方はリンドウさんと同じくらい皆に信用されています。だから貴方“だけ”に伝えようと思います。」

「僕がアラガミ化について研究してるのは以前話したと思います。伝えることは“アラガミ化した神機使いの対処法”です。」

「アラガミ化は偏食因子の過剰摂取及び定期的な供給が途絶えたことよって体内のオラクル細胞の暴走し引き起こされる急激な変異現象です。」

「現在の研究ではアラガミ化したら元に戻ることは不可能とされています。また人によつて培養されたオラクル細胞は多種多様な変異を遂げる傾向があり、一般的な神機でそのオラクル細胞の機能を停止させることは極めて困難とされています。」

「しかし、アラガミ化した神機使いの神機ならそのオラクル細胞を機能停止させることができ、結果としてアラガミ化した人間を“殺す”ことが出来ます。」

「故に現在分かっているアラガミ化した存在の対処する方法は大きな矛盾を孕んでいます。アラガミ化した神機使いの神機で殺す”こと”です。」

「勿論、今後の研究でアラガミ化しても戻す技術が生まれるかもしれませんが。ですがリンドウさんがアラガミ化していれば殺すしかありません。」

「リンドウさんの足跡を辿つて運良くリンドウさんと出会えたとして、彼がアラガミ化していたら……」

「貴方はそのアラガミを“殺せますか”？」

「……まるで僕にリンドウさんを殺してほしい言い方だね。」

アラガミ化について話しつつなにかライを試すように話すレン。

「そんなつもりはありません。ですがどんな時でも最悪な事態を想定することは大事ですよ。……貴方も“そういう”人ですよね。」

「否定はしない。だけど…」

「この世界は常にわがままで不条理な選択を迫ってくる。そして選んだ選択が現実になりそれは連綿と続いている。善悪問わずに。」

「あの日、あの時、リンドウさんが選んだ選択は正しかったのでしょうか？あの選択は皆幸せだったのでしようか？」

「そして、貴方はどんな選択をしますか？」

また試すような物言いをするレン。

「すみません。まだ搜索も始まったばかりなのにこんな暗い話をしちゃって…」

「僕は医務室に戻りますね。それじゃ。」

「レン。」

話を切り上げて医務室に戻るレンをライは呼び止めた。

「君の言う通り、この世界は残酷で不条理で理不尽で救いようのない世界だ。」

「じゃあ、なんでこの世界に未だに人類は生き残っていると思う？」

「え？」

「わからないなら君も考えてみてほしい。答えが分かればリンドウさんの選択の意味も分かると思うから。」

言うだけ言うとライは飲み物を買ひ、エレベーターに乗った。

「人類が生き残っている理由…」

レンはライからの問いの意味が分からずしばらくの間、立ち尽くしていた。

ハンニバルの進化

リンドウの搜索が再開するもその搜索に参加できない第1部隊の面々はこれまでとかわらず、アラガミの討伐の日々を送っていた。

ライも討伐に出つつ、アネットとフェデリコの新人の指導を繰り返して行っていたり、2人のスタンスにアドバイスを送ったりしていた。リンドウの搜索はまだ始まったばかりとはいえ色々な策を練って見つけようとしていた。

例えば女の子好きのリンドウだからということと女性ゴツトイーター達で呼び出す作戦をコウタが考えつくも失敗。

他にも酒好きでもあったので一帯に酒を撒いて匂いに釣られて捕らえようとするもこれも失敗。

各々が色々と考えてリンドウを探すもやはり見つからないでいた。

「なかなか見つからないみたいですね。リンドウさん。」

「そうだね。でも極東地域にはいると思うけどね。」

「それにしても貴方はやっぱり凄いですね。1人でスサノオを倒すなんて。」

今回も討伐に出ていたライだが今回はレンと2人での任務ミッションに出ている。

あの対話以降、ライの討伐にレンがついてくるようになり、以前ライがなんで最近自分と一緒にいるのかと聞くと…

「貴方の問いに答える為」です。とレンは答えた。

「君もシユウを引きつけるだけでよかったのに単独で倒してるじゃないか。他所のフェンリルなら主力級だよ。」

「いやあ…大型種で禁忌種を単独討伐に比べたら僕なんてまだまだですよ。」

「禁忌種ねえ。そういうえば最近ハンニバルの目撃例を聞かないな。」

「ハンニバル？」

「ああ、レンは知らないんだっけ？ 巷では不死のアラガミとか呼ばれてるんだよ。前に神機が壊れた原因なんだけどね。」

「不死のアラガミ…それって倒せるんですか？」

「どうだろう？ コアを回収しても一定時間で擬似のコアを作って復活するから現状はコアを回収したら即離脱らしい。」

「不死のアラガミ…確かに死なないなら数は増えてもおかしくないです。すね。」

「案外、リンドウさんが倒してるかもね？」

「確かにアラガミ化が進んでたら身体がアラガミですし倒すことができると思いますよ。……でも」

「これはどの生物にも言えることなのですが絶滅を前にした時というのは進化^変化するんです。だからハンニバルの姿がないのは絶滅したか大きな変化の前触れかもしれません。」

ゴットイーターでありながら研究者でもあるレンは研究者の視点でそう答えた。

「不死性の他に何かを身につけるのか…勘弁してほしいな。」

「まあまあ絶滅したかもしれないですし出てきたら対処しましょう。」

アナグラに戻ってくるとなにやら騒ついていた。

「どうかしたのか？」

「あ、リーダー…お帰りなさい。」

「ブレンダンさんが行方不明になったみたいで…」

「行方不明？」

近くにいたアリスに事情を聞くとそう返ってきた。どうやら防衛班の1人であるブレンダンの消息が分からなくなったらしい。

「一緒に行動していたのは？」

「カノンさんとアネットさんが一緒に行動していたみたいです。でも」

2人は戻ってきたのですが今は医務室で治療中です。」

「そうか。2人に話を聞いてみないとな…」

「先輩!!」

アリスとそのような会話をしていると突然ライに金髪の少女が絶りついてきた。

「アネット?」

「お願いします!!ブレンダンを…ブレンダンを探してください!!!」

「いや、探すよ。探すけど少し落ち着いて。」

「は…はい…」

「とりあえず君達だけでも無事でよかった。それで何があったの?」

「それがいつも通りにアラガミを討伐したら今までに見たことないアラガミが現れて…」

「新型か…どんな形だった?」

「えっと…黒っぽいトカゲのようなドラゴンのような…でも身軽で紫の火を噴いたりして凶暴でした。」

「それってハンニバルじゃないですか?」

「多分ハンニバルの変異種だね。最近見かけないと思ってたけど変異種が出てきたとは…」

アネットの話を一緒に聞いていたアリスにそう返すライ。レンと話していたことが数時間後に現実になるとは思わなかったと目を丸くした。

「私もカノンさんも疲弊しちゃってブレンダさんが隙を作ったら離脱しろと言ったんです。それで私達は離脱出来たんですけどブレンダさんが行方不明になっちゃって。」

「私が…私が新型神機をうまく使えてたら…」

「こんなことが起きてなかった…かい?それは驕りだよ。」

「……え?」

「防衛班は死んではならない。そう教えたはずだぞ。」

「……タツミさん。」

話が聞こえたのか防衛班の隊長であるタツミがアネットに向かっ

て言った。

「アイツがお前とカノンを離脱させたのも死なせない為だからだ。もちろんブレンダンの奴も死ぬつもりはないさ。付き合いが長い俺が言うんだから間違いない。」

「そうですね。ブレンダンさんは堅実な戦いを得意としてますからうまく逃げきっていると思います。」

「アイツのことだ。電波が通りにくいところに隠れてるんだろ。」

明るく言っただけに、アイツも心配してないわけではない。

でも明るく言えるのは、信じているからだとライは思った。

「お前は医務室に戻れ。医療班から太鼓判をもらったらとことん働いてもらうからな。」

「……はい。」

タツミに言われアネットは医務室に戻っていった。

「悪いな。アネットの面倒を見てもらって。」

「いえ、同じ新型ということで面倒をみるように言われていますし。」

「そうか。ところでリンドウさんが戻ってきたらアンタは隊長のままなのかな?」

「いや、僕は空席に座っただけですから席の本来の主が戻ってくるならその主が座るべきだろうし。」

「そうですか? でもリンドウさんよりもリーダーの方が統率が取れると思いますけど…第1部隊は我が強い人の集まりですし。」

「アリサ、君もその中の一員だからね。」

救出

リンドウの捜索にさらにブレンダンの捜索も加わり、第1部隊も捜索に加わるようになった。

リンドウと違いブレンダンの腕輪は壊れていないと思われるリンドウよりもブレンダンの捜索を優先することになった。

そしてライはアネットとフェデリコと共にアラガミ討伐を兼ねた捜索に出ている。

「……動きが悪い。」

シウウ種の新種『セクメト』と対峙してる中ライはアネット達を後方から援護しつつ、戦況を見ていた。

その際、目に余ったのはアネットの動きだしの鈍さだった。

アネットの戦い方は神機を力の続く限り神機を振り回す。防御を蔑ろにした超攻撃スタイル。

だが今は動きが悪い。そのせいで本来の戦い方ができず、今はセクメトの攻撃を盾で防いでいる。皮肉のもそれが囷の役割を果たし、フェデリコの攻撃でセクメトにダメージを与えているが。

「まったく…グボロも倒さないといけないのに…」

深い溜息を吐きつつ、ライは神機を強く握る。

「とりあえず、アネットは外すか。」

そう呟き、ライはセクメト討伐に赴いた。

「フェデリコ。グボロは北東エリアに現れたみたいだからそっち行こうか。」

「は…はい!!」

「アネットはこのエリア中心にブレンダンさんの捜索を頼む。」

「え…?」

「小型アラガミがいるだろうけどアネットなら大丈夫だから。じゃあ頼んだよ。」

「あ…あの私も討伐に…」

指示を出すライはフェデリコを連れて北東エリアに向かう。だがアネットも討伐参加を直訴するが…

「キツイこと言うが邪魔。」

「ツ…!!!」

「生死を賭けた戦いで集中できない奴がいたら周りはどうなると思う?」

「え…」

「その答えがわからないなら考えること。」

そう言うと今度こそライはフェデリコを連れて北東エリアに向かった。

「あの…先輩。」

「なに?」

「よかったですか? あんな言い方して…」

しばらく歩いているとフェデリコが恐る恐るライに尋ねる。

「ツバキ教官に教わっただろ? 生きるか死ぬかの戦いの心構えを。」

「そうですが…」

『そもそもアネットが本調子ならセクメトはフェデリコと2人で倒せただはずだ。もちろんアネットがブレンダンさんのことを気にしているのは分かる。それでも討伐のときは討伐に集中すべきなんだ。』

アネットもフェデリコもライの指導と防衛班の活動によって並の神機使いよりも腕が立つ実力を身につけていた。別の支部ならエース格と呼ばれるくらいだろう。

「それにグボロは嘔み付いたり暴れるから今のアネットじゃ対処しきれないからね。」

「それに気がかりがあるならそつちに集中させた方がいい。」

「中途半端ではやっていけないからね。 ゴットイーター 神機使いは。」

ライとフェデリコがグボロ討伐に向かっているその頃：

アネットはライの指示通りブレンドンの搜索に出ていた。

「ブレンドンさん!!どこですか!!」

遠目に見えるアラガミに注意しつつブレンドンを探すアネット。

だが声を上げて返事が返ってくることはなく、廃墟の中を確認するも誰もいない。

「この辺りにはいないのかな…」

辺り一帯探し回ったもの見つからず諦めの表情になるアネット。

「とりあえず先輩と合流しようかな…でも邪魔って言われちゃったし…」

いつもより自分の手足が動かないことはアネット自身自覚していた。

体調が悪いわけではないのに身体が鉛のように重い。少し走っただけなのに息切れをする。

そして生死の間際にいるのに集中してない。

「私…本当にダメな奴だ。」

自分の未熟さに頭を抱えなくなるアネットだがとりあえずこのエリアにブレンドンがいなかったことを報告しないといけない。

アネットも北東エリアに向かうもやはりその足取りが重かった。

「先輩!!あれ…!!」

フェデリコが焦るようにライを呼ぶ。ライもその先にあるものを見た。

討伐対象であるグボロに追い詰められている“青い服”を着た神機使いの姿を…

「ブレンダンさん!!」

「近づいたらスタングレネードを投げる。フェデリコはその隙にブレンダンさんを安全な場所に移動してアナグラに連絡を…」

「はい!!わかりました!!」

フェデリコに指示を出すと走り出す。そしてグボロとの距離が近くなったらライはスタングレネードを使った。

閃光によりグボロの動きが止まる。その隙にフェデリコがブレンダンに駆け寄った。

「ブレンダンさん!!」

「フェデリコ…それにアンタも…」

「話はあとです。フェデリコ。」

「はい!!ブレンダンさん。俺に捕まってください。」

「……すまない。」

フェデリコの肩を借りてブレンダンはフェデリコとともに安全圏に移動した。

残るはライと今回の任務の討伐対象であるグボロのみ。

グボロの咆哮を合図にライとグボロ・グボロの戦いが始まった。

贖罪

「すまない。迷惑かけた。」

「いえ、無事でよかったです。」

ライとグボロから離れ、近くにアラガミのいない場所まで移動したフェデリコとブレンダン。そこで持参していた救命道具でブレンダに応急処置をする。

「アネットとカノンは無事か？」

「はい。2人とも無事で既に復帰してます。」

「そうか。だが俺がこの体たらくじゃ世話ないな。」

「何を言ってるんですか。ブレンダンさんがアネット達を逃がしてなければ2人は死んでいたかもしれないですよ。」

「こんなに怪我してるのに生き残ってたんですから尊敬します。」

「……俺は……尊敬される奴じゃない。」

「え？」

肩や足に包帯を巻くフェデリコにブレンダンの呟きは聞こえなかったようだ。

同じ頃、ライとグボロ・グボロの戦闘も続いていた。

「いつものよりも動きが速い……よく見ると少し大きいな。」

攻撃を加えつつ、いつものグボロ・グボロと違うと感じたライ。

実際、動きも速く、砲塔から放たれる衝撃波は辺りの瓦礫も吹き飛ばすほどの威力があった。

「特殊なコアでも食べたのかな。」

脳裏でそんなことを考えながらライはグボロの攻撃に対応していく。いかに強くなるうともライは少し時間をかければすぐに対処で

きる。

故にライが強いと言われる所以はこの対応力だと言えるだろう。

「先輩!!」

「アネット。」

グボロの攻撃を避けているとアネットが合流した。

「援護します!!」

「……大丈夫?」

「はい!!やります!!」

「そうか。言つとくがいつものグボロより強力だから気をつけろ。」

「了解です!!」

アネットが加わり攻勢に出る。アネットの動きも本来の持ち味の超猛攻によりグボロの牙を砕き、砲塔と胴体を潰した。

程なくしてグボロは倒された。

「セクメトの時も今くらいやってほしかったね。」

「すみません。」

「でも復活したならいいよ。さて、フェデリコに連絡しないと。」

「そういえばフェデリコはどこにいるんですか?」

「ブレンダンさんと一緒だよ。」

「アネット。」

アネットに説明しているとフェデリコに肩を借りながら歩くブレンダンと合流した。

「……ブレンダン……さん……」

「すまないな。心配かけた。」

「ブレンダンさん!!!」

アネットがブレンダンに抱きつく。フェデリコに支えられているものの態勢が悪く地面に倒れた。

「こちら、ライ。討伐完了とブレンダンさんを保護したから医療班の準備させといて。」

そんな3人を他所に通信機でアナグラに連絡するライ。この後、へりでアナグラに戻り、ブレンダンは医務室に収容された。

翌日、ライはタツミと一緒に医務室を訪れていた。

「よう。怪我してるけど案外元気そうだな。」

「ああ。心配かけた。」

「通信機は持ってなかったそうですね。」

「ああ、通信機は落とした時に故障したみたいだな。」

医務室に訪れたのは当然ながらブレンダンの見舞いである。昨日は検査などがあり、面会謝絶だったのだ。

「本当にすまない。リンドウさんの捜索してたのに俺が行方不明になるなんて本末転倒だ。」

「まあ通信機が使えなくなったんだからそれは仕方ないって。」

「そうですね。無事に戻ってきたんですから今は喜びましょう。」

タツミとライが慰めるもブレンダンの表情は冴えない。

「正直言つて俺は多分死のうと思つたんだと思う。」

「俺はアーク計画の際、自分は生きるべきか悩んだ。そして生きたいと決めて方舟に乗った。」

「だがアーク計画は第1部隊に阻止されてその経緯をタツミから聞いた。自分が恥ずかしかったよ。最低で情けない愚かな男だつて。」

「ブレンダンさん。」

ポツポツと呟くブレンダンの独白。

「だから俺も償わないといけないと思つた。俺は神機使いとして俺自身が許せない選択をした。その償いを。」

「だから新種アラガミと出くわしたとき、少しだけ嬉しかった。償う方法が見つかったと思つた。」

「だが、いざ死を直前にすると怖くなった。死にたくないと思つた。逃げた時に他のアラガミに襲われてできたものだ。」

「気がつけばスタングレネードを使って逃げ出してたよ。この怪我も逃げた時に他のアラガミに襲われてできたものだ。」

「自分で決めたことも実行できないなんて本当に情けないよな。」

「……死にたくない。生きたいと思うのは普通の感情だと思いますよ。」

自嘲気味に言うブレンダンにライはそう返した。

「それに償わないといけないのは僕の方です。」

「アーク計画を否定して現状維持を選んだのは第1部隊です。だから僕達は証明しないといけないんです。」

「証明？」

「はい。僕達の選択は間違っていないかつたと皆を納得させられるように証明しないとイケない。それが僕達の贖罪です。」

「だからブレンダンさんには生きてもらわないと。生きて僕達の贖罪を受けてほしいです。」

「だから死んで償うなんて安易な選択をしないでください。職業柄死ぬことは楽にできるんですから。」

「……そうだな。すまない。」

「まあ難しいことは怪我を治してから考えろ。怪我が治ったらリンドウさんの搜索で考える暇はないけどな。」

「そうだ。新種アラガミはどういうのでしたか？」

「ああ、前に映像で見たハンニバルだったか？あれに似てたが……」

話題はそれでブレンダンが遭ったという新種アラガミの話になった。やはりハンニバルの変異種らしい。

ともかくブレンダンが無事に戻ってきた。あとはアラガミ化の懸念があるがリンドウの行方のみ、新型変異種のハンニバルも気になるが頭の片隅に置くしかない。

黒いハンニバル

「思ったんだけどさ。リンドウさんがアナグラに戻ったらこの部隊の隊長は誰になるの?」

久々にライ、アリサ、コウタ、ソーマの第1部隊のメンバーで構成された討伐任務を終えて帰りのヘリを待っている中、不意にコウタがそう言った。

「え?それはリンドウさんが隊長に復帰するんじゃない?でも統率力はリーダーの方があつような…」

「前にタツミさんにも聞かれたけど、僕はリンドウさんに復職してもらうつもりだよ。」

「え?そうなの。」

「うん。僕は偶然空いた隊長職という空席に座っただけだからね。本来の主が戻ってくるならその席を譲るつもりだよ。」

「なんか勿体ないですね。」

そんな話をしていると慌てるような声色のヒバリから通信が入った。

「皆さん!!至急救援に向かつてもらえませんか!」

「どうかしたの?」

耳にしたのは救援要請。だがヒバリ自身が焦っているのか重要な情報が入ってこない。

「落ち着いて。とりあえず救援に行くのは構わない。場所は?」

「鉄塔の森です。そこに突然アラガミが多発しまして…」

「多発?そこに他のゴットイーターは?」

「タツミさんとカレルさん、シユンさんが!!でもこの数は対処できません!!」

「わかった。正確な数がわかったら連絡を。」

そこで通信を切り、アリサ達に救援の件を伝えるライ。

「アラガミが多発?そんなことがあるんですか?」

「さあな。だが実際に起きている。理由は分からねえが。」

「来たよ!!」

すぐにへりに乗り込み、鉄塔の森へと飛び立つ。

鉄塔の森に着くと意外な光景が広がっていた。

「死んでるのか?」

「みたいだな。」

広がっていたのはコンゴウやグボロ・グボロ、シユウといったアラガミの死骸。だがコアはそのまま残っていた。

「コアの回収をしてないということはタツミさん達の仕業じゃないですね。それに大きな爪で抉られた傷ですから恐らくアラガミの仕業かと。」

「ソーマとアリサはコアの回収を頼む。僕とコウタはタツミさん達と合流する。」

「ああ。」

「わかりました。」

すぐに指示を出すとライとコウタはタツミ達と合流するため移動を始めた。

タツミ達は意外にもすぐに見つかった。

「タツミさん!!」

「アンタ達!!来てくれたのか!!」

「ヒバリさんの指示で。それより大丈夫ですか?」

「ああ、どうにかな。」

ライ達がタツミ達を見つけたのはタツミが“黒いアラガミ”に殴り飛ばされた瞬間だった。

「あれってハンニバル!!」

「えっと…例の不死のアラガミか!？」

「その変異種のようなです。」

注意深く黒いハンニバルを見るが例のハンニバルはタツミ達が戦っていたと思われるコンゴウを爪で引き裂いていた。

だが次の獲物はライ達とばかりにその爪を振り下ろす。

「クツ…!!」

ライも防ぐためにシールドを展開し爪と触れた。……その瞬間

ライの感応現象が発動した。

苦しげな声で自問自答をするリンドウの声。

痛い、苦しい、死など何かに追い詰められているかのような呻き声。

視界もリンドウの目線なのか雪道を歩いている。恐らく鎮魂の廃寺だと思われる。

そしてリンドウが目指していた場所もわかった。

ここで意識が途絶えたのか視界が黒く染まる。

次は恐らくすぐ前の光景だと思われる。

逃げるコンゴウやグボロ・グボロに一撃で仕留めるリンドウ。

その拳は黒いハンニバルと酷似していた。

そしてタツミ達と交戦していたコンゴウにも手を上げてコンゴウを倒した。

だが制御できないのかその爪をタツミに振るい、殴り飛ばした。

そこにライとコウタが合流したのだ。

意識が覚めると黒いハンニバルは闘争心を失ったのかその場から去っていった。

「スゲエ…追い払ったよ。」

「どうにか…助かったのか？」

シユンとカレルがそう呟くがライは心ここにあらずの状態だった。

この時、ライは前に問われた” 問い ”を思い出していた。

” リンドウさんの足跡を追って運良く出逢えたとして、その時リンドウさんがアラガミになっていたら、貴方はそのアラガミを殺せますか？ ”

何故この問いを思い出したのかライは分からない。いや、わからないフリをした。

ただ認めたくないのだ。

あの黒いハンニバルが…

” リンドウ ” ということを…

覚悟

「皆さん。ご無事でしたか？」

「ああ。例のハンニバルが逃げたおかげでなんとかな。」

「お前らのリーダーが来てくれなかったらどうなってたかわからなかったけどな。」

「とりあえずアンタ達も来てくれて助かったぜ。」

アナグラに戻ると危機を乗り切った3人に心配の声が上がるが3人とも無事をだったことに安堵に包まれる。

「改めてお礼を言わせてくれ。ありがとう。」

「御礼はヒバリさんに言ってください。私達を呼んだのもヒバリさんの指示です。」

「それに御礼を言うのはリーダーにしてよ。俺は何もできなかったしアリサとソーマはコア回収に明け暮れてたしね。」

「そうなのか!? さすがヒバリちゃん!!」

「ところでリーダーが何か考え込んでいたようにみえたのですがタツミさんはなにか知ってますか？」

ライはアナグラに着くとさっさとアナグラ内に入っていった。だが神妙な表情をしていたのがアリサは気になったのだろう。

「いや、確かに考え込んでいる素振りだったけど賢い奴の悩みなんて頭悪い俺が分かるはずないからな。まあ話してくれるまで待つのも隊員の仕事なんじゃないか?俺のどこなんか意思疎通とか考えてることなんかさっぱりわからないし。」

「そうですね…」

「俺はよくわからないけど。アンタ達のリーダーのやることは結果的に良いことに繋がると思うぞ。」

「だね。その分、無茶するのはアレだけど。」

コウタは諦めてるのかそれとも信用してるから楽観してるのかライの様子が変わったことに気づきつつも今は見守るつもりのようだ。

だが2人はこの選択を少しばかり後悔することになる。

「大変だったみたいね。」

「いえ、そこまで大変ではないでしたね。ハンニバルの変異種とも相対したのは数分も満たなかったですし。」

アナグラに戻ってきたライはサクヤの下を訪れていた。

「そう。とにかく皆が無事に戻ってこれてよかったわ。」

「ええ。サクヤさんの方はリンドウさんの搜索してたそうですが首尾は……」

「……残念だけど見つからなかったわ。本当にどこにいるのかしらね。」

暗い表情でそう言うサクヤ。その表情はライには半ば諦めてるよ
うに思えた。

「……サクヤさん。聞きたいことがあるんですが。」

「なにかしら?」

「……もしも、リンドウさんがアラガミ化していたら……サクヤさんは撃
てますか?」

「……………え……?」

「すみません。でも腕輪が壊れてかなりの日数が経ちました。搜索が
再開して痕跡も見つからない。だとしたら……リンドウさんはもう……」
「……………」

ライの言いたいことが分かったのかサクヤは俯いた。そしてライ
はそれがサクヤの答えと判断した。

「すみません。変なことを言いました。今のは僕の思い込みに過ぎま
せんので。ましてや僕がこんなことを言ったらダメですよね。」

「少し疲れてるのかもしれませんが。自分の部屋に戻りますね。」

そう言うライはサクヤの部屋を出て行った。

翌朝、午前5時。ライは神機保管庫にいた。

リンドウの神機を前に立ち尽くすライ。その姿は躊躇っているようにみえる。

だが覚悟を決めたのかライはリンドウの神機に手を伸ばした。

「リツカさんにまた怒られますよ。」

伸ばした手が神機に触れる直前、少年の声が聞こえた。

「……レン。」

「……ここで始めて貴方と会ったんですよ。そんなに日は経ってない筈なのに妙に懐かしいですね。」

声の主であるレンはそんなことを言いながらライの下へ来る。

「……まだ寝てなくていいのか?」

「なんだか胸騒ぎがして目が覚めたんですよ。そしたら……」

「……すまない。」

「こんな朝早くから出撃ですか。」

「そんなところだよ。サカキ博士から極秘任務を与えられてね。」

「僕も手伝いますけど?」

「いや、いい。かわりに伝言を頼めないかな?」

「伝言ですか?」

「うん。第1部隊の皆に。」

「わかりました。」

レンに伝言を託すライ。

「それじゃ行ってくるね。」

「はい。行ってらっしゃい。」

神機保管庫の外でライとレンは別れた。

レンは遠ざかるライの背中に目を向けながら小さく呟いた。
「覚悟を決めたんだな……なら僕も行かないと……」

伝言

ライにとって単独での任務は然程珍しいことではない。

前支部長ヨハネスの時代から特務と称して禁忌種の討伐に赴いたり、小型や中型種アラガミの単体討伐は1人で出撃していたからでソーマやリンドウと比べたらまだ少ない方と言えるだろうがそれでも単独任務は多い方に分類される。

そして今回も単独で「大物」を狩る為にエイジスに赴いたライ。しかしエイジスにはアラガミどころかライ以外誰もいなかった。

「リンドウさんの神機……忘れてきたな……」

静寂が包む中、そんなことを呟くライだが当然ながら誰からの返事も返って来ない。

ライ以外誰もいないエイジスに立ち尽くすまま刻々と時が進む。しかし長らく続いた静寂の刻は小さな音により終わりを告げた。

「……来たか。」

小さな音は地鳴りのようにまるでこちらに近づいているように地鳴りの音が徐々に徐々に大きくなっていく。

この地鳴りの正体を知っているのかライは自然と神機を握る力が強くなる。

そして……地鳴りの正体が姿を現す。

黒い皮膚の蜥蜴トカゲ。だが口からは紫の炎を吐き出す姿は架空の生物とされる龍を彷彿させる。

また片腕には籠手のようなものを身に付けている。その籠手には女神のようなものが彫られている。

「必ず来ると思っていた。……ここが「貴方」が目指していた場所で終着点だったから。」

ライは現れた漆黒の怪物に語りかける。返事が返ってくるはずがない。

それでもライは言葉を続ける。

「今の貴方に「意識」があるかは知らない。でも怪物その姿である以上、僕のやることは変わらない。」

淡々と静かに語るライ。神機をいつでも振るえるように構えた。そして次の一言が1人と1匹による大戦争の開戦の幕開けとなった。

「……今、楽にさせます。ハンドウさん
ハンニバル」

この言葉を皮切りに漆黒の怪物は咆哮を上げライに飛びかかった。

「見つかった?」

「いえ、部屋にもいませんでした。」

場所はかわってアナグラ。エントランスでアリサとコウタは何やら話し込んでいた。

「お前ら、どうした。」

「あ、ソーマ。リーダー知らない?」

「一緒に朝食を取ろうと思ったのですが部屋に居なくて…」

「アイツが?見てないな。」

「そうですか。こんな朝早くにどこに行ったのでしょうか?」

「おはよう。こんなところに集まってどうしたの?」

「サクヤさん…リーダーを見かけませんでしたか?」

「リーダー?見てないけど。どうかしたの?」

ソーマとサクヤも合流してライ以外の第1部隊が集結した。

「朝早くからいないんだと。」

「居住区も一通り探したけどいかなかったよ。というかりーダーは髪を見たらすぐ分かるだろうし。」

「そう…昨日はいたからいなくなったのは今日なのよね。私も昨日は話したし。」

「アイツだってガキじゃねーんだ。放つとしても勝手に戻ってくるだ

ろ。」

「確かに…：そうですけど…」

「あの…」

各々話し込んでいる中、その第1部隊に話しかける声があった。

「アネット？：それにフェデリコ。」

「どうしたの？」

「あ、実は先輩から皆さんに伝言を預かってまして…」

「伝言？」

「リーダーに会ったんですか？」

「いえ、私たちのターミナルに先輩からメールが届いてまして。内容が皆さんに対しての伝言でして…」

「その伝言というのは…」

「はい。私の方は一言だけでしたけど “来るな” って…」

「俺の方は”大丈夫だから”でした。」

「来るな？：大丈夫だから？」

アネットたちから聞いたライからの伝言に首を傾げる第1部隊。

意味としては自分は大丈夫だから増援には来るなということだろう。

「伝言は伝えましたから俺たちは行きますね。」

「ええ。ありがとう。」

「来るな？：大丈夫だから？：どういう意味だ？」

「言葉通りの意味ならアイツは俺たちに来て欲しくないということだろう。」

「そうね。でもわざわざ伝言を残すなんて…：今までこんなことは一度もなかったのに…」

「とりあえずヒバリさんのところに行きましょう。オペレーターならリーダーの居場所が分かるはずですよ。」

「あ、皆さん。」

「ヒバリさん。リーダーがどこにいるか知らない？」

「ライさんですか？任務の受付はされてませんが少しお待ち下さい。」

ライの腕輪の位置情報を調べ始めるヒバリだがライの居場所よりも別の情報を伝える。

「エイジスに新種のアラガミの反応があります。恐らく例の黒いハンニバルかと。」

「そう。リーダーを見つけたら至急向かうわ。」

「え…ちよつと待って…これって…」

「どうかした？」

ヒバリの反応がコウタが問うとヒバリは啞然としながらも言った。

「えつと…例のハンニバルと第1部隊隊長…つまりライさんが単独で交戦中です。」

「え…!？」

「リーダーが…1人で…？」

「…あの大馬鹿野郎…!!」

騒然とするコウタとアリサ、怒気を込めるソーマ。

「行くぞ!!」

「待て!!まだ動くな。」

ソーマの一言で第1部隊の面々が動こうとするもそれを制止する声が上がる。

「ツバキ教官!!」

「何故ですか!?!こうしているうちにもリーダーが…!!」

「分かっている。だがそれでもだ。まだ動くな。」

「だったら早くしろ。話があるんだろ。」

「ああ。とはいえ私は“奴”に利用されたのだからな。」

「利用？」

「例の黒いハンニバルは恐らくアラガミ化したリンドウだ。それにいち早く気づいたからこそ奴は1人で向かった。」

「そんな…」

「どうして…」

「サクヤ!!お前はリンドウを撃てるか?」

「それは…」

「お前達もだ。お前達はリンドウと戦う覚悟はあるのか?」

ツバキの問いに誰も答えられなかった。

リンドウの腕輪が壊れて日数が経っている。アラガミ化してる可能性も搜索が再開された時にはその可能性もあった。

しかしアナグラのゴットイーター達はライを除いて誰もリンドウがアラガミ化してないと信じていた。もしくは分かっていたながら目を背けた。

「私は奴からお前達の足止めを頼まれた。だがそれでも行くなら止めはしない。但し今ここで覚悟を決めろ。リンドウと戦う覚悟をな。」

「俺たちの仕事は1人で抱え込みがちなアホなリーダーを支えることだ。これまでもこれからも。」

「ほう。お前がそんなことを言うとはな。」

最初に覚悟を決めたのはソーマだった。次に口を開いたのはコウタだった。

「うん。俺も覚悟できました。まだ頭の中で整理できてないけど：リーダー1人に辛い思いはさせられないから。」

「私：楽観的かもしれないけどなんとかなると思っています。リーダーが何も考えもなしにこんなことするとは思えません。」

「そうか。」

「私は…」

「サクヤ、お前は残れ。これは命令だ。……2度も苦しい思いをする必要はない。」

「いえ、私も行きます。見届ける為に…」

「そうか。なら、エイジスで取っ組みあつてる馬鹿達に伝言を頼む。」

「2人とも無事に帰還した場合のみこの件は不問とする。以上だ。」

「あの…止めなくてよかったんですか？」

「頼まれたとはいえ奴もアイツらを止められるとは思ってない。あくまで時間稼ぎがなればよかったんだよ。」

エイジスへと向かった第1部隊の面々を見送ると近くで聞いていたヒバリがツバキに問うがツバキはそう返す。

「まったく迷惑をかけるのは前隊長も現隊長も同じか…第1部隊隊長の悪しき伝統だな。」

呆れた口ぶりでそう言うツバキだがその口許は僅かながら笑みを浮かべていた。

馳走

ライとハンニバルの戦いは苛烈を極めた。

ライは神機で斬り、撃ち、喰らう。

ハンニバルは炎を操り縦横無尽に暴れまわる。時に巨大な体躯を存分に使いライを追い込む。

一進一退の攻防。どちらも当然ながら無傷ではない。

ライは炎に焼かれたのか衣服が焦げ、頬が傷ついたのか血が流れている。身体も相手の攻撃により何度も地に叩きつけられ、衣服で見えない場所や腕や足は既にボロボロだった。

ハンニバルも同様だ。

籠手は砕かれ、全身は斬り刻まれ、息も絶え絶え。最終形態といふべき炎の翼を生やした姿になってもライを倒しきれず、こちらもライと同様にボロボロの状態だった。

「やりづらい…」

肩で息をしながらライは小さく呟く。

ハンニバルというアラガミの姿ではあるが正体はリンドウであることも関係しているだろうがそれだけでライは苦戦はしない。寧ろ時間をかければかけるほど戦況はライに有利になる。

では何故苦戦するのか、それは単純にハンニバルが強いからだ。

「骨…折れてなくとも輝が入ってそうだ…」

自分のことなのだがどこか他人事のように自身の状態を把握するライ。

改めて神機を強く握り目の前の怪物に挑む。そして弾丸を連射しながら駆け走り、跳んで神機の刀身を振るう。

だがハンニバルはタイミングを見計らったようにその斬撃を避ける。

「クツ…!!!」

空振りして着地したライだがまたもハンニバルがタイミングよく尻尾でライを吹き飛ばす。

かろうじて防具の展開が間に合って直撃は免れたが勢いまで殺せ

ず数m?吹き飛ばされる。

さらにハンニバルの猛攻は続く。

防具の展開で視界を遮った隙をつき、紫炎を吐き出す。

度重なるハンニバルからの猛撃にどうにか防いでるライだがついに限界を迎えた。

ふと足腰から力が抜ける感覚に陥ったライ。その結果、足が崩れ膝をつく。

同時にハンニバルの猛攻の仕上げもきた。

炎で槍を形成しその槍をライに振り下ろす。

それもかろうじて防ぐが衝撃でまたも吹き飛ばされ地に叩きつけられた。

「……………まだ…だ…」

どうにかして立ち上がろうとするライだが今の叩きつけとこれまでの攻防で傷ついた身体はまとも動かない。

ハンニバルは次は両手に炎の剣のようなものを装着して倒れ動けないライに近づく。

ここは生死をかけたコロッセオ闘技場。当然生きてこの地を出るには相手を殺すしかない。

「動け…」

ハンニバルの足からなる振動で自分に向かってしていると気づいたらライは動こうと身体に力を込める。

しかし満身創痍の身体は動かない。

そして無情にもハンニバルの炎の剣がライを貫いた。

声にならない叫びを上げるライ。だがその叫びも徐々に小さくなくなっていく。

そしてライは気を失ったのか何も言わなくなった。

ハンニバルもライは死んだと判断したのか貫いている剣を引き抜く。

それでも何も返事がないライ。

……………だがライの「中で蠢く何か」が動き出した。

「宿主様はやはり甘いな。非情になりきったというのに微かに甘さが残っている。」

「記憶の宿主は慈悲なき非情だったというに記憶を失えばそれも忘れるものなのかね？」

そんなことを発しながら「ライ」は立ち上がる。

「焼け臭いな。身体の隅々も痛い。でも良い「ハンデ」だ。」

「おい。クソトカゲ。まだ終わってねーぞ。ここに極上の馳走がある。それを喰らわないとはそれでもアラガミか？」

自らをご馳走といいハンニバルを睨みつける「ライ」。その眼はアラガミと同じような眼となっていた。

「逃すかよ…俺にとつてもテメエはご馳走だ。」

「だから喰わせてもらおうぞ？ 元人間!!」

まったく訳の分からないことを勝手に言うライ。そして第二ラウンド開始という意味か、ハンニバルに攻め上がった。

逃げるな

「まったくもう!!リーダーはなんでも抱え込んで!!」

「だよなー、つってもリーダーの考えなんて俺にはさっぱり分からな
いし今までも難しいことはリーダーに任せつきりだったからな。」

アナグラからエイジスに向かう第1部隊。そんな中、アリサは怒り
心頭だった。

コウタもアリサの怒りは当然と思っっているが今までライに頼りき
りだったからかアリサほどの怒りは湧かないようだ。

「……アイツだけだったんだよ。」

「え?」

「ソーマ?」

「アイツだけだ。リンドウがアラガミ化していたときの覚悟を決めて
いたのは。可能性は搜索が再開された時からあった。アイツ以外誰
もリンドウがアラガミ化してないという根拠のない自信を持ってい
た。」

「……そうね。それはただの願望でしかないのに：私達はリンドウが
アラガミ化してないと確信していた。きっとその雰囲気リーダー
を1人で行かせることになったのよ。」

ソーマの言うことに同意したのはサクヤだった。同時にサクヤは
昨日のライの問いに答えられなかったことを悔いていた。

「リンドウがアラガミ化していたら殺せるか?」

その問いにサクヤは黙った。それは思考の放棄とも言えた。

そしてライが1人で片をつけると決心した瞬間だろう。

「今は急ごうよ。それでリーダーに会ったら言いたいこと言えばいい
し。」

「……そうですね。」

話をしているうちにエイジスの入り口に到着した。

「リーダー!!」

アリサがエイジスにいるはずのライを探す。だが、すぐに見つかつ
た。

そこには1人の銀髪の人間と一体の地に這いつくばった獣。その獣に銀髪の人間が振り上げた神機を振り下ろそうとした瞬間だった。

数刻前

「アラガミといってもまだ “堕ちきってない” 半端物だよ。お前。」

ハンニバルに言葉をかけながらライは神機を振るう。

振るわれた神機は的確にハンニバルの身体を傷つけ確実に追い詰めていく。

ハンニバルも抵抗はするも今までの動きがまったく違うライに翻弄された。

「まあ半端物は俺も一緒なんだがな……」

呆れるようにそう呟くライはハンニバルの頭部に神機を振り下ろし地に叩きつけた。

「すまん。やりすぎた。久しぶりだから加減が難しいな。」

「ともあれ、アンタもいい加減楽になりたいだろ。今楽にしてやる。」
再び神機を振り上げたその時だった。

「リーダー!!」

「……時間切れか。」

アリスの声が聞こえライは小さく呟いた。
同時にライは片膝をついた。

「あれ…いつの間に…」

目の前には地に伏せるハンニバル。腹部を貫かれ意識を失ったことを臆げに覚えているライは今の状況に困惑していた。

「倒した…のか？」

地に倒れたハンニバルを見てコウタは呟く。だが相手は “不死” のアラガミ。

当然ながらその不死性を発揮して立ち上がった。

…そしてハンニバルが立ち上がった際、そこに “彼” はいた。

ハンニバルの胸部に磔にされたように一体化した男。

…雨宮リンドウがいた。

「…リン…ドウ…？」

「リンドウさん!!目を覚まして!!」

サクヤの呆然とした声とアリスの悲痛な叫びが響く。

それに呼応したかのようにリンドウは呻いた。

「リンドウ…リンドウなのね…」

「今ですよ。」

「っ…！レン。」

不意にいつのまにかライの隣にレンがいた。

…手には何故かリンドウの神機を持っていたが、

「これを逃すともう倒せないかもしれない。」

「さあ、この剣をリンドウに突き刺してください。」

そう言っただけでレンはライにリンドウの神機を渡す。

ライも神機に手を伸ばすが直前で手が止まる。

「まだ躊躇してるのですか？貴方は覚悟を決めたのではないのですか？」

「俺のことは…放っておけ…」

ライがレンと話している中、意識を取り戻したリンドウが第1部隊を諭す。

「今すぐ…立ち去れ…」

「嫌よ…もう…置いていくのも…置いていかれるのも…嫌よ…リンドウ…」

「リンドウさん…力尽くでも貴方を連れ戻します…それが私にできる贖罪だから…」

サクヤとアリサが思いの丈をぶつける。だがリンドウも覚悟を決めていた。

「俺は…覚悟はできている。…自分のケツは…自分で拭くさ…」

「ここから…立ち去れ…!!これは…命令だ!!」

「早く!!この剣でリンドウを刺すんだ!!彼を血生臭い連鎖から解放するため…!!」

ハンニバルの再生が終わりそうなのかレンの語気が強くなる。

「……巫山戯るな。」

「何が命令だ。何が覚悟ができているだ…」

ライは上記の言葉を呟き、自然な動作でリンドウの神機を掴んだ。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。隠れる。隙があったらブツ殺せ。」

「自分で言ったんだろ。何を諦めようとしてる…」

新人としてリンドウに教わったことをライは覚えている。その言葉をライは体現してきた。

しかし今のリンドウはその教えを放棄して生から逃避しようとしている。それがライは許せなかった。

「生きたくても生きられない、死にたくても死ねない奴だっている…生が許されているなら最後まで足掻き続けろ…それが滑稽で愚かでも…」

ライは記憶喪失だ。故に覚えていない。だが自分自身が死を望みながら生にしがみつくと矛盾した中途半端な存在と自覚している。

それでも覚えてなくても “知っていた” 顔も名前も覚えていないが生きたくても生きられない存在と死にたくても死ねないという存在を知っていた。

「生きろ。生にしがみつけ。命ある限り足掻き続けろ……生から逃げるな…」

リンドウのオラクル細胞による拒絶反応で腕は浸食されているライは激痛に耐えリンドウに叫んだ。

「逃げるな!!生きることから逃げるな!!」

「これは……命令だああああああ!!!」

叫びと共に走りだし、ライはハンニバルの口を裂いた。

そして喉元にあるコアに浸食された手で触れた。

……瞬間

白い光に包まれた。

執着

目を覚ますと広がるのは見慣れた景色だった。

「ここは…」

「アナグラですよ。……まあいつものアナグラとは違いますが…」

「……レン」

「まさかあんな行動をとるとは驚きましたよ。……でもこんなことが起こるなんて…」

起き上がると隣にはレンが呆れたような表情をしてライを見ていた。

「ここは貴方がハンニバルのコアに触れて感応現象が発生した世界です。恐らくリンドウの記憶の世界でしょう。」

「……記憶の世界」

「ええ。でも感応現象にはこんな力があるとは…本当に未知の力ですね。感応能力とは。」

「前にサカキ博士から感応能力が高いとは言われたことがあるけどその意見には同感だよ。」

「……貴方は本当何者なのでしょうか？」

「高い感応能力を持つゴットイーターじゃ納得できない？」

「……納得できませんがそれしかありませんよ。」

「さて、雑談はこれまでだ。リンドウさんの記憶の中らしいけどこれからどうすればいい？」

話は終わりとばかりにライはレンに問う。この世界に関してはレンの方が詳しいとライが判断したからだろう。

「とりあえずリンドウを探しましょう。」

「リンドウさんがいるの？」

「います。ここはリンドウの記憶の中ですがゴットイーターが帰る場所ですから。」

レンに言われるままにアナグラ内にいると思われるリンドウを探すライ。

「それにしても“生きる”ことから逃げるな”：ですか。」

ふとレンはリンドウに向かって叫んだ言葉を呟く。するとライは硬直した。

「貴方があんなこと言うとは正直意外でした。」

「思い出させないでくれ。我ながらなんであんなことを叫んだのか……」

「後悔してるんですか？」

「……してる。」

「いい言葉だと思えますけどね。」

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。隙があつたらぶち殺せ。」

「リンドウの教えですね。」

「その教えを凝縮したのが“生きる”ことから逃げるな”だったんだよ。」

「我ながら自然に叫んでたことだけど落ち着いて考えるとそうなるんだよね。」

「本当になんて鳥漣がましいことを言ったんだか……」

「鳥漣がましい……ですか？」

「僕にとってはね。僕は曖昧な覚悟でゴットイーターを務めているから。」

ライには他のゴットイーターのように何かのためにという覚悟は持ち合わせていない。

コウタなら家族のため、前のアリサなら親の仇討ちといった絶対に生き残るという覚悟^{理由}がある。他のゴットイーターも人類の為といった覚悟を持っているだろう。

だがライにはそんな大層な覚悟は持ち合わせていない。

アラガミとの闘いも何もせず殺されるよりは今できることをす

べてやってそれでダメなら死んでも仕方ないと割り切っている。

人はどうあっても死ぬ。ならば後悔しないようにしているといえ
ばいいのだろうか。

「…生きることから逃げるな…生きることに執着がない僕には烏澁が
ましい言葉だよ。」

そう言ってライは弱弱しく笑った。

共闘

「ここはリンドウさんの記憶の世界なんだっけ？」

「ええ。そうですがどうしました？」

「いや、改めてリンドウさんの凄さをこの記憶の追体験を通して実感したからさ。」

ライとレンはアナグラ内にいると思われるリンドウを探すため探索していた。

だがエレベーターや部屋の扉を開けるとアラガミのいる場所に繋がっていてそのアラガミを倒さなければ先に進めないようになっていた。

「僕は第二世代の神機に適したゴットイーターだ。近距離と遠距離武器を複合して戦える。神機の進化するべくして進化した形だろう。」
「でも第一世代神機でスサノオやウロヴオロスといった化け物クラスと討伐したリンドウさんの技量には僕は到底及ばないと痛感したよ。」

「貴方もかなりの腕前だと思いますが？」

「それは第二世代神機の性能がいいから。第一世代の神機でもそれなりの戦果をあげられる自信はあるけどリンドウさんほどの戦果をあげられる自信はないかな。」

「その性能を最大限活用できるのも徐々に増えている新型神機使いの中でも貴方だけでしょうね。近接も遠距離もできると多少なりとも偏りが出ますから。アネットさんがいい例です。」

「ハハ。ありがとう。」

謙遜しながらそう言うライ。

「さて、休憩も終わりにして次に進みましょうか。」

「うん。」

扉を開く。扉の先に広がったのは廃墟だった。

「……どうやら、終着点についたみたいですね。」

レンは険しい表情をしながらそう呟いた。

「ここって……リンドウさんと別れた……」

「はい。その廃教会です。そしてここにリンドウがいます。」

レンははつきりと言った。ここにリンドウがいると。

その言葉通り少し歩くと壁に凭れかかった人影いた。

「リンドウさん!!」

ライとレンは人影……リンドウに駆け寄る。

「……大丈夫。どうにか間に合ったようです。でも同時に限界も近いみたいです。」

「……これが貴方への最後のお願いです。リンドウに戦う力を与えてやってください。」

「戦う力……神機のことか?でも神機は……」

「大丈夫です。リンドウの神機は……ここに……あります。」

レンがそう言うのとレンの身体から白い光が溢れ出た。

光が収束すると……

「……レン?」

そこにレンの姿はなくなり、何故か ブラットサージ リンドウの神機が浮いていた。

「う……」

同時に眠っていたリンドウが呻いた。目を覚ましたらしい。

「リンドウさん。」

「お前……新入りか?」

「やっと見つけましたよ。」

「……まさかこんなところまで来るとはな。凄い行動力だな。」

「それに、今はリーダーだったか。出世したな。」

「いや、俺のせいでそうならざるを得なかったか。スマンな。俺のせいで。」

「そう思うなら貸しとしておきますよ。」

リンドウの言葉にそう返すライ。同時に手に持ったリンドウの神機を渡す。

「……生きることから逃げるな…か。諦めていた方は俺の方だったか。」

「死ぬのは生きるより楽ですからね。特に ゴットイーター 僕たちは簡単に選べますから。」

「そうだな。それにお前の言ったことは俺がお前に教えたことだもんな。」

「それなら俺も見苦しく生き足掻かないとな。」

そう言うときリンドウは自身の神機を手を取った。

「言っとくが俺がお前に教えたことだが言ったお前なんだから付き合ってもらおうぞ?。」

「分かっています。またふらりといなくなられたら困りますから。」

「もうしねえよ。多分な。」

そんな会話をしてると遠くから呻き声のような咆哮がそして踏み締めるような足音が聞こえた。

「来るぞ。」

リンドウの言葉の後、 黒いハンニバル リンドウの成れの果てが姿を現した。

「流石、人にもアラガミにも人気者ですね。」

「喜んでいいのかは分からんが一応褒め言葉として受け取るよ。」

ハンニバルを前にしているにも関わらず軽口を叩くライとリンドウ。

そしてここに極東支部最強と謳われる第一部隊。その新旧隊長コンビによる アラガミ討伐 大物狩りが始まった。

約束

「リンドウ!!」

「落ち着け。気を失っているだけだ。コイツもな。」

感応現象の光が消えるとリンドウとライは地に伏せていた。

サクヤ達が駆け寄り、ソーマが状態を確認する。どうやら意識を失っているだけのようだ。

「リンドウさんは人の姿に戻ってるけど…アラガミ化が止まったってこと?」

「いえ、人に戻っただけで浸食は止まってないようです。リーダーも同様ですね。」

ライもリンドウも浸食のスピードは緩やかになったもののアラガミ化による浸食は進行しているようだ。

「アナグラに戻るぞ。サカキのオッサンならどうにかできるかもしれない。」

「そうね。ソーマはリンドウをお願い。コウタとアリサはリーダーを。」

「はい!!」

「わかった!!」

リンドウはソーマが担ぎ、コウタとアリサはライを持ち上げる。

「……無事じゃなかったら許しませんからね。」

気を失っているライを見ながらアリサは小さく呟いた。

「オラア!!」

「リンドウさん!!左!!」

リンドウの記憶の世界では新旧第一部隊隊長コンビと黒いハンニバルの激闘が続いていた。

「流石リンドウさん。トリッキーすぎる。」

「おい!!確かにアレは俺だが俺はあんな動きできねえよ!!」

とはいえ呑気に会話するくらい余裕があるのか軽口を叩きながらハンニバルの相手をする2人。

並の神機使いならここまで余裕はでないだろう。

だが今ハンニバルが相手をしているのは極東支部の第一部隊の隊長なのだ。

極東支部で第一部隊は最も強い部隊である。

そしてリンドウとライはその最強の部隊の新旧隊長。

今まで数多のアラガミを屠ってきた神機使い指折りの猛者なのだ。故に弱い筈がない。

決着がついた。

「しぶとかったがこれで終わりだな。」

「そうですね。」

地に伏せるハンニバルを見ながらリンドウとライは勝利を確信した。

「あー疲れた。久々すぎて身体の筋肉が痛いぜ。」

「まだそんな歳じゃないでしょ。戻ったら部隊長に復帰してもらいますからね。」

「……マジか?もうお前でいいじゃんか。」

「嫌です。つと、まだ終わってないみたいですね。」

「あん?」

何気ない会話をしていたライとリンドウの前で倒れていたハンニバルが溶けるように地面に堕ちていく。同時に黒い水溜まりが広がっていく。

「……最後の悪あがきか。」

「リンドウさん？」

「アレは俺だから分かる。次の攻撃に耐えられれば終わりだ。」

「そうですか。じゃあ嫌でも耐えないといけませんね。」

「……くるぞ!!」

リンドウの叫びと同時に黒い水溜まりからハンニバルが姿を現し、両腕を振るう。

対してライとリンドウは神機を盾にしその腕を防ぐ。

重い一撃。疲労が溜まっているライとリンドウも徐々に押し込まれていく。

そのとき、ハンニバルからリンドウに向けて新たな攻撃が放たれた。

「……ッ!!」

放たれる遠距離攻撃は刻々とリンドウに迫る。

「……俺は……!!」

この時リンドウは自然に自分の本心を叫んだ。

「生きる!!」

たった一言の魂の叫び。その叫びに彼の神機相棒が呼応した。

リンドウの神機の盾装甲が勝手に起動しリンドウに迫る攻撃を防ぐ。

そして神機は「ある姿」に変貌した。

「そう。その言葉が聞きたかった。」

「お前は……」

リンドウの神機は「少年」の姿に変えていた。

「その叫び……その言葉だけで……僕は報われる。」

少年は光を放つ。するとハンニバルはまるで最初からその場になかったかのように消え去った。

「こうやって話すのは初めてだね。リンドウ。」

「……そうだな。だが、お前はずっと俺の近くにいたんだな。」

「うん。君がゴット神機イーター使になった時からだね。」

「君の初陣の時も、助けられなかった仲間を思っ泣いた時も……仲間を思っ別れる覚悟を決めた時も……いろんな君を僕は見てきた。」

「そうか。」

「でもそこまで時間はないみたい。もうすぐここから出ないと。」

「そうだな。だけどまた会える気がする。だから別れの言葉とか性に合わないから言わねーぞ。」

「君に別れの言葉なんて似合わないからやめてよ。気持ち悪い。」

「おい!!」

軽口を叩き合うリンドウとレン。その姿は本当に相棒のような間柄を証明していた。

「やはり貴方に託して間違いじゃなかった。」

「……レン。」

少年…レンはリンドウからライに目を向けた。

「きつと貴方じゃなければここまで来れなかったし成し遂げられなかった。ありがとう。」

「そうかな。」

「そうですよ。正直、貴方にならそのまま神機として使ってもらってもいいかなと思っただくらいです。」

ライに感謝を伝えるレン。その表情には笑顔が張り付いていた。

「貴方はとても不思議な人です。それにとっても勇敢な人です。同時に危なっかしい人です。だから周りは貴方を尊敬して心配もするのでしょうか。」

「そうかな?」

「……自覚はないのはリンドウと一緒にですね。もっと周りを見た方がいいですよ。世界は貴方が思っている以上に“色鮮やか”ですから。」

「……え?」

「時間のようです。改めて言うよ。リンドウ、ライさん。ありがとう。貴方達…いや、君達と出会えてよかった。」

「僕もサヨナラは…別れの言葉は言わない。代わりにに最高の相棒と尊敬する先輩にこの言葉を送るよ。」

「また“未来”」

「……ああ。明日また会おうぜ。相棒。」

「レン。また明日。」

再会の言葉を告げる。それに満足したのかレン満面の笑みで光の中へと消えていった。

同時に風景も白く染まる。

そして瞬く間にライとリンドウは白に飲み込まれた。

帰還と邂逅

「っ……」

呻き声を上げるとリンドウは目を覚ました。

「ここは…」

見慣れた天井、若干鼻を刺激する消毒液の匂い。ここがアナグラの医務室であることをリンドウが気づくのに時間はかからなかった。

「……。いや、戻ってこれたのか…いや、戻ってきたんだな。」

二度と戻れると思っていなかった場所に自分がいるという夢のような現実。だが自身の「腕」を見てリンドウはこれが現実だと理解した。

「浸食は止まったとはいえ、流石に戻ることはできないか。」

リンドウの片腕はアラガミ化していた。浸食は止まったものの元の腕に戻るとは今の技術では不可能だろう。

「リンドウさん。入りますよ。」

ふと医療班の人の声が聞こえ、閉まっていたカーテンが開く。

「よう。おはよう。」

「……リンドウ…さん？」

呑気に挨拶をしたリンドウだがこの後、極東支部所属者全員に揉みくちやにされることになる。まあ2日も寝てたのだから仕方ないが

…

「やあ、リンドウくん。久しぶりだね。またこうして顔を合わせることになるとは思いもなかったよ。」

「それはこっちも同じですよ。サカキ博士。いや、今は支部長代理でしたか。」

一応検査を受け異常なしと太鼓判を押されたリンドウは医務室を

出て支部長室でサカキと話していた。

「そうだね。君がいなくなつてからいろいろあつたから。君はさしづめ浦島太郎状態なんじゃないか？」

「そうですね。見ない新人も増えてるし前支部長が死んでるしで本当に俺の知るアナグラかと思えますよ。」

「だろうね。結局変化というものはどこでも起きているものなのだろう。」

「うん。顔を見て思ったけど元気そのものだね。その腕は今の技術では戻すには不可能だろうが。」

「構いませんよ。それに戻る技術があつても戻すつもりはありませんし。これは俺にとつての戒めですから。」

そう言いながらアラガミ化した片腕を掴むリンドウ。

「そうか。でもその腕を覆う籠手みたいなものは作ろう。流石にその腕を晒すのは怖がられるだろうし。」

「それはお願いします。」

「さて、あとは彼が起きるのを待つしかないか。」

「今はゆっくり寝かせてやってください。アイツらから聞きましたがいろいろと抱えていたみたいですから。」

リンドウはこの通り目覚めたがもう一人未だに眠る続けている存在がいた。

「君の話を書く限り大活躍だったようだねリーダーくん。まあ彼も身体異常はなかったから時が経てば目覚めると思うけど。」

「ええ。奴のおかげで俺は今ここにいます。とりあえずアイツが起きるまでは俺が奴の代わりをします。あと一つ相談が…」

「なんだい？」

「第一部隊の隊長職についてですが…」

「リンドウさんは起きたのにリーダーはまだ目を覚ましませんね。」
「仕方ないよ。リンドウさんも言ってたけどかなり無茶をしたみたいだし。」

「命に別状はない。健康状態も良好。そこまで心配する必要はない。時が経てば勝手に起きるだろ。」

医務室にはアリサ、コウタ、ソーマが未だに眠り続けるライを見守っていた。

「そういう割には心配してるんじゃないの？」

「コウタ。あんまりイジメちゃダメですよ。ソーマはえっと…ツンデレ？なんですから。」

「アホか。」

3人とも心配はしている。でも安心もしている。ライは必ず目覚める。そう信じられるからこそ軽口を叩き合える雰囲気になっているのだろう。

「…少し悔しいです。」

「アリサ？」

「私の感応能力じゃリーダーの意識を呼び起こすことができない。私もリーダーと同じ新型神機の使い手で感応能力も高い筈なのに。リーダーには…ライさんにはできて私にはできない。勿論違いはあるのは理解しているけど…やっぱり悔しい。」

アリサはライの手を握っていた。それは以前ライが深い眠りについてたアリサの手を取ったとき感応現象が起きたおかげでアリサは意識を取り戻した。

だが前と逆の立場になって同じことをしても今回は何も起こらなかった。

そもそも感応能力とは何なのか。何故ライには感応現象が起こせてアリサには起こせないのか。感応能力はまだ謎が多いのかもしれない。

「うーん。感応能力とかは俺には分かんないけどつまりアリサはリーダーが出来ることが自分にはできないことが悔しいってこと？」

「まあそんなところですよ。努力すればできるようになるものならとも

かく感応能力を上げることがどう努力すればいいか分からないというか…」

「数をこなすしかねえんじゃねえか。」

「ソーマ？」

「俺はアラガミの気配を察知できる。それがお前のいう感応能力というのなら俺もこの能力を使いこなせていない。使いこなせていれば『死神』とかいう異名もつけられてねえだろうしな。」

「そもそも感応現象とやらも引き起こせたのはリーダーだけなんだろう？他の新型も引き起こせないならむしろお前は正常でリーダーの方が異常だ。」

「えっと…慰めようとしてるんですか？」

「勘違いするな。仮にお前が感応現象を起こしたとしてリンドウが生きてると知った時、お前はこういう行動をとった？」

「それは…」

そこでアリサは考える。

ライはリンドウが生きてると知った時、最初に話したのはサカキとツバキの2人だった。対してアリサが最初に話すのは誰だったか。そしてどんな行動をとっていたか。

「分かりません。でもリーダーのように上手く立ち回することは出来なかったと思います。」

「だろうな。大方混乱を大きくするだけだっただろう。」

「…悔しいけど言い返せない。」

「なんかリーダーってかなり大人びてるよね。常に冷静で指示も的確。少し抜けてる所もあるけど頭もいいし戦闘能力も高い完璧人間だ。」

「確かに。リーダーはなんとというか絵に描いたというか理想の人間というか。神機使いになる前は何をしていた人なのでしょう。」

「それはコイツ自身が1番知りたいことだろうな。」

「え？」

「どういうことですか？」

「…ああ。お前らは知らされてないのか。いや、知らないのか。」

「リーダーには過去の記憶がない。記憶喪失なんだ。」
極東支部では公然の秘密とされているライの記憶喪失。だがコウ
タとアリサは衝撃のあまりしばらく声が出なかった。

その頃、ライは廃墟にいた。

廃墟と言っても城のような場所でライの前にはボロボロだが王の
玉座らしきものが鎮座している。

「ここは…」

「ここはお前の深層だ。」

ライの小さな呟きにどこからともなく返事が返ってきた。

ライは玉座を見据える。すると沢山の白い粒子が現れ密集して形
を成していく。

「ここはお前の深層。つまり俺は『ライだ。』」

その言葉と共に光は消え声の主が姿を現した。

そこには『ライ』がいた。

全身が真っ白で服も真っ白。ただ違うのは右目は『真紅』に染ま
り、その瞳には『鳥を思わせる紋様』が浮かんでいる。

左目は金色に染まっている。その目は『アラガミ』の瞳に見えた。
全身真っ白で肌や衣服。真紅と黄金のオツドアイ。これだけでも
気持ち悪いのに更には狂気的な笑みを浮かべる姿に更に不気味さが
増す。

「君は…」

「言いたいことは分かる。その通りだ。言っただろ。俺はお前だと。
お前の考えていること、言おうとしていることは分かるんだよ。」

「だが一応はじめましてだ。俺は『お前の中のアラガミ』。リンドウ
とかいう奴からしたらレンのような存在だ。よろしくな。『宿主様

“
└

手がかり

「こちらこそよろしく。」

「……普通に返すとは思ったが実際に返されるとどうにも変な感じがするな。」

「レンに会っていたのが大きいだろうね。これでも驚いているけど。」

呑気に返事を返すライに少し戸惑うアラガミ。

「そんなところか。まあしばらくはよろしくな。宿主様。」

「しばらく?。」

「ああ。俺はアンタを『喰らう』つもりだからな。」

「それは怖いな……と言えいいのか?。」

「分かっていたつもりだがアンタは本当に空虚空っぽだな。」

脅すことを言っているのに対して反応が変わらないライにアラガミはそう言う。

「記憶がないからなのかねえ。この心象も本来は『色』がついてるはずなのに。この通りモノクロだ。」

「確かに。でも忘れてるだけでこの場所は『知っている』。」

「だろうな。ここはお前の心象だから知っていて当然だ。」

「それで? 挨拶の為に僕をここに呼んだのか?。」

「それもあるが少し宿主様を手伝ってやろうと思つてな。」

「手伝う?。」

「俺は今のアンタよりはアンタのことを知っている。血液を通してアンタの情報を得ているからな。」

「アンタの知り合い曰く『血液は情報の宝庫』らしいからな。」

「確かに何処かで聞いた言葉だ。」

「それと『妹』が世話になったからな。」

「……妹」

妹と聞いてふと『月に旅たったアラガミ』を思い出すライ。

「シオのお兄さんなのか?。」

「さあな。俺も記憶が曖昧で覚えてない。だがアイツが言うならそうなのだろう。」

「話を戻すが記憶を取り戻したければアンタは行かなければならない場所がある。」

リンドウを救出してはや5日。リンドウは目覚めたがライは未だに眠り続けていた。

「本当によく眠ってるわね。」

「そうですね。5日間も寝続けるのは流石に寝すぎだと思いますが。」

この5日間、第一部隊は交代でライの様子を見に来ていた。特にアリサはほぼ毎日とっていい。

「それだけリンドウのことで苦労をかけたってことね。今は寝かせておきましょう。」

「サクヤさんもリンドウさんと同じことを言うんですね。何故そこまで…。」

「起きるって信じられるかって？そうね…。」

アリサの問いにサクヤは少し考える素振りを見せると答えた。

「彼だから…かな。」

「彼なら信じられる。今までいろんなことを成し遂げてきた彼だから信じてあげられる。この長い眠りも次に何かを成し遂げる時に必要なことなのかもしれないしね。」

「でもこれからは貴女が彼を信じてあげないとね。私とリンドウは“別働隊”になるわけだし。」

サクヤの言う通り第一部隊はライ、アリサ、コウタ、ソーマの4人体制となる。リンドウとサクヤは第一部隊所属ではあるが基本的に別行動になると通達があったのだ。

「さて、私は行くわね。できれば“式”までには起きてほしいけど。」

そこは祈るところかしら。」

「そうですね。リーダーもリンドウさんとサクヤさんの“結婚式”には参加してほしいですから。その時は引っ叩いてでも起こしましよ
うか？」

「それはやめて。リーダーが可哀想だから。でもそうね……」

苦笑いを浮かべるサクヤだがすぐに悪戯っぽい笑みを見せる。

「昔読んだ物語とかだと眠りについたお姫様を起こす方法は王子様も
口づけだったけど逆はどうなのかしらね？」

「な……!? さ……サクヤさん!!」

「あはは。ごめんなさい。でもねアリサ。チャンス逃したらダメ
よ。」

そう言いながらサクヤは出て行った。残されたアリサは顔が真っ
赤だ。

「……そんなこと……できるわけないじゃないですか……」

「……何ができないんだい？」

「え？」

ふと呟いただけなのに返事が返ってくると思わず変な声を上げ
てしまうアリサ。

「イタタ。なんか全身が痛い。寝違えたかな？」

「……り……」

「ん? あ、~~どう~~うだった。おはようアリサ。」

「リーダー!!??」

呑気に身体を伸ばしながらアリサに挨拶するライ。そんなライを
アリサの奇声が襲うのは数秒後のことだった。

「浦島太郎のような気分だ。」

「浦島？なにそれ？」

エントランスではリンドウとサクヤの結婚披露宴が催されていた。極東支部職員全員スーツやドレス姿でバイキング形式で料理を取りながら談笑している。

「極東に伝わる昔話だよ。海岸で子供に虐められた亀を助けた男が亀に竜宮城っていうところに連れて行かれるんだけど竜宮城から帰ってきたら時間が数百年も経っている話。」

「へえ。そんな話があるんだ。今度妹達に聞かせてよ。」

ライとコウタも例外なくスーツ姿で料理を食べながら談笑していた。

「でもリーダーって記憶はないのにそう言う話は知っているんだな。なんか不思議。」

「そうだね。自分に関する記憶はないけどそれ以外は知識として知っている感じかな。」

「それで浦島太郎のような感じって？」

「起きたら5日も経っててリンドウさんとサクヤさんが婚約してるし第一部隊は4人編成になってるしで少し混乱してるよ。」

「あー、確かにリーダーが寝てる間にトントン拍子で話が進んだなあ。」

「5日も寝てたから文句は言えないけど勝手に話が進むのはどうかと思う。」

「それだけお前らを認めてるんだよ。」

「あ、リンドウさん。」

「いろんな人に絡まれてましたね。」

「まあな。だが今日の主役はサクヤだからあとは全部任せて逃げてきた。」

「うわ：薄情者。」

「そう言うならコウタ。お前がどうにかしてこい。」

「えー嫌っすよ。」

「この宴の主役命令だ。行ってこい。」

半ば強引にサクヤの救援に出されたコウタだが恨みつらみ言いな

がらも救援に向かった。

「今更ですが御結婚おめでとうございます。」

「おう、ありがとな。」

「でも本当に急でしたね。」

「だろ？俺がまたいなくならないように首輪を着けるという意味合いがあるんだと。」

「前科持ちに厳しいですね。」

「人ごとじゃねーだろ。お前もいつれアリサあたりにつけられるんじゃないか？」

「アリサはそんなことはしないとありますが…」

「どうかね。サクヤに似てアリサも依存するところあるしなあ。」

飲み物を飲みながら談笑を続けるライとリンドウ。

「これからはサカキ博士の直属部隊になるんでしたっけ？」

「ああ。籍はこれまで同様第一部隊に入っているが基本的に別行動だろうな。俺とサクヤは遠征に出ることが多くなるだろうし。」

「サカキ博士曰くまだ極東には未知のアラガミが存在する。現に俺たちはこの極東を全て把握してるわけじゃないからな。」

「そうですね。極東支部のある関東エリアもすべて把握しているわけじゃない。探索範囲の拡大が目的ですね。」

「だな。とはいえいきなり遠くまで行くのは装備的に不可能だから時間をかけて徐々に広げていくことになるだろう。しばらくは日帰りかできて一泊二泊くらいか。」

「それまでは新人教育をしつつアラガミとやり合う日々が続くだろう。まあいつもと変わらんか。」

「結局はアラガミとの殺し合い。そこに落ち着くんですね。」

「それが宿命だからな。その為にゴット俺イーターたちは生まれたんだからこればかりは逃れられねえよ。」

アラガミとの戦いを宿命と評するリンドウ。その表現にライは同意するも何処か考えてしまう。

アラガミとの戦いに終わりがあるのか…と。

「どうした？」

「なんでもありませんよ。今の状況では考えるだけ無駄なことを考えていただけですから。」

「でもリンドウさんがアナグラにいるなら少しは僕も余裕ができそうですね。」

「なんだよ。俺に何かさせようってか？」

「いえ、僕も多少の時間的余裕ができそうなので少しばかり『自分』について調べようと思ひまして。」

「……記憶か？」

「はい。自分のことを本腰入れて知ろうと思ひます。」

「どうやって？なんか思ひ出したのか。」

「いえ、でも手がかりが手に入りました。」

そう言つてライは一度言葉を止めて改めて言い放つた。

「『トウキョウ』に行こうと思ひています。かつてこの極東の首都と呼ばれた場所に。」

過去の帰還編 規格外

「成程。それは興味深い話だ。」

結婚式の数日後、ライは支部長室でサカキと話していた。

「ゴットイーターの内に宿るアラガミに自我が芽生える。普通ならありえないと一蹴されるだろうが僕たちは『シオ』という存在でそれに似た現象を知っている。故に君の話はただの笑い話とは断定できない。」

「リンドウ君の件も君の話だとリンドウ君のアラガミに導かれたとも言える。実に興味深い。これも君の持つ感応能力のおかげなのかもしれないね。」

「それで次は君の中のアラガミが『トウキョウ』に行けと言う。勿論何か企みがあるのかもしれないが君は行きたいの难道?」

「はい。」

「そうか。うん。構わないよ。今すぐには無理だが準備が整い次第、君とリンドウ君、サクヤ君にはトウキョウに行ってもらおう。」

「ありがとうございます。」

「まあいづれは行かなければならない場所なんだけどね。」

「と言いますと?」

「今は君たちゴットイーターがアラガミと戦っているがこれは我々人類の『生存圏』の確保及び拡大を目的としている。」

「生存圏の確保及び拡大。即ち。」

「人類の復興」

「その通り。まあこれは極東支部だけではなくフェンリル本部含めて行われるべき大義だ。」

「だが安全地帯の確保に始まり食糧問題、治安維持その他諸々含めるとこれは段階的に進めなければならない。それにこれらに必要な技術確立もね。」

「やることがいっぱいあると。」

「ああ。今はリンドウ君とサクヤ君達しかいないがいづれは他のゴツトイーター達にも探索に出てもらうことになるだろう。」

「成程。確かに首都は確実に押さえとくべきですね。特にトウキョウには政庁を含め重要なパイプラインが多い。損傷はあるでしょうが直すことができれば今後の重要な拠点になる。」

「……君、首都に詳しいね？記憶が戻ったのかい？」

「知識としては知っているとこの感じですかね。」

「記憶はないけど知識として知っている状態ということか。うん。君をトウキョウに行ってもらうことは重要なことのようにだ。」

サカキはそう言って笑みを浮かべる。だがすぐに真剣の顔に戻り言った。

「だけど気をつけてほしい。」

「博士？」

「トウキョウにはおそらく君の記憶の残滓があるだろう。その残滓は少なからず君の記憶を刺激する。その刺激が君の記憶を呼び起こすかもしれない。」

「だがそれは君の脳に強いショックを与えているようなものだ。それにより君は、君でなくなるかもしれない。」

「……どういうことですか。」

「人格の上書き。いや、過去の君に戻ると言うべきか。君の記憶が戻る時、今までの……ゴツトイーターとなった君の記憶が失われる可能性がある。それは君にとっては自分を取り戻すことになるが我々にとっては完全な別人となる。」

「だからこれだけは覚えていてくれ。君はゴツトイーターの皇ライとということ。そして君が帰るべき場所はここだということ。」

「……分かりました。」

「え？リーダー、アナグラから離れるんですか？」

「うん。少しの間リンドウさん達と一緒に行動することになる。」

「えーじゃあ、しばらくは第一部隊としての活動はなくなるってこと？」

サカキとの対話の後、ライはアリサとコウタと共に討伐任務に出ている。
いた。

「ソーマもいるし活動がなくなることはないと思うけど。」

「そのソーマが最近調べ物で任務に出てくれないんですけどね。」

「たまに単独で出てくるみたいだけど、言ってくれたら手伝うのに。」

「自分で解決できるなら自分です。ソーマはそういう奴だから。」

「あ…居ました。ハンニバルです。」

「うへえ。本当にいたよ。」

「リンドウさんに比べたら大分マシそうだな。」

討伐対象であるハンニバルを見つけ嫌な顔をするアリサとコウタに対して呑気にそんなことを言うライ。

「マシそうって…」

「やっぱリーダーって規格外だな。」

「2人もあのハンニバルを相手すればそう言う感じになるよ。アレに比べたら動きが遅いし。」

「……やっぱリーダーの感覚はわからね〜」

「今はハンニバル討伐に集中しましょう。」

「了解。」

無駄口を止めハンニバル討伐を始める第一部隊。不死のアラガミと称されるハンニバルだがライの的確な指示の下、苦戦することなく討伐を完了した。

ハンニバルの討伐に苦戦しないのはやはりライがリンドウという

ハンニバルと戦った経験があつたからだろう。

ライの強みは一度の戦闘で多くの経験値を得ることができることだ。それを独自に分析して次の戦闘に活かす。そうやってライは自らを強化してきた。

では記憶が戻った場合、ライはどのくらい強くなるだろうか？

記憶とはこれまで蓄積してきた経験値だと捉えることもできる。

蓄積した経験値が多ければ多いほどライは強く成長する。

それを短時間且つ短期間で行うライは言うように規格外な存在と言えるだろう。

負の遺産

「新種のアラガミが現れた？」

「うん。リンドウ君達の報告でね。正確に言うところの辺りには見つかってないアラガミがトウキョウ周辺にはいたということだろうね。」

支部長室に呼び出されたライはサカキから新種のアラガミの話を聞いていた。

「なんかの変異種とかですか？」

「リンドウ君の報告を聞く限り近いのはクアドリガの装甲を付けたボルク・カムランと言っていた。防御力のある高機動型アラガミと言えそうだね。」

「防御力がある高機動型……」

サカキの報告を聞いたライ。すると彼の脳裏に“ある言葉”が浮かんだ。

「……KMF……」

「……君、その名をどこで？」

「え？」

「KMF：通称ナイト・メア・フレイムKMF。アラガミが出る前の人類の主要戦力にしてアラガミとの戦いで負け続けた負の遺産だ。」

「……酷い言われようですね。」

“例の戦い”以降、軍需産業の縮小を進めた組織：超合衆国の失態と言われている。平和の時代に軍事力は必要ないが自衛力まで奪うことはなかったと今となっては言える。」

「まあアラガミの発生は“狂王の呪い”とも吹聴する輩もいた時代だ。アラガミに対する恐怖や超合衆国への不安をぶつける場所が欲しかったんだろうね。」

サカキからアラガミが現れる前の時代の話を聞きたびにライは脳裏を刺激する。だがライはその状態に困惑していた。

「ともかく、君たちがトウキョウに行くには新種のアラガミと戦わな

ければならないだろう。その覚悟は持って置いてくれ。」
「……分かりました。」

「リンドウさん。」

「おう。お前か。」

支部長室を出てエントランスに向かうとちようどリンドウが寛いでいた。

「サカキ博士から聞きました。新種のアラガミと遭遇したと。」

「なんだ。もう聞いたのか。」

「どんな形をしましたか？」

「大きさはボルク・カムラン位だな。それでツノのついた頭とライフを構えた胴体にまるで車輪がついてるような機動だった。」

「それとなんか青っぽい奴もいたな。顔が開いてなんかレーダーでも探知してるような奴。」

「角ありと青っぽい…『無頼』と『サザーランド』か…」

「なんだ？知ってるのか？」

「いえ、でもサカキ博士からそのアラガミの正体は聞きました。サカキ博士が言うには恐らくKMFを捕食したアラガミだそうです。」

「KMF？なんだそりゃ？」

「博士曰く今となっては負の遺産だそうです。」

「負の遺産？よく分かんねーがどうやらそのKMFのアラガミとやらについてはお前は何か知っているようだな。」

「え？」

「さっきお前が呟いたブライとサザーランドだったか？恐らくKMFの名前かなんかだろう。多分お前の記憶とKMFがなんか関係して

いるんじゃないか？」

「そう…ですね。」

リンドウの指摘があつた通りKMFという単語を聞いてからライの脳裏にはKMFに関する知識が次々と出ていた。

「よし。そう言うことなら討伐に出てみるか。」

「え？」

「当然だろ？未知のアラガミを討伐するのも俺たちの仕事だ。それにトウキョウ目的地に行くためには通らなければならぬ場所だ。道を作る為にも討伐は必須だ。」

「そうですね。」

「決行日はサカキ博士と決めるが一応第一部隊全員を連れて行く。それでいいか？隊長。」

「それでいいですよ。全く。隊長職今からでもいいですから代わりませんか？」

「それは嫌だ。お前ら我が強くて疲れる。」

いろいろと話を進めるリンドウに苦笑しつつKMF型アラガミの討伐は第一部隊で行われることが決定した。

新種

「断る。」

「言うと思った。」

「いいじゃないですか。しかも新種ですよ。」

リンドウの提案で新種アラガミの討伐を第一部隊で行うこととなり早速ライはコウタとアリサにその旨を伝えた。2人は即答で参加したがもう1人の第一部隊員であるソーマは不参加の意向を示した。「俺も忙しいんだよ。それにリンドウ達も参加するなら戦力は申し分ないだろ。」

「そう言うことじゃなくてさ。久しぶりに全員で討伐なんだからさ。」
「そうですよ。ソーマが最近忙しくしているのは知っていますけどまには息抜きしましょうよ。」

「……討伐を息抜きというのはどうなんだ？」

なんとかソーマを説得しようとするコウタとアリサ。だがその説得はうまくいきそうにない。

「ソーマの言う通り戦力は申し分ない。というか本人が行く気ないなら生存率が下がるだけだしむしろいい方がいい。」

「それに仮に僕たちがやられた場合にアナグラの戦力が下がるのは少しでも避けるべきだ。」

「リーダー……」

「えっ？全滅する可能性があるの？」

「すると思うよ。アナグラから離れてるから通信はできないだろうし未知のアラガミだからどういいう行動をするかも分からない。」

「あ……確かに……」

「新種アラガミの対策は分からないことが多いことからあらゆる選択肢を用意する必要がありますね。」

「チツ……そういうことか。」

ソーマはライが言おうとしていることを察したのか舌打ちをする。

「……そういう訳だから参加してくれるかい？」

「狸が……あのおっさんに似てきたな。お前。」

「それは少し心外かな。」

「あれ？いつに間にか説得されてる？」

「すごいです。あの堅物ソーマをいとも簡単に説得するなんて……」

「お前らのはただお前らの願望をぶつけてただろ。」

「説得する時は相手の言い分を肯定しつつ自分の意見を交えて妥協点を見つける。2人は子供ののように自分の言い分を相手に押し付けてる感じだからソーマには響かなかったんじゃないかな？」

ライの指摘に押し黙ってしまふコウタとアリサ。押し黙るということは自分達でも分かっていたのだろう。

「こうして全員が揃うのは久し振りだな。」

「そうね。」

未知のアラガミ討伐に訪れたライ達第一部隊。リンドウがそう言うのとサクヤも同意する。

「こんな場所があったんですね。廃墟となっておりますが見た感じこの場所も街みたいですし。」

「そう考えると俺達って本当に極東の一部しか知らないんだなあ。」

「サクヤさん達はこういう場所を周ってるんですね。」

「そうね。人類がいつれ住める場所の目星をつけるのが目的かしら。今のところだけど。」

「ここに居住地を造るにしてもそれはまだ先だろう。サカキ博士曰く技術不足と人材不足その他諸々不足している。だから今は住める場所の目星を付けとく。あとは今回のような未知のアラガミの偵察が今の俺たちの任務だ。」

「技術不足に人材不足…」

「あ、リーダーとソーマが戻ってきた。『釣り』がうまくいったみたいだよ。」

サクヤとリンドウの話を聞いているうちに偵察に出ていたライとソーマが戻ってきたのを伝えるコウタ。

その先にはライとソーマが『青い巨人』に追われていた。

「あれが新種？なんかカッコいい!!」

「サカキ博士曰くKMFとやららしいぞ。」

「なんですか？それ。」

「さあな。詳しくはサカキ博士かリーダーに聞け。」

その会話をあと、接敵、戦闘の火蓋が切られた。

「っ…疲れた…」

「なんなんですかあの機動は!?!」

「まさかここまでとはな…ハンニバルよりもタチが悪いぞ。」

戦闘が終わったものの第一部隊の面々が疲労が顔に出ていた。

「まあ無理な機動が祟って足が壊れてからは多少は戦いやすくなったとは思っけど。」

「というか身を隠してるのになんで居場所がバレたの!?!」

「ファクトスファイア。簡単に言うとな敵機能だよ。」

「ファクト…なんだって?」

「リーダー。あのアラガミについて知ってるんですよね?」

「知識としてはね。でもアラガミに成り果てるから索敵として機能してるかは分からないけどね。」

「クアトリガのような足は?」

「確かランドスピナーだったかな。高速機動ができる上に小回りもきくから厄介だね。まあこれもアラガミになったからうまく使えてるかは疑問だけど。」

淡々とKMFに対する問いに答えるライ。この後もスタントンフアヤスラツシユハーケンなどの説明した。

「それでこういうタイプはまだ沢山いるのか？」

「どうだろう。寧ろ少ないんじゃないかな。沢山いるならアナグラ近辺で発見されてただろうし。」

「確かに…」

「少なくともトウキョウにはいるだろうな。できればアラガミ化してない状態を一体くらい確保できれば儲けものだな。」

「ですね。アラガミとの戦いではあまり役に立たなかつたみたいですが人類の技術の結晶であるのは事実ですし。」

「そもそもだけどKMFって俺たちに動かせるの？」

「お前じゃ無理だろ。」

「そうですね。コウタじや直ぐに壊しそう。」

「ひでえ。否定出来ないけど。」

そんな話をしてるうちに迎いのへりが飛んできた。今回は討伐がメインだったが目的地であるトウキョウは直ぐそこに迫っていた。

トウキョウ搜索

「着いたな。」

「ここが極東の首都…」

「……………」

KMF型のアラガミを倒してから数週間が経ち、ライとリンドウとサクヤは遂に極東のかつての首都 “トウキョウ” に降り立った。

「それじゃ役割分担といくか。俺とサクヤは適当に見てまわるからお前も “記憶探し” してこい。」

「…え？」

「ちよつとリンドウ!？」

「あくまでも探索は俺とサクヤの仕事だからな。それに3人一緒だとこの街を見てまわるのに時間がかかるだろうしな。」

「理由は分からんが幸いこの街にはアラガミの数が少ない。危険は少ないだろうしお前なら単独でなんとかするだろ。」

「分かりました。」

「集合は2時間後くらいにするか。まあそこら辺は適当にということだ。」

「リンドウ!!」

「どうしたサクヤ?」

「どうしたじゃないわよ。ここは未知の場所なのよ。なのにわざわざ別れて行動するなんて…」

「確かにここは未知の場所だな。……俺たちにとってはな。」
「え……？」

「少なくともアイツにとってはここは知ってる場所なんだよ。現にアイツ、軽い足取りで行きやがった。」

「あれはどうみても思い出せないだけで土地勘があるな。それだけでもここに連れてきた甲斐があつたな。」

「連れてきたって決めたのはサカキ博士でしょ。」

「細かいことはいいんだよ。それにうまくいけば記憶を取り戻すかもしれないしな。」

「それがアイツにとって良いことなのか悪いことなのかは分からないが。」

「さて、探索を始めるとするか。」

「ちよつとそれってどういう意味？」

「あん？」

「彼の記憶が戻ることは良いことのはずでしょ？」

「そうだな。でも奴にも嫌な思い出とかもあるだろ。それを思い出すのはいいことか？」

「それはそうだけど……」

「それにサカキ博士が言つてたが最悪の場合、記憶を取り戻すことで今までの記憶を失うこともあるらしい。」

「え……？」

「可能性は低いがあり得ることだからな。記憶が戻ることは良いことだが素直に喜べることもないんだよ。」

「……なんでこつちに来たんだろう。」

ライは迷いなく動く自らの身体に困惑していた。
リンドウ達と別れて行動するとなつてからライは迷うことなく道を進むんでいた。

それはまるで久し振りに故郷に帰省したような足取りだった。
ライは記憶を失っている。故に肉体の記憶と不一致している。
だからライは困惑する。

「止まった。」

数分ほど時が経つとライの足取りは止まった。

「ここは…学校？」

辿り着いたのは広大な敷地の学校だった。

「…………ツシュフオード…アツシュフオード…っ…………!!!」

学校の門にはアラガミに傷つかれて擦れてはいるものの名前が書いてある。その名を口にするるとライの頭に強い痛みが走り、堪らず手で押さえた。

「っ…!!はあ…落ち着け。」

痛みは引いていき、押さえていた手を放す。

「はあ…」

学校の敷地内に目を向けると既に壊れているし劣化もしている校舎と壊れている噴水があつた。それに複数だがオウガテイルがいた。

「……………ここは貴様等のような下種がいていい場所じゃない。」

オウガテイルを見つけた瞬間、ライは何故か激昂した。

自分でも驚いていたが身体はオウガテイルに向かって走り出し、叩き潰さんと神機を振り上げる。

「(ここ)を…「彼等」の居場所を…踏み躪るな!!!」

ライの叫びに呼応するように神機はオウガテイルの一体を叩き潰した。

アルバム

「しかし本当にアラガミの数が少ないわね。」

「そうだな。いないわけではないがこんなに少ないと逆に不気味だな。」

そんな会話をしながらも探索を続けるリンドウとサクヤ。ライと別れてからしばらく歩くが此方もアラガミとの接触は少数の小型アラガミくらいだった。

「例のKMF型アラガミがいる様子もないわね。」

「寧ろソイツ等がアラガミを倒しているからここに居ないのかもな。」
「え？」

「なんで驚くんだよ。アラガミ同士で食いあうこともあるんだからそういうこともあるだろ。」

「確かにそうだけど…」

この場所にアラガミが少ない理由をアラガミ同士の共喰いと結論づけるリンドウ。とはいえそのKMF型アラガミもないことにも少し違和感を感じていた。

「考えても答えが出るわけないか。」

「リンドウ？」

「探索を続けるぞサクヤ。」

「ちよつと…!？」

難しいことを考えることが苦手なリンドウは思考を放棄して探索を続けることにした。

「……………」

リンドウとサクヤがそんな話をしていた頃ライは学園内を探索し

ていた。

「教室に職員室、食堂に図書室、プールに…」

学園内も多少はボロボロになってはいるものの少し修繕すれば使えるくらいには形を保っていた。

「ここは…屋上か。」

階段を登り屋上に辿り着いたライ。学園内をある程度は探索していたライは一度休息をとることにした。

「こっちは大方調べたから次は…」

事前に持ってきた軽食を食べながら次の行き先を決めるライ。

「校舎は見終えたから次は向こうの建物か。」

屋上から次の目的地に目を向けるライ。だがその目にはどこかしら暗かった。

そもそもこの学園に来た時から…否、視界に入った時から罪悪感のような暗い感情に蝕まれていた。

それは自分という「異物」がこの場にいることへの拒否反応にもみえた。

「……さっさと調べてここを出よう。」

軽食を食べ終わると次の目的地…「クラブハウス」へと向かった。

「ここは…生徒会室と客室が一緒になっているのか。」

クラブハウス内に入り、ライは一通り歩きまわる。クラブハウスの内部は生徒会室と客室のような部屋があった。

「不思議とこの場所は懐かしいと感じる。……身勝手だな。僕は。」

自身を自嘲しながらもライは生徒会室へと足を踏み入れる。

生徒会室に入るもその場には当然ながら誰もいなかった。

ただ中央にテーブルがあり、そこに一冊の本が置かれていた。

「……これはアルバム？」

本を手に取り数ページ捲る。本の中身は写真が入っていて制服を着た生徒達が写っていた。

「っ……!!?」

アルバムを捲るとある一枚の写真に目が止まった。

その写真には複数人の男女の生徒が仲良さげに写っていた。

その生徒達はライは知っている。

「……ミレイ……さん。」

「シャーリーにリヴァル……」

「ニーナにスザク」

無意識だが写真に写っている生徒の名前だろうかライはその名を呼ぶ。

「カレンにナナリー……」

「ルルーシュ。」

写真に写る生徒の名前を呼びおえるとそこでライは自身が涙を流していることに気づいた。

「なんで……」

なんで泣いているのか。ライは理解できない。

ただ、記憶のあった自分にとってはこの写真に写るこの生徒達が大事な存在であることは理解できた。

「アルバムは持って帰ろう。この写真だけ持っていくのはどうかと思うし。」

アルバムを持って帰ることを決めてアルバムを最後まで捲る。最後のページには折り曲げられた白い紙が挟まっていた。

「これは……」

白い紙を開くと手紙だろうか文章が書いてあった。

「図書室の奥の本棚を調べよ」

たったこれだけの文章が書いてあった。

「図書室の奥の本棚……」

何かの謎かけだろうかと思うライ。だがわざわざアルバムの1番後ろに隠すようにあったことがその先に何かがあると案じているのではないかとも考えた。

「調べてみるか。」

ライは生徒会室を後にして図書室へと向かった。

……その先に〃とある人物〃が待ち続けていることも知らずに……